水俣病の経験を将来に活かした
地域構想と国際的情報発信のための水俣学研究拠点の構築

平成 27 年度～平成 31 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書

プロジェクト番号：S1591010L
令和　2 年　5 月

学校法人名：熊本学園
大　学　名：熊本学園大学
研究組織名：水俣学研究センター

平成 27 年度～平成 31 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
研究成果報告書

目次

はじめに ・・・

はじめに

水俣学研究センターは、2005（平成 17）年に設置され、原田正純先生を中心として、水俣学の構築を目指して研究調査、学内外の教育、社会貢献と情報発信に努め、発足してから 15 年が経過しました。本書は、2015（平成 27）年より 5 年にわたり実施された文部科学省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業：水俣病の経験を将来に活かした地域構想と国際的情報発信のための水俣学研究拠点の構築」の成果報告書です。

事業報告書としての性格、当初の事業計画と目標をふまえて、得られた成果や達成度を社会に公表し、批判をあおぐことを課題として執筆しています。詳細な学術的成果や専門的な議論は、水俣学研究センターの刊行物や所属研究者が発表している成果物を見ていただきたいと思います。日常的な研究活動とその成果は『水俣学通信』や WEB ページ上に公開していますのでそちらも参照していただくようお願いします。

文部科学省には、報告書本文に加えて、過去 5 年間の水俣学にかかわる主要新聞記事なども資料として添付し提出いたしました。ご供覧いただきたいと存じます。

この事業は、被害実態の解明、地域戦略の構築、資料の収集とそのデータベース化および国内外への情報の発信をとおして、水俣学の研究基盤を構築・強化していくことに重点を置いています。学内においては、学部や大学院と連携して、水俣学講義、フィールドワークや将来の研究者養成を行ってきており、また公開講座や公開セミナーなどによる地域還元、水俣学ブックレットなどの刊行やホームページでのアーカイブ公開などによって成果公開も行ってきております。さらに、タイ、中国、韓国や台湾、カナダなどの研究機関や公害発生地域の NGO などとの交流も進めています。

地方私学においてグローバルな視点とユニークな方法に立って、地域に根ざし地域の課題に応える調査研究、そして水俣病という人類史上の出来事に対する取り組みとして、私どもとしての自負と反省はあるものの、本報告書を通して、社会の負託にどこまで応えることができたかは、大方のご意見を伺うこととしたいと思います。

まだまだ未熟ではありますが、さらに精進して水俣学の発展に努めて参りますので暖かいご支援を賜りますようお願いいたします。

2020 年 5 月 27 日

熊本学園大学水俣学研究センター長

花田 昌宣

平成 27 年度　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　構想調書の概要

研究プロジェクト名 : 水俣病の経験を将来に活かした地域構想と国際的情報発信のための水俣学研究拠点の構築
研究テーマの主体となる研究組織：熊本学園大学水俣学研究センター
研究代表者　　：社会福祉学部　教授　花田昌宣
研究テーマに係る研究者数　　：21 名
研究観点：研究拠点を形成する研究
研究期間：5 年

1　研究目的・意義

水俣病発生確認の 1956 年から半世紀以上が経過し，水俣病事件は社会的には終息しつつあるとみなされている。しかし今なお水俣病は学術的にも政策的にも被害者の補償と救済の面において解決されたとは言い難く，抜本的解決策が呈示されず，地域再構築に進むことができていない。公害の原点，水俣病がなぜこのような状況にあり,その解決の方策を解明していくことは，開発途上国を中心に公害問題を抱える海外においても重要なことであろう。この研究プロジェクトにおいては，原田正純氏が提唱した水俣学の理念と方法を発展させ，水俣病被害の実態，発生機序,さらに被害民にとっての課題を明らかにする。その基礎の上に水俣病によって脆弱化した地域社会や大量の水銀が眠る水俣湾埋立地など環境の課題と過去から今日に至る過程をふまえた地域再構築戦略を，住民参加と地域の民主主義形成に基づいて再検証することにより構想する。この研究の過程で水俣病文献蒐集とアーカイブ構築を進め，それが人材育成の場となり，さらに国内外における研究拠点としての役割を果たす。

2　研究計画・研究方法

①研究体制

（1）本プロジェクトにおいては，研究代表者の統括の下，三つの有機的に連関した研究班を組織し，担当者 21 人を配置，さらに補佐するＲＡ，地域の研究協力者等を配置する。

第一班　水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究
第二班　環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究
第三班　水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成

各班の研究責任者による運営委員会を週に一度開催する。定期的に研究会を開催し，研究の進捗状況や問題点を把握し，効果的な運営と緊密な連係をはかる。また，大学として研究支援事務組織において組織的な支援体制を構築する。

（2）研究成果は学術誌『水俣学研究』において毎年公表し，水俣学ブックレットおよびWebサイトで，広く社会に発信する。

②年次計画

H27　キックオフ研究会の開催と研究体制を構築する。RAの採用，地元研究協力者および海外の研究員の受け入れを開始する。各年度に，若手研究者セミナー，水俣病事件研究交流集会，水俣現地における公開講座ならびに公開セミナーを実施し，研究紀要，水俣学資料叢書，広く社会に向けた水俣学ブックレットを刊行する。

H28　水俣病発生公式確認60年記念シンポジウムを熊本及び水俣で開催。そこにカナダの水俣病被害者を招聘する。

H29　外部評価委員を招いて，熊本および水俣現地で中間報告会を公開で行うとともに，全体としての進捗状況を点検する。

H30　水俣学研究センターが連携する国内外の研究者，被害民，NGOを招聘し，環境被害に関する国際フォーラムを開催する。

H31　各班の到達目標達成度を点検し成果の集約を行う。外部評価委員による評価の実施と成果報告シンポジウムを開催する。

③私学助成金申請予定額　（単位：千円）

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	合　計
施設・装置費	0	0	0	―	―	0
設　備　費	0	0	0	―	―	0
研　究　費	10,533	9,206	9,021	11,038	9,343	49,141
合　計	10,533	9,206	9,021	11,038	9,343	49,141

3　研究により期待される効果

（1）［研究基盤の形成］　地元に根ざした地域密着型の研究による水俣病事件の教訓の継承と新たな学問･教育体系の確立，その成果を生かす水俣病についての総合的研究拠点が形成され，国内外に学術的貢献を果たす。

（2）［人材育成と情報提供］　水俣病を教訓化した環境問題に関する総合的な国際的教育・研究拠点として国内外からの受け入れができる機関となる。さらに，学校教育や社会教育などの環境・公害教育を支援することで，本学のみならず広く若手教育・研究人材の創出をする。

（3）［政策提言］　地域に密着する調査・研究･教育の中から，公害・環境・地域破壊と再生にかかわる地元ならびに国内外の第一線の専門家・実務家の養成ができ，環境再生と地域再構築のための地域社会モデルの構築が可能となる。

（4）［国内外のネットワークと情報発信］　海外とのネットワークを形成・強化し，事件発生からの経験のモデル化を通して，開発途上国を中心とした公害発生地域に貢献する。水俣病事件に関わる歴史的資料の散逸を防止し，発掘，収集，保存する。

平成 27 年度　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　研究構想調書

1　研究プロジェクトの位置付け（研究プロジェクトの大学における位置付けや基盤形成への役割等）

熊本という地に起きた公害，水俣病に関する取り組みは，地域に根ざす大学がなし得る学術的かつ社会的貢献である。同時に，学部から大学院までの一貫した教育・研究を実施し，国内外でも希有な研究拠点形成をなすものである。 水俣学研究センターは，当初，故原田正純氏の提唱により大学院社会福祉学研究科をベースに企図され，2005 年には理事会の決定により本学キャンパスならびに水俣現地に開設，今日まで本学の重点的な研究拠点として位置づけられてきた。

2　プロジェクトの意義・目的（研究プロジェクトの学術的な特色や意義等）

【水俣学研究拠点形成の背景と課題】　本学では，2005 年に水俣学研究センターを設置，10 年間にわたり水俣学の構築につとめてきた。水俣では被害者救済，地域の活性化などに課題が山積している。他方，水俣学は，国内外で一定の認知を得たとはいえ，いまだ緒に就いたばかりである。あらためて，国際的広がりと長期的視野にたって水俣病被害の多様性と社会的広がりの実態研究，環境被害を経験した地域の評価機能を内包した住民参画型の地域戦略モデルの構築，水俣学アーカイブの構築という新たな野心的試みを掲げて，水俣学研究拠点の構築をはかる。

【方法的特色】　水俣学とは，公害被害を専門の壁を越えて研究する総体的な学問として構想されている。人類の負の遺産としての公害病事件を研究することは，水俣のみならず国内外の環境破壊と公害発生に対する問題解決に貢献をすることになる。多くの課題を抱える水俣病を過去の事件ではなく現在進行形の事件としてとらえ研究し，研究成果を発信する。さらに水俣学として新たな学的方法論の構築，地域人材の育成，国内外の新たな人材の受け入れと育成，そしてこれまでの研究の蓄積を活かして国際的に発信する。

【ネットワーク形成による研究基盤構築】　国内外の研究機関ならびに NGO 組織との連携強化と共同研究体制の構築をめざす。海外ではカナダ，タイ，中国，台湾，韓国それぞれの公害発生地域の NGO や住民組織との研究交流をさらに進める。国内では，新潟，福島における研究者やアクターと連携し調査研究する。水俣及び不知火海沿岸地域では，患者団体，NPO などと密接な協力関係を築いており，さらに自治体や研究機関とのネットワークを形成し，地域の課題に応えるメディエーターとしての役割を果たす。

【本研究の到達目標】　大学の研究機関として，現地に密着し，水俣病という公害被害を被った水俣・不知火海沿岸地域の再構築と多世代にわたる水俣病被害民の復権と幸福な生を実現する健康な社会環境を構想する。これらが，水俣病を教訓化し，世界で発生する公害被害への問題解決と未然防止につながるものである。

3　研究プロジェクトに参加する主な研究者の概要

【学内】

	所属	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	当核研究課題の成果が研究プロジェクトに果たす役割
第1班	社会福祉学部・教授	花田　昌宣	被害者補償・救済の制度分析と解決策の模索	研究の統括，水俣病被害の制度分析
	社会福祉学部・教授	下地　明友	臨床をふまえた新たな水俣病概念の呈示	水俣病の臨床医学と病の人類学
	水俣学研究センター・研究助手	田尻　雅美	水俣病患者の医療とケアのニーズ分析	水俣病患者の福祉的ケア
	商学部・教授	萩原　修子	語りを通した被害者のサファリングの解析	水俣病被害者のナラティブ
第2班	社会福祉学部・教授	宮北　隆志	水俣病被害地域再構築の構想	副統括責任者，地域戦略の検討
	社会福祉学部・教授	中地　重晴	土壌汚染調査,埋立地の水銀問題解決への提言	地域の環境汚染の把握と対策
	社会福祉学部・教授	守弘　仁志	地域活性化につながる地域情報資源の活用	地域活性化の検討
	社会福祉学部・講師	藤本　延啓	水銀が水俣に及ぼした影響の社会史的考察	廃棄物と地域の社会史の検討
第3班	社会福祉学部・教授	山本　尚友	資料・文献の蒐集とデータベースの構築	文献・資料データベース構築
	水俣学研究センター・研究助手	井上　ゆかり	水俣学アーカイブスの構築と国際発信	アーカイブ構築,連携

【学外】

	所属	研究者名	研究プロジェクトにおける研究課題	当核研究課題の成果が研究プロジェクトに果たす役割
第1班	岡山大学大学院・環境生命科学研究科・准教授	頼藤　貴志	国際的研究をふまえた水俣病像の解明	水俣病の疫学
	大阪市立大学大学院・経営学研究科・教授	除本　理史	被害補償と救済に関わる経済学的解析	被害補償の経済学
	九州大学大学院・人間・環境学研究科・准教授	飯嶋　秀治	住民の語りと地域共生のあり方の呈示	地域住民のナラティブと地域の民俗
	大阪大学大学院・法学研究科・教授	大久保　規子	国際法的視点から水俣病救済策の検討	環境被害の国際法的検討
	弁護士	東　俊裕	障害法からみた被害者の復権の法的研究	被害補償と救済の法学的検討
	東京経済大学・経済学部・准教授	尾崎　寛直	水俣病がもたらした地域経済の変容	地域経済と公害被害の検討
	九州大学大学院・経済学研究科・教授	磯谷　明徳	水俣の基幹産業と労働生活の分析	化学産業の労働経済学
第2班	和光大学・経済経営学部・講師	森下　直紀	水俣とカナダにおける地域環境変容	自然環境の社会学的国際比較
	鹿児島大学大学院・理工学研究科・教授	冨安　卓滋	海水及び底質の水銀の変化の解析	地域の環境汚染の把握と対策
第3班	熊本日日新聞社・取締役	高峰　武	収集資料の解析	ジャーナリズムと水俣病の連携
	法政大学・社会学部・教授	小林　直毅	映像アーカイブネットワークの構築	アーカイブネットワーク構築

4　研究プロジェクトに参加する研究者の科学研究費補助金の採択状況

年度	研究種目	研究課題名	研究者名	採択金額（千円）
26	研究成果データベース(一般)	水俣学研究センター文献データベース	花田　昌宣	4,100
26	基盤研究(C)	水俣病事件における「再生する力」の社会・宗教・民俗学的研究	萩原　修子	1,170
26	基盤研究(B)	タイ東部臨海地域における工業化・地域社会の変容と健康の社会的決定要因に関する研究	宮北　隆志	5,330
26	基盤研究(C)	不法投棄に関する社会史研究―豊島地域社会に対するミクロ-マクロリンク的視角から	藤本　延啓	780
26	若手研究(B)	水俣病における社会的食物連鎖の要に位置する漁業と漁民被害の構造	井上 ゆかり	650
26	基盤研究(S)	環境法の参加原則に係る評価指標の検討－環境民主主義の確立に向けた国際連携構築	大久保 規子	14,040
26	基盤研究(B)	胎児期メチル水銀曝露の臨床的慢性影響評価	頼藤　貴志	1,170
26	基盤研究(C)	福島原発事故避難者の生活再建に向けた学際的研究	除本　理史	1,690
26	基盤研究(B)	施設間移行と生存経路多様化の基礎的研究	飯嶋　秀治	3,380
26	基盤研究(A)	汚染地域における水銀の環境動態と生態系への影響	冨安　卓滋	9,880
26	基盤研究(C)	社会的災害の被害救済に係る横断的・総合的制度研究	尾崎　寛直	390
26	若手研究(B)	先住民族とカナダ水俣病の環境正義をめぐる環境史	森下　直紀	1,040
			合　　計	43,620

年度	研究種目	研究課題名	研究者名	補助金額（千円）
25	挑戦的萌芽研究	障害者就労のパラダイム転換：障害概念の革新とソーシャルエコノミー	花田　昌宣	780
25	基盤研究(C)	水俣病事件における「再生する力」の社会・宗教・民俗学的研究	萩原　修子	910
25	基盤研究(C)	重度化する水俣病患者における家族介護の困難とケアの社会化の諸条件に関する研究	田尻　雅美	780
25	基盤研究(B)	タイ東部臨海地域における工業化・地域社会の変容と健康の社会的決定要因に関する研究	宮北　隆志	6,240
25	基盤研究(C)	不法投棄に関する社会史研究―豊島地域社会に対するミクロ-マクロリンク的視角から	藤本　延啓	910
25	若手研究(B)	水俣病における社会的食物連鎖の要に位置する漁業と漁民被害の構造	井上　ゆかり	1,170
25	基盤研究(C)	福島原発事故避難者の生活再建に向けた学際的研究	除本　理史	1,950
25	挑戦的萌芽研究	臨床人類学―文化相対主義とのつきあい方	飯嶋　秀治	910
25	基盤研究(C)	社会的災害の被害救済に係る横断的・総合的制度研究	尾崎　寛直	650
25	基盤研究(A)	汚染地域における水銀の環境動態と生態系への影響	冨安　卓滋	17,550
25	若手研究(B)	先住民族とカナダ水俣病の環境正義をめぐる環境史	森下　直紀	1,040
			合　　計	32,890

5　研究プロジェクトに参加する研究者の科学研究費補助金以外の研究費補助金の採択状況

年度	研究費配分機関名	補助金等の名称	研究課題名	研究者名	補助金額（千円）
26	三菱財団	三菱財団人文科学研究 助成	水俣学映像資料のアーカイブ化による水俣病事件史研究の基盤形成	花田　昌宣	2,500
				合　　計	2,500

6　地域活性化等について

◆　地域課題の解決

本研究課題自身が，水俣病という地域の種々の困難と問題の所在を究明し，地域及び地域住民さらに被害者にとってのウェルビーイングの向上を目指すものである。いくつかの課題を例示すれば，水俣病に関わる根強い差別・偏見の克服，水俣病被害者の福祉的課題に関する提言，水俣病によって疲弊した地域の再構築に関する方法と将来の方向性に関する提言，環境，特に水俣湾埋め立て地などに眠る高濃度の水銀を含有するヘドロや周辺地区における水銀をはじめ重金属による土壌汚染の実態把握と修復について検討などをあげることができる。

また，水俣市内に現地研究センターをおいており，定期的（月二回）に健康・医療・福祉相談を実施し，水俣病に関する住民の不安や疑問に応えることができる。

情報センターとして地元に開放しており，会議室・研究施設は，様々な問題解決のための議論の場として活用されている。

◆　人材育成

【水俣病を伝えるセミナー：地元学校教員のスキルアップ】

地元教員の自主的研究組織である水俣芦北公害研究サークルと連携して，水俣・葦北地域の小・中・高等学校教職員を対象に，水俣病および公害教育にかかるセミナー（本研究プロジェクトメンバーによる講義とフィールドワーク）を開催し，学校現場で教育の質的向上と教職員のスキルアップに貢献する。

【若手研究者セミナー】

大学院をはじめ高等教育研究機関に所属する全国の若手研究者を対象に，研究メンバーおよびゲスト講師による講義とフィールドワークを組み合わせて，水俣学の方法と最新の研究成果について議論し，それぞれの場に持ち帰ってもらう。水俣病をはじめ，公

害などを研究する若い人材育成につながる。

【公開講座・公開セミナー：社会教育の場の提供】

熊本市と鹿児島市の間には，小規模短大１校をのぞいては高等教育機関がない。本プロジェクトの一環として水俣で開催される連続公開講座や公開セミナーは，地域にとっての貴重な社会教育の場となっており，地域の課題にこたえる人材の輩出に貢献することができる。

【教職員研修セミナー】

年に一度，学内教職員を対象に水俣において，水俣学現地研究センターならびに漁村地区など現地訪問研修を実施し，水俣学研究センターならびに本研究プロジェクトに関する理解を深め，研究基盤形成を学内的に支援する体制に資するとともに，研究を支える人材を育成する。

平成 27 年度　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業　研究テーマ調書

１　研究テーマの概要

①研究分野

本研究プロジェクトは，人類の負の経験としての水俣病事件を鏡として，教訓を未来に活かすための研究基盤の形成を目的としている。水俣病が長い間，医学や一部の専門家によってのみ扱われてきたことの反省に立ち，医学のみならず，社会学，経済学，法学，社会福祉学，人類学からメディア研究や理工学にいたるまでの多様な学際分野の研究者たちが，地元の研究協力者や住民の協力を得て進める学際的でオープンな研究体制を構築する。また，国際的なネットワークによる国境を越えて研究を進める。研究課題は，(1) 社会科学的視点を取り込んだ被害の全容の解明，(2) 被害の経験をプラスに転化するために将来に向けた地域再構築戦略，(3) 研究資料の収集とデータベース化による情報基盤形成と水俣学アーカイブスの構築，それを通した成果の発信によって構成されている。

②研究内容

水俣学研究とは，現地に密着し，専門家と素人および学問領域の壁を越え，過去の失敗に学び将来に活かすという方法的観点から，水俣病によって負の影響を受けた住民および地域社会の課題の析出と修復に取り組み，環境問題の教訓と視座を与えるものである。そのために以下三つの研究調査班が有機的につながって学際的な探求に取り組む。

＜第 1 班：水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究＞

被害実態の広がり(医学面のみならず社会的側面から)の把握に努め，現在の課題を明らかにする。病いを社会的なものとしてとらえ，医学的な疾患学・症候学から解き放ち，社会環境の中に再定置し，改めて被害実態を明らかにする。そのために臨床・疫学調査，被害民／地域住民の社会福祉学的実態調査と補償と救済をめぐる課題の析出，被害住民のナラティブの収集と分析が組み合わされる。到達目標：水俣病の被害と救済補償に関する実情把握と望まれる方向性の提案

＜第 2 班：環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究＞

水俣病の経験をふまえた地域戦略形成の目標（QOL の向上と社会的紐帯の再建）実現のための住民を巻き込んだ実証研究を行う。①地域の社会経済の現状把握と活性化の方途，②環境汚染（水銀汚染サイト）の実態把握と修復方法の研究，③海外の公害被害発生地域の経験分析と共有化，④地域における社会福祉と社会政策的課題の検討を行う。到達目標：地域再生のための基礎資料およびフレームワークの呈示と地域戦略の提言

＜第 3 班：水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成＞

第 1，第 2 班の調査研究を媒介としながら，水俣病に関わる文献資料データベースの高度化と豊富化を行う。地域に散在する資料の収集・整理と公開，水俣病に関する映像アーカイブの構築、患者・関係者の証言の蒐集，解題を加えた水俣病研究文献目録の制作を行う。それらを国内外に発信し，広く研究者に利用可能な情報基盤を構築する。
到達目標 : 将来にわたる水俣学研究の情報基盤の構築と共有，成果の国内外への発信と人材育成。

③期待される成果又はその公表計画

水俣病に関する総合的研究拠点の構築をとおした，若手研究人材および地域の人材の創出，水俣病をはじめとする公害・環境問題に関して国内外からの受け入れができる総合的な国際的教育・研究センター，教訓の発信と地域再構築の地域社会モデルの提言，これらをとおして海外とのネットワークが形成・強化され，事件発生から地域再構築にいたる経験の教訓化を通して，開発途上国を中心とした公害発生地域へ貢献することができる。

研究成果は，進捗状況を随時 Web サイトで公表するとともに，毎年開催される水俣病事件研究交流集会，第 4 年次に開催する国際会議，『水俣学研究』（研究紀要）での論文・調査報告の発表，著作物（『水俣学ブックレット』『水俣学研究資料叢書』，プロジェクト完成時の総合的著作）によって社会に問う。熊本学園大学の自己点検・自己評価の実施規程および水俣学研究センター自己点検評価委員会規程により内部評価を実施する。また，高度学術研究支援センターのもと，学外の専門研究者，および水俣現地の関係者を委員として外部評価を行う。

２　年度別の具体的な研究内容

【平成 27 年度】

キックオフ研究会の開催と研究体制の構築。RA の採用，地元研究協力者および海外の研究員の受け入れ開始。

各班単位での研究会ならびに合同研究会による研究の実施と進捗管理システムの構築。全体を研究代表者が統括する。各班においては，研究課題をサブテーマに分化させ，各研究者のイニシアティブをベースに分業と協業にもとづいて共同で進められる。第 1 班の研究の基盤に立脚して，第 2 班の構想がたてられ，第 2 班の成果が，第 1 班の課題に制度政策的根拠を与える。それらとともに第 3 班の作業が進められる。三つの班は密接に連関しながら作業を組み立てていく。

各年度に，若手研究者セミナー，水俣病事件研究交流集会，水俣現地における公開講座ならびに公開セミナーを実施し，研究紀要，水俣学資料叢書，広く社会に向けた水俣

学ブックレットを刊行する。

第１班:水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究(責任者:花田昌宣)
①臨床･疫学研究の研究着手。従来の先行研究を検討，環境疫学，臨床心理学及び医療人類学的視点から，疾病概念の再検討をふまえた調査方法の彫琢。また，地域住民を対象とした健康･医療･福祉相談事業の継続的実施とケースカンファレンスの実施(下地)および疫学的分析に基づき，エビデンスに基づいた水俣病の研究（頼藤）を行う。それにより疾病概念の転回を踏まえて病像論から水俣病患者の健康被害を社会福祉学的に再構築し，家族・地域支援のあり方の研究へと拡張されていく（田尻)。
②補償救済制度研究（花田，除本，大久保，東）への研究着手。変転常なき水俣病被害者に対する補償と救済の制度を，法と経済をベースにした歴史的視点，他の公害事件等との比較に基づく社会的視点，今日求められている被害補償のあり方の三つの視点から，資料に基づく調査をふまえて，行政機関，被害者団体，補償受給者および申請者など地域住民に対しインタビューを行う。
③国際連携（森下，花田)：水俣病被害が発生しているカナダ先住民居留地における課題の解析に着手，日本とカナダ（マニトバ大学先住民研究センター）との共同研究体制の構築。

第２班:環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究（責任者：宮北隆志)
①評価手法及び指標の検討（宮北，藤本)：社会的アクターの再定義を踏まえた地域住民参加のあり方の検討。地域再生構築のために社会的健康影響評価(HIA)手法を援用して社会的，経済的，工学的側面から，包括的評価指標体系を開発する。
②地元市民グループと連携した環境調査（中地，冨安)：不知火海の海水や底質（冨安）や地域環境における土壌，埋め立て地の環境汚染の実態把握（中地）のための，調査実施体制の構築とデータ収集。
③社会情報の解析（守弘)：情報（新聞，ラジオ，テレビ，インターネット）の普及と活用の変遷をたどり，水俣病発生初期から現在までの情報流通と地域変容を明確化し，今日のコミュニティ研究に関しての基盤を提供する。

第３班：水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成（責任者：山本尚友)
①水俣学映像アーカイブの拡張発展（井上)：地元協力者とともに証言映像の作成：患者・関係者の証言の蒐集・編集，記録映像の収集を実施する。また，法政大学においてNHK と共同して開発中の水俣病アーカイブとの連携体制の構築（井上，小林)。
②水俣病資料の収集・整理・公開（山本，高峰)：水俣病訴訟資料（資料価値の高い証

拠類や書面）の収集と整理公開
③地域に散在する資料の収集・整理と公開：本プロジェクトを通して，各研究員の意識的資料収集をベースに継続的に実施。

【平成 28 年度】
水俣病発生公式確認 60 年記念シンポジウムを熊本及び水俣で開催する。そこにカナダの水俣病被害者を招聘する。

第 1 班：水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究
一年目に始動したサブテーマと連動して次の調査が開始される。
①漁村地域における住民の語りを通した共生研究（萩原，飯島）：既存のナラティブ資料の網羅的蒐集，水俣病被害者および地域住民へのインタビュー調査。インタビューを通して，漁村地域のコミュニティ形成の変遷をたどり，地域共生の可能性を模索し課題を提示する。
②社会福祉的ケア研究（田尻，東）：自宅訪問を基礎に被害者の日常生活に内在した調査の実施に着手。補償救済制度研究と連携して，金銭賠償以外の生活保障全般にかかる福祉・医療ニーズ調査を行う。
第 1 班のサブテーマは別々のものではなく，同一の個人，家族，コミュニティにおきた水俣病被害の持つ多面的な側面を表すことから密接な連携のもと並行的あるいは共同で調査を進める。

第 2 班：環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究
①被害地域の社会経済データ収集と分析（尾崎，磯谷）：地域経済，自治体財政，産業，雇用と労働にかかる経年的データを蒐集し,加えて社会的健康影響評価手法を地域経済に援用した評価手法の開発に着手する。
②社会関係資本形成と地域活性化のための社会的健康影響評価に基づく調査（宮北，藤本）：一年目に検討された評価の指標と手法に基づき，地域民主主義形成と内発的発展の視座からの社会史的手法に根ざす密着型調査を住民参加で開始する。
③環境被害を経験している海外の国・地域の経験の共有（宮北，森下はじめ全員で分担）：清華大学公共管理学院と連携して中国における公害被害の現地調査（河南省淮河を予定）。ならびに研究者・NGO・住民の交流を通して経験の共有をはかる。これは同時に水俣の経験を発信することに繋がる。
第 3 班：水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成
①資料の利活用の促進（水俣学研究センター）： Web サイトでのデータベースのリニューアル， 現地研究センターにおける資料の利用，本学センターの資料の活用・公開利

用を促進するために体制の整備を行う。
②水俣病研究文献目録（花田，研究員全体で分担）：解題付きの研究文献（書籍，論文）目録作成に着手。
③水俣病事件資料集の編集（高峰）:『水俣病事件資料集』（青林舎刊）が 1968 年までの資料を収録しており，1969 年以降の資料集を作成する。収録する資料は水俣学研究センターで蒐集された資料をもとに編集する。その中間的作業として第三水俣病事件資料（1973−1975 年）の解析，死亡患者認定にかかる Y 氏事件資料（1989〜1996 年）の解析から着手する。

【平成 29 年度】
３年目後半に，外部評価委員を招いて，熊本および水俣現地で中間報告会を公開で行うとともに，全体としての進捗状況を点検する。

第 1 班：水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究
現地調査の継続：臨床・疫学研究ならびに補償救済制度研究の中間報告を行い，地域共生研究へフィードバックおよび社会福祉的ケア研究に反映する。

第 2 班:環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究
2 年目に実施した地域の社会的アクターを巻き込んだ社会的健康影響評価事業を通した，あらたな地域再構築に向けた方策を検討する。この年度の後半に研究調査および指標の再検討を行う。そこでは企業や政府から「水俣病対策」の対象とされた地域という垂直的な関係でなく水平的な協力関係の構築にむけた方向性と地域知（コモンズとしてのローカルナレッジ）の課題を検証する。

第 3 班：水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成
前年度までの事業を継続的に実施するとともに，水俣でアーカイブ事業の成果と意味を社会に発信し課題の整理を行うシンポジウムを開催する。

【平成 30 年度】
環境被害に関する国際フォーラムの開催：水俣学研究センターが連携するカナダ（マニトバ大学先住民研究センター，先住民水俣病被害者自治組織），中国（清華大学公共管理学院，淮河水質公害 NGO），タイ（チュラロンコン大学，環境 NGO），台湾（国立成功大学，台南地区ダイオキシン・水銀公害 NGO），韓国（蔚山大学公衆衛生学教室，環境運動連合 NGO）を招聘し，水俣および新潟水俣病の研究者並びに被害民を交えた国際フォーラムを開催する。

第１班：水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究

各サブテーマの現地調査を継続するとともに，中間的成果を集約し，最終成果の素案の作成に着手し，上記国際フォーラムにおいて報告する。

第２班：環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究

各サブテーマの現地調査を継続するとともに，成果を集約し，最終成果の素案の作成に着手し，国際フォーラムにおいて報告する。

第３班：水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成

国際フォーラムの海外からの参加者への取材と海外の公害事件の写真や映像による記録の収集とアーカイブへの搭載。研究文献目録試作版の関係者への公開と検討を行う。

【平成 31 年度】

各班の到達目標達成度を点検し，成果の集約を行う。外部評価委員による評価の実施と成果報告シンポジウムを開催する。

第１班：水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究

水俣病の被害と救済補償に関する実情把握と望まれる方向性の提示という到達目標をふまえて，水俣病被害者に対する施策立案への貢献，水俣病の過去と現在の検証と課題の提示を行なう。研究論文と専門書籍を刊行する。また，地域社会に水俣病の正確な認識を伝えるために水俣学ブックレットを刊行する。地元で公開講座を開催する。

第２班：環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究

地域再構築のための基礎資料および地域再構築と環境再生戦略の提言という到達目標を踏まえて，集中的に研究会を行い，成果を取りまとめる。それに基づいて，水俣での公開シンポジウムを行い，地域活性化（地域再構築戦略及び環境修復）に焦点を当てて，報告書を作成する。

第３班：水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成

水俣学研究の情報基盤構築においては，英語での情報提供として，国際的に活用される。映像アーカイブの記録の公開と共有，研究文献目録・事件資料集の制作と刊行を行う。

福祉と環境に基づく地域社会構想を，各班の成果を集約して福祉環境に基づく地域社会構想を「不知火海ウェルビーイングコミュニティ白書」として刊行する。

4　研究テーマに参加する研究者の主な業績

所属・職名	研究者名	発表論文名・著書名	発表年月日
第1班　社会福祉学部・教授	花田　昌宣	【著書】「水俣病の現在と課題」「水俣病の現在と水俣学の課題：私的覚書き」『水俣からのレイトレッスン（水俣学ブックレット9）』 熊本日日新聞社	2013年3月
		【著書】「カナダ先住民水俣病と受難の社会史」『水俣からのレイトレッスン（水俣学ブックレット9）』 熊本日日新聞社	2013年3月
		【著書】「水俣学と原田先生の最後の仕事」『原田正純追悼集　この道を　一　水俣から』 熊本日日新聞社	2012年12月
		【著書】花田昌宣・原田正純共編著『水俣学講義　第5集』日本評論社	2012年8月
		「新日本窒素における工職身分撤廃過程と労使関係」『大原社会問題研究所雑誌』676号　2015年2月号	2015年2月
		「水俣学関連資料管理・活用の現状と課題」『大原社会問題研究所雑誌』673号　2014年11月号	2014年11月
		「福祉就労を超える社会的企業の可能性」『社会運動』 412号	2014年
		「いのちをつなぐ、東北、熊本：3.11以降の福祉と環境を考える」『社会関係研究』19巻2号	2014年
		＊Takaoka, S., fujino, T., Hotta, N. Ueda, K., Hanada, M., Tajiri, M., Inoue, Y. “Signs and symptoms of methylmercyury contamination in a First Nations community on Northwestern Ontario, Canad” *Science of the Total Environment,* Vol.468-469	2014年

		「水俣病の教訓の内実を問う ー 国際水銀条約と水俣病最高裁判決」『社会運動』 401 号	2013 年
		「公害の原点、水俣病と福島：水俣学の視点から」『震災学』 2 号 ほか 14 件(うち査読有 2 件)	2013 年
社会福祉学部・教授	下地　明友	【著書】大塚耕太郎・加藤敏・下地明友・村井俊哉著『精神医学の思想(専門医のための精神科臨床リュミエール　30)』中山書店	2012 年
		「文化精神医学と風土・民族・宗教:リスク・文化・語り・位相論的視点から」『最新精神医学』 18 巻	2013 年
		「ソーシャル・サファリング(Social suffering)；熊本県と社会精神医学の系譜 ー『構造の裂け目』と『存在の現れ』ー覚醒剤中毒、CO 中毒、水俣病、カネミ油症、慢性ヒ素中毒そして・・・『終わっていない』」『日本社会精神医学会雑誌』 22 巻 3 号	2013 年
		「原田正純　その多様な世界」『KUMAMOTO』 創刊号	2012 年
		「戦争・境界の軌跡・臨床の詩学 ー 障害学と医療人類学との遭遇」『こころと文化』 10 巻	2011 年
		「レジリアンス・病・文化 ー レジリアンスの医療人類学」『こころと文化』 10 巻	2011 年
水俣学研究センター・研究助手	田尻　雅美	【著書】「忘却される患者 ー 第一号患者は、今・・・」熊本学園大学水俣学研究センター編『水俣学ブックレット9　水俣からのレイトレッスン』 熊本日日新聞社	2013 年 3 月
		「水俣からのレイト・レッスン(5)終わらない水俣病：第一号患者のケースから」『保健師ジャーナル』 68 巻 10 号	2012 年

		＊原田正純・花田昌宣・田尻雅美・井上ゆかり, 他「カナダ・オンタリオ州先住民地区における水銀汚染 ー カナダ水俣病の 35 年間」『水俣学研究』3 号	2011 年
商学部・教授	萩原　修子	「生み落とされることば、手渡されていくことば:水俣病事件と『本願の会』」『宗教研究』 373 号	2012 年
		「善き物語と悪しき物語」『熊々論々』 第 1 号	2011 年
岡山大学大学院 ・環境生命科学研究科・准教授	頼藤　貴志	【著書】Yorifuji, T., Tsuda, T. “Minamata” Wexler, P. (ed.)*Encyclopedia of Toxicology* 3rd edition vol.3, Elsevier Inc	2014 年
		【著書】Yorifuji, T., Tsuda, T., Harada, M. “Minamata disease: a challenge for democracy and justice” *in Late lessons from early warnings: science, precaution, innovation Europian Environment Agency*	2013 年
		【著書】Jordi, J., Yorifuji, T., et al “Epidemiological evidence on methymercury neurotoxicity” *in Methymercury and Neurotoxicity Springer*	2012 年
		【著書】Granjean, P., Yorifuji, T. “Mercury” *in Party's Toxicology* 6th edition, Wiley-Interscience	2012 年
		＊“Intrauterine Exposure to Methylmercury and Neurocognitive Functions ー Minamata disease” *Archiv. Env. Occup. Health (published online)*	2014 年
		＊“Visual evoked potentials in children prenatally exposed to methylmercury” *Neuroxicology* Vol.37	2013 年
		＊“Critical appraisal of the 1977 diagnostic criteria for Minamata disease” *Arch Environ Occup Health* 68 巻	2012 年
		＊Maruyama, K., Yorifuji, T. et al. “Methul Mercury Exposure at Niigata, Japan, Japan: Results of Neurological Examination of 103 Adults” *J. Biomed. Biotechnol.* Vol. 2012	2012 年

		＊Inoue, S., Yorifuji, T., et al “Short-term effect of severe exposure to methylmercury on atherosclerotic heart disease and hypertension mortality in Minamata” *Sci Total Environ*. Vol.417-418	2012 年
		*“Long-term exposure to methylmercury and psychiatric symptoms in residents of Minamata, Japan” *Environmental nternational*, Vol.37 ほか 58 件(うち査読有 50 件)	2011 年
大阪市立大学大学院・経営学研究科・教授	除本　理史	【著書】大島堅一・除本理史著『原発事故の被害と補償:フクシマと人間の不幸』大月書店	2012 年
		【著書】除本理史・大島堅一・上園昌武著『環境の政治経済学』　ミネルヴァ書房	2010 年
		「国内外の環境問題のとりくみ 第 2 回「原発と人権」全国研究・交流集会の報告」『人間と環境』 40 巻 2 号	2014 年
		「戦後日本の公害問題と福島原発事故」『經濟學研究』63 巻 2 号	2014 年
		「熊本水俣病事件の現段階 : チッソ分社化に着目して (環境論壇 環境汚染と健康被害)」『環境経済・政策研究』6 巻	2013 年
		「チッソの分社化とは何か : 歴史的背景から問題点と課題を考える (特集 水俣は今)」『月刊地理』 57 巻 2 号	2012 年
		＊除本理史・尾崎寛直「水俣病特別措置法と環境・福祉対策の課題--水俣市および水俣・芦北地域の再生・振興の観点から」『東京経大学会誌　経済学』269 号	2011 年
九州大学大学院・人間・環境学研究科・准教授	飯嶋　秀治	【著書】『人間共生論叢　特集・茂道の生人』九州大学大学院人間環境学府共生社会学講座	2014 年 3 月
		【著書】「オーストラリア先住民の「暴力」とどうつきあうか」内藤直樹・山下輝裕編『社会的包摂／排除の人類学 一 開発・難民・福祉』 昭和堂	2014 年 2 月
		【著書】片岡啓・清水和裕・飯嶋秀治編『生と死の探求(九州大学文学部人文学入門2)』 九州大学出版会	2013 年 2 月

		【著書】『人間共生論叢　特集・茂道の命脈』九州大学大学院人間環境学府共生社会学講座	2012 年 3 月
		＊「社会的排除とのついきあい方 ー 日本の児童養護施設における臨床心理学と文化人類学の連携」『文化人類学』77 巻	2012 年
		＊「経済学と人類学 ー 個人投資家の事例から」『九州人類学報』 38 巻	2011 年
		＊「宗教の教育と伝承 ー ベイトソンのメタローグを手がかりにして」『宗教研究』 85 巻第 2 輯第 369 号 ほか 11 件(うち査読有 1 件)	2011 年
大阪大学大学院・法学研究科・教授	大久保　規子	「泉南アスベスト国家賠償第 2 陣訴訟高裁判決の意義 : アスベスト被害と国家賠償」『環境と公害』44 巻 1 号	2014 年
		「最新判例演習室 行政法 水俣病認定の義務付け請求が容認された事例 : 水俣病認定申請棄却処分取消、水俣病認定義務付け請求控訴事件[福岡高判平 24.2.27」『法学セミナー』57(8)	2012 年 8 月
		「座談会 社会的災害の被害補償・救済と国の責任を考える--水俣病とアスベストをめぐる 2 判決を受けて」『環境と公害』40 巻 3 号	2011 年
		「環境影響評価法の 2011 年改正について(特集 時の法律)」『ジュリスト』1430 号	2011 年 1 月
		「環境法制の展開と課題（特集 21 世紀日本法の変革と針路）-- (公法)」『ジュリスト』1414 号　　ほか 16 件	2011 年 1 月
弁護士	東　俊裕	「当事者の視点 われら自身の声 障害者制度改革の成果と権利条約の視点から見たこれからの課題」『DPI : われら自身の声』30 巻 1 号	2014 年 4 月

		「もし、あの日私があの場所にいたら : 車いす障害者からの語り（いのちをつなぐ、東北、熊本 : 3.11 以降の福祉と環境を考える 2012 年 6 月福祉環境学フォーラム記録)」『社会関係研究』19 巻 2 号	2014 年 3 月
		「障害者差別解消法の意義と課題（特集 障害者差別解消法が意味するもの)」『月刊福祉』 96 巻 13 号	2013 年 12 月
		「障害を理由とする差別の禁止に関する法制度の果すべき役割」『病院・地域精神医学』56 巻 1 号	2013 年 9 月

		「水俣病補償・救済のゆくえ--特別措置法の問題点と課題を中心に（特集 公害被害救済をめぐる最新動向)」『環境と公害』46巻2号 ほか7件	2010年
東京経済大学・経済学部・准教授	尾崎 寛直	【著書】『医療・福祉問題にみる復興の課題、原子力災害からの生活再建と地域の復興 ー 福島原発事故から考える』 ミネルヴァ書房	2015年5月刊行予定
		「被災者の暮らしの再建と医療・福祉システムの再構築」『環境と公害』 44巻4号	2015年1月
		「環境被害等の補償・救済にかかわる横断的比較制度研究」『環境経済・政策研究』 6巻1号	2013年
		「公害等の補償・救済制度に関する横断的な比較研究の意義」『人間と環境』 38巻1号	2012年
九州大学大学院・経済学研究科・教授	磯谷 明徳	【著書】植村博恭・宇仁宏幸・磯谷明徳・山田鋭夫編著 『転換期のアジア資本主義』 藤原書店	2014年
		【著書】宇仁宏幸・山田鋭夫・磯谷明徳・植村博恭著『金融危機のレギュラシオン理論・日本経済の課題』 昭和堂	2011年
		「戦後日本の化学工業の変容, チッソと労働組合」『大原社会問題研究所雑誌』 675号 2015年1月号	2015年1月
		“Transformation of the Japanese Corporate _systema and Possibilities of the ″New J-type firm″ Re-examined” *Discussion Paper* No.2014-1, Faculty of Economics, Kyushu University	2014年
第2班 社会福祉学部・教授	宮北 隆志	【著書】「福島・三池・水俣から『専門家』の意見を問う」三池CO研究会編 弦書房	2014年7月
		【著書】“Minamata disease and revitalization” Ed. By R. Cox & A. Caryle *Risky engagements: encounters between science and art* Univ. Manchelster	2013年
		【著書】「地域戦略プラットフォームを核とした市民参画・協働の取り組みと『水俣学』」、熊本学園大学水俣学研究センター編『水俣からのレイトレッスン（水俣学ブックレット9)』 熊本日日新聞社	2013年

		【著書】「水俣・芦北地域戦略プラットフォーム」花田昌宣・原田正純編著『水俣学講義 第5集』 日本評論社	2012年
		【著書】『失敗の教訓を生かす～持続可能な水俣・芦北地域の再構築(水俣学ブックレット8)』 熊本日日新聞社	2010年
		「持続可能な農的暮らしと健康な地域社会の実現をめざして－地域固有の資源を活かしたエネルギー自治」『月刊社会教育』	2014年2月
		「水俣病事件と“社会的合意の形成”」『流れを変える』Vol.5	2014年8月
		＊“Minamata and Ahikita Regional Strategic Platform Providing Opportunities for Citizens' Participation and Collaboration and “Minamata Studies”『水俣学研究』5号	2014年
		「水俣の国際化-タイにおける近代化/工業化の進展と公害問題」『地理』57巻2号	2012年2月
		「水俣・芦北地域戦略プラットフォームを核とした市民参画・協働の場づくり「水俣学」」『保健師ジャーナル』68巻	2012年
		宮北隆志・中地重晴・花田昌宣・丸山定巳・藤本延啓・田尻雅美・井上ゆかり, 他 「マプタプット工業団地の拡張をめぐる諸問題の現状と課題」『水俣学研究』3号 ほか9件(うち査読有4件)	2011年
社会福祉学部・教授	中地　重晴	【著書】『水銀ゼロをめざす世界(水俣学ブックレット11)』 熊本日日新聞社	2013年
		【著書】「水銀規制国際条約と水俣学」 熊本学園大学水俣学研究センター編『水俣学ブックレット9　水俣からのレイトレッスン』 熊本日日新聞社	2013年
		【著書】「放射能汚染とつきあう社会の到来」今福龍太・鵜飼哲編『津波の後の第一講』 岩波書店	2012年2月
		「水銀条約の意義と早期批准に受けた日本の課題」『労働の科学』69(5)	2014年
		「水銀条約と日本の課題」『環境と公害』43巻4号	2014年
		「水俣病などの水銀汚染にかかる歴史とあるべき今後の社会的取組み」『環境技術』42	2013年

		「水俣学の視点からみた福島原発事故と津波による環境汚染」『大原社会問題研究所雑誌』 No661	2013 年 11 月
		「住民参加による産廃不法投棄の原状回復 ― 香川県豊島の経験」『環境技術倫理研究』10　　ほか 4 件	2013 年
社会福祉学部・教授	守弘　仁志	【著書】『変わりゆくコミュニケーション　薄れゆくコミュニティ』(前納弘武・岩佐淳一・内田康人編著) ミネルヴァ書房	2012 年
		【著書】『社会理論と社会システム』(共編著) 学文社	2012 年
社会福祉学部・講師	藤本　延啓	【著書】「大規模不法投棄問題と地方自治体」『新通史　日本の科学技術　世紀転換期の社会史 1955 年～2011 年』 第 4 巻　原書房	2011 年 12 月
		中地重晴・藤本延啓「インドネシアの廃棄物処理の現状と課題」『海外事情研究』40	2013 年
		「徳島県上勝町における廃棄物政策の歴史と『34 分別』の背景」『第 23 回廃棄物資源循環学会研究発表会論文集』	2012 年
和光大学・経済経営学部・講師	森下　直紀	【著書】「水俣病事件の障害学――『住民手帳』という実践モデルについて」 川端美季他編『生存学研究センター報告』 生存学研究センター	2013 年 3 月
		【著書】「社会調査者はなにを見たか一水俣病被害の構造的理解をもとめて」 天田城介他編『差異の繁争点一現代の差別を読み解く』 ハーベスト社	2012/3/1
		「水俣病史における『不知火海総合学術調査団』の位置　－人文・社会科学研究の『共同行為』について（社会調査の実践的課題）」『生存学研究センター報告』14	2010/11/1
鹿児島大学大学院・理工学研究科・教授	冨安　卓滋	＊“Estimation of the residual total mercury in marine sediments of Minamata Bay after a pollution prevention project” *Marine Chemistry*, Vol.159	2014 年
		＊“Quantitative Evaluation of Real-time Measurements of Atmospheric Mercury in a Mercury- contaminated Area” *Journal of Environment and Safety*, Vol.4	2013 年
		＊“Selective determination method for measurement of methylmercury and ethylmercury in soil/sediment samples using high-performance liquid chromatography-chemiluminescence detection coupled with simple extraction technique” *Journal of Chromatography*, Vol.1228	2013 年

		＊“Sensitive determination method for mercury ion, methyl-, ethyl-, and phenyl-mercury in water and biological samples using high-performance liquid chromatography with chemiluminescence detection” *Analytical Sciences*, Vol.28	2012 年
		＊“Mercury Speciation in the Water of Minamata Bay, Japan” *Water, Air, & Soil Pollution,* Vol.218	2011 年
第3班 社会福祉学部・教授	山本尚友	【著書】『さいれん復刻版 第1回～6回配本書誌解題』 柏書房	2010―2013年
		【著書】花田昌宣・山本尚友・井上ゆかり著『水俣病と向き合った労働者の軌跡（水俣学ブックレット10）』 熊本日日新聞社	2013 年
水俣学研究センター・研究助手	井上 ゆかり	【著書】『「さいれん」復刻版刊行記念シンポジウム報告書』（編集） 水俣学研究センター	2014/3/1
		【著書】「生活現実から水俣病被害を捉える―芦北漁民のケース 」熊本学園大学水俣学研究センター編『水俣学ブックレット9 水俣からのレイトレッスン』 熊本日日新聞社	2013 年
		【著書】「一人ひとりの生き方が問われた六年間―合理化闘争から水俣病への目覚め」花田昌宣・山本尚友監修『さいれん復刻版第 3 回配本』 柏書房	2011 年
		「現場と理論の往還道 水俣学の試み」『現代思想』2015 年 2 月号	2015 年 2 月
		「生活現実としての水俣病被害」『保健師ジャーナル』68 巻	2012 年
熊本日日新聞社・取締役	高峰 武	【著書】『水俣病小史（増補版）（水俣学ブックレット 6） 』（編集） 熊本日日新聞社	2012 年
		「『原田正純』を読み直す」『水俣学研究』5 号	2014 年
		「水俣病最高裁判決をどう読むか ： 軌道修正の絶好のチャンスだ」『新聞研究』744	2013 年 7 月
		「一人の医師が存在したという救い （原田正純さんが水俣から見ていた世界）」『週刊金曜日』 21(5)	2013 年 2 月

法政大学・社会学部・教授	小林　直毅	【著書】小林直毅・西田善行「テレビアーカイブとしての『水俣』」 相良匡俊教授・湯川新教授退職記念号	2012 年
		「アーカイブ番組を大学教育にいかす」『放送研究と教育』第 64 巻	2014 年
		「メディア言説としての安定賃金闘争と水俣病事件」『大原社会問題研究所雑誌』 630 号	2011 年 4 月
		「大学教育における『水俣』のテレビドキュメンタリー」『Speech communication Education』24 号	2011 年 3 月

（様式 2）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

平成 27 年度～平成 31 年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要

1 学校法人名 熊本学園　　2 大学名 熊本学園大学

3 研究組織名 熊本学園大学水俣学研究センター

4 プロジェクト所在地 熊本市中央区大江 2 丁目 5 番 1 号

5 研究プロジェクト名 水俣病の経験を将来に活かした地域構想と国際的情報発信のための水俣学研究拠点の構築

6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
花田 昌宣	社会福祉学部	教授

8 プロジェクト参加研究者数 22 名

9 該当審査区分 理工・情報　生物・医歯　(人文・社会)

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
花田 昌宣	社会福祉学部・教授	被害者補償・救済の制度分析と解決策の模索	研究の統括、水俣病被害の制度分析
宮北 隆志	社会福祉学部・教授	水俣病被害地域再構築の構想	副統括責任者、地域戦略の検討
中地 重晴	社会福祉学部・教授	土壌汚染調査、埋立地の水銀問題解決への提言	地域の環境汚染の把握と対策
井上 ゆかり	水俣学研究センター・特定事業研究員	水俣学アーカイブスの構築と国際発信	アーカイブ構築、連携
田尻 雅美	水俣学研究センター・特定事業研究員	水俣病患者の医療とケアのニーズ分析	水俣病患者の福祉的ケア
高木 亨	社会福祉学部・准教授	水俣病発生地域の地理的調査・分析	水俣病発生地域に関する地理的検討
萩原 修子	商学部・教授	語りを通した被害者のサファリングの解析	水俣病被害者のナラティブ分析
東 俊裕	社会福祉学部・教授	障害法からみた被害者の復権の法的研究	被害補償と救済の法学的検討
藤本 延啓	社会福祉学部・講師	水銀が水俣に及ぼした影響の社会史的考察	廃棄物と地域の社会史の検討
矢野 治世美	社会福祉学部・准教授	資料収集と分析	文献・資料データベース構築
高峰 武	熊本日日新聞社・論説顧問、水俣学研究センター・	収集資料の解析	ジャーナリズムと水俣病の連携

（様式 2）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	客員研究員、 熊本学園大学・ 特命教授		
学外研究者			
下地　明友	水俣学研究センター・ 顧問　客員研究員	臨床をふまえた新たな水俣病概念の呈示	水俣病の臨床医学と病の人類学
頼藤　貴志	岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 疫学・衛生学分野・ 教授	国際的研究をふまえた水俣病像の解明	水俣病の疫学的検討
除本　理史	大阪市立大学大学院・経営学研究科・ 教授	被害補償と救済に関わる経済学的解析	被害補償の経済学的検討
飯嶋　秀治	九州大学大学院・ 人間・環境学研究科・ 准教授	住民の語りと地域共生のあり方の呈示	地域住民のナラティブと地域の民俗検討
大久保　規子	大阪大学大学院・ 法学研究科・教授	国際法的視点から水俣病救済策の検討	環境被害の国際法的検討
尾崎　寛直	東京経済大学・ 経済学部・准教授	水俣病がもたらした地域経済の変容	地域経済と公害被害の検討
磯谷　明徳	九州大学大学院・ 経済学研究科・教授	水俣の基幹産業と労働生活の分析	化学産業の労働経済学的検討
森下　直紀	和光大学・ 経済経営学部・講師	水俣とカナダにおける地域環境変容	自然環境の社会学的国際比較
冨安　卓滋	鹿児島大学大学院・ 理工学研究科・教授	海水及び底質の水銀の変化の解析	地域の環境汚染の把握と対策
山本　尚友	水俣学研究センター・ 客員研究員	資料・文献の蒐集とデータベースの構築	文献・資料データベース構築
小林　直毅	法政大学・ 社会学部・教授	映像アーカイブネットワークの構築	アーカイブネットワーク構築
（共同研究機関等）			

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
障害法からみた被害者の復権の法的研究	弁護士	東　俊裕	被害補償と救済の法学的検討

（変更の時期：平成 27 年 4 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
弁護士	熊本学園大学 社会福祉学部・教授	東　俊裕	被害補償と救済の法学的検討

（様式 2）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
資料・文献の蒐集とデータベースの構築	熊本学園大学 社会福祉学部・教授	山本尚友	文献・資料データベース構築

（変更の時期：平成 29 年 4 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
熊本学園大学社会福祉学部・教授	水俣学研究センター客員研究員	山本尚友	文献・資料データベース構築

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
水俣病患者の医療とケアのニーズ分析	水俣学研究センター研究助手	田尻雅美	水俣病患者の福祉的ケア

（変更の時期：平成 29 年 4 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
水俣学研究センター・研究助手	水俣学研究センター 特定事業研究員	田尻雅美	水俣病患者の福祉的ケア

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
水俣学アーカイブスの構築と国際発信	水俣学研究センター研究助手	井上ゆかり	アーカイブ構築、連携

（変更の時期：平成 29 年 4 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
水俣学研究センター・研究助手	水俣学研究センター 特定事業研究員	井上ゆかり	アーカイブ構築、連携

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	福島大学うつくしまふくしま未来支援センター・准教授	高木　亨	

（変更の時期：平成 29 年 4 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
福島大学うつくしまふくしま未来支援センター・	熊本学園大学 社会福祉学部・准教授	高木　亨	水俣病発生地域に関する地理的検討

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

准教授			

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	（一社）和歌山人権研究所・主任研究員	矢野治世美	

（変更の時期：平成 29 年 5 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
（一社）和歌山人権研究所・主任研究員	熊本学園大学 社会福祉学部・准教授	矢野治世美	文献・資料データベース構築

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
臨床をふまえた新たな水俣病概念の呈示	社会福祉学部・教授	下地明友	水俣病の臨床医学と病の人類学

（変更の時期：平成 30 年 4 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
社会福祉学部・教授	客員研究員　水俣学研究センター顧問	下地明友	水俣病の臨床医学と病の人類学

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
収集資料の解析	熊本日日新聞社・論説顧問	高峰　武	ジャーナリズムと水俣病の連携

（変更の時期：令和 1 年 7 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
熊本日日新聞社・論説顧問	熊本日日新聞社・論説顧問、水俣学研究センター客員研究員、熊本学園大学特命教授	高峰　武	ジャーナリズムと水俣病の連携

（様式 2）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
国際的研究をふまえた水俣病像の解明	岡山大学大学院 ・環境生命科学研究科・准教授	頼藤貴志	水俣病の疫学的検討

（変更の時期：令和 1 年 8 月 1 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
岡山大学大学院 ・環境生命科学研究科・准教授	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科疫学・衛生学分野・教授	頼藤貴志	水俣病の疫学的検討

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
地域活性化につながる地域情報資源の活用	熊本学園大学・社会福祉学部・教授	守弘仁志	地域活性化の検討

（変更の時期：令和 1 年 9 月 18 日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	死去のためプロジェクト参加研究者数減		

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

11 研究の概要（※ 項目全体を10枚以内で作成）

（1）研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

1956 年の水俣病の発生確認から半世紀以上が経過し、水俣病事件は社会的には終息しつつあるとみなされている。しかし、学術的・政策的にも被害者の補償と救済の面において未解明な点も多く、抜本的解決策も呈示されていない。そうした中で、被害の多様性研究、地域再構築調査、アーカイブ構築の基盤となる研究拠点の構築発展を企図して本プロジェクトを展開する。原田正純氏が提唱した水俣学の理念と方法を発展させ、水俣病被害の実態、発生機序さらに被害民にとっての課題を明らかにし、その基礎の上に水俣病によって脆弱化した地域社会や大量の水銀が眠る水俣湾埋立地など環境の課題をふまえた地域再構築戦略を、社会と環境の総体的な課題と住民参加と地域の民主主義の形成に基づいて再検証することにより構想する。この研究の過程で水俣病文献収集とアーカイブ構築を進め、それが人材育成の場となり、さらに国内外における研究拠点としての役割を果たす。

第 1 班の水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究、第 2 班の環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究、第 3 班の水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成の成果を総合することにより、不知火海沿岸の環境負債を活かした住民による地域再構想を提起すること、ならびに多世代にわたる水俣病被害民の復権と幸福な生を実現する健康な社会環境を明示する。

（2）研究組織

（1）本研究プロジェクトは「水俣学研究センター」を母体とし、そのもとで組織し、研究代表者は各班の統括、プロジェクトの進捗管理など研究マネジメントに責任を負う。

本研究プロジェクトでは、以下の 3 つの研究班を組織するが、これらは入れ子状に密接に協働しながら研究を進める。**第 1 班（責任者：花田昌宣、学内研究員 4 名、学外研究員 7 名）は、「水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究」として、水俣病被害とは何かの問い直し**が行われ、その研究調査プロセスは**第 2 班（責任者：宮北隆志、学内研究員 4 名、学外研究員 2 名）「環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究」**へと反映されるとともに、第 2 班の成果は、第 1 班の水俣病問題の解決への指針を提供する。**第 3 班（責任者：井上ゆかり、学内研究員 3 名、学外研究員 3 名）「水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成」は、水俣学研究の資料的基盤を形成**し、第 1、第 2 班のベースを提供すると同時に、この 2 つの班の地域密着型研究調査過程で収集される資料を加増することで充実が図られる。

（2）大学院生・PD 及び RA の人数・活用状況

大学院では、水俣学フィールドワークを正規科目として実施しており、本研究プロジェクトと連携した教育を実施している。RA 等に関しては、2015 年度から 2019 年度まで各年度 1 名を採用した。

（3）研究チーム間の連携状況

各班の研究責任者を中心として毎週 1 回月曜日に運営委員会を持ち研究の進捗状況や問題点を把握し、効果的な運営と緊密な連携をはかっている。プロジェクトの構成員は、研究会などで恒常的に連携するだけではなく遠隔地の研究者も含め、IT ツールを用いて絶えず情報交換を行っている。

（4）研究支援体制

水俣学研究センターに 2015、2016 年度は研究助手 2 名、2017 年度からは研究員 2 名を配置するとともに、事務職員 3 名（本学 2 名、現地研究センター1 名）が配置されている。本学学術文化課が担当事務部局として、財政・経理・施設整備・研究評価、学内諸部局組織との連携を図り支援している。

（5）学外研究機関などとの連携状況

本研究プロジェクトはオリジナルな方法と課題を有しているため、固定的な共同研究機関をおいていないが、日本環境会議、国立水俣病総合研究センター、NPO 法人環境ネットワークくまもと、水俣ほたるの家、水俣病センター相思社、水俣病互助会、水俣病不知火患者会、水俣市や天草市御所浦支所とは、日常的な協力関係を構築している。海外との学術研究交流は、国立成功大学社会科学院（台湾）、EARTH（タイ）、中国清華大学、NGO 環境運動連合（韓国）などと交流協定を締結し連携している。

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

(3)研究施設・設備等

本学の「水俣学研究センター」、並びに水俣市に開設した「水俣学現地研究センター」を本プロジェクト推進のために活用している。2017 年 1 月、これまで借用利用していた本学 14 号館 3 階日本・中国金融研究プロジェクト室及び第三会議室を研究スペースとして、また 2020 年 2 月には 14 号館 2 階のビデオ学習室の利用が認められ、書庫として配置し、資料の受け入れ、データベース化などの研究活動の充実が図れるようになった。

水俣学研究センター		面積(㎡)	用途
14号館3階	事務室	33.2	事務作業など
	文献資料室	33.2	関係図書や資料を配架及び閲覧
	データベース室	33.2	資料整理・データベース化
2階	書庫	33.2	関係図書や資料を配架及び閲覧
7号館3階	書庫	40.0	資料所蔵
	書庫	40.0	資料所蔵

研究員 1 名、事務職員 2 名、RA1 名、アルバイト 10 名を配置。7・14 号館に資料整理作業室ならびに書庫を設置し、水俣学関連書籍、研究資料、DVD 等は、研究員、客員研究員や大学院生、調査に訪れる研究者らが活用している。

水俣学現地研究センター		310.51㎡	
1階	事務スペース	2階	会議室
	研究打合せスペース		研究室
	休養室		貴重書庫
	資料閲覧スペース		相談室
	資料作業スペース		待合スペース
	談話コーナー		ホール
	書庫		

平成 17 年 8 月に水俣市に開設。現地における調査・研究活動の拠点として、研究員 1 名、事務職員 1 名、アルバイト 5 名を配置。健康・医療・福祉相談、研究会などは 2 階に設置された相談室・会議室で行う。

(4)研究成果の概要　※下記、13及び14に対応する成果には下線及び＊を付すこと。

各研究班における研究成果の概要、共通した研究成果に分けて以下示す。

【1 班　水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究】

(1) 継続した健康･医療･福祉相談

現地における調査・研究活動の拠点として、2005（平成 17）年 8 月に水俣市浜町 2 丁目に開設した水俣学現地研究センターにて、健康･医療･福祉相談を行っている。これは、地元貢献の意味を持ち、住民のニーズに応えるよう努力している。毎月 2 回実施しており、本事業実施中、180 件数の相談があった（153）。

健康・医療・福祉相談

年度	回数	人
2015	9	24
2016	13	42
2017	12	25
2018	31	46
2019	28	43
合計	93	180

水俣病の被害は､補償救済制度についての知識が得られておらず、理解していないため認定申請が遅れたケース、近隣からの差別を恐れて本人が公健法の認定申請や水俣病特措法の救済策への手続きといった水俣病救済システムを拒絶していたケース、自身の水俣病の症状に気づいていなかったケースなどなど種々の理由から補償救済対象となっていないケースなどに類型化されることを解明した（25.98.104.105.107.138）。

水俣病の健康被害の多様性の研究として若い世代の水俣病被害者（胎児性水俣病と同世代）の被害実態に着目した。とくに、高次脳機能障害を把握するべく臨床心理テストと医学的臨床検査を組み合わせた手法を開発して、調査を行い成果の一部を発表できた。全身病としての水俣病が人格に与える影響を考察した（34.37.38.39.40.41.42.43.44.45.46.157.162.163）。これらの成果は、タイ王国チュラロンコン大学からの招聘による水俣病公式確認 60 年国際シンポ､総合地球環境学研究所から招へいを受け、インドネシア・ハサヌディン大学とゴロンタロ州立大学で開催された国際シンポジウム、水俣学研究センター第 3 回国際フォーラム、水俣学研究センター私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウムで報告した（135.140.144.146.151.152.153.157）。

2017 年 1 月 18 日、2019 年 1 月 13 日に開催した水俣病臨床研究会では、水俣病医学研究に携わる医師らを中心に、新潟、東京、大阪、岡山、熊本の医師および弁護士など 26 人、水俣学研究センターの研究員が参加し、水俣病に積極的にかかわる専門家が中心となって、日本神経学会による水俣病に関する見解をめぐって情報共有とディスカッションを行った。

(2) 朝日新聞社と共同で水俣病公式確認 60 年アンケート調査を実施

2016 年 2 月から 3 月にかけて、熊本学園大学水俣学研究センターは朝日新聞社と協力して、水俣

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

病公式確認 60 年アンケート調査を 8000 人を超える水俣病被害者に対して水俣病被害者団体の協力を得ておこなった。目的は、水俣病の被害を受けた人々の、被害経験及びその認識を把握し、水俣病に係る現在の課題および将来に求められているものを把握することを通して、今日の現状と課題を明確にしようというものであった。

この調査には被害者団体、14 団体に協力を依頼し、うち 8 団体が協力、団体として機能しておらず会長が個人的に協力していただいた団体もある。調査はアンケート用紙による自記式調査であった。調査票の配布及び回収は郵便でおこない、一部手渡しもあるがそれはごく少ない。アンケート配布総数は 8936 通、回収数は 2619 通で回収率 29.3%であった。

アンケート実施後、単純入力作業がほぼ終わり、データ入力の校正や集計作業に入ったばかりの 2016 年 4 月に熊本地震に見舞われ、水俣学研究センターも含め熊本学園大学全体も被災したため、集計・分析作業は予定より遅れることを余儀なくされた。中間報告は守弘が第 13 回水俣病事件研究交流集会において発表した（194.3）。クロス集計や統計処理を中心とした分析作業を終え 2019 年 2 月には最終報告書を刊行した（92）。被害者を対象とした調査は本調査が初めてであり、不知火海沿岸被害者が水俣病事件史 60 年のとき何を求めているのかを知り得た意義は大きかった。

（3）2014 年に実施したカナダ調査結果を先住民族の 2 つの居留地で報告

カナダ先住民の居留地のうちメチル水銀汚染の被害を受けているイングリッシュ・ワビグーンリバー流域のヴァバシムーン、グラッシーナロウズの住民に対し、2004 年以来継続的に実施している調査結果を踏まえて 2014 年に実施した医学的調査および魚類の総水銀調査結果の報告を行い、意見交換を行った。また、トロントで MDB（水銀障害委員会）検討会に要請があり参加。トロント大学では学生や市民など対象に講演を行った。1974 年から原田がカナダ水俣病の医学的調査を行っており、当センター設立当初から医師団や社会的調査班を編成し 2 つの居留地で調査を進めてきた。こうした継続的な関わりが水俣と世界を結びつけ、水銀条約にむけた課題整理につなげることができるといえる（13.119.199.200.202）。

（4）カナダ水俣病と熊本水俣病シンポジウムの開催

カナダ水俣病の被害者を招聘し、**熊本市と水俣市、東京都でシンポジウム**を 2017 年に開催した。このシンポジウムは、第 1 班の水俣病を社会的なものとして位置づけ医学的な学問から解き放ち、社会環境のなかに再定置し、あらためて終わることのできない**カナダと熊本水俣病の被害実態を明らかにする**ことを目的として開催した。この取り組みにより、海外とのネットワーク形成のみならず公害発生地域への貢献がより深まった（144.201）。

（5）資料叢書の刊行

熊本県芦北町の漁師が書き残した日記などを同地域の漁民に聞き取りを行い編者が必要最小限の脚注をつけ資料叢書Ⅴとして刊行した（126）。

（6）ブックレットの刊行

不知火海沿岸には長崎や広島のように歴史を刻んだ案内看板が百間排水口と親水護岸にしかない。そのため水俣病を学ぶためのガイドブックを刊行し 13 年が経過した年に新版を刊行した（91）。さらに同書の英語版も刊行した（88）。水俣病公式確認から 60 年を迎えた年に歴史の証言と今日的課題を示すことが求められておりブックレットとして刊行した（98）。

（7）書籍の刊行

1 班の取り組みとして 2011-2012 年に原田らと行った熊本県芦北町の水俣病多発漁村の医学的全戸調査と社会学的調査の成果を書籍として刊行した（123）。

【2 班　環境負債を克服し地域再構築にむけた評価と民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究】

（1）社会的困難を抱える地域における合意形成と自立的発展に必要な視点の提示

東部タイ・マプタプット、東北タイ・ルーイ県、ミャンマー・ティラワ SEZ、並びに、国内では水俣、並びに、福島におけるフィールド調査、課題検討会、ワークショップ、国際シンポジウムの開催を通じて得られた「地域の自立的/内発的発展に必要な視点」は、下記の 4 点に整理された。①「予防原則」に基づいた初期対応の重要性を再確認すること。②「国」と「地方」、或いは、「中央」と「周縁部」という構造の存在を明確化すること。③新たな「社会的合意」形成の仕組み（民主主義）の確立を模索すること。④地域固有の資源を地域のために活用するための仕組みや制度を確立する。これらは、地域の資源を活用して、自然に寄り添うようにして生きてきた人々が、最初に、しかも、最も深刻な犠牲を引き受け生活しているという現実から見えてく る視点であり、地域の資

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

源としての太陽光、 水、風、土、鉱物、森林、川や海などの「自然資本」の活用を、地域住民の手で行うこと によって、地域の持続可能性を、「環境」「地域経済」「社会的公正」の３つの側面から高めていくことが求められていると考える。持続可能な地域社会を住民主体でつくりあげてくために、今、それぞれの地域に求められているのは、「地域の風土・歴史・文化 に根ざした地域固有の解決策（地域のあり方）を見出し、それを外に開き、グローカル に共有する中で、一つひとつの、ひとり一人の命の尊厳が保たれる社会の実現に粘り強く取り組んでいくこと」である（93）。

（2）「水俣市ゼロ・ウェイスト円卓会議」と「ゼロ・ウェイストのまちづくり推進会議」におけるアクションリサーチ

水俣市における市民-行政協働のシステムである「水俣市ゼロ・ウェイスト円卓会議」への参与観察、あわせて全国のゼロ・ウェイスト宣言都市（徳島県上勝町・福岡県大木町・奈良県斑鳩町・福岡県みやま市、および水俣市）を連携する「ゼロ・ウェイストのまちづくり推進会議」における事務局機能を担うことを通して、水俣市における地域再構築・合意形成をはかる基盤を構築することができた（195）。

（3）課題検討会の開催

「環境首都水俣創造事業」とそれに至る経緯を中心的な議論対象としながら、水俣市の「協働」「市民参加・参画」について市民らと情報共有と意見交換を行った。

（4）資料叢書の刊行

市民研究グループみなまた地域研究会と共同で**沿岸漁民の生活史を明らかにし漁業と暮らしの歴史と現在を明らかにする目的で聞き取り**を行い、その記録を資料叢書Ⅳとして刊行した（97）。

（5）ミャンマー金鉱山調査

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の協力を得て、ミャンマー政府天然資源省環境保護局の案内で、ミャンマー北部シング―周辺の小規模金採掘鉱山の操業実態を調査した。ミャンマーにおける水銀使用の現状を把握することができた。水銀に関する水俣条約の発効に伴い、世界的に水銀規制が厳しくなる中で、水俣病の教訓を国際的にどう伝えていくのか、今後の学術交流や調査の基礎が構築できた。

（6）地域研究会の成果

水俣市民や水俣病被害者を主体として、当センターと共同で水俣病の負の遺産を生かした地域づくりの将来構想を自らの手によって示すことを目的に「みなまた地域研究会」を結成し、調査活動を行った。水俣湾及び水俣市内に残る水銀による環境汚染を調査し、対策の必要性を指摘した。一方、鹿児島大学の協力のもと、海辺の生き物観察を行い、生態系の回復を確認した。また、**現在の水俣市民の魚食の程度や水銀摂取量を把握するため、陰膳調査や献立調査などを実施**、現状把握を行い、水銀摂取量の多い者がいることを見出した。水俣条約の汚染サイトとして、水俣湾埋立地や旧八幡プールのリスク管理を行う必要があることを提起した。水俣市民が、水俣川河口部振興構想の是非を検討するための資料として活用されている（68.118.181.190.191.192.193）。

（7）中国と水俣の環境問題シンポジウムの開催

「中国の環境問題の現在―重金属と健康への影響」と題する、本学の特別セミナーにおいて、中地が「水俣湾に埋め立てられた水銀と水銀条約の課題」というテーマで報告した（183）。なお、2020年 3 月に貴州省及び湖南省での調査を中国科学院環境地質化学国家重点研究所郑宝山教授チームと実施する予定であったが、新型コロナ感染症の影響で延期された。

（8）韓国加湿器殺菌剤被害ワークショップの開催

韓国の加湿器殺菌剤問題に取り組む研究者、韓国政府機関担当者と水俣病補償救済制度等を比較検討し、加湿器殺菌剤問題解決を展望する意見交換のためのワークショップを開催した（138）。また、10 月には国立ソウル大学公衆衛生学教室並びにアジア公衆衛生学会の招聘を受けて研究発表をした（136）。

（9）ブックレットの刊行

『いのちをつなぐ～水俣、福島、東北～』は、2011 年 3.11 東日本大震災からどのように復興していくのか、特に放射能汚染からの復興を考えるために、風評被害や差別事件などを解決していくために、水俣病の経験と対比し、課題を整理、解決策を見出すための一助としてブックレットを刊行した。また、『九州・熊本の産業遺産と水俣』は、世界産業遺産として九州各地の産業遺産が登録されるに際し、水俣市内のチッソの旧工場や熊本市内にも同等の価値がある産業遺産があることを紹介するために刊行した（100）。

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

【3 班 水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成】

（1）寄贈資料を水俣学データベースで順次公開

本研究期間中、添付資料**表 1** の資料群の寄贈を受け、それらの文献目録化を終え、逐次水俣学研究センターのホームページ上で「水俣学研究センター所蔵資料データベース」として公開した。研究期間中、公開した資料群は添付資料**表 2** の通りであった。

目録には、一部**資料画像のマスキングを行い（マスキング基準有）公開**している。さらにカセットテープなどの**音源資料は、デジタル音源に変換し、目録上で視聴できるよう工夫**を加えた。写真資料は、水俣病事件のただなかを生きてきた元新日本窒素労働組合員の協力を仰ぎ、写真 1 枚に①フィルム番号②コマ番号③現像日④タイトル⑤撮影地⑥人物⑦主題別索引⑧備考を記載する「写真資料カード」を作成し、写真 1 枚が水俣病事件を知らない若い世代にまで語り続けていける情報を盛り込んだ。**こうした地域の人材とモノをマッチングし後世に資料を受け継ぐことこそが研究基盤を構築するのみならず水俣病事件を中心とした教訓の発信につながる**といえよう。なお、**写真画像は目録上に順次公開**している。

HP 上のデータベースページ閲覧件数は、129754 件であった。研究期間中、来館し資料閲覧された件数は添付資料**表 3** のとおりであった。水俣学研究センターHP 上のページ別閲覧件数では、「データベース」は 2016 年 6 位だったものが 2019 年 12 月には 3 位になるなど、資料群の公開数が増えるに従って閲覧が増えていることがうかがえる（2019 年 12 月グーグルアナリティクスによる、以下同様出典）。**この成果により、国内外に散在する資料を集約し、水俣学研究の情報基盤形成という目標を達成できた。**この成果は学会などで報告した（205.208.210.211.212.213.）。

（2）水俣学アーカイブの拡充と英語版の公開

水俣学アーカイブスは、資料と映像をリンクしたアーカイブで、水俣学研究・資料文献データベースおよび映像資料を通して、水俣学の取り組みの一端が研究者以外へも理解が容易になるよう、閲覧システムを HP 上に構築し 2014 年に公開したものである。**コンテンツは、証言**（「患者証言」を動画で配信）**・歴史**（「水俣今昔」として水俣市街写真の昔と今を地図上にマッピングしキャプションとともに公開、「時空でたどる新日窒労組」は安定賃金闘争時代の 10 拠点で組合がどのような闘いを行ったかを写真で辿ることができるものを公開）**・自然**（「海辺の物語」として地域研究会の生物写真を地図上に配置し公開）**・教育・記録・未来**で構成している。

研究期間中、これらコンテンツの充実を図るとともに、**2016 年 4 月にはアーカイブの英語版を作成し公開した。さらに 2017 年 3 月には「時空でたどる新日窒労組」の英語版を公開した。**英語版の充実を図ることで、アメリカ 1.22%、カナダ 1.15%、韓国 0.38%、台湾 0.22%、タイ 0.18%、マレーシア 0.12%、ブラジル 0.1%、不明 0.22%と海外からの閲覧も増えている。

水俣学研究センターHP のページ別閲覧状況は、トップページ 15.83%、水俣学アーカイブの「水俣今昔」5.91%であり、電話での問い合わせも多くなっている。さらに、国内の閲覧場所は、熊本市 16%、大阪市 10.84%、東京都新宿区 5.17%、神奈川県横浜市 4.89%、福岡市 4.54%、東京都港区 4.3%、愛知県名古屋市 2.41%、京都市 2.35%、東京都千代田区 2.26%、その他 1.89%で首都圏での閲覧件数が伸びている。**本研究期間中にデータベース、アーカイブを充実させ、さらに海外にも情報発信したことから、第 3 班の到達目標である「将来にわたる水俣学研究の情報基盤の構築と共有、成果の国内外への発信」は達成できたと考える。**

（3）水俣病事件資料集続編刊行にむけた資料収集と整理

水俣病研究会が 1926 年から 1968 年までの資料『水俣病事件資料集』を刊行したのは 1996 年であった。未だ終わることのできない水俣病事件において 1968 年以降の資料を若手研究者が入手することは困難な状況となっている。そのため続編の刊行が待たれており、かつ水俣病事件を初期から経験している患者や支援者、研究者らが亡くなっていく状況のなか喫緊の課題として資料集の続編を刊行するために、水俣病資料集編纂委員会を 2015 年にたちあげ編集作業に着手した。続編に編纂する資料群は当センターが公開してきた資料を中心とした。2016 年に熊本地震により資料破損などを経験したことで、熊本大学と本学に保存されている水俣病研究会蒐集資料を複写するプロジェクトも開始した。研究期間中に熊本大学に保存されている水俣病研究会蒐集資料の複写ならびに仮目録作成を終え、今後本学に保存されている 1968 年以降の水俣病研究会蒐集資料目録とあわせ編纂を行う予定である。**計画では研究期間中に刊行の予定であったが、熊本地震の影響で基礎資料の整理、選定にとどまった。しかし、この作業に RA1 名を配置し若手研究者の人材育成に努めたこ**

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

とで第 3 班の到達目標である「人材育成」は実を結びつつあるといえる。

（4）段階的資料保存プロジェクトの開始

2016 年熊本地震を契機として、劣化の激しい資料を対象として簡易補修処理ならびに脱酸性化作業を行う段階的な保存プロジェクトを開始した。本プロジェクトは、研究基盤形成の要となる 100 年後の世代に資料を受け継ぐ取り組みとして位置付いており、**第 3 班の到達目標である「将来にわたる水俣学研究の情報基盤」を形成した。**

（5）横断検索機能の追加

2019 年 3 月には、**これまで公開してきた膨大な資料群を横断的に検索することのできる「横断検索機能」を HP のデータベースに搭載するシステムを構築**した。このことが**資料検索を容易にし、利用促進につながる**と考えている。しかし、横断検索機能公開間際になりグーグルなどが突如として音声や動画の無料配信サービスを中止したことを受け、これまで公開してきた音声や動画配信を当センターのシステムに構築しなければならなくなり、横断検索機能の公開が遅れ 2020 年 5 月となったが、本研究がもたらした成果は大きい。

（6）教育コンテンツ機能の検討

上記水俣学の資料群を環境教育に活かす研究に発展させるため、第 3 班の責任者が 2020 年度科学研究費助成事業（基盤 B）に応募し採択された。**こうした研究ができることとなったのは、第 1 期（2005-2009 年度）、第 2 期（2010-2014 年度）、第 3 期（2015-2019 年度）と継続して研究基盤形成を整える支援をしていただいたおかげである**といえる。

【第 1.2.3 班の共通した研究成果】

（1）水俣学講義による人材育成

水俣学講義は 2002 年に熊本学園大学社会福祉学部（3 年次以上対象、福祉環境学科は必修、ライフウェルネス学科･子ども家庭福祉学科･社会福祉学科は選択科目）に開講され 18 年が経過した。この講義は、当センターの運営委員が担当教員として授業計画をたて、患者･研究者･弁護士･記者・支援者など水俣病事件に関わってきた方々を外部講師として招き講義していただいている。

毎年 200 名を超える学部学生が履修し、そこから水俣病事件研究を志す院生もでている。また一般市民も聴講し、授業は当センターHP でライブ中継しているため海外からも閲覧することができるシステムを構築している。この講義は水俣病の知識を教えるものでなく、社会に出て最も大切な「いのちへの向き合い方」を自らと重ね考えることに重きをおく若手人材育成として位置付いている。**当センターの研究を発展させた教育**であり、**単に研究者を養成するだけでなく地域に根ざした人材を育成する教育プログラム**といえる。

（2）水俣学若手研究セミナーの開催

全国の大学関係者、大学院生および PD、指導教員の推薦のある学部生、在野の研究者を対象に、希望者に略歴書・研究テーマを提出してもらい受講者の決定を行い、座学とフィールドワーク、そして討論を行う現地セミナーを 2011 年から開催している。このセミナーには、本研究センターの主な研究者のみならず客員研究員などが座学やフィールドワーク準備を行い、各研究班の成果を情報共有する場ともなっている。本研究期間中は 3 回実施し、参加者は、全国の大学の法学部・医学部・文学部・社会学部の大学院生のみならず、研究者や写真家、水俣の住民など多様な顔ぶれとなった。なお、このセミナーは本学大学院社会福祉学研究科福祉環境学専攻のフィールドワークⅠに位置づけられ、本学大学院生も参加した。**様々な立場から水俣病事件を見つめなおすオープンな教育の場**を提供できている。しかし、国際的教育・研究センターを目指すならば、海外からの参加を呼びかける英語版のチラシなど作成する必要があったと反省している。

（3）水俣病を「伝える」セミナーの開催

水俣病事件史において第一次訴訟など初期から道を切り開いてきた人の語りから水俣病を学び自らの教育現場でどのように次世代に伝えていくかを再検証することを目的に、水俣芦北公害研究サークルと共同で 2010 年からセミナーを開催してきた。水俣病公式確認 60 年を迎えた年に、水俣・芦北・津奈木の教職員を対象として、患者から学び伝える必要性と子ども達にどのように伝えていくのか課題整理と意見交換を行った。**この取り組みが、第 1 班の研究成果である「水俣病被害と補償救済に関する実情」を提供する場**となり、さらには地域の教育人材を育成するのみならず、**地域のコンフリクトのなかで教育に携わる教員たちの現状と課題共有の場となり、第 2 班の「地域戦略への提言」につながる取り組み**となった。

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

（4）定例研究会の開催

定例研究会は当センターの研究員・客員研究員・特別研究員による研究報告と議論することを目的に開催している。2016 年 2 月に「水俣学プロジェクトの今後の進め方について」として各研究班の進捗状況報告と課題を確認した。同年 11 月には熊本地震後の水俣湾埋立地や八幡残渣プールなどの水銀の安全性について中地が報告し、地域再生のための地域戦略の提言を行った（191）。2017 年 9 月には京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科の藤倉達郎氏を招聘し「地域研究の可能性と水俣学」として開催した。また同年 10 月に京都・たかぎクリニック精神科医の高木俊介氏に「オープンダイアローグと水俣学」と題し話題提供いただいた。**これら 2 つの研究会は、中間報告前の水俣学の研究基盤形成に向けた各班の研究課題整理の場となった。**さらに同年 9 月には、熊本大学政策創造研究教育センター上野眞也教授から「不知火海の漁業・流通のメチル水銀暴露リスク」と題した報告を受け、水銀暴露と健康被害について討議する機会を設け、新たな研究課題への契機を得た。

（5）Schoo との教育連携

熊本学園大学では、インターネット生放送を活用したコミュニケーション型動画学習サービス「schoo（スクー）WEB-campus」を運営する株式会社スクーと連携し、2015 年 7 月から『現代にいきる水俣学』をオンライン上で開講した。九州では本学が初めての開講であり、**いつでもどこからでも学びの場を提供できる試み**であった。現在、新型コロナウィルス感染拡大による緊急事態宣言後、全国の大学でも遠隔授業が採用されているが、水俣学としては容易に対応が可能であった。

（6）国際フォーラムの開催

熊本市および水俣市で開催した「第 3 回環境被害に関する国際フォーラム」は、研究者だけによる国際会議ではなく、国内外の公害被害発生地域の被害住民、研究者、NGO/NPO 支援者らによって構成し、被害者の視点にたち、公平と正義に基づく実践的な議論の場となることを目的に開催した。参加国と地域は、カナダ・韓国・中国・新潟・水俣であり、参加者は延べ 200 名であった。**この国際フォーラムは、海外とのネットワーク形成を強化するにとどまらず、学際的でオープンな情報共有の場、さらには継続的な公害による環境破壊や健康被害のない社会づくりに役立つ提言の場となったことから各班の目標は達成された。**またこの成果は『水俣学研究』に投稿し掲載が決定した（印刷中：1）。**なお当初計画していたように本フォーラム中、国内外の被害者の映像記録を撮影し、アーカイブに搭載するための編集を終え、近日公開**予定である。

（7）私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウムの開催

本研究期間中、中間報告を 2018 年 1 月の第 13 回水俣病事件研究交流集会において行い課題整理と研究計画の修正を行い取り組んだ。その成果報告シンポジウムを 2019 年 12 月に行った。報告は第 1、第 2、第 3 班からそれぞれ行った（135.153.182.205）。この報告を受け、市民や客員研究員などとともに「水俣学」を今後どのように発展させていくかを公開で議論した。

以上のように、当初計画どおりの成果が得られた。また、成果の一部は、学術誌や新聞報道で取り上げられ、今後の展開が期待されている。

＜優れた成果が上がった点＞

これまでの研究成果のなかで特に優れた成果を各班で示す。

【1 班　水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究】

（1）健康・医療・福祉相談事業を通した調査の遂行および胎児性水俣病に関する臨床的調査及び文献資料等の調査研究の成果をタイ王国チュラロンコン大学で開催した国際シンポジウム Minamata@60: Learning from Industrial Disaster towards Sustainable Society and Environment”において発表した（146.157）。とくに戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウムでは、**健康・医療・福祉相談事業を通した調査結果を水俣学研究センター設立 15 年目の成果として報告したことは、テレビ局から特集番組がつくられるなど社会的反響が大きかった**（153）。

（2）また、朝日新聞社と共同で実施した水俣病被害者を対象とした意識調査では調査対象者 8000 人で回収率は 30%を超え、水俣病研究史上初めての大規模調査となった。**集計結果は 2018 年 1 月に中間報告として公表し、2019 年 2 月には最終報告書（3）を刊行することができたが、先行調査の分析も踏まえた統計的分析ならびに**自由回答欄の質的な分析を進めており、水俣病被害の社会的側面を質的にも明らかにできるものである。

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

【2 班　環境負債を克服し地域再構築にむけた評価と民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究】
（1）地元市民グループと共同で不知火海の底質・魚介類中の水銀調査、陰膳調査を行った。本調査で、水銀による高濃度の土壌汚染が明らかになり追加調査を実施し、地元での公開の研究会で警告を発するとともに熊本県へ調査の必要性を提言した。陰膳調査では、週間耐容摂取量と同程度の水銀を摂取している市民がいることを明らかにしたが、サンプル数が限られているため対象者を増やすとともに継続したモニタリングを行っている（68.190.193）。
（2）水銀に関する水俣条約の発効に伴い、水俣湾埋立地（エコパーク）及び旧八幡プール（チッソの産業廃棄物最終処分場）を汚染サイトとして管理する必要性を問題提起した。水俣川河口部振興構想による公有水面埋立の是非を検討する際に参考にされている（68.118）。
（3）東北タイ・ルーイ地区、ミャンマー・マンダレー管区、インドネシア・ゴロンタロなどの環境汚染発生現地調査を地元研究者らの協力により実施、地域に根ざした水俣病の教訓の国際発信と協働の取り組みを始めることができた。

【3 班　水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成】
（1）**データベース**で公開した文献目録には、倫理上の配慮をしながら積極的に**資料画像を公開**するとともに目録上で音声データが視聴できるシステムを構築し、**歴史的な音声記録を公開**している。また、**アーカイブ**構築を進めて、**写真のみならず動画映像も公開**し、研究成果公開による社会への貢献を果たすことができた。この成果により、国内外に散在する資料を集約し、水俣学研究の情報基盤形成という目標を達成し、さらに**英語版を作成したことから、成果を国内外へ発信する目標も達成することができた。**
（2）地域の人材と資料をマッチングさせることで資料の価値を高め、**資料整理に RA などの若手研究者をあたらせることで人材育成を図り**、研究基盤を構築してきた意義は大きいといえる。
（3）2020 年 3 月には、すべての資料群を横断し検索できる機能を搭載した。グーグルが動画や音声配信サービスを突然終了したことを受けて、サーバー上のシステム構築を余儀なくされたが、**期限内に横断検索機能を公開することで当初の計画していた資料利活用の促進**につながった。

＜課題となった点＞
本研究プロジェクトは、当初の計画通り、またはそれ以上の成果を達成することができた。そのため研究期間終了時における大きな問題点はないが、以下の課題を構成メンバーで共有し、水俣病の経験を将来に活かした地域構想を実現させ社会に還元していく。
（1）若手研究セミナーなど若手人材育成の場で、国際的教育・研究センターを目指すために、海外からの参加を呼びかける英語版のチラシなど今後作成する。
（2）データベースの導入部分は英語版を作成したものの、目録上は日本語のままであるため、今後は目録上の英語版を作成する必要がある。しかしながら、写真画像や資料画像、さらにはアーカイブで動画配信し英語字幕をつけていることから、資料閲覧来館者のなかにはドイツなど海外から写真や映像資料の閲覧もでてきており、当初の研究計画以上の成果は達成できた。

＜自己評価の実施結果と対応状況＞
当センターホームページ上で研究成果は順次公開し、定例研究会などで各班の情報・意見交換を活発に行い、メンバー間の研究促進および連携強化に努めた。さらに各班の研究成果は年度ごとに学会などで報告し課題整理、計画の修正を行い研究促進に努めた。結果として当初の計画通りの成果をあげることができた。研究者の定年退職があったものの当センターの客員研究員として共同研究を進めた。また、研究者の突然の死に見舞われたものの、研究終了間際であり、それまでに成果を残し若手研究者に引き継いでいたため問題は生じなかった。

＜外部（第三者）評価の実施結果と対応状況＞
下記 3 名の外部評価委員から外部審査を受審した。評価の抜粋を以下に示す。
【外部評価委員】
1.　長谷川公一委員（東北大学大学院文学研究科教授、2020 年より尚絅学院大学大学院特任教授）
2.　赤木洋勝委員（国際水銀ラボ取締役所長）
3.　嘉田由紀子委員（前びわこ成蹊スポーツ大学学長、2019 年より参議院議員）
【外部評価】

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

（1）研究組織について

3 つの研究班が入れ子状に協働している点は評価できる。大学院生・PD の数は不明である。後述のように 2016 年に実施した患者・被害者アンケート調査結果の分析・発表があまり進んでいないのは、分析しうるスタッフの不足等によるものではないかとの印象を持つ。高度な統計処理能力が求められているわけではないので、学外の若手研究者との適切な協働などによって、早期に対応することが求められる。幾つかの学外研究機関と連携しているが、研究組織にも海外の研究者の参加が望ましい。「将来に活かした地域構想」に関連して、水俣の地域再生という課題を水俣学の中にどのように位置づけうるのかは、重要な論点であり、この課題を 3 つの研究班のうち、どこがどのように担うのかという点を、今後明確にしてほしい。**（長谷川）**

熊本学園大学を拠点として、水俣学の学際的な研究だけでなく、学生の教育拠点として、複合的な組織役割がうまくまとまっていると思われます。特に水俣病発見から６０年をへて、社会的に風化される恐れがある中で、自然科学と社会科学の研究者だけでなく、患者・被害者や関係者の協働として新たな学際研究を展開している野心的な組織に多いに期待します。現地密着型の研究として、地の利、人の利、組織の利の総合化は見事です。**（嘉田）**

（2）研究施設・設備について

水俣学アーカイブが日英語版で公開されはじめた点は評価できる。「国際的情報発信」は難題だが、水俣学こそ、国際的に情報発信していくべき貴重なコンテンツである。国際的情報発信の内実化にさらに本格的に取り組んでほしい。**（長谷川）**

水俣地元での、各種の資料、特に文書や写真などは後からみると一層資料的価値が高まるものです。デジタル化の技術が進む中で、写真資料などのデータベースをすすめ、それがオンラインで、外部からも検索や活用できるようになっているところは素晴らしいです。今後、これらの内容を展示できるような施設展開は可能でしょうか。**（嘉田）**

（3）研究プロジェクトの進捗状況・研究成果などについて

若手研究者が着実に研究成果を蓄積している点は評価できる。狭い意味でのアカデミックな発表の場だけでなく、運動的なメディアを重視している点、2016 年の熊本地震とセンターとの関わりを積極的に発信してきた点も評価できる。ただし全体として査読論文の数、アカデミックな学会 での報告数、英語での研究成果の発表が限られている。2016 年に朝日新聞社と本センターが共同で実施した患者・被害者アンケート調査は 2610 人か 回答を得て、回答結果の分析が大いに期待されたが、2016 年 5 月 1 日前後の新聞報道は目立つものの、学術的な報告が質量ともに限られていたのは、きわめて残念である。水俣学研究 9 号掲載の 研究ノートが代表的なものだが、単純集計レベルにとどまっている。**（長谷川）**

参加者アンケートや、新聞記事をみていると、水俣病を風化させない、という必要姓の高さがうかがわれます。そのような中で、大学の組織全体を拠点として、原田正純さん達先駆者が目指した、被害者住民当事者もふくめた協働研究がすすめられていること、深く敬意を表します。**（嘉田）**

（4）選定時の「留意事項への対応状況」について

特になし**（長谷川）**

記載なし**（嘉田）**

（5）総合所見について

運動的な要素と学術研究的な側面との統合は、魅力的ではあるが、きわめて難しい課題である。患者自身の高齢化、第 1 世代の研究者から次世代の研究者への世代交代等の諸課題に直面しながら、また熊本地震の被災などがありながらも、本センターが善戦していることは何人も否定できまい。本センターが果たしてきた水俣学の学術的な継承・基本的な課題の掘り起こし・患者との対話などの諸側面は高く評価できる。ただし水俣学の新たな展開・創造的発展という点で、どの程度特筆すべきものを遺せたのか、という点では評価は分かれるのではないか。引き続き、真摯に努力いただきたい。**（長谷川）**

直近の裁判結果など、残念な結果でしたが、国会での報告会も開催していただき、政策責任母体である環境省などに働き続けることはますます重要になっています。未だ全域の疫学調査などもなされておりませんが、これこそ行政や政治の仕事です。昨年出版された井上さんの画期的な漁村社会学研究などを基盤として、引き続き社会的発信を続けて下さるよう、ご期待申し上げます。国会

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

議員として、また環境社会学者として応援させていただきます。（嘉田）

＜研究期間終了後の展望＞
具体的には以下の展望をもって研究を継続・発展させていく。
（1）学内外からの水俣学の調査・研究及び教育と人材育成については、期待も高く、戦略的研究基盤形成支援事業によって形成された研究拠点は、維持・継続、発展が求められている。私大助成を初め、公的機関による学術研究支援の種々の補助金獲得を得て研究基盤を維持する。
（2）いまだ水俣病をめぐる差別事件があとをたたず、水俣病を中心に据えた地域づくりを模索している熊本県においては、学校や社会における公害教育は必要不可欠である。水俣病公式確認から 63 年が経過し、「公害水俣病」に対して多角的視点から取り組める人材及び活用しうる資料やツールが求められている。そこで、熊本学園大学学生、小中学校教員、市民を対象として、独自に制作した「水俣学データベース、アーカイブ」という集積したデータを活用し公害教育のモデル化を行い、多様な分野の知識や考え方を持ち合わせた人材を育成し、あわせて公害教育のプラットフォームを形成することで、水俣病事件を理論的・実践的に研究する社会基盤を構築していく。」

＜研究成果の副次的効果＞
水俣学データベースおよびアーカイブを活用した環境教育に寄与するため、実践的なプログラムの構築が待たれている。

12 キーワード（当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。）

（1） 水俣学　（2） 水俣病　（3） 公害
（4） 被害救済　（5） 地域再構築　（6） 健康影響評価
（7） アーカイブ　（8） データベース

13 研究発表の状況（研究論文等公表状況。印刷中も含む。）

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには＊を付すこと。

＜雑誌論文＞

研究班１　水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究						
No.	著者名	論文標題	雑誌名、巻号	ページ	発行年	査読
＊1	花田昌宣	第 3 回環境被害に関する国際フォーラム報告記録	水俣学研究、10	印刷中	2020	
2	花田昌宣	水俣の風景と一人芝居	季刊・水俣支援東京ニュース、8	4	2019	
＊3	守弘仁志、中地重晴、井上ゆかり、花田昌宣、田尻雅美、斎藤靖吏、田中久稔、藤本延啓	水俣病公式確認 60 年アンケート調査結果総論	水俣学研究、9	19-38	2019	
4	花田昌宣	水俣病の学術と運動の担い手	日本看護倫理学会誌、11(1)	109-110	2018	
5	花田昌宣	水俣避病院と水俣病：水俣病差別の理解のために	部落解放研究くまもと、76	71-107	2018	
6	花田昌宣	公害被害と社会福祉の課題の方法論序説：水俣病事件の被害の社会的側面に関して	水俣学研究、8	47-60	2018	
7	花田昌宣	研究と実践をつなぐ新たな研究モードの創生：水俣学から熊本地震へ	Social Design Review、9	10-21	2018	

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

8	花田昌宣	インクルーシブな避難所と水俣学の経験－地域に根ざした学と社会運動	現代思想、45(5)	96-104	2017	
9	花田昌宣	水俣病は終わっていない:水俣病公式確認 60 年の現状と将来への課題－熊本震災をふまえて	部落解放、736	15-23	2017	
10	花田昌宣	熊本地震と障害者支援:避難所の経験から	部落解放研究くまもと、72	3-73	2016	
11	花田昌宣	被災者支援と人権保障	ヒューマンライツ、344	2-11	2016	
12	花田昌宣	水俣病 60 年、今残された課題と水俣病研究の教訓	環境と公害、46(2)	40-45	2016	
＊13	Hanada, M., Shimoji, A., Nakachi, S., Tajiri, M., Inoue, Y., Morishita, N., et al	2014 Report on Research Results for Minamata Disease in First Nations Groups in Canada	水俣学研究、7	19-34	2016	
14	花田昌宣	障害者を受け入れたインクルーシブな避難所:熊本学園大学での取り組み	季刊福祉労働、152	125-130	2016	
15	花田昌宣	公害水俣病に対する差別の現在形	ヒューマンライツ、338	2-9	2016	
16	花田昌宣	水俣病の六〇年:公害の経験をどう活かすか	科学的社会主義、216	38-44	2016	
17	花田昌宣	水俣病を人権と差別の課題として	部落解放、724	46-55	2016	
18	花田昌宣	公式確認六〇年:なぜ水俣病が終わらないのか　差別と人権の課題として	部落解放研究くまもと、71	62-77	2016	
19	花田昌宣	水俣病に関する差別の現状と課題:差別事例の調査から見えてくるもの	ヒューマンライツ、333	34-39	2015	
20	花田昌宣	「水俣学」をつくる	歴博、192	11-15	2015	
21	下地明友	不思議の場所、それは多文化間精神医学:臨床の位相は徴候的な場所である(第 24 回多文化間精神医学会 2017 年度受賞講演)	こころと文化、17(1)	67-70	2018	
22	下地明友	不思議の場所、それは多文化間精神医学 － 臨床の位相は徴候的な場所である	こころと文化、17(1)	67-70	2017	
23	下地明友	災害とこころのケア～熊本地震の経験から～	精神衛生、69	1-18	2017	
24	田尻雅美	水俣病被害を矮小化しようとする力:病名変更を求める看板から考える(特集　パッシング:救済を求められない社会)	ヒューマンライツ、376	16-20	2019	
＊25	田尻雅美	シリーズマイノリティの声 23　放置される水俣病 － 救済策によって強化される差別	ヒューマンライツ、357	22-25	2017	
26	萩原修子	書評　下地明友著『沖縄の医介輔の歴史と語りから見えてくるもの:ライフヒストリーと語り(Narrative) ― 地域医療と沖縄の医介輔・中級医療職』	水俣学研究、9	129-131	2018	
27	萩原修子	水俣病事件と「もうひとつのこの世」	現代宗教 2018	111-132	2018	
28	東　俊裕	条約の実施体制と日本障害者の置かれている基礎的な社会構造から見た評価	福祉労働、163	8-24	2019	
29	東　俊裕	合理的配慮を提供する事業者側に求められる視点	リハビリテーション、604	26-29	2018	
30	東　俊裕	熊本地震:公的支援からこぼれ落ちる障害者	災害復興研究、10	99-104	2018	
31	東　俊裕	障害者権利条約と第 1 回日本政府報告の内容と課題:障害のある子どもに焦点を当てて	子どもの権利研究、29	129-141	2017	

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

32	東　俊裕	被災地における障害者支援	ヒューマンライツ、354	10-15	2017	
33	東　俊裕	熊本地震と被災障害者への支援活動	福祉労働、152	1-4	2016	
＊34	Yorifuji, et al.	Lessons from an early-stage epidemiological study of Minamata disease	J. Epidemiol., 30(1)	12-14	2020	有
35	Yorifuji, T., Kashima, S., Tani, Y., e al	Long-term exposure to fine particulate matter and natural-cause and cause-specific mortality in Japan	Environ. Epidemiol., 3(3)	E051	2019	有
36	頼藤貴志	大気汚染による健康影響 ― 疫学研究の知見より	日本の科学者、53(5)	259-264	2018	
＊37	Yorifuji, T., Takaoka, S., Granjean, P.	Accelerated functional losses in ageing congenital Minamata disease patients	Neurotoxicol Teratol., 69	49-53	2018	有
＊38	Takaoka, S., Fujino, T., Kawakami, Y. Shigeoka, S., Yorifuji, T.	Survey of the extent of the persisting effects of methylmercury pollution on the inhabitants around the Shiranui Sea, Japan	Toxics, 6(3)	pii:E39	2018	有
＊39	Yorifuji, T., Kashima, S., et al	Temporal trends of infant and birth outcomes in Minamata after severe methylmercury exposure	Environ. Pollut.、231(Pt 2)	1586-1592	2017	有
＊40	Yorifuji, T., Tsuda, T.	Epidemiological studies of neurological signs and symptoms and blood pressure in populations near the industrial methylmercury contamination at Minamata, Japan	Arch. Environ. Occup. Health、71(4)	231-236	2016	有
＊41	Yorifui, T., Kado, Y., et al	Neurological and neurocognitive functions from intrauterine methylmercury exposure	Arch Environ. Occup. Health、71(3)	170-177	2016	有
＊42	Yorifuji, T., Kashima, S.	Secondary sex ratio in regions severely exposed to methylmerury “Minamata disease”	Int. Arch. Occup. Environ. Health、89(4)	659-665	2016	有
＊43	Yorifuji, T., Kato, T., et al	Intrauterine Exposure to Methylmercury and Neurocognitive Functions: Minamata Disease	Arch. Environ.Occup. Health、70(5)	297-302	2015	有
＊44	頼藤貴志・入江沙織、他	水俣病における胎児期メチル水銀暴露 ― 見過ごされてきた胎児期低・中濃度曝露による神経認知機能の影響	環境と公害、46(2)	52-58	2016	
＊45	頼藤貴志・入江沙織、他	胎児期メチル水銀曝露による神経認知機能：水俣病	水俣学研究、7	3-17	2016	有
＊46	頼藤貴志・津田敏秀・原田正純	水俣病：民主主義と正義のための挑戦	水俣学研究、6	103-138	2015	
47	除本理史	現代資本主義と「地域の価値」― 水俣の地域再生を事例として	地域経済学研究、38 号	1-16	2020	
48	牛島佳代・成元哲・向井良人・除本理史	福島から照射する水俣病をめぐる分断修復の現状と課題	中京大学現代社会学部紀要、13(2)	83-126	2019	
49	除本理史	公害地域再生の現代的課題：水俣市を事例として	環境と公害、48(3)	64-70	2019	
50	除本理史	戦争から表現へ：水俣の地域再生と石牟礼文学	現代思想、46(7)	224-231	2018	
51	除本理史	原発事故賠償と福島復興制作の 5 年間を振り返る：避難者に対する住まいの保障に着目して	經營研究、66(4)	185-195	2016	
52	除本理史	公害被害地域の再生に関する一試論：水俣「もやい直し」再考	經營研究、66(3)	31-48	2015	

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

53	飯嶋秀治	水俣と民族誌 － 石牟礼道子『苦海浄土 － わが水俣病』を中心に	九州人類学会報、42	3-7	2015	
54	大久保規子	環境と司法　環境団体訴訟はなぜ必要なのか － 環境民主主義の国際的潮流	世界、893	191-198	2017	
55	大久保規子	環境民主主義指標（EDI）の意義と課題	環境と公害、46（3）	38-43	2017	
56	大久保規子	PRTR 制度の国際的展開と市民参加	化学物質と環境、138	14-16	2016	
57	大久保規子	アジアにおける環境民主主義の展開	環境と公害、45（1）	36	2015	
58	尾崎寛直	公害問題とソーシャルワーク	ソーシャルワーク研究、45（2）	23-30	2019	
59	尾崎寛直	カネミ油症被害の「補償」問題 ― 公害事件等との比較を交えて	環境と公害、48（4）	9-13	2019	
60	尾崎寛直	新たな大気汚染公害被害者救済制度はなぜ必要か	日本の科学者、53（5）	26-31	2018	
61	尾崎寛直	横断的比較による水俣病の補償システムの検証	環境と公害、44（4）	16-18	2015	
62	磯谷明徳	制度経済学：一世紀の時を経て再生・復活　経済システムの多元性と進化の経済学へ	経済ｾﾐﾅｰ増刊	62-63	2015	
研究班2　環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究						
63	戸渡洋子、宮北隆志	健康格差の縮小に向かう公衆衛生看護アプローチの検討 ～ A.センのケイパビリティ・アプローチを手がかりに	社会関係研究、24（2）	103-125	2019	
64	宮北隆志.	大学内にインクルーシブな避難所を開設：家族・地域を丸ごと受け入れた熊本学園大学の取り組み	労働の科学、72（3）	142-147	2017	
65	宮北隆志	事例研究：化学工場における爆発災害管理とリスクコミュニケーション（監訳）	水俣学研究、7	87-106	2016	
66	宮北隆志	＜現地報告＞2016 年熊本地震 ― 被災者とともに震災と向き合った 14 号館避難所の 45 日間	環境と公害、46（2）	59	2016	
67	中地重晴	PRTR 制度と情報活用の改善のための提案	化学物質と環境、158	4-6	2019	
＊68	中地重晴	水銀条約汚染サイトとしての水俣市の環境評価	総合科学、24（1）	83-97	2019	
69	中地重晴	有害物質含有消費者製品の廃棄・処分の現状と課題 ― Tウォッチによるアンケート調査から	労働の科学、72（11）	33-37	2017	
70	中地重晴	廃棄物による健康リスク	日本医師会雑誌、146（特別号2）	221-224	2017	
71	中地重晴	豊島の教訓とは何か	環境管理、53（10）	34-41	2017	
72	中地重晴	熊本地震の被災地におけるアスベストの飛散防止と廃棄物処理の課題	労働の科学、72（3）	20-25	2017	
73	中地重晴	水俣で学ぶ環境保護を取り入れた中小企業における参加型職場環境改善活動	労働の科学、71（5）	304-307	2016	
74	中地重晴	災害時のアスベスト問題 ～ 阪神淡路大震災から東日本大震災まで ～	環境技術、44（5）	242-248	2015	
75	黒木邦弘・花田昌宣・高木亨・那須久史	平成 28 年（2016）熊本地震と熊本学園大学避難所運営：避難所の方針と災害ソーシャルワーク実践の一考察	社会福祉研究所報、47	169-185	2019	

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

76	Sakamoto, M., Itai, T., Marumoto, K., Marumoto, M., Kodamatani, H., Tomiyasu, T., Nagasaka, H., e tl	Mercury speciation in preserved historical sludge: Potential risk from sludge contained within reclaimed land of Minamata Bay, Japan	Environmental Research, 180	108668 (doi: 10.1016/j.envres.2019.108668)	2019	有
77	冨安卓滋	火山噴火と大気環境－第 5 講　火山噴出の大気動態・環境影響－③水銀	大気環境学会誌、51(2)	20－28	2016	
研究班3　水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成						
78	井上ゆかり	水俣病多発漁村に生まれ育った第二世代の苦悩	部落解放、724	12-18	2016	
79	矢野治世美	災害と被差別民：部落史から災害を考える	部落解放研究くまもと、79	67-80	2020	
80	矢野治世美	書評　入口善久著『蘆花と水俣』	水俣学研究、9	59-60	2019	
81	矢野治世美	部落差別と水俣病差別：羽江忠彦『七生まで忘れんばい』を読む	部落解放研究くまもと、78	25-40	2019	
82	矢野治世美	天草の被差別民	部落解放研究くまもと、77	71-106	2019	
83	矢野治世美	史料でみる近世の水俣：色川大吉「不知火海民衆史」への疑問から	部落解放研究くまもと、76	108-127	2018	
84	高峰　武	書評　下地明友著『〈病〉のスペクトル　精神医学と人類学の遭遇』	水俣学研究、8	89-100	2018	
85	高峰　武	解題　水俣病公式確認と猫実験の時代 ― 伊藤蓮雄・元水俣保健所長のテープについて	水俣学研究、8	61-68	2018	
86	高峰　武	石牟礼道子さんが見ていた世界	週刊金曜日	23-27	2018	
87	高峰　武	水俣病を見続ける視点	ごんずい、72	35-36	2018	

＜図書＞

No.	著者名	図書名	出版社名	ページ数	発行年
研究班1　水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究					
＊88	Hanada, M., et al (eds.)	A Walk to Learn about Minamata Disease（水俣学ブックレット No.16）	熊本日日新聞社	136 頁	2020
89	花田昌宣	3.11 を心に刻んで（岩波書店編集部編『3.11 を心に刻んで』）	岩波ブックレット 1021	35-36	2020
90	花田昌宣	国際水銀条約発効の意義と課題　水俣の教訓をもとに（世界人権宣言大阪連絡会議編『国際人権規約連続学習会講演録,2018』）	部落解放・人権研究所	33-44	2019
＊91	中地重晴・花田昌宣・田尻雅美・井上ゆかり（編）	ガイドブック　水俣病を学ぶ、水俣の歩き方（水俣学ブックレット 16）	熊本日日新聞社	83 頁	2019
＊92	守弘仁志・中地重晴・井上ゆかり、花田昌宣・田尻雅美・斎藤靖吏・田中久稔・藤本延	水俣病公式確認 60 年アンケート調査最終報告書	熊本学園大学水俣学研究センター	134 頁	2019

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	啓				
＊93	花田昌宣	水俣病被害とその影響をふまえた水俣地域市民社会の再生に関する総合的研究	科学研究費助成事業研究成果報告書		2019
94	花田昌宣	水俣病の現在と差別・偏見（部落解放・人権研究所編95『被差別マイノリティのいま』）	解放出版社	298-304	2017
95	花田昌宣・久保田好生（編）	いま何が問われているか：水俣病の歴史と現在	くんぷる	256 頁	2017
96	花田昌宣・田尻雅美（編）	水俣病問題のいま：差別禁止法制定を求める当事者の声⑨	部落解放・人権研究所	146 頁	2017
＊97	花田昌宣（編）	水俣学研究資料叢書Ⅳ「不知火海の漁師聞き書き」	熊本学園大学水俣学研究センター	263 頁	2017
＊98	花田昌宣・中地重晴（編）	水俣病60年の歴史の証言と今日の課題（水俣学ブックレット 15）	熊本日日新聞社	107 頁	2016
99	花田昌宣	原田正純著『いのちの旅 「水俣学」への軌跡』解説	岩波書店	201-222	2016
＊100	中地重晴・花田昌宣（編）	九州・熊本の産業遺産と水俣（水俣学ブックレット 14）	熊本日日新聞社	149 頁	2016
101	花田昌宣	なぜ水俣病が終わらないのか ― 現在の課題にふれて（衆議院調査局環境調査局『水俣病問題の概要』）	衆議院調査局	95-100	2015
102	下地明友、他訳	マッド・トラベラーズ ― ある精神疾患の誕生と消滅（イアン・ハッキング著）	岩波書店	360 頁	2017
103	下地明友、他訳	精神医学歴史事典（エドワード・ショーター著）	みすず書房	480 頁	2016
＊104	下地明友	〈病い〉のスペクトル ― 精神医学と人類学の遭遇	金剛出版	368 頁	2015
＊105	田尻雅美	胎児性・小児性水俣病の社会福祉的ケアの課題と将来への展望～被害の多様性を踏まえた分析～	熊本学園大学大学院社会福祉学研究科博士論文	133 頁	2016
106	田尻雅美	家族と介護者（池田理知子、他編『よくわかるヘルス・コミュニケーション』）	ミネルヴァ書房	116-117	2016
＊107	田尻雅美	水俣病の補償・救済制度の限界―水俣病未解決がもたらすもの（水俣学ブックレット 15）	熊本日日新聞社	55-67	2016
108	萩原修子	水俣病事件における「再生する力」の社会・宗教・民俗学的研究	科学研究費助成事業成果報告書		2015
109	除本理史	曖昧にされる被害補償の責任 ― 福島と水俣の共通性（花田・久保田編『いま何が問われているか 水俣病の歴史と現在』）	くんぷる	147-163	2017
110	除本理史	未来のために学ぶ四大公害病	岩崎書店	22 頁	
111	除本理史	公害から福島を考える ― 地域の再生をめざして	岩波書店	224 頁	2016
112	大久保規子・高村ゆかり、他編	環境規制の現代的展開（大塚直先生還暦記念論文集）	法律文化社	530 頁	2019
113	大久保規子、他	はじめての行政法 4 版	有斐社	298 頁	2018
114	尾崎寛直	「食品公害」問題における補償制度の欠陥 ― 公害事件等における政策形成の比較から（科学研究費補助金基盤研究（B）「宮本憲一氏収集資料を活用した環境政策形成史に関する研究」研究代表者：碇山洋）	科学研究費助成事業研究成果報告書		2020
115	尾崎寛直	職業病・労働災害と公害問題（環境経済・政策学会編	丸善出版	112-113	2018

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

		『環境経済・政策学事典』）			
116	尾関周二・保母武彦・尾崎寛直（編）	「環境を守る」とはどういうことか ― 環境思想入門	岩波書店	63 頁	2016
研究班2　環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究					
117	宮北隆志	ヘルスプロモーションの理念と健康格差（池田理知子、他編『よくわかるヘルスコミュニケーション』）	ミネルヴァ書房	128-129	2016
＊118	中地重晴	水銀条約と水俣の課題（花田・久保田編『いま何が問われているか　水俣病の歴史と現在』）	くんぷる	107-145	2017
＊119	森下直紀	カナダ水俣病事件の現在：世界に潜在する水俣病患者救済のために（花田・久保田編『いま何が問われているか』）	くんぷる出版	127-145	2017
120	森下直紀	千湖に生きるひとびと：水をめぐるオジブエたちの半世紀（渡部公三、他編『異貌の同時代：人類・学・の外へ』	以文社	171-207	2017
121	森下直紀	水俣病事件史にみる公害と人権（李修京編『グローバル社会と人権問題』）	明石書店	175-180	2015
122	冨安卓滋	ミナマタ湾埋め立て地に眠るヘドロ中水銀の化学形態別分析によるリスク評価（科学研究費助成事業・基盤研究（C）研究分担）	科学研究費助成事業成果報告書		2019
研究班3　水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成					
＊123	井上ゆかり	生き続ける水俣病　漁村の社会学・医学的実証研究	藤原書店	346 頁	2020
124	井上ゆかり	水俣病多発漁村住民の水銀曝露と健康障害および補償給付の連環の実証的研究	科学研究費助成事業研究成果報告書		2019
125	井上ゆかり	権力に被害を叫ぶことからはじまる水俣病　岩本美智代解題（花田・久保田編『いま何が問われているか　～水俣病の歴史と現在』	くんぷる	205-216	2017
＊126	岩本廣喜著、井上ゆかり編	海録　女島に生きた漁民（水俣学研究資料叢書Ⅴ）	熊本学園大学水俣学研究センター	165 頁	2016
127	井上ゆかり	水俣病多発漁村における漁民・漁業被害の多重連環 ― 熊本県芦北町女島での社会学ならびに医学的調査による実証研究	熊本学園大学大学院社会福祉学研究科博士論文	178 頁	2016
128	高峰　武	石牟礼道子さんの「眼差し」（石牟礼道子資料保存会編『残夢童女　石牟礼道子追悼文集』）	平凡社	209-223	2020
129	高峰　武	書くことが生きる証だった石牟礼さん（石牟礼道子・田中優子・高峰武・宮元成美編著『追悼　石牟礼道子毒死列島　身悶えしつつ』）	金曜日	7-28	2018
130	高峰　武	8のテーマで読む水俣病	弦書房	232 頁	2018
131	高峰　武	20 世紀の水俣病（花田・久保田編『いま何が問われているか　水俣病の歴史と現在』）	くんぷる	9-65	2017
132	高峰　武	水俣病を知っていますか	岩波ブックレット	72 頁	2016
133	高峰　武	「負の歴史」からたどる水俣病（衆議院調査局環境調査室『水俣病問題の概要』）	衆議院調査局	101-104	2015

＜学会発表＞

No.	発表者名	発表標題名	学会名	開催地	発表年月
研究班 1　水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究					

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

134	花田昌宣	「水俣病」の将来を構想する：被害者の犠牲者非難の構図からの脱出	第 15 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2020 年 1 月
＊135	花田昌宣	水俣と水俣病の将来を構想する ― 水俣学研究の到達点	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウム	熊本市	2019 年 12 月
＊136	花田昌宣	*Experience of Minamata Disease and Role of Open Research Center for Minamata Studies*	Symposium for Post Humidifier Disinfectant Disaster Research Center	ソウル市	2019 年 10 月
137	花田昌宣	第 3 回国際フォーラムの課題：失敗の教訓を将来に活かす	第3回環境被害に関する国際フォーラム（基調講演）	熊本市	2019 年 2 月
＊138	花田昌宣	水俣病被害の現状と補償制度の課題	水俣病事件と加湿器殺菌剤惨事日韓ワークショップ	水俣市	2019 年 2 月
139	花田昌宣	水俣避病院と水俣病差別	第 14 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2019 年 1 月
＊140	花田昌宣	第一プロジェクト「水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究」と総括（水俣学研究センター戦略的研究基盤形成支援事業第 2 期目の中間報告）	第 13 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2018 年 1 月
141	花田昌宣	研究と実践をつなぐ新たな研究モードの創生：水俣学から熊本地震へ	社会デザイン学会	東京都	2017 年 12 月
142	花田昌宣	大規模災害と社会連帯経済：東北と熊本の経験から	第7回日韓社会的企業セミナー	ソウル市	2017 年 12 月
143	花田昌宣	水俣病61年と水俣学の展開	第5回水俣学若手研究セミナー	水俣市	2017 年 9 月
＊144	花田昌宣	日本とカナダの水俣病問題の現状と課題	水俣病公式確認60年国際シンポジウム「カナダ先住民の水俣病と水銀汚染」	町田市 熊本市	2017 年 2 月
145	井上ゆかり・田尻雅美・花田昌宣・下地明友・中地重晴・宮北隆志	平成28年度熊本地震と避難所運営に関する健康医療支援体制について	第75回日本公衆衛生学会総会	大阪市	2016 年 10 月
＊146	Hanada, M.	Lessons from the history of Minamata Disease and current challenges in the international community	International conference. 'Minamata@60: Learning from Industrial Disaster toward Sustainable Society and Environment	バンコク市	2016 年 9 月
147	花田昌宣	水俣病をいかに伝えていくか ― 被害現地住民との対話をめざす「水俣学」構築の試み ―	シンポジウム「公害をいかに伝えていくか ― 東アジア近現代史の視点から」	横浜市	2016 年 3 月
148	花田昌宣	水俣病差別研究の課題と方法	第11回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2016 年 1 月
149	下地明友	医療人類学から見た多文化共生社会：The open（開かれ）と The between（あいだ） ― heteroglossia（異言語混淆） ― 未来の精神医学：小さな声は（かき消される声）は止むことがない	第 37 回日本社会精神医学会	京都市	2018 年 3 月
150	下地明友	不思議な場所としての多文化間精神医学	第 24 回多文化間精神医学会学術大会	東京	2017 年 11 月
＊151	田尻雅美・井上ゆかり	「紛争」解決としての水俣病施策―終わることのできない水俣の今	第 3 回環境被害に関する国際フォーラム	熊本市	2019 年 2 月
＊	田尻雅美	Staying close to the Minamata	Japan-ASEAN Medial Seminar on Human	インドネ	2019 年 5 月

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

152		disease patients	Health Impact of Heavy Metals	シア	
＊153	田尻雅美	健康・医療・福祉相談から見える水俣病被害の実態と施策の課題 ― 被害者が求めるもの	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウム	熊本市	2019 年 12 月
154	田尻雅美	水俣病の差別	第 3 回差別禁止法制定をめぐる当事者の集い	神戸市	2018 年 1 月
155	田尻雅美	分科会 5 差別禁止法の実現をめざして「水俣病」	第 32 回人権啓発集会	神戸市	2018 年 1 月
156	田尻雅美	終わらない水俣病	第 49 回食とみどり、水を守る全国集会 in 熊本	熊本市	2017 年 11 月
＊157	Tajiri, M.	60 years of Fetal Minamata Disease Patients	International conference. 'Minamata@60: Learning from Industrial Disaster toward Sustainable Society and Environment	バンコク市	2016 年 9 月
158	頼藤貴志	胎児期メチル水銀曝露に関する疫学研究のまとめ	第 15 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2020 年 1 月
159	頼藤貴志	疫学方法論とその応用：水俣病の事例を通して	第 12 回新潟青陵学会学術集会	新潟市	2019 年 11 月
160	頼藤貴志	水俣病の疫学	第 3 期水俣病大学	東京	2019 年 5 月
161	頼藤貴志	胎児性水俣病患者さんの日常生活動作（ADL）の変化	第 14 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2019 年 1 月
＊162	頼藤貴志	水俣における周産期・乳児期の健康アウトカムの時間的トレンドについて	第 13 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2018 年 1 月
＊163	頼藤貴志	水俣病における胎児性メチル水銀曝露	第 12 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2017 年 1 月
164	頼藤貴志	被害の全体像を考える ～ メチル水銀の健康影響に関する疫学研究を踏まえて ～	水俣病事件 60 年を問うシンポジウム	水俣市	2016 年 2 月
165	頼藤貴志	最近行った疫学研究の報告	第 11 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2016 年 1 月
166	尾崎寛直・除本理史	「もやい直し」の現代的意義を再考する	第 14 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2019 年 1 月
168	飯嶋秀治	漁村での 10 年 ― 見えたこと、見えなかったこと	第 14 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2019 年 1 月
169	飯嶋秀治	石牟礼道子（1927-）	課題研究懇談会「応答の人類学」第 33 回研究会	能美市	2018 年 1 月
170	飯嶋秀治	海外での水俣表象	第 12 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2017 年 1 月
171	飯嶋秀治	漁村の文脈 ― 発達課題に臨む（シンポジウム「環境災害と宗教学」）	西日本宗教学会第 6 回学術大会	福岡市	2016 年 3 月
172	飯嶋秀治	生人からGS（グリーンスポーツ）へ	第 11 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2016 年 1 月
173	尾崎寛直	一般廃棄物の単独処理と広域処理の課題	第 7 回「21 世紀の多摩学」研究会	国分寺市	2019 年 10 月
174	尾崎寛直	福祉コミュニティと災害 ～ 要援護者を地域で支えるしくみ	欅友回 2019 年講演会	国分寺市	2019 年 6 月
175	尾崎寛直	「地域づくり」分科会コメンテーター、「公害入門」コーディネーター	第 6 回公害資料館連携フォーラム	町田市	2018 年 12 月
176	尾崎寛直	各種社会的災害の補償システムの比較研究から被ばく補償を考える	第 2 回トヨタ財団助成研究 共同研究会	広島市	2018 年 11 月

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

177	尾崎寛直	放射能汚染による健康被害者の援護制度構築に向けて ～ 被爆者援護制度からの教訓とヒント	第 4 回原発と人権 全国交流集会	福島市	2018 年 7 月
178	尾崎寛直	ヒロシマ・ナガサキ、ミナマタ、フクシマ 繰り返される問題構造と解決の糸口	新潟水俣病シンポジウム	新潟市	2016 年 10 月
179	磯谷明徳	山田鋭夫他『市民社会と民主主義』(藤原書店、2018 年)への総括コメント	進化経済学会・現代日本の経済制度部会	大阪市	2018 年 11 月
180	磯谷明徳	「制度主義的転回」後の制度経済学：新たな展開の可能性	進化経済学会・現代日本の経済制度部会	大阪市	2018 年 7 月
研究班2 環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究					
＊181	中地重晴	水俣川河口臨海振興構想を考える	第 15 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2020 年 1 月
＊182	中地重晴	水俣の健康リスクと環境リスクを再検討する	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウム	熊本市	2019 年 12 月
＊183	中地重晴	水俣湾に埋め立てられた水銀と水銀条約の課題	熊本学園大学 2019 年度特別セミナー	熊本市	2019 年 8 月
184	中地重晴	豊島の原状回復の今後の課題	豊島学(楽)会第 13 回研究発表会	香川県豊島	2019 年 4 月
185	中地重晴	水俣とカナダの汚染サイトの修復について	第3回環境被害に関する国際フォーラム	熊本市	2019 年 2 月
186	中地重晴	日本における水銀規制の現状と今後の課題	第 14 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2019 年 1 月
187	中地重晴	豊島処分地の現状と地下水汚染対策の課題	豊島学(楽)会第 12 回研究発表会	水俣市	2018 年 4 月
188	中地重晴	第二プロジェクト「環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究」(水俣学研究センター戦略的研究基盤形成支援事業第 2 期目の中間報告)	第 13 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2018 年 1 月
189	中地重晴	産廃特措法の施行状況と原状回復後の跡地利用の課題について	豊島学(楽)会第 11 回研究発表会	大阪市	2017 年 4 月
＊190	中地重晴	水俣市民の食品からの水銀摂取の現状について	第 12 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2017 年 1 月
＊191	中地重晴	水俣地域周辺における水銀汚染について ― みなまた地域研究会調査から見えてきたこと	水俣学研究センター第 31 回定例研究会	熊本市	2016 年 11 月
＊192	中地重晴	水銀条約の批准に向けた水銀新法の成立と日本の課題	第 11 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2016 年 1 月
＊193	中地重晴・宮北隆志	水俣市における土壌中の高濃度水銀汚染について	第 74 回日本公衆衛生学会総会	大阪市	2015 年 11 月
＊194	守弘仁志	水俣病公式確認 60 年アンケート調査結果から	第 13 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2018 年 1 月
＊195	藤本延啓	水俣市円卓会議の経緯とゼロ・ウェイスト政策	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウム	熊本市	2019 年 12 月
196	藤本延啓	豊島問題の社会史 ― 不法投棄事件は人々と社会に何をもたらしたか	日本平和学会 2017 年度秋季研究集会	高松市	2017 年 11 月
197	藤本延啓	被災・復旧・復興の個別性と全体性 ― 西原村における熊本地震災害支援から	第 43 回山口地域社会学会総会研究集会	山口市	2017 年 7 月
198	藤本延啓	不法投棄事案における「問題」「被害」「解決」 ― 豊島住民のライフヒストリーから	第 73 回西日本社会学会	山口市	2015 年 5 月

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

＊199	森下直紀	カナダ水俣病:アニシナベ先住民の伝統的生活と同化政策	規範×秩序研究会	加賀市	2019 年 8 月
＊200	森下直紀	公害対策による見えざるアニシナベ先住民への同化政策	環境社会学会	東京都	2019 年 6 月
＊201	森下直紀	カナダ・オジブエ先住民 水銀被害の歴史と現在－カナダの水俣病－	和光大学地域連携研究センター主催 公開シンポジウム	町田市	2017 年 2 月
＊202	森下直紀	カナダ水俣病事件の現状について	第 13 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2018 年 1 月
203	SakamotoTK., Marumoto, K., Mori, K., Horvat,M., Poulain, S., Kodamatani, H.m Tomiyasu, T.,	Mercury speciation in preserved sludge which is estimated to be remaining under the reclaimed land area of Minamata Bay, Japan	4th International Conference on Environmental and Economic Impact on Sustainable Development	ナポリ（イタリア）	2018 年 6 月
204	Sakamoto, M., Itai, T., Narumoto, K., Mori, K., Horvat, M., Poulain, A., Kodamatani, H., Tomiyasu, T	Mercury speciation in preserved soludge which is estimated to be remaining under the reclaimed land area of Minamata Bay, japan	53rd Congress of the Euro Societies of Tpxocplogy	ブラスティラバ（スロヴァキア）	2017 年 9 月
研究班3 水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成					
＊205	井上ゆかり	水俣学アーカイブを活用した 研究拠点形成に関する実証的研究 ―水俣の知識インフラの拡充に向けて	私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウム	熊本市	2019 年 12 月
206	井上ゆかり	避難所における健康医療支援の意味と水俣学	平成 28 年熊本地震から 2 年熊本震災と障害者を受け入れた避難所資料展特別セミナー	熊本市	2019 年 2 月
207	井上ゆかり・田尻雅美・佐藤スエミ	何が水俣病差別を生み出すのか	差別禁止法研究会第 4 回当事者の集い	新潟市	2019 年 2 月
＊208	井上ゆかり	第三プロジェクト「水俣学アーカイブを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成」（水俣学研究センター戦略的研究基盤ン形成支援事業 2 期目の中間報告）	第 13 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2018 年 1 月
209	井上ゆかり	地域の縮図となる避難所で何が問われたか ―「熊本学園モデル」とよばれた 45 日間	第 8 回日本世代間交流学会	熊本市	2017 年 10 月
＊210	井上ゆかり・花田昌宣・田尻雅美	「公害」水俣病の記憶を伝える － 水俣学の基底	うつくしま福島未来支援センター研究会	福島市	2017 年 3 月
＊211	井上ゆかり・花田昌宣・田尻雅美	「震災」熊本地震後の資料復旧と『公害』水俣病の記憶を伝える意味	フクシマの復興の歩みを学術的視点から海外に発信するシンポジウム	福島市	2017 年 3 月
＊212	井上ゆかり・花田昌宣・守弘仁志	今なお解決をみない水俣病事件を次世代に「伝える」ネットワーク形成	社会情報学会九州・沖縄支部 2016 年度研究会	福岡市	2017 年 2 月
＊213	井上ゆかり	「水俣」をみつめるためのデータベース作成事業 － 水俣学の試み	第 4 回公害資料館連携フォーラム in 水俣	水俣市	2016 年 12 月
214	井上ゆかり	避難所での健康・医療支援の意味と水俣学	熊本学園大学熊本地震シンポジウム	熊本市	2016 年 11 月

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

215	井上ゆかり	水俣病多発漁村における漁民・漁業被害の多重連環	水俣病事件 60 年と福島複合災害 5 年～研究者として考える福島大学基盤研究 S チーム公開ワークショップ	福島市	2016 年 3 月
216	井上ゆかり	医学的調査と社会学的調査でみる漁民被害の実態	水俣病臨床研究会	水俣市	2016 年 1 月
218	矢野治世美	史料でみる近世の水俣 ― 船津村の位置づけをめぐって	第 14 回水俣病事件研究交流集会	水俣市	2019 年 1 月
219	高峰 武	小さな声に耳を傾けたか	日本コミュニケーション学会九州支部大会	福岡市	2019 年 11 月
217	高峰 武	小さな声に耳を傾けたか	福島政経懇話会	福島市	2019 年 9 月
218	高峰 武	ピアレビュー「水俣病を知っていますか」	第 11 回水俣病学術資料調査研究推進室セミナー	熊本市	2016 年 10 月

＜研究成果の公開状況＞（上記以外）

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

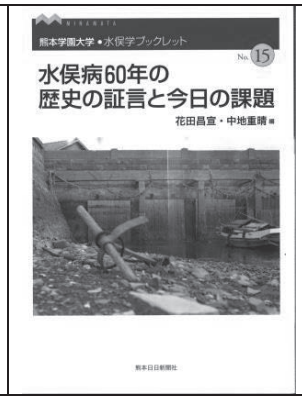
＜既に実施しているもの＞

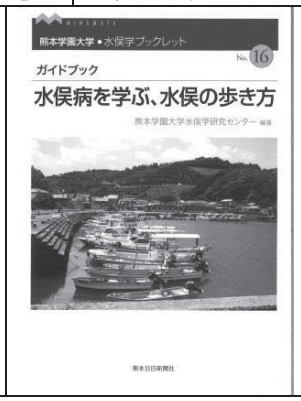
Ⅰ.水俣学研究センター刊行物　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/books/

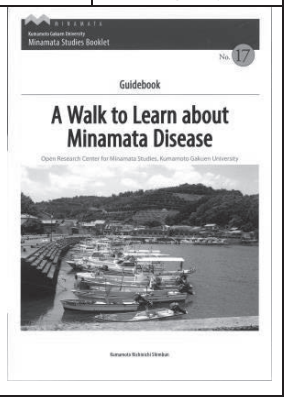
1.水俣学ブックレット　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/booklet/

No.	タイトル	著者・編著者	発行年月
No.14	「九州・熊本の産業遺産と水俣」	中地重晴・花田昌宣	2016 年 3 月
No.15	「水俣病 60 年の歴史の証言と今日の課題」	花田昌宣・中地重晴	2016 年 6 月
No.16	「ガイドブック 水俣病を学ぶ、水俣の歩き方」	水俣学研究センター	2019 年 3 月
No.17	「A Walk to Learn about Minamata Disease」	水俣学研究センター	2020 年 3 月









2.研究紀要　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/bulletin/

No.	編集	発行年月
水俣学研究第 7 号	水俣学研究編集委員会	2016 年 9 月
水俣学研究第 8 号	水俣学研究編集委員会	2018 年 9 月
水俣学研究第 9 号	水俣学研究編集委員会	2019 年 9 月

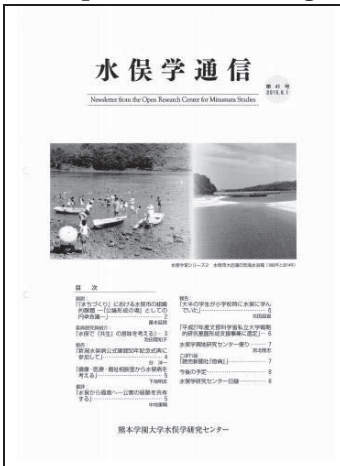
3.資料叢書　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/publication/

No.	タイトル	著者・編著者	発行年月
Ⅴ	「海録　女島に生きた漁民」	岩本廣喜著　井上ゆかり編	2016 年 3 月 30 日
Ⅵ	「不知火海の漁師聞き書き」	花田昌宣　編集	2017 年 3 月 30 日

4.「地域健康影響評価 タイ・チャチェンサオ県、パノムサーラカム郡、 タンボン Khao Hinsorn における石炭火力発電所の事例」　監訳：宮北隆志、翻訳：松田加洋子、協力：吉村千恵、2015 年 6 月　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/publication/

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

5.「水俣病公式確認 60 年アンケート調査報告書」水俣学研究センター編著　2019 年 2 月
6.「生き続ける水俣病―漁村の社会学・医学的実証研究」井上ゆかり著、藤原書店、2020 年 3 月
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/topics_10616.html
7. 水俣学通信（水俣学研究センター情報紙）　第 40 号～59 号
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/minamata_tsushin/







Ⅱ. 水俣学講義　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar01/
第 14 期　水俣学講義　2015 年 9 月 24 日～2016 年 1 月 24 日　全 15 回

開催月日	タイトル	講師
9 月 24 日	水俣学へのいざない：水俣病事件の歴史と現在	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
10 月 1 日	行政不服審査請求から水俣病認定制度を検討する	井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター）
10 月 8 日	フクシマからミナマタを考える	山田真（八王子中央診療所理事長・小児科医）
10 月 15 日	胎児性・小児性水俣病患者　放置された人々	田尻雅美（熊本学園大学水俣学研究センター）
10 月 22 日	水俣病とともに	下田良雄・下田綾子（水俣病患者）
10 月 29 日	私の活動の中で水俣病から学んだこと	川合仁（京都現代医学研究所・川合診療所・精神科医）
11 月 5 日	DVD 上映	
11 月 12 日	災害ボランティアの心構え～水俣－阪神淡路大震災－東日本大震災～	村井雅清（阪神淡路大震災被災地 NGO 協働センター）
11 月 19 日	初めに水俣ありき	山上徹二郎（(株)シグロ代表取締役・映画プロデューサー）
11 月 26 日	「負の遺産」としての水俣病事件の経験を活かした水俣・芦北地域の再構築に向けた歩みと今後の課題	宮北隆志（熊本学園大学水俣学現地研究センター長）
12 月 3 日	水俣市及び水俣湾周辺の水銀による環境汚染の過去と現在、未来	中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長）
12 月 10 日	足尾・水俣・福島―通底する公害の構造―	菅井益郎（国学院大学経済学部）
12 月 17 日	「水俣病を告発する会、京都」、駆け出しの頃といま	大津定美（神戸大学名誉教授・「NPO.ミャンマー農村に小水力発電を」理事）
1 月 7 日	人間（ひと）がつくるジャーナリズム	井上佳子（熊本放送報道制作局テレビ制作部チーフディレクター）
1 月 14 日	水俣病発生公式確認 60 年を迎えて：いま考えるべきこ	花田昌宣（熊本学園大学水俣学

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	と	研究センター長）

第 15 期　水俣学講義　2016 年 9 月 29 日～2017 年 1 月 19 日　全 15 回

開催月日	タイトル	講師
9 月 29 日	水俣学へのいざない：水俣病事件の歴史と現在	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
10 月 6 日	胎児性・小児性水俣病患者にとっての水俣病	田尻雅美（熊本学園大学水俣学研究センター）
10 月 13 日	私にとっての水俣病	中村雄幸（熊本水俣病を告発する会）
10 月 20 日	水俣病とわたし	坂本しのぶ（水俣病患者）・谷由布
10 月 27 日	DVD 上映	
11 月 10 日	水俣病公式確認 60 年と報道のいま	田中久稔（朝日新聞）
11 月 17 日	水俣病問題と差別禁止法	谷川雅彦（部落解放・人権研究所所長）
11 月 24 日	水俣病と環境権の国際的展開	大久保規子（大阪大学法学研究科法学・政治学専攻）
12 月 1 日	ある漁村の世帯でみる生産され続ける水俣病被害	井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター）
12 月 8 日	私たちの水俣病	岩本昭則、敬子（水俣病患者）
12 月 15 日	水俣病と医学	高岡滋（みなまた協立クリニック）
12 月 22 日	東京からの「定点支援」47 年　得したか損したか	久保田好生（東京水俣病を告発する会）
1 月 5 日	水俣を水銀条約の汚染サイトとして評価する	中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長）
1 月 12 日	水俣病の公式確認から 60 年～その「責任」と「償い」は？～	宮北隆志（熊本学園大学水俣学現地研究センター長）
1 月 19 日	世界の水俣病　カナダ調査の報告	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）

第 16 期　水俣学講義　2017 年 9 月 21 日～2018 年 1 月 25 日　全 15 回

開催月日	タイトル	講師
9 月 21 日	水俣学への招待	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
9 月 28 日	水銀条約の発効と水銀規制に関する世界の課題、日本の課題	中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長）
10 月 5 日	水俣病事件とアジアの産業公害そして水銀条約 COP1	谷洋一（水俣病被害者互助会事務局・NPO 法人水俣病協働センター理事）
10 月 12 日	「水俣」を伝える	平野恵嗣（共同通信社国際局海外部記者）
10 月 19 日	水俣病補償協定締結訴訟の意義	大川一夫（弁護士・龍谷大学法学部非常勤講師）
10 月 26 日	DVD 上映	
11 月 9 日	水俣に生まれて	吉永理巳子（水俣病を語り継ぐ会

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

		代表）
11 月 16 日	医学的に隠された水俣病被害の実態を明らかにしてきた 47 年の取り組み	藤野糺（水俣病訴訟支援公害をなくす県民会議医師団団長）
11 月 30 日	水俣の声を記録し伝える　熊本から全国へ　そして世界へ	大木真美（熊本県民テレビ）
12 月 7 日	胎児性・小児性水俣病患者～被害を訴え続ける～	田尻雅美（熊本学園大学水俣学研究センター）
12 月 14 日	〈水俣〉と出会う　埼玉大学水俣合宿の取り組みから	安藤聡彦（埼玉大学教育学部教授）
12 月 21 日	水俣病の診察を通して―「素」の診察―臨床医学にこだわってみる	下地明友（熊本学園大学水俣学研究センター）
1 月 11 日	水俣病の公式確認と猫実験の頃	高峰武（熊本日日新聞論説顧問）
1 月 18 日	漁村のくらしをみつめ水俣病被害をとらえなおす	井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター）
1 月 25 日	まとめ　水俣病をめぐる今後の課題	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター）

第 17 期　水俣学講義　2018 年 9 月 20 日～2019 年 1 月 24 日　全 15 回

開催月日	タイトル	講師
9 月 20 日	水俣学への招待：水俣病事件の歴史と現在	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
9 月 27 日	県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）の紹介	塚田眞弘（県立環境と人間のふれあい館（新潟水俣病資料館）館長）
10 月 4 日	石牟礼道子のこと	藤原良雄（株式会社 藤原書店 社長）
10 月 11 日	終わることのできない水俣病の今	井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター）
10 月 18 日	水俣の海に生きる	鴨川強巳（漁師）、中村雄幸（中村鮮魚）
10 月 25 日	私と水俣病	坂本龍虹（水俣病被害市民の会代表）
11 月 8 日	水俣病の社会福祉	田尻雅美（熊本学園大学水俣学研究センター）
11 月 15 日	水俣病をとおして見えてきたもの	村田三郎（社会医療法人 阪南医療福祉センター 阪南中央病院副院長）
11 月 22 日	ひとり芝居　天の魚	川島宏知（俳優）、白木喜一郎（舞台監督、「天の魚」出前プロジェクト代表）
11 月 29 日	水銀条約の今	中地重晴（熊本学園大学社水俣学研究センター事務局長）
12 月 6 日	遅れて来た者の支援活動	小坂勝弥（京都・水俣病を告発する会）
12 月 13 日	「司法による救済」を選択すること	康由美（大阪弁護士会）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

12 月 20 日	DVD 上映	
1 月 10 日	砂田明一人芝居「天の魚」からの始まり	家中茂（鳥取大学地域学部）
1 月 24 日	水俣病の現在と水俣病被害　水俣病 60 年アンケート結果から	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）

第 18 期　水俣学講義　2019 年 9 月 26 日～2020 年 1 月 23 日　全 15 回

開催月日	タイトル	講師
9 月 26 日	水俣学への招待：水俣病事件の歴史と現在	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
10 月 3 日	水俣病補償・救済制度と胎児性水俣病患者	田尻雅美（熊本学園大学水俣学研究センター）
10 月 10 日	水俣病と戦後日本	小島敏郎（弁護士・顧問　早稲田リーガルコモンズ法律事務所）
10 月 17 日	水俣病訴訟から学ぶ	松野信夫（くまもと法律事務所）
10 月 24 日	2020 年、水銀条約で私たちの暮らしはどう変わるのか	中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長）
10 月 31 日	水俣と私－ある弁護士と水俣のかかわり合い	金井塚康弘（なにわばし国際合同法律事務所）
11 月 7 日	DVD 上映	
11 月 14 日	水俣病事件を取材して	大治浩之輔（フリージャーナリスト・元NHK社会部記者）
11 月 21 日	行政不服審査請求からみる水俣病－いま何が問われているか	井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター）
11 月 28 日	チッソの労使関係史から見えてくるもの	石井まこと（大分大学経済学部教授）
12 月 5 日	私にとっての水俣病	徳冨一敏（水俣市南部もやい直しセンターおれんじ館館長）
12 月 12 日	水俣病事件～人間の尊厳を取り戻す闘い、父川本輝夫からの伝言～	川本愛一郎（有限会社リハシップあい代表取締役社長）
12 月 19 日	水俣病について	下地明友（熊本学園大学水俣学研究センター顧問）
1 月 9 日	水俣に導かれて 41 年	芥川仁（写真家）
1 月 23 日	水俣病事件の歴史とその反省：チッソという会社、労働者、そして水俣病	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）

Ⅲ.公開講座　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar02/

第 12 期　テーマ「九州・熊本の産業遺産と水俣」

期日：2015 年 10 月 6 日～11 月 3 日

会場：水俣市公民館

後援：九州産業考古学会、熊本産業遺産研究所、水俣市、水俣市教育委員会

参加者：延 321 人

開催月日	タイトル	講師
10 月 6 日	熊本・九州の産業遺産とその意味	幸田亮一（熊本学園大学学長）
10 月 13 日	産業遺産としての三池炭鉱の光と影	藤木雄二（大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ副理事長）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

10 月 20 日	北九州での産業遺産活用の取組み	市原猛志（九州大学百年史編集室助教・北九州市門司麦酒煉瓦館館長）
10 月 27 日	水俣の産業遺産 旧日本窒素肥料（株）工業建物の意義	磯田桂史（熊本大学五高記念館客員教授）
11 月 3 日	旧工場現地見学会	案内：磯田桂史（熊本大学五高記念館客員教授）

案内チラシと 11 月 3 日の様子





第 13 期「熊本地震と水俣－地震への備えを考える－」期日：2016 年 9 月 27 日～10 月 25 日
会場：水俣市公民館
後援：水俣市
参加者：延 172 人

開催月日	タイトル	講師
9 月 27 日	益城町の被災状況	和田要（熊本学園大学社会福祉学部）
10 月 4 日	地域を創る―いま地域で生きるために大切なこと	天野和彦（福島大学うつくしまふくしま未来支援センター）
10 月 11 日	熊本地震からの復興と次の大震災にどう備えるか	河田恵昭（関西大学社会安全研究センター長）
10 月 18 日	困難を抱える被災者への支援体験 熊本地震における大学避難所の取り組み	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
10 月 25 日	被災した障害者に対する支援とその取り組みから見えてくるもの	東俊裕（熊本学園大学・被災地障害者センターくまもと事務局長）

案内チラシと 10 月 11 日の様子





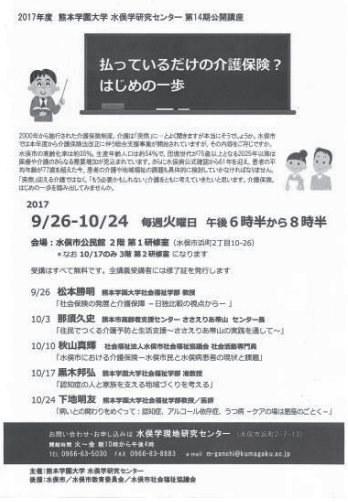
第 14 期「払っているだけの介護保険？はじめの一歩」

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

期日：2017 年 9 月 26 日～10 月 24 日
会場：水俣市公民館
後援：水俣市、水俣市社会福祉協議会、水俣市教育委員会
参加者：延 165 人

開催月日	タイトル	講師
9 月 26 日	社会保険の発展と社会保障－日独比較の視点から－	松本勝明（熊本学園大学社会福祉学部）
10 月 3 日	住民でつくる介護予防と生活支援～ささえりあ帯山の実践を通して～	那須久史（熊本市高齢者支援センターささえりあ帯山センター長）
10 月 10 日	水俣市における介護保険－水俣市民と水俣病患者の現状と課題	秋山真輝（社会福祉法人水俣市社会福祉協議会 社会活動専門員）
10 月 17 日	認知症の人と家族を支える地域づくりを考える	黒木邦弘（熊本学園大学社会福祉学部）
10 月 24 日	病と関わりをめぐって：認知症、アルコール依存症、うつ病－ケアの場は星座のごとく－	下地明友（熊本学園大学社会福祉学部・医師）

案内チラシと 10 月 10 日の様子





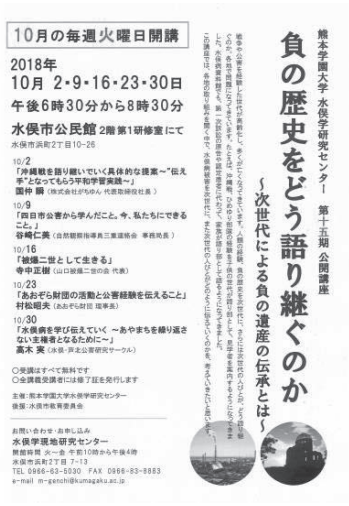
第 15 期「負の歴史をどう語り継ぐのか～次世代による負の遺産の伝承とは～」
期日：2018 年 10 月 2 日～10 月 30 日
会場：水俣市公民館
後援：水俣市教育委員会
参加者：延 204 人

開催月日	タイトル	講師
10 月 2 日	沖縄戦を語り継いでいく具体的な提案 ～"伝え手"となってもらう平和学習実践～	国仲瞬（株式会社がちゆん代表取締役）
10 月 9 日	四日市公害から学んだこと。今、私たちにできること	谷崎仁美（自然観察指導員三重連絡会事務局長）
10 月 16 日	被爆二世として生きる	寺中正樹（山口被爆二世の会代表）
10 月 23 日	あおぞら財団の活動と公害経験を伝えること	村松昭夫（あおぞら財団理事長・弁護士）
10 月 30 日	水俣病を学び伝えていく～あやまちを繰り返さない主権者となるために～	高木実（水俣芦北公害研究サークル・熊本学園水俣学研究センター客員研究員）

案内チラシと 10 月 2 日の様子

（様式 2）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L





第 16 期「『ひきこもり』を知る・考える －『個人の問題』で片づけてしまわないために－」

期日：2019 年 9 月 24 日～10 月 15 日

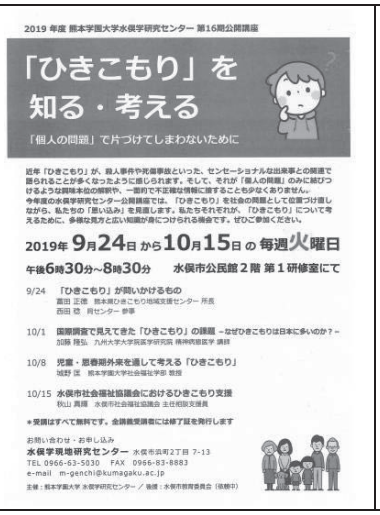
会場：水俣市公民館

後援：水俣市教育委員会

参加者：延 210 人

開催月日	タイトル	講師
9 月 24 日	「ひきこもり」が問いかけるもの	富田正徳（熊本県ひきこもり地域支援センター所長）・西田稔（同センター参事）
10 月 1 日	国際調査で見えてきた「ひきこもり」の課題-なぜひきこもりは日本に多いのか？-	加藤隆弘（九州大学大学院医学研究院 精神病態医学 講師）
10 月 8 日	児童・思春期外来を通して考える「ひきこもり」支援	城野匡（熊本学園大学社会福祉学部 教授・医師）
10 月 15 日	水俣市社会福祉協議会におけるひきこもり支援	秋山真輝（水俣市社会福祉協議会 主任相談支援員）

案内チラシと 10 月 15 日の様子





法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

Ⅳ. **公開セミナー・シンポジウム** http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar03/

1. 第 23 回公開セミナー「第 6 回水俣病を『伝える』セミナー」
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/active03_7676.html
期日：2016 年 3 月 2 日
会場：水俣市公民館
主催：熊本学園大学水俣学研究センター、水俣芦北公害研究サークル
後援：水俣市教育委員会、芦北町教育委員会、津奈木町教育委員会
参加者：延 35 名

内容	講師
どこに学び、なにを次世代に伝えるか 水俣病公式確認 60 年を迎える年「患者さんから学び伝える」必要性を考える	下田綾子、下田良雄

2. 水俣病公式確認 60 年国際シンポジウム「カナダ先住民の水俣病と水銀汚染」
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/active03_8216.html
期日：2017 年 2 月 18 日～19 日
会場：熊本学園大学 14 号館 1411 教室（18 日）、水俣市公民館ホール（19 日）
参加者：延 170 人

開催月日	内容	報告者
2 月 18 日	第 1 部　カナダ先住民代表による報告	サイモン フォビスター（グラッシーナロウズ） マーヴィン リー マクドナルド（ヴァバシムーン） ルーシー フォビスター（グラッシーナロウズ）
	第 2 部 2014 年カナダ先住民居留地調査報告 カナダ先住民居留地の健康被害調査 居留地における環境中の水銀汚染状況 日本とカナダの水俣病問題の現状と課題	 下地明友（熊本学園大学水俣学研究センター） 中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長） 花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）

開催月日	内容	報告者
2 月 19 日	カナダ先住民代表による報告 日本とカナダの水俣病問題の現状と課題－2014 年調査を踏まえて 水俣からの報告 水俣病－日本とカナダ－ フロアからの発言、討論と交流	サイモン フォビスター（グラッシーナロウズ） マーヴィン リー マクドナルド（ヴァバシムーン） 花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長） 佐藤英樹（水俣病被害者互助会） 高岡滋（神経内科リハビリテーション協立クリニック）

3.「カナダ・オジブエ先住民 水銀被害の歴史と現在－カナダの水俣病－」
期日：2017 年 2 月 22 日
会場：和光大学ポプリホール鶴川
主催：和光大学地域連携研究センター・熊本学園大学水俣学研究センター
後援：東京水俣病を告発する会、町田市教育委員会、川崎市教育委員会

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

報告者	サイモン フォビスター（グラッシーナロウズ） マーヴィン リー マクドナルド（ヴァバシムーン） ルーシー フォビスター（グラッシーナロウズ） 最首悟（和光大学名誉教授） 花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長） 森下直紀（和光大学）

4. 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「水俣病の経験を将来に活かした地域構想と国際的情報発信のための水俣学研究拠点の構築」中間報告

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/active04_9901.html

開催日：2018 年 1 月 7 日

会　場：水俣市公民館ホール

	タイトル	報告者
第 3 班	水俣学アーカイブスを通した知の集積と国際的情報発信拠点の形成	井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター）
第 2 班	環境負債を克服し地域再構築にむけた評価および民主主義的合意形成をめざす社会的実証研究	中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター）
第 1 班	水俣病被害の多面性に着目した問題解決のための包括的研究と総括	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター）
外部評価	外部評価委員からのコメント	嘉田由紀子（前滋賀県知事）
		長谷川公一（東北大学大学院文学研究科教授 ）
		赤木洋勝（国際水銀ラボ取締役所長）

5.私立大学戦略的研究基盤形成支援事業成果報告シンポジウム「水俣病の現在と水俣学の創造」

http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar03/

期日：2019 年 12 月 23 日

会場：熊本学園大学 14 号館 2 階 1422 教室

タイトル	報告者
水俣と水俣病の将来を構想する－水俣学研究の到達点－	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
健康・医療・福祉相談から見える水俣病被害の実態と施策の課題－被害者が求めるもの－	田尻雅美（熊本学園大学水俣学研究センター研究員）
水俣の健康リスクと環境リスクを再検討する	中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長）
水俣市円卓会議の経緯とゼロ・ウェイスト政策	藤本延啓（熊本学園大学水俣学研究センター研究員）
水俣学アーカイブを活用した研究拠点形成に関する実証的研究－水俣の知識インフラの拡充に向けて－	井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター研究員）
総合討論	

6.若手研究セミナー　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar08/

第 4 回「水俣病の現在と水俣学の試み」

期間：2015 年 9 月 4 日～6 日、全 3 日間

会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター

受講者：13 名

開催月日	内　容	
9 月 4 日	フィールドワーク	水俣がはじめての人向けの水俣現地案内
	セミナー ①	「水俣病 60 年を水俣学はどう語るか：水俣病事件の歴史と現在の課題」 花田昌宣（熊本学園大学社会福祉学部/水俣学研究センター長）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	セミナー ②	「環境破壊を経験した地域社会の再構築のための新たな統治とその評価」 宮北隆志（熊本学園大学社会福祉学部/水俣学現地研究センター長）
	フィールドワーク準備ならびに受講者による発表と討論	
9 月 5 日	特別セミナー	「不知火海総合学術調査の経験―研究者の立ち位置」 最首悟（和光大学名誉教授）
	フィールドワーク	水俣病被害者聞き取り
	フィールドワークまとめ	
	グループ報告と討論	
9 月 6 日	セミナー③	「2020 年目標と国際的な水銀規制－水銀条約の批准と日本の課題」 中地重晴（熊本学園大学社会福祉学部/水俣学研究センター事務局長）
	グループ討論	
	グループ報告と総合討論	

第 5 回「水俣病の現在と水俣学の試み」
期間：2017 年 9 月 8 日～10 日、全 3 日間
主会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター
受講者：11 名

開催月日	内 容	
9 月 8 日	フィールドワーク	水俣がはじめての人向けの水俣現地案内
	セミナー ① 特別セミナー	「水俣病 61 年と水俣学の展開」 花田昌宣（熊本学園大学社会福祉学部/水俣学研究センター長） 「メディアからみた水俣病－反省と課題」 高峰武（熊本日日新聞社論説顧問）
	フィールドワーク準備ならびに受講者による発表と討論	
9 月 9 日	セミナー ②	「水俣病患者の補償・救済制度～地域で生きるとは～」 田尻雅美（熊本学園大学水俣学研究センター）
	フィールドワーク	水俣病被害者聞き取り
	グループ報告と討論	
9 月 10 日	セミナー③	「水俣の水銀汚染の現状と課題」 中地重晴（熊本学園大学社会福祉学部/水俣学研究センター事務局長）
	グループ報告と総合討論	

第 6 回「水俣病の現在と水俣学の試み」
期間：2019 年 9 月 6 日～8 日、全 3 日間
会場：熊本学園大学水俣学現地研究センター
受講者：8 名

開催月日	内 容	
9 月 6 日	フィールドワーク	水俣がはじめての人向け水俣現地案内
	セミナー① セミナー②	「いま、水俣はどうなっているか：研究の課題と展望」 花田昌宣（熊本学園大学社会福祉学部/水俣学研究センター長） 「表出できない患者たちの水俣病被害－水俣病公式確認アンケート調査から」 井上ゆかり（水俣学研究センター研究員）
	フィールドワーク準備ならびに受講者による討論と発表	
9 月 7 日	特別セミナー	「水俣病被害救済問題と訴訟の現状」 淡路剛久（立教大学名誉教授）
	フィールドワーク	水俣病被害者聞き取り

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	グループ報告と発表	
9 月 8 日	セミナー③	「水俣における水銀汚染の現状と水銀条約の日本と世界の課題」 中地重晴（熊本学園大学社会福祉学部/水俣学研究センター事務局長）
	まとめのグループ討論、報告と総合討論	

Ⅴ. 研究会

1.定例研究会　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar09/

〈2015 年度〉 第 26 回～第 29 回　2015 年 4 月 22 日～2016 年 2 月 15 日

〈2016 年度〉 第 30 回～第 31 回　2016 年 4 月 4 日～11 月 28 日

〈2017 年度〉 第 32 回～第 35 回　2017 年 6 月 5 日～10 月 7 日

回数	テーマ	報告者	開催年月日
第 26 回	水銀条約締結後の進捗状況と日本の課題及び小規模金採掘に伴う水銀汚染の現状－インドネシアにおける水銀汚染について	中地重晴（水俣学研究センター事務局長）	2015 年 4 月 22 日
第 27 回	水俣市における「協働」の「失敗」－なぜ「水俣市円卓会議」全体が停滞したのか。その一方で、なぜ「ゼロ・ウエイスト」「茶飲み場」は続いているのか－	藤本延啓（水俣学研究センター研究員）	2015 年 6 月 24 日
第 28 回	ミャンマーの現状について	大津定美（神戸大学名誉教授）	2015 年 12 月 17 日
第 29 回	水俣学プロジェクトの今後の進め方について	花田昌宣（水俣学研究センター長）	2016 年 2 月 15 日
第 30 回	水俣学研究プロジェクトの推進のために（本年度の調査・研究活動）	花田昌宣（水俣学研究センター長）	2016 年 4 月 4 日
第 31 回	水俣地域周辺における水銀汚染について～みなまた地域研究会の調査から見えてきたこと～	中地重晴（水俣学研究センター事務局長）	2016 年 11 月 28 日
第 32 回	水俣病研究の最近の動向について	花田昌宣（水俣学研究センター長）	2017 年 6 月 5 日
第 33 回	不知火海の漁業・流通とメチル水銀暴露リスク	上野眞也（熊本大学政策創造研究教育センター）	2017 年 9 月 6 日
第 34 回	地域研究の可能性と水俣学	藤倉達郎（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究）	2017 年 9 月 27 日
第 35 回	オープンダイアローグと水俣学	高木俊介（京都・たかぎクリニック）	2017 年 10 月 7 日

2.水俣病事件研究交流集会　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar04/

〈2015 年度〉 第 11 回

期日：2016 年 1 月 9 日～1 月 10 日、全 2 日間

会場：熊本県水俣市公民館ホール

参加者：延 370 人

開催月日	内　容	報告者
1 月 9 日	テーマ：特別セッション「水俣病 60 年の歴史の証言」 水俣病患者：初期の水俣病を経験してきた方 支援者：水俣で患者たちの訪問・支援活動を行っていた方 1940 年チッソ入社の労働者。戦後のチッソと水俣病で倒れた工員大矢二芳さんらを語る。	 坂本フジエ（水俣病互助会） 堀田静穂 中村和博（元新日窒労組）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	学校教師：1960 年代学校の様子はどうだったか テーマ：「水俣病の歴史と現在」 岡本達明著『水俣病の民衆史』をめぐって 映像でみる胎児性患者 60 年～金子雄二さんの場合～ 水俣病とは何か？その多面性及び距離感の差異に関する考察（試論）	梅田卓治（水俣市立久木野小学校/水俣・芦北公害研究サークル） 矢作正（「技術と社会」資料館） 吉崎健（NHK 熊本放送局） 森枝敏郎（熊本県地域福祉実践研究会）
1 月 10 日	テーマ：「水俣病の医学をめぐる今日の課題」 天草・非対象地域住民の神経症候 最近行った疫学研究の報告 初期新潟有機水銀中毒症からの考察 テーマ：「水俣病をめぐる現在の課題」 松本健次さんに再審を！健次さんと水俣病 生人から GS（グリンスポーツ）へ 新潟水俣病における行政の責任 水銀条約の批准に向けた水銀新法の成立と日本の課題 水俣病差別研究の課題と方法	 高岡滋（神経内科リハビリテーション協立クリニック） 頼藤貴志（岡山大学大学院環境生命科学研究科） 斎藤恒、萩野直路、丸山公男（木戸病院、新潟青陵大学） 金井塚康弘（大阪弁護士会松本健次さん再審弁護団） 飯嶋秀治（九州大学人間環境学研究院） 萩野直路（新潟水俣病第三次訴訟を支援する会） 中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長） 花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）

〈2016 年度〉 第 12 回
期日：2017 年 1 月 7 日～1 月 8 日、全 2 日間
会場：熊本県水俣市公民館ホール
参加者：延 260 人

開催月日	内 容	報告者
1 月 7 日	テーマ：「水俣病原因企業と行政」 1970 年代チッソ救済の経緯と論点 水俣再生の歩み・25 年間の検証 御所浦島の採石場問題と不知火海の環境について テーマ：「水俣病の表象」 「公害と出会う場」としてのメディアを考える 映像でみる胎児性患者 60 年～坂本しのぶさんの場合	 矢作正（「技術と社会」資料館） 森枝敏郎（熊本県地域福祉実践研究会） 大嶽弥生（水俣の暮しを守る：みんなの会） 池田理知子（国際基督教大学）五十嵐紀子（新潟医療福祉大学） 吉崎健（NHK 熊本放送局）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	海外での水俣表象	飯嶋秀治（九州大学人間環境学研究院）
1 月 8 日	テーマ:「水俣病の医学」 新潟水俣病行政訴訟控訴審での新潟市控訴理由書（1）における発症閾値問題と丸山論文に対する批判について 一万人検診データから見る水俣病の実態 水俣病における胎児性メチル水銀曝露 「水俣病発症閾値 50ppm」の問題点 テーマ:「不知火海周辺の水銀汚染の現在」 八幡残渣プールと不知火海の水銀汚染を考える 水俣市民の食品からの水銀摂取の現状について テーマ:「水俣病訴訟の現状と課題」 新潟水俣病第三次訴訟・行政訴訟で問われていること 熊本水俣病互助会訴訟控訴審と義務付け訴訟報告	 丸山公男（新潟青陵大学） 高岡滋（神経内科リハビリテーション協立クリニック） 頼藤貴志（岡山大学大学院環境生命科学研究科） 三浦洋（阪南中央病院） 山下善寛（水俣の暮しを守る:みんなの会） 中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長） 萩野直路（新潟水俣病第三次訴訟を支援する会） 谷洋一（水俣病被害者互助会）

〈2017 年度〉 第 13 回
期日：2018 年 1 月 6 日～1 月 7 日、全 2 日間
会場：水俣市公民館
参加者：延 340 人

開催月日	内 容	報告者
1 月 6 日	セッション 1 カネミ油症と台湾油症の比較－患者の症状、認定基準（日本）・患者登録（台湾）を中心に－ カネミ油症未認定患者検診報告－長崎県の一離島における健康障害－ 水俣における周産期・乳児期の健康アウトカムの時間的トレンドについて セッション 2 ノーモア・ミナマタ第 2 次訴訟の報告 水俣病の症候の特徴と中枢神経系の特性 新潟水俣病行政訴訟高裁判決 9 名中 9 名認定！ 11 月 29 日の新潟水俣病行政認定義務付け訴訟控訴審判決について 国県の水俣病発症閾値 50ppm 論の誤りとその政治的意図	 金星（長崎大学水産・環境科学総合研究科＆日台油症情報センター） 藤野糺（菊陽病院） 頼藤貴志（岡山大学大学院環境生命科学研究科） 中島潤史（ノーモア・ミナマタ第 2 次訴訟弁護団） 高岡滋（神経内科リハビリテーション協立クリニック） 高島章（新潟水俣病第三次訴訟・行政認定義務付け訴訟弁護団長） 萩野直路（新潟水俣病第三次訴訟を支援する会） 三浦洋（阪南中央病院）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	セッション 3 水俣条約締約国会議ジュネーブ報告	 谷由布（水俣病協働センター）
1 月 7 日	新村苑子氏の『新潟水俣病短篇小説集』について カナダ水俣病事件の現状について 水俣病公式確認 60 年アンケート調査結果から	後藤岩奈（新潟県立大学） 森下直紀（和光大学） 守弘仁志（熊本学園大学水俣学研究センター）

〈2018 年度〉 第 14 回
期日：2019 年 1 月 12 日～13 日、全 2 日間
会場：水俣市公民館ホール
参加者：延 320 人

開催月日	内 容	報告者
1 月 12 日	テーマ:「水俣病の人文学」 新村苑子氏の『葦辺の母子　新潟水俣病短編小説集Ⅱ』について 漁村での 10 年　ー見えたこと、見えなかったことー 『暮しの手帖』のなかの公害—1967 年秋号の特集記事が描く水俣病 テーマ:「水俣病の医学」 胎児性水俣病患者さんの日常生活動作（ADL）の変化 水俣病互助会訴訟の医学的論点 不知火海・水俣対岸地域におけるメチル水銀の健康影響 テーマ:「汚染サイトとしての水俣」 日本における水銀規制の現状と今後の課題 水俣川河口臨海部振興計画の問題点	 後藤岩奈（新潟県立大学） 飯嶋秀治（九州大学） 池田理知子（福岡女学院大学） 賴藤貴志（岡山大学大学院環境生命科学研究科） 三浦洋（阪南中央病院） 高岡滋（神経内科リハビリテーション協立クリニック） 中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長） 山下善寛（熊本学園大学水俣学研究センター）
1 月 13 日	テーマ:「水俣病訴訟の今」 ノーモア・ミナマタ第 2 次訴訟の現状と課題 新潟の三次訴訟高裁判決の誤り、行政訴訟高裁判決と比較して テーマ:「水俣の過去と現在」 1968 年三資料（市民会議発足ビラ、恥宣言、政府見解）紹介 現地研究センター資料からみえる守山工場（日窒アセテート）労組と水俣との関係についての一考察 「もやい直し」の現代的意義を再考する テーマ:「水俣の歴史と水俣病」 史料でみる近世の水俣ー船津村の位置づけをめぐってー 水俣避病院と水俣病差別	 髙峰真（ノーモアミナマタ弁護団） 萩野直路（新潟水俣病第三次訴訟を支援する会） 矢作正（「技術と社会」資料館） 大門信也・籾木優一郎（関西大学） 除本理史（大阪市立大学）、尾崎寛直（東京経済大学） 矢野治世美（熊本学園大学水俣学研究センター） 花田昌宣（熊本学園大学水俣学

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

		研究センター長）

〈2019 年度〉 第 15 回
期日：2020 年 1 月 11 日～12 日、全 2 日間
会場：水俣市公民館
参加者：延 322 人

開催月日	内 容	報告者
1 月 11 日	テーマ:「水俣病を学ぶこと」 教育と水俣病－水俣病事件と水俣高校の公害教育（1980 年前後）－ 「水俣病を考える」から「水俣病から考える」へ テーマ:「水俣病訴訟の今」 ノーモア・ミナマタ訴訟で明らかとなった貴重な事実 新潟水俣病第二次行政訴訟の闘い 第二世代訴訟の現在	 石井雅臣（水俣芦北公害研究サークル） 早乙女理（トヨタ自動車マリン事業部） 村山雅則（ノーモア・ミナマタ訴訟弁護団） 萩野直路（新潟水俣病第二次行政訴訟事務局） 谷洋一（水俣病被害者互助会）
1 月 12 日	テーマ:「水俣病の医学」 新潟水俣病における妊娠規制の諸問題 胎児期メチル水銀曝露に関する疫学研究のまとめ 日本神経学会「回答」の問題点 テーマ:「水俣の今」 水俣川河口臨海部振興構想を考える 「水俣病」の将来を構想する:被害者の犠牲者非難の構図からの脱出	 佐藤靜（大阪樟蔭女子大学） 頼藤貴志（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科疫学・衛生学分野） 高岡滋（神経内科リハビリテーション協立クリニック） 中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長） 花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）

3. 水俣病臨床研究会　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar05/
第 6 回水俣病臨床研究会　2017 年 1 月 8 日
開催日：2017 年 1 月 8 日（日）
会　場：熊本学園大学水俣学現地研究センター

テーマ	報告者
最高裁判決後の水俣病検診のまとめ	高岡滋（水俣病訴訟支援公害をなくする県民会議医師団）
水俣病発症閾値 50ppm の問題点	三浦洋（阪南中央病院　水俣病問題研究会）

第 7 回水俣病臨床研究会　2019 年 1 月 13 日
開催日：2019 年 1 月 13 日
会　場：熊本学園大学水俣学現地研究センター

テーマ	報告者
日本神経学会の水俣病に関する見解について	高岡滋（水俣病訴訟支援公害をなくする県民会議医師団）

4.タイ・ミャンマー科研（海外学術調査）研究会
タイ・マプタプット工業団地における被害調査
テーマ:「タイ・ミャンマーにおけるクロスボーダーな工業化・人権侵害と域外責務・環境民主主義」
期日：2017 年 10 月 16 日
場所：熊本学園大学 14 号館 3 階 143C 教室

（様式 2）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

タイトル	報告者
環境を守る物語のカ－東北タイの伝承と開発 ミャンマー・ティワラ経済特区の現状と課題	バンペン・チャイヤラック（タイ） 木口由香（メコン・ウォッチ事務局長、理事）

Ⅵ.国際シンポジウム・会議

1.“Minamata@60: Learning from Industrial Disaster towards Sustainable Society and Environment”、 2016 年 9 月 10 日、会場 : タイ・チュラロンコン大学 Chaloem Rajakumari 60 Building7F ホール
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/active03_8044.html
http://earththailand.org/en/article/32

2. セミナー “Myanmar’s SEZs: Opportunities or Threats to Local Communities”
主催 : EARTH　RIGHTS　INTERNATIONAL、2016 年 2 月 23 日、ミャンマー・ヤンゴン
https://earthrights.org/blog/we-dont-want-to-be-another-minamata-seminar-brings-myanmars-sez-residents-to-the-forefront/

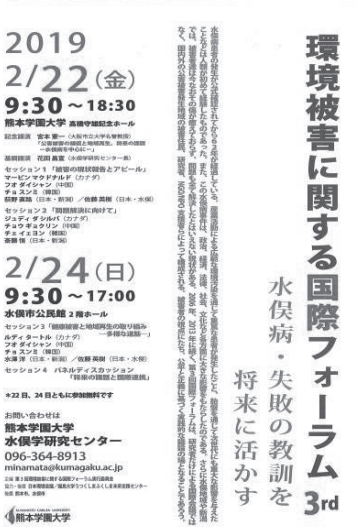
3. フォーラム“The Second Forum on Myths and Facts: Gold Mining in Loei Province”
主催 : EARTH、2017 年 6 月 29 日、タイ・バンコク

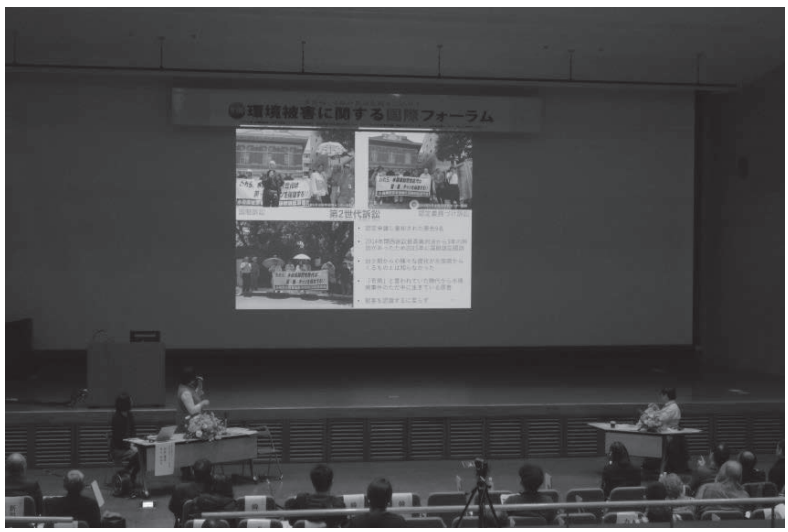
4. 第 3 回「環境被害に関する国際フォーラム―水俣病・失敗の教訓を将来に活かす―」
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/international/international03/
期日 : 2019 年 2 月 22 日・24 日
会場 : 熊本学園大学　高橋守雄記念ホール（22 日）、水俣市公民館ホール（24 日）
後援 : 熊本市、水俣市
協力・後援 : 日本環境会議、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター

開催月日	内　容	
2 月 22 日	記念講演	「公害被害の救済と地域再生の歴史的課題―水俣病を中心に―」 宮本憲一（大阪市立大学名誉教授・日本環境会議名誉理事長）
	基調講演	「第 3 回国際フォーラムの課題：失敗の教訓を将来に活かす」 花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
	セッション 1	－被害の現状報告とアピール－
	カナダ	「Wabaseemoong Then and Now」 マーヴィン　リー　マクドナルド（カナダ・ヴァバシムーン代表）
	韓国	「加湿器殺菌剤生存者の証言」 チョ　スンミ（韓国・加湿器殺菌剤被害者） 「加湿器殺菌剤の子どもを亡くした遺族の証言」 キム　ドクジョン（韓国・加湿器殺菌剤被害者家族）
	中国	「淮河水汚染対策と癌の村の変遷」 フォ　ダイシャン（淮河水系生態環境科学研究センター）
	新潟	「日本政府は水俣病をメチル水銀中毒として扱っていない」 萩野直路（新潟・新潟水俣病第 3 次訴訟を支える会事務局）
	水俣	「裁判や運動の原動力」 佐藤英樹（水俣・第 2 世代訴訟団長、水俣病被害者互助会）
	セッション 2	－問題解決に向けて－
	中国	「中国の環境被害と環境政策」 チョウ　ギョクリン（南京大学教授）
	韓国	「生活化学製品の環境保健事件―加湿器殺菌剤惨事」 チェ　イェヨン（大韓民国政府社会的惨事特別調査委員会副委員長）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

	カナダ	「Grassy Narrows Mercury Poisoning to December 2018」 ジュディ ダ シルバ（グラッシーナロウズ）
	熊本学園大学	「『紛争』解決としての水俣病施策－終わることのできない水俣の今－」 田尻雅美、井上ゆかり（熊本学園大学水俣学研究センター研究員）
	新潟	「阿賀野川流域のメチル水銀中毒調査」 斎藤 恒（新潟・元新潟勤労者医療生活協同組合木戸病院院長）
	総括	花田昌宣（熊本学園大学水俣学研究センター長）
2 月 24 日	セッション 3	－健康被害と地域再生の取り組み－多様な道筋－
	熊本学園大学	「水俣とカナダの汚染サイトの修復について」 中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長）
	韓国	「加湿器殺菌剤生存者の証言」 チョ スンミ（加湿器殺菌剤被害者） 「加湿器殺菌剤の子どもを亡くした遺族の証言」 キム ドクジョン（加湿器殺菌剤被害者家族）
	中国	「淮河水汚染対策と癌の村の変遷」 フォ ダイシャン（淮河水系生態環境科学研究センター）
	カナダ	「Grassy Narrows Mercury Poisoning to December 2018」 ジュディ ダ シルバ（グラッシーナロウズ） 「Wabaseemoong Then and Now」 マーヴィン リー マクドナルド（ヴァバシムーン代表） 「Grassy Narrows Community Health Survey」 ドナ マーグラー（モントリオール大学）
	新潟	「長い道のりだった」 水澤洋（新潟水俣病患者）
	水俣	「裁判や運動の原動力」 佐藤英樹（第 2 世代訴訟団長、水俣病被害者互助会）
	セッション 4	パネルディスカッション－将来の課題と国際連携－各国代表





5. 「“ノーモア・ミナマタ&ノーモア加湿器殺菌剤惨事”水俣病事件と加湿器殺菌剤惨事日韓ワーク

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

ショップ」2019 年 2 月 25 日、水俣市公民館第一研修室
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar03_10294.html
6.1st Japan - ASEAN Medical Seminar on Human Health Impact of Heavy Metals, Hasanuddin University, Makassar, Indonesia, May 3 st
https://www.chikyu.ac.jp/srirep/his1/
7. 2nd Japan - ASEAN Medical Seminar on Human Health Impact of Heavy Metals, Damhil Hotel Ballroom,Gorontalo,Indonesia May 5st
https://www.chikyu.ac.jp/srirep/his2/

Ⅶ. その他

1. 第 3 期水俣学研究プロジェクト・キックオフ研究会、2016 年 8 月 4 日
2. 水俣病公式確認 60 年朝日新聞社との合同アンケート調査検討会
〈アンケート内容検討会〉
開催日：2017 年 5 月 22 日、7 月 3 日、9 月 7 日、10 月 23 日、11 月 6 日、11 月 25 日、12 月 12 日、12 月 25 日、2018 年 2 月 21 日
〈自由記述転記作業〉
日時：2017 年 11 月 6 日～7 日
〈水俣病公式確認 60 年朝日新聞社との合同アンケート調査検討会〉
開催日：2018 年 4 月 2 日、5 月 12 日、6 月 4 日、7 月 2 日、8 月 24 日、9 月 14 日、1 月 31 日

＜これから実施する予定のもの＞

14 その他の研究成果等

1. チッソ労働運動史研究会　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar07/
〈2015 年度〉第 27 回～29 回　2015 年 8 月 19 日～2016 年 3 月 31 日
〈2016 年度〉第 30 回～32 回　2016 年 6 月 18 日～2016 年 12 月 28 日
〈2017 年度〉第 33 回～36 回　2017 年 5 月 28 日～2018 年 3 月 31 日
〈2018 年度〉第 37 回～38 回　2018 年 7 月 5 日～12 月 19 日
〈2019 年度〉第 39 回～42 回　2019 年 4 月 3 日～11 月 24 日

内 容	開催年月日
第27回　65年から72年までの安賃後の合理化進行下における労使関係	2015年8月19日
第28回　書籍刊行にむけた各担当者社会政策学会での報告	2015年12月19日
第29回　書籍刊行にむけた各担当者社会政策学会での報告	2016年3月31日
第30回　岡本達明『水俣病の民衆史』日本評論社、2015年を読み解く	2016年6月18日
第31回　『チッソ労使の労働運動・経営・民衆・社会史』刊行検討	2016年8月19日
第32回　『チッソ労使の労働運動・経営・民衆・社会史』書籍刊行にむけた各編者の報告	2016年12月28日
第33回　書籍刊行にむけた各担当者の進捗状況報告	2017年5月28日
第34回　2018年書籍刊行にむけた研究員からの進捗状況報告	2017年10月6日
第35回　2018年書籍刊行にむけた各研究員からの進捗状況報告	2017年12月26日
第36回　2018年書籍刊行にむけた各研究員からの進捗状況報告	2018年3月31日
第37回　来年度刊行予定の新日室労組とチッソの労使関係史書籍刊行にむけて	2018年9月23日
第38回　各担当者から書籍刊行のための進捗状況報告	2019年1月5日
第39回　書籍刊行にむけた各担当者の進捗状況報告	2019年4月13日
第40回　書籍刊行にむけた各担当者の進捗状況報告	2019年6月29日
第41回　書籍刊行にむけた各担当者の進捗状況報告	2019年8月28日
第42回　書籍刊行にむけた各担当者の進捗状況報告	2019年11月24日

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

2. 水俣・芦北地域戦略プラットフォーム
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar06/
〈2015 年度〉第 39 回～40 回　2015 年 6 月 29 日～2016 年 3 月 28 日
〈2016 年度〉第 41 回　　2016 年 12 月 23 日

	テーマ	開催年月日
第39回	「『環境首都水俣』創造事業を考える」	2015年 6月29日
第40回	「みなまる弁当はなぜお弁当屋さんなのか」	2016年 3月28日
第41回	「自然産業につながる人々④－捕る人・つなぐ人・食べる人－」	2017年 1月 16日

3. 天草環境会議　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/seminar/seminar11/
〈2015 年度〉第 32 回　2015 年 7 月 11 日～11 日、全 2 日間
〈2016 年度〉第 33 回　2016 年 7 月 9 日～10 日、全 2 日間
〈2017 年度〉第 34 回　2017 年 7 月 8 日～ 9 日、全 2 日間
〈2018 年度〉第 35 回　2018 年 7 月 7 日～ 8 日、全 2 日間
〈2019 年度〉第 36 回　2019 年 7 月 13 日～14 日、全 2 日間
4. 水俣病事件資料集編纂委員会
〈2015 年度〉第　2 回～12 回　2015 年 5 月 20 日～2016 年 3 月 29 日
〈2016 年度〉第 13 回～21 回　2016 年 5 月 19 日～2017 年 3 月 27 日
〈2017 年度〉第 22 回～30 回　2017 年 4 月 26 日～2018 年 3 月 12 日
〈2018 年度〉第 31 回～36 回　2018 年 5 月 7 日～2019 年 1 月 21 日
〈2019 年度〉第 37 回～36 回　2019 年 5 月 20 日～9 月 15 日
5. 企業（schoo）との連携によるインターネット授業　https://schoo.jp/class/2534
2015 年度コミュニケーション型動画学習サービス「現代にいきる水俣学」
2015 年 7 月 6 日「終わりなき水俣病の 60 年」花田昌宣
2015 年 7 月 13 日「失敗から得た教訓」宮北隆志
2015 年 7 月 20 日「世界に広がる水銀汚染と水銀条約」中地重晴
6. 海外研究者の受け入れ
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/international/international04/
〈2015 年度〉
韓国緑の忠南、台湾国立中正大学、茗溪学園中学、日韓 PAOT ワークショップ
〈2016 年度〉
シリ ポーン氏（メー ファー ルアン大学、タイ）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、スリチャイ氏（チュラロンコン大学、タイ）
〈2017 年度〉
チャ スンギ氏（朝鮮大学）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、アメリカ・フランスからの取材
〈2018 年度〉
パリ 13 大学、パスカル・プチ氏（パリ 13 大学経済学部）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、韓国環境保健市民センター、大韓民国政府社会的惨事特別調査委員会、ソウル大学、放送通信大学（韓国）、江原大法学専門大学院（韓国）、カトリック大学（韓国）
〈2019 年度〉
中国科学院、シリポーン氏・ワンワリー氏・三宅氏（メイファールング大学、タイ）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
7. その他　http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/international/international04/
〈2015 年度〉
年間を通じての JICA 研修、水俣環境アカデミーキック・オフシンポジウム水俣エクスカーション、日本コミュニケーション学会九州支部、甲南女子高校、新潟大学、濟々黌 SGH、私学教育研修会一斉研修中学部会などの水俣病問題に関する研修、講義、案内などを大学、水俣で実施した。また、畑育郎水俣案内、環境省環境調査研修所、東京経済大学など大学の研究者による聞き取りや資料閲覧を大学・水俣で受け入れた。熊本日日新聞社新任職員水俣病概要研修、大阪人権研究所水俣調査

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

協力も実施した。
〈2016 年度〉水俣病に関する研修の受け入れ
年間を通じての JICA 研修の受け入れ。法政大学、佐賀大学、九州大学、大分大学、大阪市立大学、鳥取大学、京家政学院大学などの研究者による聞き取りや資料閲覧の受け入れ、東京医学芸大学、北九州大、甲南女子高校、新潟大学、岡山大学、京都大学、北九州エコツアー神奈川大学、国際基督教大学水俣高校スーパーグローバル高校研修、人吉中原小学校など水俣病問題に関する研修、講義、案内などを大学、水俣で実施した。
〈2017 年度〉
年間を通じての JICA 研修、大学の研究者による聞き取りや資料閲覧。福岡女子大学、法学研究者、神戸学院大学、水平社博物館長、中央大学、保険医協会、日本消費者連盟関西グループ、新潟大学、アスベスト患者家族の会、海外環境協力センター、愛媛大学社会共創学部、慶応義塾大学環境情報学部、日本 NUS など水俣病問題に関する研修、講義、案内などを大学、水俣で実施した。。
〈2018 年度〉
海外から、フランスのダンスセラピスト、フィリップ・シェール氏の水俣現地案内、患者達との面談などを行い、研究調査交流の広がりを作ることが出来た。とくに JICA や海外の研究機関からの研究や訪問調査を積極的に受け入れた。
年間を通じて様々な研修を受け入れており、JICA、明治大学中学高等学校、ILO 職員、国立環境研究所、福岡県立大学、福岡女子大学、神奈川学園高校、龍谷大学舟橋ゼミ、関西大学大門ゼミ、甲南女子高校、かがやきの森支援学校、総合地球環境学研究所、新潟大学、京都大学、京都造形芸術大学、京都文教大学の大学などの水俣病問題に関する研修、講義、案内などを大学、水俣で実施した。また、法政大学、佐賀大学、大分大学、大阪市立大学、福岡女子大学、東京家政学院大学、東京学芸大学、新潟大学、京都大学など大学の研究者による聞き取りや資料閲覧に協力した。
〈2019 年度〉
年間を通じての JICA 研修、福島イノベーション・コースト構想推進機構、特別セミナー中国講師（中国科学院）水俣研修、インクルーシブ教育研究所水俣研修、学習院大学、京都造形芸術大学、群馬大学附属病院、甲南女子高校、新潟大学、部落解放・人権政策確立要求佐賀県実行委員会「水俣フィールドワーク」、福岡女学院大学池田ゼミ、福岡女子大学、埼玉大学有機農業研究会などの水俣病問題に関する研修、講義、案内などを大学、水俣で実施した。海外からフランスのダンスセラピスト、フィリップ・シェール氏、ドイツ Bernd Braunlich 氏、Marianna Christofides 氏、また、大学の研究者による聞き取りや資料閲覧に協力した。

8. 2019 年度熊本学園大学特別公開セミナー「中国の環境問題の現在－重金属と健康への影響－」
期日：2019 年 8 月 3 日（土）
会場：熊本学園大学 14 号館 1411 教室

内　容	
基調講演	「大気汚染:石炭燃焼に伴うフッ素汚染と水俣病との比較」 鄭宝山氏（中国科学院地球化学研究所 環境地球化学国家重点研究室 名誉教授）
報告	「温室効果ガスの活用:温室効果ガス二酸化炭素の地質学的回収利用と貯蔵」 王燕氏（中国科学院岩土力学研究所、地質構造工学国家重点研究室 助教授） 「赤潮:太湖の藍藻類（シアノバクテリア）の繁殖による飲用水への影響」 朱広偉氏（中国科学院南京地理学・湖沼学研究所 教授） 「チベット高原のヒ素:チベット高原におけるヒ素汚染と健康影響」 李社紅氏（中国科学院地球化学研究所、環境地球化学国家重点研究室 教授） 「水俣湾に埋め立てられた水銀と水銀条約の課題」 中地重晴（熊本学園大学水俣学研究センター事務局長）

（様式 2）

法人番号	431002
プロジェクト番号	S1591010L

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

＜「選定時」に付された留意事項＞

該当なし

＜「選定時」に付された留意事項への対応＞

該当なし

＜「中間評価時」に付された留意事項＞

該当なし

＜「中間評価時」に付された留意事項への対応＞

該当なし

表1　寄贈資料

年度		資料名	点数
2015	1	関西訴訟旧蔵資料	189+段ボール3
	2	井上英次熊本県市議資料	30
	3	田上誠熊本学園大学職員資料	6
	4	新日窒労組旧蔵資料　追加（簿冊）	3
	5	馬場昇旧蔵資料	段ボール46
	6	水俣農作業道具現物資料	2
	7	名古屋告発する会旧蔵資料	段ボール4
2016	8	週刊金曜日	段ボール20
	9	熊本市在住1975年生まれ毛髪現物資料　18年間分	90
	10	堀田宣之旧蔵資料	段ボール15
	11	新日窒労組旧蔵資料　追加（現物）	2
	12	新日窒労組旧蔵資料　追加（現物）	1
	13	書籍	1
	14	篠倉満熊大法学部教授旧蔵資料	18
	15	飯尾豊旧蔵資料	段ボール8
	16	熊本県高等学校教職員組合旧蔵資料	段ボール150
	17	新日窒労組旧蔵資料　追加（写真）	11
2017	18	新日窒労組旧蔵資料　追加（現物・ビデオ）	6
	19	新日窒労組旧蔵資料　追加（現物）	10
	20	土呂久調査資料	31
	21	書籍	22
	22	原田正純映像資料	1
	23	新日窒労組旧蔵資料　追加（簿冊）	1
	24	水俣戦友会等資料	5
	25	野田工場退職者旧蔵資料　（現物・写真・8mm）	118
2018	26	野田工場退職者旧蔵資料　（簿冊・現物）	27
	27	深井純一旧蔵資料	段ボール86
	28	新日窒労組旧蔵資料　追加（現物）	1
	29	伊藤蓮雄旧蔵資料（フィルム）	3
	30	野田工場退職者旧蔵資料　（簿冊）	1
	31	新日窒労組旧蔵資料　追加（ビデオ）	2
	32	石井雅臣収集資料	2
	33	石田博文収集資料　追加（現物）	4
	34	福島大学未来うつくしまセンター機関紙	2
2019	35	水俣湾関連資料	15
	36	高峰武収集資料（第3水俣病関連）	4
	37	石田博文収集資料　追加（簿冊）	6
	38	堀田宣之旧蔵資料　追加	段ボール4
	39	興南小学校資料	1
	40	石田博文収集資料　追加（写真）	123
	41	砂田明旧蔵資料	2

表2　熊本学園大学水俣学研究センター所蔵資料データベース一覧（2015-2019年度）

		メタデータ 形態分類別																	画像・音声データ	
資料名	公開年度	A.簿冊	B.書籍	C.パンフ	D.一紙	細目録	さいれん細目録	E.写真	G.現物	A.冊子・書籍	B.パンフ	C.一紙	D.地図	E.物品	F.写真ネガ	G.写真紙焼	H.カセットテープ	I.ビデオテープ	画像ファイル（資料点数）	音声ファイル数（資料点数）
新日本窒素労働組合旧蔵資料	2015							38,763											3,255	
	2016					5,044	431	37											7,129	
	2017																		6,859	
	2018					3,409	698	3											3,946	
	2019																		6,986	
最首悟旧蔵資料	2015																		24	
松本勉旧蔵資料	2017									15	3	39	157	16			507			3
	2018																173		102	15
	2019																		224	15
鰐淵健之旧蔵資料	2016									51	17	60							128	
馬場昇旧蔵資料	2017									97	33	600								
堀田宣之旧蔵資料	2017									523	44	69								
水俣教組旧蔵資料	2018									959	365	651	2							
名古屋水俣病を告発する会旧蔵資料	2019									275	78	269		1		1				
計		0	0	0	0	8,453	1,129	38,803	0	1,920	540	1,688	159	17	0	1	680	0	28,653	33

表3　資料閲覧来館者数一覧

	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
水俣学研究センター（熊本市）	1	5	1	2	5
水俣学現地研究センター（水俣市）	10	25	15	29	15
総計	11	30	16	31	20

2015/04/16　木曜日
熊本日日新聞　朝刊
19面　1段

熊日の本　水俣学ブックレット13「いのちをつなぐ～水俣、福島、東北～」

水俣病事件をさまざまな視点から再検証し、現代社会が抱える問題に迫る「熊本学園大学・水俣学ブックレット」シリーズの最新作「いのちをつなぐ～水俣、福島、東北～」を発売中です。

2011年3月11日の東日本大震災とそれに続く福島原発事故。こうした震災、津波、原発事故を私たちはどう考えていくのか。そのことの意味を考え、「いのちをつなぐ」と表現し、考察した1冊。熊本学園大学で開かれた福祉環境学フォーラムの内容に、水俣と福島の現状をテーマに「水俣学からの問題提起」などの書き下ろしを加えています。

水俣学ブックレット13
「いのちをつなぐ～水俣、福島、東北～」
好評発売中

お求めは書店、熊日販売センター、熊日支社・総支局、または熊日出版☎096（361）3274へ。

【企画】熊本学園大学水俣学研究センター【編著者】花田昌宣、中地重晴（ともに熊本学園大社会福祉学部教授）【体裁】A5判、110ページ【定価】本体価格800円＋税【発行】熊本日日新聞社【制作・発売】熊日出版



2015/04/26　　日曜日

熊本日日新聞　　朝刊

8面　2　段

読書　熊本のほん　「いのちをつなぐ～水俣、福島、東北」　花田昌宣　中地重晴編著

熊本のほん

「いのちをつなぐ ～水俣、福島、東北」

花田昌宣、中地重晴編著

「熊本学園大学・水俣学ブックレット」の13冊目。2012年に同大で開かれた福祉環境学フォーラム「いのちをつなぐ、東北、熊本―3・11以降の福祉と環境を考える」の記録を再編集した。同大の花田昌宣水俣学研究センター長の論考「水俣病の経験と福島の被害―水俣学からの問題提起」なども収録。

震災・原発事故後の東京電力・政府の対応は、事実の隠蔽と情報隠し、加害企業の責任回避、加害企業救済など、水俣病事件史のフラッシュバックのようだと指摘。一方で、安易に水俣病被害と重ね合わせることは、国家ぐるみで推進してきた原発開発の帰結という福島原発事故の本質を見えなくする恐れがあるとも戒めている。

（熊本日日新聞社・864円）



2015/07/06　　月曜日
熊本日日新聞　　朝刊
17面　2　段

「水俣学」講義　ネットで生中継
熊本学園大　きょうから3週連続
配信会社と連携

「水俣学」講義 ネットで生中継

熊本学園大 きょうから3週連続

熊本学園大は水俣病事件をさまざまな立場で捉える「水俣学」を学外に発信しようと、6日から3週連続で講義をインターネットで生中継する。

同大は全国の大学で唯一、水俣病をテーマにした水俣学研究センターを設置。独自の研究実績に関心を持ってもらおうと、動画学習サービス「schoo（スクー）」の運営会社と連携して初めて実施する。

講義は6、13、20日の計3回で、午後7時から1時間。同センターの教授3人が水俣病の歴史や課題、世界的な水銀汚染問題などを解説する。スクーのホームページで無料聴講でき、ネットを通じ、その場で質問や意見のやりとりができる。後日、録画も見られる。

6日はセンター長の花田昌宣教授が「終わりなき水俣病の60年」と題して、被害拡大の経緯や水俣病と向き合って生きる患者の暮らしぶりなどを伝える。花田教授は「水俣病問題を広く共有できる機会としたい」と話す。

配信会社と連携

水俣学は、多くの患者を診察した故原田正純医師らが提唱。2002年度から同大社会福祉学部で開講している。（鎌倉尊信）

2015/09/05　　土曜日

熊本日日新聞　　朝刊

28面　8　段

水俣病未解決の背景学ぶ　熊本学園大　研究者対象セミナー

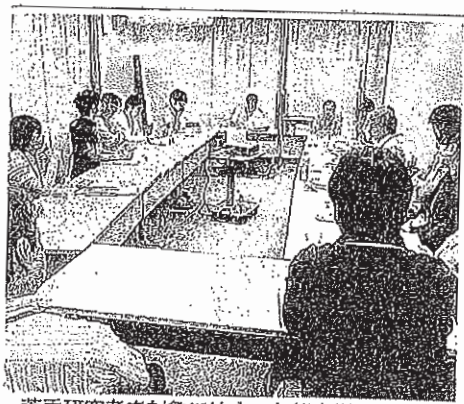
水俣病未解決の背景学ぶ

熊本学園大 研究者対象セミナー

水俣病研究を担う若手を対象にした熊本学園大水俣学研究センターのセミナーが4日、水俣市で始まった。水俣病の公式確認から来年で60年。センター長の花田昌宣教授は、問題が解決しない理由の一つに行政の姿勢を挙げ、「住民が訴える被害を最初から理由もなく疑ってきた」と批判した。

花田教授は従来の補償・救済制度について「差別を恐れる人がまだいる。本人申請が前提の制度を見直すべきだ」と指摘。「国や県が住民健康調査に乗り出しても被害の全容解明には時間がかかる」として、不知火海沿岸の全住民を対象に、医療費を無償化する手帳を配布する救済策の私案を紹介した。

和光大現代人間学部2年の山崎遼太郎さん(20)は「水俣病問題の根深さを感じた。差別の問題を心理学的な視点から研究したい」と話した。セミナーは6日まで。東京や新潟などから約20人が参加している。(隅川俊彦)



若手研究者を対象に始まった熊本学園大水俣学研究センターのセミナー＝4日、水俣市

統一していなかったため、同じ人のデータでも、特定健診とレセプトでIDが異なるケースが多かった。

厚労省でデータの整理を終えている11～12年度の状況を検査院が調べたところ、健診データ計約4800万件のうち、レセプトと照合して同一人物と確認できたのは22%だった。

水俣病特措法訴訟

「水銀被害の広がり明らか」

熊本地裁 原告側

水俣病特別措置法の未認定患者救済から外れたのは不当として、水俣病不知火患者会の会員が国と県、原因企業チッソに1人当たり450万円の損害賠償を求めた訴訟の口頭弁論が4日、熊本地裁であり、原告側は救済対象地域の線引きをあらためて批判した。

県が公表した救済策の地域別集計を受け、原告側は「対象地域外の3761人が救済された。水銀被害の広がりを示す証拠だ」と主張。国・県側は原告側が主張する遅発性水俣病について「根拠が乏しい仮説に過ぎない」などと反論した。

園田昭人・原告弁護団長は弁論後、蒲島郁夫知事が「(地域外で

2015/09/25　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

26面　7　段

「水俣学」現場に学ぶ　熊本学園大　本年度講義始まる



水俣病事件の概要と水俣学の取り組みについて話す熊本学園大水俣学研究センター長の花田昌宣教授＝24日、熊本市中央区

「水俣学」現場に学ぶ

熊本学園大　本年度講義始まる

水俣病事件を多様な視点や研究領域から捉える本年度の「水俣学講義」が24日、熊本市の熊本学園大で始まった。来年1月までの計15回、患者や家族、研究者らが水俣病の体験や患者認定制度の不合理さ、地域の水銀汚染などを語る。

現場に学びつつ学問の枠を超えて水俣病事件を研究しようと故原田正純・同大教授らが提唱し、社会福祉学部の講義として毎年度開いており14回目。初回のこの日は同大水俣学研究センター長の花田昌宣教授が水俣病事件の概要やセンターの取り組みなどを話した。

花田教授は水俣学を「地域に根ざして住民と学び、その成果を地域に返す新しい学問のモデル」と説明。海外の公害問題にも携わっている現状を話した。

「公害の原点」とされ、来年で公式確認60年を迎える水俣病については「今なお多くの課題が残り、過去の問題ではない」と指摘。その根幹にあるのが認定制度と正当な補償を求めて苦悩する被害者で、行政や原因企業の責任が問われているとした。

講義は毎週木曜午後1時から。自由に聴講でき、インターネットでも中継する。

（鎌倉尊信）

2015/10/03　　土曜日

熊本日日新聞　　朝刊

26面　9　段

設定制度は「救済の壁」　学園大で水俣学講義

認定制度は「救済の壁」

学園大で水俣学講義



水俣病の認定制度について語る熊本学園大水俣学研究センターの井上ゆかり研究助手＝1日、熊本市

熊本市の熊本学園大で開講中の水俣学講義は1日、同大水俣学研究センターの井上ゆかり研究助手が公害健康被害補償法に基づく水俣病の認定制度を取り上げ、「被害者救済を阻む権力の壁そのものだ」と語った。

井上研究助手は、被害者側が門戸の狭さを指摘している国の認定基準などを解説。本人が申請しないと認定手続きが始まらない仕組みにも触れ、「差別を恐れて申請できない人も多い。認定されるべき人が放置されている」と批判した。

「公式確認から来年で60年だが、どんな病気かをめぐって今なお争いがある。被害がどのような年代、地域に広がったのかも分かっていない」とも指摘。水俣病が過去の問題ではないことを強調した。（鎌倉尊信）

環境問題テーマ　学会が支部大会　きょう水俣市

日本コミュニケーション学会九州支部は3日、「環境問題とコミュニケーション」をテーマに、水俣市で支部大会を開く。午後1時からは同市公民館で、水俣病事件に詳しい「エコネットみなまた」の山下善寛代表理事が「水俣の環境問題と健康被害」と題して基調講演する。

山下さんは1956年にチッソ水俣工場に入社。労組委員長などを務める傍ら、患者支援に長年携わってきた。講演では、水俣病発生当時の工場の実態や労働者の健康被害などを語る。入場無料。大会実行委☎0800(6747)1416。

2015/10/11　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
14面　4　段

産業遺産の価値知って　学園大公開
講座　幸田学長が講演　水俣市



公開講座で九州・熊本の産業遺産について講演する熊本学園大の幸田克二学長＝水俣市

産業遺産の価値知って

学園大公開講座　幸田学長が講演　水俣市

熊本学園大水俣学研究センターの公開講座「九州・熊本の産業遺産と水俣」が6日夜、水俣市公民館で始まり、幸田克二学長が「九州・熊本の産業遺産とその意味」と題し講演した。

幸田学長は、同市古賀町に残る旧日本窒素肥料株式会社水俣工場（1909年完成、現江川水俣工場）を「日本の近代化に貢献した光の部分と、水俣病という公害史の負の部分を含める、歴史的価値は高い」と評価した。

一方、価値がありながら保存運動がうまくいかなかった例は多いとし、世界遺産になった万田坑（荒尾市）や三角西港（宇城市）を成功例に挙げ、「市民が遺産の価値に気づき、保存に向けた組織づくりを進めることが大切だ」と指摘した。

（隈川後彦）

同講座は27日まで毎週火曜日午後6時半から同公民館である。参加無料。最終日の11月3日は、午後1時から旧日本窒素肥料株式会社水俣工場の見学会を開く。水俣学現地研究センター☎0966-50-3300（8:30～17:30）

2015/10/16　　金曜日
熊本日日新聞　　朝刊
32面　8　段

患者支援　実情重視で　水俣学研究者　学園大で講義

患者支援 実情重視で

水俣学研究者 学園大で講義



胎児性・小児性水俣病患者の現状について話す田尻雅美さん＝15日、熊本市中央区の熊本学園大

熊本学園大（熊本市中央区）で開講中の水俣学講義で15日、学園大水俣学研究センター研究助手の田尻雅美さん(47)が講師を務めた。高齢化する胎児性・小児性水俣病患者の実情に則した支援制度の必要性を説いた。

患者の介護問題に関し、田尻さんは1956年の公式確認のきっかけとなった小児性患者の田中実子さん(62)の生活を報告。自宅でヘルパーによる24時間介護が必要だが、原因企業チッソとの補償協定だけでは十分でなく、障害者総合支援法による介護を受けているという。

田尻さんは、協定の「実情に即した具体的方策を誠意をもって早急に講ずる」との前文を示し、「加害者であるチッソや国、県は、介護家族の高齢化などで多くの患者の生活が破綻していることを踏まえた支援をすべきだ」と述べた。（西島宏美）

天草エアライン 19日に運航再開

天草市五和町の天草空港に着陸した天草エアライン機の右主翼エンジンから白煙が上がったトラブルで、天草エアは15日、予備エンジンに交換後の19日に

2015/10/23　　金曜日
熊本日日新聞　　朝刊
27面　1　段

水俣学　差別体験や苦悩語る　学園大　公式確認契機の患者家族

水俣学　差別体験や苦悩語る

学園大 公式確認契機の患者家族



妹田中実子さんの近況について語る下田綾子さん（中央）。右は夫良雄さん＝熊本市中央区

水俣病公式確認から来年5月で60年。確認のきっかけとなった患者田中実子さん(62)＝水俣市＝を自宅で介護する姉下田綾子さん(71)が22日、熊本市の熊本学園大で開講中の水俣学講義の講師を務め、家族の思いと背負い続けてきた苦悩を打ち明けた。

下田さんがこれまで公の場で話す機会はほとんどなかった。水俣病研究の第一人者だった故原田正純医師は2012年6月に亡くなる前、「社会はもっと実子さんに目を向けなければならない」と話したことが背中を押したという。

水俣病になった妹2人の看病に忙しい両親に代わり、長姉の下田さんが家事を担った。伝染病でもないのに自宅周辺を消毒された差別体験などを挙げ、「残されたきょうだいは周りの冷たい視線に耐え、猫の子のように肩を寄せ合って暮らした」と振り返った。

下田さんの夫良雄さん(67)は、一生をかけて田中さんを世話する覚悟で綾子さんとの結婚を決めた経緯を話し、「義理の妹の世話は苦痛ではない」と語った。学生には「いろんな病気、障害の人がいるが、決して差別だけはしないでほしい」と訴えた。（石貫謹也）

2015/11/13　　金曜日

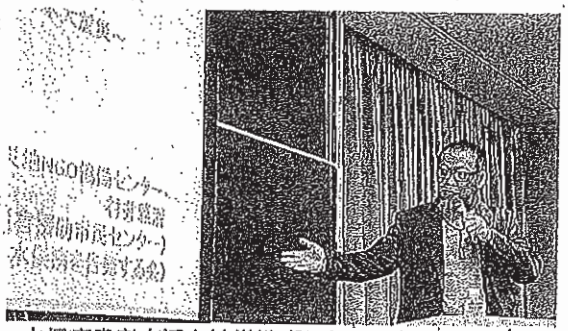
熊本日日新聞　　朝刊

26面　10段

水俣学　患者、被災者支援　思い語る　学園大　NGO村井さん講義

水俣学　患者、被災者支援 思い語る

学園大ＮＧＯ村井さん講義



水俣病患者支援と被災地ボランティアへの思いを語る村井雅清さん＝12日、熊本市中央区

熊本市中央区の熊本学園大で開講中の水俣学講義は12日、被災地ＮＧＯ協働センター（神戸市）の村井雅清さん(65)が、水俣病患者支援の経験と被災地でのボランティア活動に共通する思いを語った。

村井さんは胎児性患者の故上村智子さんとの出会いを振り返り、「どうして日本の社会で、こんな理不尽なことが起こるのかと思った」と回顧。水俣病問題が、阪神・淡路大震災後に取り組む被災者支援の原点になったと語った。

「経済成長に突き進み、命の尊さを無視した戦後の社会構造が水俣病を起こした」と指摘。東京電力福島第１原発の廃炉に向け、建屋周辺の地下水を海に放出する汚染水低減策について「東電や国の論理を通すため、またも海や漁民を犠牲にしている」と批判した。

被災者に足湯を提供し、体験を語ってもらう活動を「心の自立の第一歩」と表現。公式確認から来年で60年を迎える水俣病は「患者ら当事者が語り続けているからこそ国内外で注目される」と話した。（鎌倉尊信）

2015/11/20　金曜日
熊本日日新聞　朝刊
30面　7　段

「患者の温かさに触れた」　水俣学講義　映画製作の山上さん

「患者の温かさに触れた」

水俣学講義 映画製作の山上さん



自身の人生に影響を与えた水俣病との出合いを話す山上徹二郎さん＝19日、熊本市中央区

熊本市の熊本学園大で開講中の水俣学講義は19日、同市出身の映画プロデューサー、山上徹二郎さん(61)＝東京都＝が「高校時代に水俣病と出合い、その後の自身の人生に大きく影響を与えた」と語った。

山上さんは済々黌高在学中、水俣病1次訴訟の集会に参加。上京して患者らと一緒に1年8カ月、チッソ東京本社前で座り込んだ。「農業や漁業を手伝う中で患者の温かさに触れ元気をもらった。生活を支えているつもりだったが、自分が学ぶことの方が多かった」と振り返った。

最新作のドキュメンタリー映画「沖縄 うりずんの雨」の一部も放映し、戦時中の読谷村での集団自決や戦後は米兵の性暴力の実態を説明。米軍普天間飛行場の辺野古沿岸移設にも言及し、「自分の問題と考え、沖縄で起きていることを知ってほしい」と呼び掛けた。

（鎌倉尊信）

2015/11/27　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

27面　9　段

自然資本　住民が活用を水俣学　宮北教授が講義　学園大

自然資本 住民が活用を

水俣学 宮北教授が講義 学園大



「水俣病問題には地方に犠牲を押し付ける構図があった」と語る宮北隆志教授＝26日、熊本市中央区

熊本市中央区の熊本学園大で開講中の水俣学講義は26日、学園大水俣学研究センターの宮北隆志教授が水俣病発生当初の行政やチッソの対応について、「人命より経済を優先し、中央が地方に犠牲を押し付ける構図があった」などと語った。

宮北教授は1949～57年ごろ、水俣市で魚介類やネコに現れた異変を軽視し、公式確認翌年の57年に食品衛生法による水俣湾の漁獲禁止を見送ったことなどを批判。「健康被害が現れてからでは遅い。一人一人の命の尊厳が保たれる社会を実現しなければならない」と訴えた。

中央主導の開発や工業化が地域の発展を阻害する事例として、タイやミャンマーの現状を紹介。「水俣病事件や原発事故に象徴される社会経済システムと決別し、海や川など自然資本は地域住民が活用を決める仕組みを目指すべきだ」と強調した。（鎌倉尊信）

2015/12/04　　金曜日
熊本日日新聞　　朝刊
28面　12段

埋め立て地の水銀除去訴え　水俣学講義

くまで立て替え払い」とJAに伝えた上で全額を払ったという。（中村勝洋）

埋め立て地の水銀除去訴え

水俣学講義

熊本市中央区の熊本学園大で開講中の水俣学講義は3日、学園大水俣学研究センターの中地重晴教授が登壇した。水銀による健康被害防止を目的とする「水銀に関する水俣条約」を踏まえ、水俣湾埋め立て地に残る水銀の除去の必要性を訴えた。

埋め立て地は、水俣病の原因企業チッソが排出した水銀を含む汚泥約151万立方㍍を封じ込めている。

中地教授は「水銀条約は汚染場所のリスク評価や修復などを盛り込んでいる。まずは水銀や埋め立て地護岸の現状を調べるべきだ」と主張。「護岸の補修などを続けて水銀をそのまま残すより、除去など抜本的対策の議論が必要な時期だ。次世代にツケを回してはいけない」と述べた。（鎌倉尊信）

2015/12/11　　金曜日
熊本日日新聞　　朝刊
32面　10段

公害の共通課題指摘　水俣学　菅井
国学院大教授が講義　学園大

公害の共通課題指摘

水俣学 菅井国学院大教授が講義　学園大



公害の歴史を振り返り、共通する課題を指摘した国学院大の菅井益郎教授＝熊本市中央区

熊本学園大（熊本市中央区）で開かれている水俣学講義は10日、国学院大（東京）の菅井益郎教授(69)＝日本経済史＝が公害の歴史を振り返り、足尾鉱毒事件と水俣病、福島原発事故に共通する課題を指摘した。

菅井教授は、足尾鉱毒事件解決に奔走した田中正造の「デンキ開ケテ、世間暗夜となれり」という言葉を紹介。「福島原発事故の直後に思い浮かんだ。正造は100年後を見通していた」と話し、原発の再稼働を批判した。

公害の共通課題としては、過ちを認めない官僚や企業、それらを擁護する科学者の存在を挙げ、「被害が発生するまで対策を取らなかった」と指摘した。

原発事故の補償について、門戸が狭い水俣病患者の認定基準を例に挙げ、「症状や居住区域などを全て限定的にすると、福島でも補償されない人が出てくる」と警告した。（石貫謹也）

2015/12/18　　金曜日
熊本日日新聞　　朝刊
28面　7　段

正しい情報　世界発信を　水俣学
大津神戸大名誉教授が講義　学園大

正しい情報 世界発信を

水俣学 大津神戸大名誉教授が講義 学園大



「世界には水俣病を間違って捉えている人がいる」と話した大津定美名誉教授
＝17日、熊本市中央区

熊本学園大（熊本市中央区大江）が開講する水俣学講義は17日、神戸大の大津定美名誉教授（77）＝国際経済学＝が登壇し、「世界から公害をなくすには水俣病を正しく知ってもらわないといけない」と話した。

大津さんは1969年に「水俣病を告発する会・京都」に加わり、水俣病訴訟の原告団を支援してきた。

イギリス留学などヨーロッパやアジアで経済を学び、多くの国の研究者と交流してきたが、「日本は戦後の経済成長でよく頑張ったと言われたが、水俣病のような犠牲の上に成り立っていると伝えてきた」と強調。

家族ぐるみの付き合いというミャンマーのアウン・サン・スー・チー氏でさえ「水俣病患者が金銭目的のみで裁判をしていると誤解していた」とし、「水俣病を正しく知ってもらう情報の発信が重要だ」などと述べた。（西島宏美）

優秀警察職員表彰
東署の田中警部補

九州管区局長賞詞

九州管区警察局は17日までに、2015年の優秀警察職員16人を表彰した。熊本県警は



田中寛二警部補

2016.1.8　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

26　面　8　段

「国との闘いの歴史」水俣学　熊本放送井上さん講義　学園大

「国との闘いの歴史」

水俣学 熊本放送井上さん講義 学園大



水俣学講義で話す熊本放送の井上佳子さん＝7日、熊本市中央区

熊本市中央区の熊本学園大で開かれている水俣学講義は7日、水俣病やハンセン病などを取材してきた熊本放送のチーフディレクター井上佳子さん(55)が講師で登壇し、「水俣病は国との闘いの歴史だった」などと話した。

井上さんは水俣病事件の中で国家を強く意識した出来事として、チッソ水俣工場の排水の放置や見舞金契約、2度の政治決着による事件の〝幕引き〟、水銀に関する研究の遅れなどを列挙。「日本は命を大切にしてこなかった」と訴えた。

その上で「自分がチッソの社員だったら」などと自問することの大切さも強調。現在、関心があるテーマとして2世代にわたって患者を支援している人を挙げ、「親の価値観をきちんと受け継いでいる。取材してみたい」と述べた。(石貫謹也)

2016.1.8　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

26　面　10段

◆あすから水俣病事件交流集会
9、10日、水俣市公民館

◈あすから水俣病研究交流集会

水俣病研究者らが一堂に集まる水俣病事件研究交流集会が９、10日、水俣市公民館で開かれる。今年は水俣病の公式確認から60年で、主催する熊本学園大水俣学研究センターは「課題が山積する現状を知ってほしい」と参加を呼び掛けている。９日は午後１時に始まり、戦前からチッソ水俣工場で働いた元労働者や1960年代の地域の様子を知る元教師らが証言。10日は午前10時から医学者の報告などがある。資料代千円。同センター☎096(364)8913。

2016.1.10　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
23　面　6　段

事件の記憶　後世に　50～60代　関係者、当時を証言

事件の記憶 後世に

50～60年代 関係者、当時を証言

水俣病研究者らが一堂に集まる水俣病事件研究交流集会が9日、水俣市公民館で始まった。今年は水俣病公式確認から60年となり、事件の記憶を後世に残そうと、1950年代～60年代の水俣を知る人が相次ぎ証言した。

水俣病は当初、伝染病のように扱われて差別を招いた。当時、市衛生課の職員だった渕上英明さん(84)＝同市＝は患者を伝染病患者の収容施設に移すなどした経緯を振り返り、「今考えると間違いだった」と話した。

原因企業チッソの労働者だった中村和博さん(92)＝同市＝は、チッソ内部にも水俣病になった人がいたことを報告。「加害企業にいたことが心苦しかった」と述べ、会場の患者に「ごめんなさい」と謝罪した。

自身を含めて家族4人が水俣病に襲われた坂本フジエさん(90)＝同市＝は「チッソの言うままに低額の見舞金契約を結ばされた」と強調。看護師として移動診療所の導入に尽力した堀田静穂さん(75)＝北九州市＝は患者を生活の現場で診る大切さを訴えた。

集会最終日の10日は医学者の報告などがある。資料代千円で誰でも参加できる。

（石貫謹也）



チッソの同僚が水俣病に襲われた状況を語る中村和博さん＝9日、水俣市

2016/01/23　土曜日
熊本日日新聞　朝刊
25　面　13段

水俣病60年　水銀汚染 繰り返さない　水俣市であすシンポ

水俣病の患者団体や市民団体など約20団体でつくる水俣病公式確認60年実行委員会（代表・上村好男水俣病互助会長）は24日、水俣市公民館で水俣病事件の問題点を問うシンポジウムを開く。無料。

3月まで月1回開く連続シンポジウムの第1弾。患者補償の基盤となった水俣病1次訴訟の原告だった上村会長と坂本フジエさんが「水俣病60年を ふりかえる」と題して話す。

水俣病60年

水銀汚染 繰り返さない

水俣市であすシンポ

中地重晴・熊本学園大教授（環境化学）が水銀ヘドロを閉じ込めた水俣湾埋め立て地の課題などを講演し、水銀分析の世界的権威の赤木洋勝・国際水銀ラボ所長らが「水俣病を繰り返さないために何が必要か」のテーマでパネル討論する。

実行委は、健康被害と環境汚染の全体像の解明、被害実態にあった補償制度の確立、水銀汚染の根絶などを目的に結成した。午後1時半開演。水俣ほたるの家☎0966（63）8779。

2016/02/03　水曜日
熊本日日新聞　朝刊
10　面　1　段

「水俣条約」締結を閣議決定　水銀削減 日本の役割重く　熊本学園大研究センター 中地教授「原点の地」と向き合え

水俣条約締結を閣議決定

政府は２日、「水銀に関する水俣条約」の締結を閣議決定した。2013年10月に水俣市と熊本市で開かれた外交会議で条約が採択されて２年余り。日本は23番目の締結国となる見通し。50カ国の締結を必要とする条約発効の見通しが立たない中、世界最悪のメチル水銀汚染となった水俣病は16年５月、公式確認60年を迎える。各地の水銀汚染を調査研究する熊本学園大の取り組みや、条約交渉に携わった環境省担当者へのインタビューなどを通じて、水銀削減に向けた課題を考える。【１面参照】

水銀削減 日本の役割重く

熊本学園大研究センター 中地教授「原点の地」と向き合え


水銀値を調べるため住民の毛髪を採取する熊本学園大などの調査団＝2014年、カナダ・ホワイトドッグ


中地重晴教授

水俣病研究者の故原田正純医師らが2005年4月に立ち上げた熊本学園大水俣学研究センター（熊本市中央区）は、開設から10年が経過した。この間、水俣病のような水銀被害を繰り返さないよう、海外での調査研究やフォーラムなどを開催。「水銀に関する水俣条約」の締結を閣議決定した日本について、同センターの中地重晴教授（環境化学）は「まだ果たすべき役割が残っている」と訴える。

バルブ工場から排出された水銀によって健康被害が生じたカナダ中部の先住民居留地は、原田医師らが1975年に初めて調査した。その後も同センターが住民検診や環境調査などを続けている。

同センターによると、工場の下流域に生息する川魚には、いまも高濃度の水銀が蓄積。排水は70年ごろには止まっており、大量の水銀が環境中に排出された後の回収の難しさが指摘されている。

砕いた鉱石から金を抽出する際に水銀を使う小規模金採掘は、多額の資金を要しないこともあって、アジアやアフリカなど世界各地に拡大している。同センターも関わったインドネシアのワークショップでは、無機水銀による中毒症状が住民に現れたとの報告があった。

アジアの各地では、ため池で食用の魚を飼育する例が少なくない。水銀が流れ込んで魚が有機化すれば、水俣病が発生する恐れがあり、魚の水銀濃度や住民の摂取量を調べることが急務だという。

条約発効には50カ国の締結が必要。国連環境計画（UNEP）は当初、採択から3年以内の発効を目指していたが、締結が広がらないまま既に2年が経過した。先進国が積極的に締結しないと途上国に対する説得力を欠くとして、同センターは経済協力開発機構（OECD）に加盟する約30カ国の動向に注目している。

日本政府は「この間、水俣病の教訓を生かす」として条約づくりを進めてきたが、同センターは残された課題として水銀製品の国内での製造・販売の禁止や水銀の回収・保管システムの確立などを挙げる。

水俣病を引き起こした水銀ヘドロも、水俣市の水俣湾埋め立て地に封じ込められたまま。水銀条約は、水銀によって「汚染された場所」の修復などを求めているが、日本政府は「法律で管理された場所」としており、埋め立て地を「汚染された場所」とみなしていない。

水俣病発生の原点である埋め立て地に手を付けない日本政府の対応に、国際NGOからは批判も出ているといい、中地教授は「現代の技術では土壌から水銀を分離できる。水銀フリー（不使用）を訴えるのなら、日本はまず足元の水銀汚染に向き合うべきだ」と強調する。

2016/03/13　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
3　面　1　段

水俣病60年　埋め立て地の水銀 回収を　患者ら　海の汚染テーマに議論

（第3種郵便物認可）

埋め立て地の水銀回収を

患者ら 海の汚染テーマに議論

水俣市

水俣病60年



水俣病公式確認60年実行委が開いたシンポジウムで海の汚染をテーマに議論するパネリスト＝水俣市

水俣病患者団体などでつくる水俣病公式確認60年実行委員会（代表・上村好男水俣病互助会長）は12日、水俣市のもやい館でシンポジウムを開き、水俣湾と不知火海の汚染と今後の課題などを議論した。熊本学園大の中地重晴教授（環境化学）が「水銀ヘドロが封じ込められた水俣湾埋め立て地は、護岸の更新ではなく中の水銀を回収し、別の場所で永久保管すべきだ」と主張。海底の泥や原因企業チッソの産業廃棄物が埋められた水俣市内の土壌も調査し、対策を講じるべきだと指摘した。

患者の上村代表（81）と坂本フジエさん（91）＝ともに水俣市＝は、家族が水俣病に奪われた体験を証言した。沿岸住民らの健康環境調査の実施などを求めて、国などに提出する共同要求書の内容も公表した。

実行委によるシンポジウムは2月に続き2回目。最終回の3回目は、3月27日午後1時半から水俣市公民館で開く。（隅川俊彦）

2016/04/15　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

23　　面　9　段

水俣学ブックレット14　九州・熊本の産業遺産と水俣　好評発売中

水俣病事件をさまざまな視点から再検証し、現代社会が抱える問題に迫る「熊本学園大学・水俣学ブックレット」シリーズの最新14作「九州・熊本の産業遺産と水俣」を好評発売中です。

昨年10－11月に水俣市で開催された4人の専門家による水俣学公開講座を採録。九州における産業遺産の現状とその活用状況をはじめ、水俣に残るチッソ旧工場の産業遺産としての価値なども探りました。

お求めは書店、熊日販売センター、熊日支社・総支局、または熊日出版☎096（361）3274へ。

水俣学ブックレット14
九州・熊本の産業遺産と水俣
好評発売中



熊日の本

【企画】熊本学園大学水俣学研究センター【編者】中地重晴、花田昌宣【体裁】A5判152ページ【定価】800円＋税【発行】熊本日日新聞社【制作・発売】熊日出版

2016/05/01　　日曜日

熊本日日新聞　　別刷

面　　段

特集　水俣病公式確認60年

未来へ貴重な財産に

知る・学ぶ　でおさらい

水俣病はなぜ起きたのですか。

水俣病は、工場が海に流したメチル水銀に汚染された魚介類を食べた人に発生しました。

水俣病はどんな病気ですか。

体内に取り込まれたメチル水銀は、脳や神経に蓄積し、感覚障害を起こします。その結果、歩くことができなくなったり、見える範囲が狭くなったりします。聞こえにくくなったり、言葉もはっきりしません。水俣病が見つかった当初は、症状の激しさのあまり亡くなる人もいました。胎盤はそれまで、胎児を守るとされていましたが、メチル水銀は通過させてしまいます。胎児性患者は、母親の体内で胎盤を通して感染し、生まれてきました。このように初めから被害にあって生まれてきた人たちのことを胎児性患者といいます。

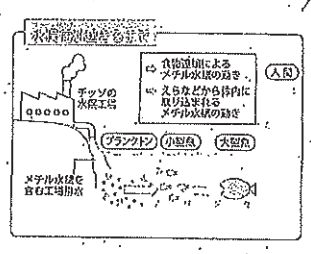
この60年間で何人が水俣病になったのですか。

ひとまとめに人数を言えないところがあります。水俣病の重症さが明らかになった患者は2千人余り。チッソが1800万～1600万円の一時金や年金を払うなどして「幕引き」を図ったとされていないものの、メチル水銀による健康被害が認められた人には、2000万円台の一時金を払った、病歴代を無料にしたりする救済策がありました。2回目は2万6千人余り、2回目は1万1千人余り、2回目は1万1千人余り上乗りしました。ほかにも手を挙げていない被害者が大勢いると考えられています。

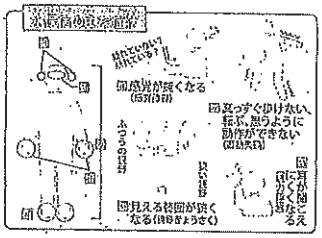
水俣病をめぐる、争いはまだ続いているのですか。

チッソが国や熊本県と争っているよう、水俣病と認めよう、認めるようにと訴訟や裁判に発展しています。2人に1人は2千人余りに上っています。認定や救済を求めて、熊本や福岡、大阪、東京の地方裁判所に提訴しました。水俣病の患者認定を巡っては、最高裁が10年に、国や県の賠償責任を認めました。水俣病の問題が解決したと言えるためには、水俣病の全容解明や、チッソに求めている被害者への謝罪をつかむための動きを求める声や、生活再建を子どもに託したチッソが抱えてなくなることに危惧する声もあります。

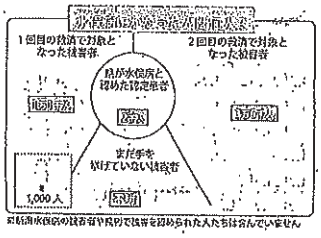
水俣病が起きるまで



水俣病の症状

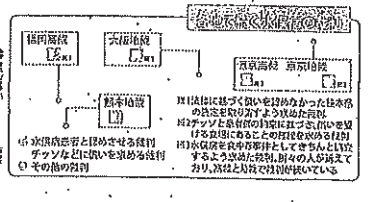


水俣病の患者認定



※熊本県水俣病の被害者や裁判で賠償を認められた人たちは含んでいません

水俣病をめぐる争いの経過



水俣病のことをもう少し知りたい、もっと勉強したい！―。そう考える小中学生に読んでもらいたい本を紹介します。

患者の悩みや勇気描く



作者は、医師として水俣病患者に寄り添い続け、2012年に亡くなった故田尻宗昭さん。おなかの赤でメチル水銀の猛威を史上で生まれた胎児性患者と接してきました。本には彼らが抱える悩みや、苦境を乗り越える勇気などが描かれています。（フレーベル館、税抜本体。県立図書館などで借りることができます）

水俣病発生前の古里の姿



作家、石牟礼道子さんの代表的な作品の一つです。石牟礼さんは水俣市に暮らす生家だったころに水俣病と出合い、患者や家族の声にずっと耳を傾け続けています。この本で石牟礼さんは、水俣病が起きる前の古里の姿を描きました。（講談社学術文庫、810円）

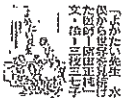
胎児性患者の貴重な写真も



故田尻宗昭さんは1980年という早い段階から、水俣病を記録し続けた写真写家です。水俣病が広く知られるきっかけになった患者や、家族に支えられながら21歳で亡くなった胎児性患者らの貴重な写真がたくさん載っています。（草土文化、1944円）

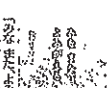
学ぶ・調べる　おすすめ入門書

原田医師の考え、行動知る



胎児性患者さんの生い立ちから亡くなるまでを描いた本です。作者は俳人の三枝三恵子さん。長い患者いの旅と厳しい支援を通し、原田さんがどんなことを考え、どんな行動を取って水俣病と向き合ったのか知ることができます。（学研プラス、1512円）

たくましく生きる魚たち



作者の吉田亮人さんは熊本市出身。幕に潜るダイビングをきっかけに水中写真を撮るようになり、水俣の海と出会いました。水俣の海に暮らす魚たちが、これまで見てきたことを教えてくれます。たくましく生き抜く魚たちの表情が印象的です。（新日本出版社、1620円）

豊かな不知火海の復活



芝居は作家の苔丸道子さんが手がけ、夫妻は故本後さん、故田さん夫婦が描きました。表紙は、故子供の頃のことを描いた「原風の海」でも有名です。豊かだった不知火海の自然が破壊され、魚介や人間の命が奪われる様子が描かれています。（小峰書店、1944円）

補助記事ベース　主な動き追う



熊本日日新聞が2001年から掲載した年表です。水俣病を引き起こしたチッソの工場設立から操業、水俣病の発見を経て解決、償いを求めて患者たちが起こした裁判など水俣病をめぐる主な動きが時代を追って掲載してあります。（熊本日日新聞社、823円）

※写真の写真のうち「水俣を語れない」「水俣病小史」は次ページ6段は熊本県内各地の本から掲載しました。

2016/05/01　　日曜日

熊本日日新聞　　別刷

面　　段

特集　水俣病公式確認60年



3.　平成28年(2016年)5月1日　日曜日　熊本日日新聞

もっと知ろう 水俣病 ㊦

水俣病をめぐる問題は、この60年でさんどん複雑になっていきました。これらの問題を考える上で知っておきたい基本的なことを、小・中学生にも分かるように伝えます。（水俣支局・松田佳也）

繰り返された失敗

ステージ1　救済対象外された患者

【患者は…】1956年5月、水俣湾の魚介類を食べた猫が狂い死にする奇病が発生しました。翌年には人にも同じ症状の患者が見つかり、原因は工場排水に含まれる有機水銀と突き止められました。

【もしも…】1959年6月、水俣湾の魚介類を食べた猫が狂い死にする奇病が発生しました。翌年には人にも同じ症状の患者が見つかり、原因は工場排水に含まれる有機水銀と突き止められました。

ステージ2　「良わしさは認定」

ステージ3　最高裁の判断

ステージ4　最高裁の判断

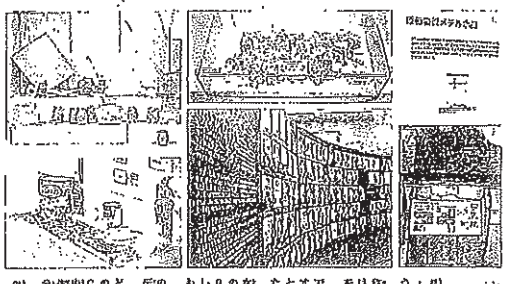
ステージ5　公にされなかった調査結果の報告

ステージ6　最高裁の判断

ステージ7　最高裁の判断

花田昌宏のまとめ　やるべきことやらなかった

暮らしや産業、科学 問い直す

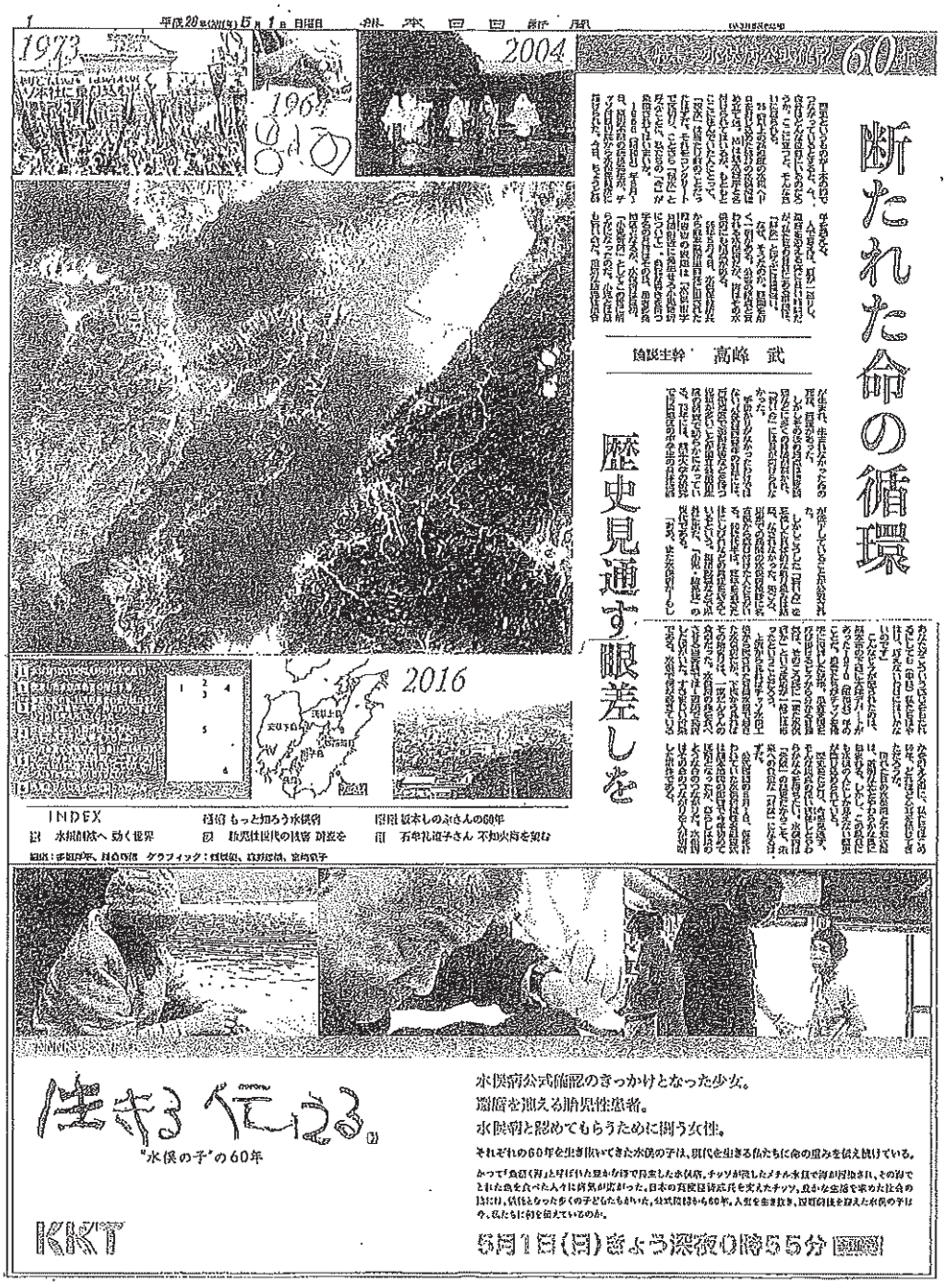


2016/05/01　　日曜日

熊本日日新聞　　別刷

面　　段

特集　水俣病公式確認60年



断たれた命の循環

歴史見通す眼差しを

論説主幹　高峰　武

INDEX

記　水俣病へ 動く世界　　社説　もっと知ろう水俣病　　環境　猿本しのぶさんの60年
図　胎児性世代の現在 対応を　　面　石牟礼道子さん 不知火海を望む

協力：熊日写真、共合写真　グラフィック：樋口浩、政野淳彦、宮崎智子

生きる 作る。

"水俣の子"の60年

KKT

水俣病公式確認のきっかけとなった少女。
難病を抱える胎児性患者。
水俣病と認めてもらうために闘う女性。

それぞれの60年を生き抜いてきた水俣の子は、現代を生きる私たちに命の重みを伝え続けている。

かつて「魚湧く海」と呼ばれた豊かな海で自生した水俣病。チッソが流したメチル水銀で海が汚染され、その海でとれた魚を食べた人々に病気が広がった。日本の高度経済成長を支えたチッソ、豊かな生活を求めた社会の陰に、犠牲となった多くの子どもたちがいた。公式確認から60年、人生を生き抜き、困難克服を訴えた水俣の子は今、私たちに何を伝えているのか。

5月1日(日)あさ深夜0時55分

2016/06/03　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

2　　面　7　段

射程　地震がもたらした新資料

2016.6.3

射程　地震がもたらした新資料

水俣病に関する新たな資料が見つかった。原因企業チッソ（当時は新日本窒素肥料）が1958年、原因究明を進める熊本大に対し、亡くなった患者を解剖した場合に脳や内臓を研究の材料として半分譲るよう求めていたという文書だ。

当時の西田栄一・水俣工場長が鰐淵健之・熊本大学長にあてたものだ。社名入りの上質な紙で、学長の決裁印も押されている。「個人的にひそかに打診した」という類いのものではなく、会社から大学への公式な依頼であることが見て取れる。

文書には、チッソ付属病院に入院中の女性患者が重症で病状の見通しも悪いとして、死亡後に「貴方で解剖される場合は奇病研究資料として弊方に是非その解剖資料（脳その他の内臓）の半分を分譲して戴きたく存じます」と記されている。

女性はその後亡くなり、熊本大が解剖した。遺体の一部をチッソ側に譲ったかどうかは不明だが、患者の死亡を待つかのような無神経な要求に驚かされる。

なぜ、チッソは患者の遺体の一部を手に入れたかったのか。

当時は熊本大の研究によってチッソの工場排水が原因と疑われていたが、チッソは否定していた。59年に熊本大が有機水銀説を発表すると、チッソは「使用しているのは無機水銀であり、化学的常識からみて疑問」とする見解を県議会に出すなど、化学業界の協力も得て「科学」の名の下に大々的な反論を展開していく。遺体の一部を熊大以外の研究機関に持ち込んで分析し、反論の材料を得ようとした可能性がある。

文書は、熊本学園大の書庫に眠っていた。熊本地震で散らかった書庫を片付けていた職員が、偶然見つけた。未曽有の災害が、思わぬ形で水俣病の歴史の一端に光を当てた。

公式確認から今年で60年を迎えた水俣病。だが、その闇はいまだに深いようだ。

（久間孝志）

2016/07/23　土曜日
熊本日日新聞　朝刊
28　面　6 段

水俣病60年　患者らの証言 集める
水俣学ブックレット15作目



新しい水俣学ブックレット「水俣病60年の歴史の証言と今日の課題」の表紙

水俣病60年

患者らの証言 集める

水俣学ブックレット15作目

熊本学園大水俣学研究センター（熊本市）の水俣学ブックレット15作目「水俣病60年の歴史の証言と今日の課題」が熊本日日新聞社から刊行された。水俣病が公式確認された60年前を知る患者らの証言などを集めた。

第１部は今年１月、水俣市で開かれた集会での発言を収録。長女を亡くすなど家族ぐるみで被害に遭った同市の患者坂本フジエさん(91)は「親として経験したつらさは誰にも分かってもらえない」と語っている。

水俣病の発生当初を知る元市職員や元チッソ労働者らも証言。第２部にまとめた研究者３人の論稿で同センターの花田昌宣教授は、被害者が自ら申請しないと救済されない制度の問題点を指摘した。864円。各書店で発売中。

（石貫謹也）

2016/09/04　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
6　面　6　段

読書　熊本のほん　「水俣病60年の歴史の証言と今日の課題」　花田昌宜、中地重晴編（熊本日日新聞社・864円）

熊本のほん

「水俣病60年の歴史の証言と今日の課題」
花田昌宜、中地重晴編

熊本学園大学・水俣学ブックレットの15冊目。水俣病公式発見から60年にあたり、患者たちの生と闘いの歴史が刻まれた時の流れの意味を考える。「水俣病の歴史の証言」「水俣病の今日の課題」の2部構成。



第1部は、今年1月の第11回水俣病事件研究交流集会での特別セッション「水俣病60年の歴史の証言」の講話記録。水俣病患者、水俣市職員、チッソの工場労働者、支援者などそれぞれ立場の異なる人々が語る。

第2部では、現在の水俣病と水俣をめぐる課題として、三つの論考「水俣病の補償・救済制度の限界」（田尻雅美）、「水俣市に残された水銀による環境汚染」（中地重晴）、「水俣病公式確認60年・何が必要か」（花田昌宜）を収録。水俣病がなぜ終わらないのか、何が必要なのか納得させられる。（熊本日日新聞社・864円）

2016/09/22　木曜日
熊本日日新聞　朝刊
28　面　1　段

「熊本地震と水俣」　27日から連続講座　水俣市で学園大

「熊本地震と水俣」27日から連続講座　水俣市で学園大

「熊本地震と水俣」を開く。10月25日まで毎週火曜日の全5回。

熊本学園大水俣学研究センターは27日から、水俣市公民館で災害時の障害者支援や避難所運営などをテーマにした公開講座「熊本地震と水俣」を開く。10月25日まで毎週火曜日の全5回。

熊本学園大（熊本市）が地震後に開設した避難所の運営に当たった花田昌宣・水俣学研究センター長や、日本の防災研究の第一人者である河田惠昭・関西大社会安全研究センター長らが講師を務める。

午後6時半～8時半で、無料。全回受講で修了証を発行する。水俣学現地研究センター☎0966（63）5030。

▽27日　和田要・学園大教授「益城町の被災状況」▽10月4日　天野和彦・福島大うつくしま、未来支援センター特任准教授「地域を創る」▽同11日　河田氏「熊本地震から復興と次の地震にどう備えるか」▽同18日　花田氏「困難を抱える被災者への支援体験」▽同25日　東俊裕・学園大教授「被災した障害者に対する支援とその取り組みから見えてくるもの」

2016/09/28　水曜日
熊本日日新聞　朝刊
27　面 7 段

水俣病60年　水俣学講義 あすから
来年1月まで、熊本学園大

水俣学講義 あすから

来年1月まで、熊本学園大

水俣病事件から多角的に学ぶ本年度の水俣学講義が29日、熊本市中央区大江の熊本学園大で始まる。一般を受け入れるほか、インターネットで講義を中継。学園大水俣学研究センター水俣病60年」は、幅広い聴講を呼び掛けている。

今年で15期目。水俣病公式確認60年の節目であることから、60年を振り返るような講義内容となっている。還暦を迎えた水俣市の胎児性患者、坂本しのぶさんらが週替わりで講師を務める。

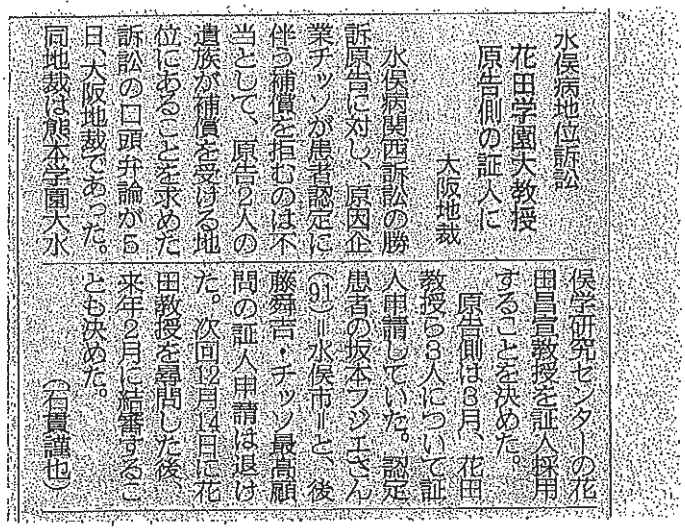
来年1月まで15回で、祝日と年末を除く毎週木曜の午後1時～2時半。ネット中継や講義日程は同センターのホームページで見ることができる。花田昌宣教授は「今なお課題が山積する現状を伝える機会にしたい」と話している。同センター☎096（364）8913。（石貝謹也）

2016/10/6　　木曜日

熊本日日新聞　　朝刊

26　面　5　段

水俣病地位訴訟　花田学園大教授原告側の証人に　大阪地裁



水俣病地位訴訟
花田学園大教授
原告側の証人に
大阪地裁

水俣病関西訴訟の勝訴原告に対し、原因企業チッソが患者認定に伴う補償を拒むのは不当として、原告2人の遺族が補償を受ける地位にあることを求めた訴訟の口頭弁論が5日、大阪地裁であった。同地裁は熊本学園大水俣学研究センターの花田昌宣教授を証人採用することを決めた。

原告側は8月、花田教授ら3人について証人申請していた。認定患者の坂本フジエさん（91）＝水俣市＝と、後藤舜吉・チッソ最高顧問の証人申請は退けた。次回12月14日に花田教授を尋問した後、来年2月に結審することも決めた。（石貫謙也）

2016/10/28　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

1　面　1　段

水俣病60年 第4部　見えぬ全容 胎児性世代の被害は今①　自己批判した原田医師　患者「限定的に捉えた」

1　3版　平成28年(2016年)10月28日　金曜日　熊本日日

患者「限定的に捉えた」

見えぬ全容

胎児性世代の被害は今 ①

60年前、水俣病は「小児奇病」として県衛生部に届けられた。メチル水銀の健康被害がいち早く顕在化したのは、子どもたちだったからだ。しかし、近年になって「社会が認識してきた子どもの被害はごく一部の重症者に限られ、多くの被害が見過ごされてきた」という声が強まっている。

自己批判した原田医師



自分が水俣病なのかどうか検診を受けにきた女性の神経症状を調べる晩年の原田正純医師＝2009年、水俣市

母親の胎内で、毒物のメチル水銀を浴びた胎児性水俣病患者。その存在を明らかにしたのは、2012年に77歳で亡くなった原田正純医師だった。「胎盤は毒物を通さない」というのが医学界の常識だった時代。1964年に原田医師が発表した論文は、胎児性水俣病の詳しい臨床報告としては世界初で、翌年に日本精神神経学会賞を受賞した。

ところが、原田医師は09年、復刻させた論文に加えた解説で「被害を限定的に捉えていた」と自己批判した。患者の発生を時間的・地理的に限定したことや、症状が重い脳性まひ型に限定したことを過ちと断言。「重症者の底辺にいる軽症者に思いを巡らすべきだった」と後悔の言葉を連ねた。

実際、行政が水俣病と認めた認定患者のうち胎児性をはじめとする若い世代は少ない。

県は若い世代の患者認定を審査する場合、胎児性も含めた「小児水俣病の判断条件」を加味する。対象となる53年以降の出生者は、県がこれまで認定した患者1789人中、わずか70人しかいない。熊本学園大水俣学研究センターが所蔵する90年代半ばの資料でも、熊本県と鹿児島県が認定した患者計約2200人のうち、戦後生まれは150人に満たない。

「政府が68年に公害認定する前、胎児性や小児性の患者は半数近かった」。原因企業内から患者を支えたチッソ水俣工場第一組合の元委員長で、水俣病研究を続ける岡本達明さん(61)＝東京都清瀬市＝は現状と比べ、「重症者の裾野に広がる被害を誰もが見過ごしてきた」と断える。

原田医師は晩年、自らに課した宿題を解くかのように、裾野の被害解明に取り組んだ。

09年には、反省を踏まえた新たな論文を発表し「取り残された胎児性世代」の「見えがたい症状」の実態解明が重要だと強調。100例を目標に胎児性世代の臨床例を積み重ねる研究も進めたが、半分近くに達したところで病に倒れた。

「胎児性の研究を進めようにも、先生を取り巻く環境がなかなかそうさせてくれなかった」。熊本学園大水俣学研究センター長を務める花田昌宣教授(64)は、原田医師の研究者人生を振り返る。

水俣病をめぐる一連の裁判では、医学面から患者を支援。三池炭鉱炭じん爆発による一酸化炭素(CO)中毒やカネミ油症のほか、海外の水銀汚染の被害者からも頼りにされ、対応に追われた。さらに、患者認定をめぐる行政との争いは後年まで続いた。

「認定問題にあれほど時間を割かれずに済んでいたら、胎児性世代の被害解明にもっと没頭できたかもしれない」。花田教授はそう考えている。

(石貫譲也)

水俣病60年　第4部　2016.10.28

2016/12/09　金曜日
熊本日日新聞　朝刊
28　面　9　段

水俣病60年　小児性患者 半生語る
水俣市・岩本さん　学園大で講義

小児性患者 半生語る

水俣市・岩本さん 学園大で講義

水俣病60年



熊本学園大の水俣学講義で差別を受けた経験を話す小児性水俣病患者の岩本昭則さん（右）と妻の敬子さん＝8日、熊本市

熊本学園大（熊本市中央区）で開かれている水俣学講義で8日、水俣病1次訴訟原告で患者の岩本昭則さん（66）＝水俣市＝が、妻の敬子さん（66）とともに差別や偏見に翻弄された半生を語った。

昭則さんは患者多発地帯の漁師一家の出身で、水俣病が公式確認された1956年に発症した小児性患者。入院先の病院から通学した小学生時代について「級友は『奇病だから寄ってくるな』といじめた。私は学校でも、病院でも独りぼっちだった」と振り返った。

就職後も、水俣病と知られるたびに居づらくなり、何度も転職せざるを得なかったという。

患者ということを隠してきた岩本さんは8月、患者団体の水俣病互助会の総会で、初めてつらい経験を吐露。以来、95年の政府解決策の対象となった敬子さんらの支えで、講演などを続けている。（隈川俊彦）

2017.01.09　土曜日
熊本日日新聞　朝刊
23　面　1　段

水俣病60年
水銀量調査等報告　研究交流集会が閉幕　水俣市

水銀量調査など報告

水俣病60年　研究交流集会が閉幕　水俣市

水俣市公民館で開かれていた水俣病事件研究交流集会は最終日の8日、水俣市民の普段の食事に含まれる水銀量調査の中間報告などがあった。

熊本学園大水俣学研究センターの中地重晴教授（環境化学）らは2016年3月、水俣市の成人男女5人から3日間・計9食分の食事を提供してもらい、水銀量を測った。

胎児を保護する目安とされている1日の水銀の摂取量は、体重1㌔当たり0・23㍉㌘。測定の結果、5人中3人の食事が目安を上回り、最大で0・26㍉㌘だった。5人は主に地元産の魚介類を食べていたという。

中地教授は「ただちに健康被害と結び付けることはできない」と強調した上で、「水俣湾の魚の水銀濃度は現在も高い。16年11月に実施した調査の分析も踏まえ、関連を詳しく調べたい」と語った。

医学を巡る議論では「毛髪水銀値が50㎰以上でないと水俣病を発症しない」という国の主張に、「50㎰未満の認定患者もいる」「毛髪水銀は過去の暴露を示すものではない」との批判が相次いだ。（石貫謹也）



水俣病を巡る医学の課題について会場からの質問に答える医師ら＝8日、水俣市

2017.01.24　　火曜日
熊本日日新聞　　朝刊
22　面　1　段

水俣病60年　「本年度の水俣学講義」終了　熊本学園大

患者理解する医師少ない　差別の視点で見直しを

本年度の「水俣学講義」終了　熊本学園大

患者理解する医師少ない
差別の視点で捉え直しを
講師ら訴え



水俣学講義で将来の不安などを訴える坂本しのぶさん(左)。隣は支援者の谷由布さん＝2016年10月、熊本市中央区

水俣病60年

水俣病事件から多角的に学ぶ熊本学園大の「水俣学講義」は2016年度、予定されていた全15回の講義が終了した。学内、学外の講師はそれぞれの立場から、公式確認から60年が経過しても解決しない水俣病の課題を訴えた。

還暦を迎え、歩行などの身体機能が低下しているという胎児性患者の坂本しのぶさん(60)＝水俣市＝は「家族にいつまでも迷惑を掛けられない」と述べる一方、「患者を理解してくれる医師がいる施設は少ない」と強調。自宅を出て施設に入所することへの不安を口にした。

部落解放・人権研究所（大阪市）の谷川雅彦所長は、「差別被害という視点から水俣病を捉え直さなければならない」と指摘。多くの患者を診察してきた協立クリニック（水俣市）の高岡滋医師は、国や県が主張する水俣病の医学を「調べないしデータを取らない。多様な症状もばらばらに論じている」と批判した。

東京・水俣病を告発する会の久保田好生さん(65)は「省庁やチッソ本社がある東京は、患者にとって大事なフィールドだった」と東京で患者支援を続けた意義を語った。学園大の宮北隆志教授は「中央から見下された地方に懐性が押し付けられた」と説明。水俣病の構図が福島の原発事故や沖縄の基地問題に似通っていることを指摘した。

締めくくりの講義を担当したのは、学園大水俣学研究センター長の花田昌宣教授。カナダの先住民が被害に遭っている水銀汚染の調査結果を報告しながら、「国内外を問わず、この60年の負の経験を将来に生かさなければならない」と呼び掛けた。（石貫謹也）

2017.02.11　土曜日
熊本日日新聞　朝刊
24　面　9　段

水俣病60年　カナダ水銀被害テーマにシンポ

18,19日県内二ヵ所

カナダ水銀被害テーマにシンポ

18、19日 県内2カ所

水俣病60年

カナダの先住民居留地で起きた水銀汚染について考えるシンポジウムが18、19日、県内2カ所で開かれる。熊本学園大水俣学研究センターが水俣病の公式確認60年に合わせ、先住民らを招く。

居留地はオンタリオ州の2カ所。製紙工場が水銀を川に流し、魚を食べた先住民が健康被害を受けた。故原田正純医師が1975年と76年の調査を踏まえ、世界で初めて被害を報告した。

18日のシンポジウムは午後1時半から、熊本市中央区の熊本学園大で。先住民や同センターの研究者が居留地の現状を報告する。19日は午後1時から、水俣市公民館で。水俣病被害者らも加わり、補償の在り方などについて議論を深める。

参加無料。同センター☎096(364)8918。

2017.02.19　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
25　面　3　段
水俣病60年　カナダの水銀被害訴え
熊本市でシンポ

カナダの水銀被害訴え

熊本市でシンポ　先住民「川に沈殿」



カナダの水銀汚染について報告する先住民のサイモン・リー・フォビスターさん（左）。右からマーヴィン・リー・マクドナルドさん、ルーシー・フォビスターさん＝18日、熊本市中央区

カナダ・オンタリオ州の先住民居留地で起きた水銀汚染について考えるシンポジウムが18日、熊本市中央区の熊本学園大で始まり、先住民3人と研究者が現状を報告した。未認定患者や定期頭など日本の水俣病と重なる部分が多く、「カナダ政府は被害にきちんと向き合うべきだ」と訴えた。

カナダの水銀汚染は製紙会社のパルプ工場が原因。広大な流域面積を持つ川を汚染し、居留地2カ所で魚を多食した先住民らの健康被害を引き起こした。州政府は1969年、汚染を確認したが、水俣病の発生を認めていないという。

先住民3人は、川が汚染されて健康被害が起きるまでの経過や補償を巡る現状を報告。「川底に沈殿した水銀の除去を訴えているのに実現しない」「政府や原因企業が設置した委員会の被害認定には問題点が多い」と話した。

学園大水俣学研究センターの研究者3人による2014年の現地調査の報告もあった。花田昌宣教授は「先住民は開発政策に伴って強制移住させられ、居留地で被害に遭った。被害の前提に日本人による迫害の歴史がある」と指摘した。

シンポは同センターが水俣病の公式確認60年に合わせて開き、約70人が参加。最終日は19日午後1時から、水俣市民会館で水俣病被害者らを交えて議論する。（石貫謙也）

2017.02.19　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
31　面　6　段
水俣病60年
水俣の構図そのまま
魚、犬、猫に前兆　認定を巡る混乱

水俣病60年

水俣の構図そのまま

魚、犬猫に前兆　認定を巡る混乱

カナダ先住民がシンポで訴えた水銀汚染。水俣病研究の第一人者だった故原田正純医師は1975年、初めて現地入りし、先住民の検診で水俣病の典型症状を確認していた。

現地は漁業や魚食が盛んで、不知火海沿岸と似た環境。居留地グラッシーナロウズのルーシー・フォビスターさん(56)は「川は異臭が漂い、魚が浮かんだ。魚を食べた犬や猫は震えて倒れ、死んだ」と説明した。

ルーシーさんの夫サイモンさん(61)は「カナダ政府は原田先生の話をきちんと聞くべきだった」と訴えた。カナダ政府は健康被害を水俣病と認めないまま、原因企業と設置した委員会で補償対象を決める仕組み。子どもの頃から足の痛みが続くが、ルーシーさんは補償対象からは外されている。「父親が高濃度の水銀に汚染された記録が残っているのに」と不満を漏らした。

ヴァンクーバーという居留地から来日したマーヴィン・リー・マクドナルドさん(64)は、家族で魚を釣るなどして暮らしてきた。母親やきょうだいを健康被害の補償対象と認めたものの、自身は対象外。「家族は同じものを食べて生活してきた。なぜ、私だけ水銀の影響がないと言えるのか」。認定を巡る混乱も水俣の構図そのままだ。（石貫謙也）

2017.02.20　月曜日
熊本日日新聞　朝刊
28　面　1　段

水俣病60年　カナダ先住民と水俣病
被害患者ら
共通の問題解決へ連携

熊本日日新聞　平成29年(2017年)2月20日　月曜日

水俣病60年

カナダ先住民と水俣病被害者ら

共通の問題 解決へ連携



大石利生・水俣病不知火患者会長（左）による症状などの説明を聞くカナダの先住民＝19日、水俣市

カナダ・オンタリオ州の水銀汚染をテーマにしたシンポジウムは最終日の19日、水俣市公民館で、被害を受けている先住民3人と水俣病被害者らが意見を交わした。両国に共通する被害認定、補償の問題解決に向け、今後も連携する方針を確認した。



北朝鮮による拉致被害者家族会と支援組織「救う会」の合同会議後、記者会見する飯塚繁雄さん（左から2人目）ら＝19日午後、東京都港区

「今年中に救出せよ」

拉致家族会、救う会が方針

北朝鮮による拉致被害者家族会と支援組織「救う会」が19日、東京都内で合同会議を開き、「政府は拉致問題を最優先とし、今年中にすべての被害者を救出せよ」との新しいスローガンや、今後の運動方針を決めた。

7家族の13人と全国の救う会組織の26人が参加。「全被害者を帰すなら、見返りとして、日本政府が独国にかけている制裁を解除できると北朝鮮に伝え、実質的な協議に入るべきだ」として、初めて「今年中」という期限を警

ター（61）ら先住民3人が、汚染された川の魚を食べたことによる健康被害でも、補償対象から外されている現状などを報告。現地は、日本の水俣病と同じだ」と述べた。

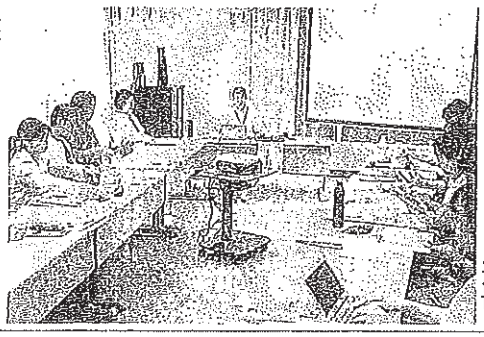
ック（水俣市）の高岡滋医師（65）は「西国の判で争っている水俣病は、症状は非常に似ている」と指摘し、水俣病被害者互助会の佐藤英樹会長（62）に対し、サイモンさんは「私たちは同じ船に乗っている。一緒に力を合わせていこう」と声を詰まらせて呼び掛け、約70人の参加者が拍手で応じた。（福山隆一郎）

2017.09.09　土曜日
熊本日日新聞　朝刊
32　面　11段

「水俣病　学際的調査研究を」　学園大が若手研究者セミナー

「水俣病 学際的調査研究を」

学園大が若手研究者セミナー



若手研究者を対象に始まった熊本学園大水俣学研究センターのセミナー＝8日、水俣市

水俣病の若手研究者を対象としたセミナーが8日、水俣市で始まった。現地で患者らと交流することで研究を深めてもらおうと、熊本学園大水俣学研究センターが毎年実施しており、5回目。

16人が参加。センター長の花田昌宣教授は「水俣病問題は法学、医学、経済学などと分かれて取り組んでも解決しない」と強調し、「一人一人が学際的調査研究をすべきだ」と呼びかけた。

熊日の高峰武論説顧問は「メディアと水俣病」と題して講演。1954年8月1日付の熊日に掲載された水俣市茂道地区での猫大量死の記事などを紹介し「自然はサインを出していたが、私たちが受け取ることができなかった」などと話した。

セミナーは10日まで。9、10日は患者らの話を聞くフィールドワークやグループ討論などを実施する。（山本遼）

2017.09.22　　金曜日

熊本日日新聞　　朝刊

3　面　1　段

人ひと　「水俣学」をリードする熊本学園大教授の　花田昌宣さん

人ひと

「水俣学」をリードする熊本学園大教授の

花田 昌宣（はなだ まさのり）さん



熊本学園大（熊本市中央区）の水俣学研究センター長として「水俣学」講座を主宰する。水俣病を学際的に、専門家の枠を超えて市民と共に考える試みだ。「水銀被害の深刻さを国内外に発信し続ける」。地球規模で水銀を規制する「水銀に関する水俣条約」が8月に発効し、思いを新たにした。

【26面参照】

水俣病は、戦後日本の復興とともに、水俣市の経済を支えた化学工業メーカー、チッソの工場排水に含まれていたメチル水銀が原因だ。規制が遅れたのはなぜか。いまだ定まらない水俣病の「病像」とは。加害者側、被害者側に分断された地域を修復するには…。

専門は社会政策学。水俣病問題が投げ掛ける複雑な問いを、医学など自然科学だけでなく、社会科学の領域からも解こうと迫る。そして「専門家主義では解決できない」と強調する。水俣学の講師に幅広い分野の専門家に加え、患者や支援者らも招くのはそのためだ。

水俣病との関わりは約40年前の名古屋大生時代。支援団体のイベントで、東海地方に移住した被害者がいると知った。差別や偏見を恐れ、補償を受けられる立場でも病気を隠す人々に触れ「医学だけでなく社会的、政治的問題だ」と感じた。

初代センター長で精神神経科医師の故原田正純さんは、徹底して現場にこだわった。当時の医学的常識を覆す、汚染魚介類を食べた母の胎内で罹患した胎児性患者の存在を見いだし、1962年、学会で報告した。「現場に学び、社会に反映させる」。揺るがぬ信念だ。大阪府出身、65歳。

2017.09.22　金曜日
熊本日日新聞　朝刊
26　面　8　段

条約発効後初の「水俣学」始まる 学園大

自分で考える力を鍛えたい」と話した。（益田大也）

条約発効後初の「水俣学」始まる

学園大

熊本学園大（熊本市）で21日、水俣病を多角的な視点で考える第16期「水俣学」講座が始まった。水銀を包括的に規制する「水銀に関する水俣条約」発効後は初めて。この日は熊本学園大水俣学研究センター長の花田昌宣教授が講義し「水俣病は過去の話ではなく、今の社会の問題として考えてほしい」と学生ら約120人に投げ掛けた。

【3面「人」欄に花田教授の横顔】

水俣病は、原因企業チッソの工場排水に含まれたメチル水銀が原因で、1956年に公式確認された。花田教

2017.09.24　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
16　面　3　段

水俣市　介護保険テーマに公開講座
26日から全5回（水俣市公民館で毎週火曜日午後6時半～8時半。受講料無料。熊本学園大学水俣学研究セン

水俣市公民館で毎週火曜日午後6時半～8時半。受講料無料。熊本学園大学水俣学研究センター主催

水俣市　介護保険テーマに公開講座

熊本学園大水俣学研究センターは26日から、介護保険をテーマにした公開講座を水俣市公民館で開く。10月24日までの毎週火曜日午後6時半～8時半で全5回。

公開講座は、同センターが地域貢献の一環で、さまざまなテーマで専門的なことを分かりやすく伝えようと毎年開催。今回は「払っているだけの介護保険？　はじめの一歩」と題し、介護予防や認知症患者と家族を支える地域づくり、水俣市民と水俣病患者の介護保険に関する現状と課題などを学ぶ。

26日から全5回

受講料は無料で、全講義受講者には修了証を発行する。水俣学現地研究センター☎0966（63）5030。

2018.01.07　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
3　面　1　段
「感覚障害のみ」認めぬ国批判　水俣病事件研究集会　新潟弁護団長ら講演

「感覚障害のみ」認めぬ国批判

水俣病事件研究集会　新潟弁護団長ら講演

国の基準よりも幅広く患者と認めた東京高裁判決を勝ち取った新潟水俣病行政訴訟の高島章弁護団長らが6日、水俣市で開かれた水俣病事件研究交流集会で講演し、感覚障害のみでは患者と認めようとしない国の姿勢を強く批判した。

同訴訟は、感覚障害しかないことを理由に患者と認めなかったのは不当だとして、新潟市の男女9人が提訴。東京高裁は昨年11月、全員を患者と認定するよう同市に命じた。同市が上告しなかったことから、判決は確定している。

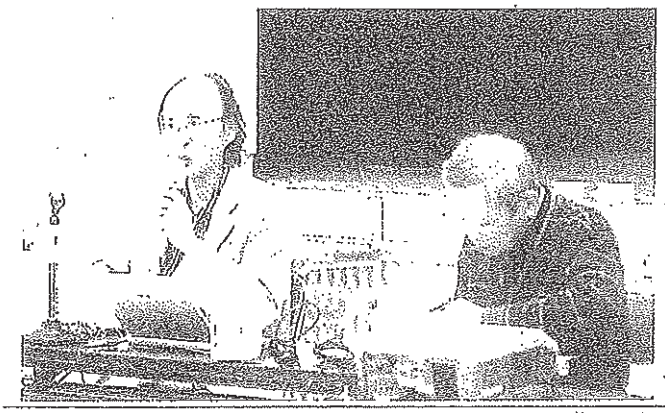
最高裁は2013年、別の訴訟の判決で感覚障害しかなかった女性（故人）を水俣病と認定。国は「感覚障害だけでも認定可能」とする一方で、汚染魚多食の証拠などを求める新たな通知を出したが、患者団体などは「認定のハードルを上げた」と反発している。

弁護団事務局の萩野直路さんは「（複数症状の組み合わせを原則とする）国の認定基準では救えない患者がいることを高裁判決が明確にした」と指摘。確定後も「認定基準は否定されていない」とする環境省の姿勢に疑問を呈した。

高島弁護団長は、認定の幅を広げる司法判断が定着していることを強調。「認定基準をしているのは国にもかわらず、被告が新市だったことから国『当事者ではない』という態度をとり続けた。無責任だ」と述べた。

熊本地裁で同様の訴訟を続ける水俣病被害者互助会の佐藤英樹事務局長は「現行の認定基準に固執する行政があらためて怒りを感じる。新潟の原告とも携しながら認定制度の矛盾を問うていきたい」と話した。

（隅川俊彦）



新潟水俣病を巡る東京高裁判決について報告する高島章弁護士（左）と支援する会の萩野直路さん＝6日、水俣市

訴訟や水銀影響巡り議論

水俣病の研究者らが全国から集まる水俣病事件研究交流集会が6日、水俣市公民館で始まった。初日は新潟水俣病を巡る昨年11月の東京高裁判決や、水銀が胎児や乳児に与える影響などについて議論した。7日まで。

岡山大大学院の頼藤貴志准教授は、水俣病が公式確認される前年の1955年を境に水俣市の出生率が低下する一方、自然死産率が上昇し、いずれも県全体と逆転した統計資料を紹介。「水銀の暴露により、周産期や乳児期の子どもの健康に深刻な影響を与えた」と指摘した。

阪南中央病院（大阪府松原市）の三浦洋理事長は、毛髪水銀値が50ppm以上でないと発症しないとする国の主張について「毛髪水銀値は測った時点の状態を表すにすぎず、過去の暴露を示すものではない」と批判した。

集会は熊本学園大水俣学研究センターが毎年開催。初日は約170人が参加した。

（山本遼）

2018.01.07　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
3　面　1　段
訴訟や水銀影響巡り議論

2018.01.08　　月曜日

熊本日日新聞　　朝刊

3　面　1　段

カナダ水銀汚染紹介　水俣病事件研究交流会　坂本さんら報告も

8日 月曜日　熊本日日新聞

カナダ水銀汚染 紹介

水俣病事件研究交流会 坂本さんら報告も

水俣病事件研究交流集会は最終日の7日、研究者や被害者が水俣市公民館に集まり、カナダでの水銀汚染や、スイスで昨年開かれた「水銀に関する水俣条約」第1回締約国会議（COP1）などに関する報告をした。

カナダの水銀問題は和光大の森下直紀講師（東京）がオンタリオ州での事例を説明。1960年代に製紙工場が排出した水銀が周辺の河川などを汚染したほか、地中に廃棄された水銀による汚染が現在も続いている恐れがあると指摘。「患者への補償問題を含め、今後の動向に注視したい」と述べた。



水俣病事件研究交流集会で、COP1について報告する谷由布さん（右）と坂本しのぶさん＝7日、水俣市

COP1関連では胎児性患者の坂本しのぶさん（61）と現地へ同行した水俣病協働センターの谷由布さん（36）が報告。国連が水銀の危険性を広く伝えるため、坂本さんの訴えを盛り込んだ動画を作成したことを紹介し、「（COP1で）海外の政府関係者やNGOの人々に、しのぶさんのメッセージが大切なものと受け止めてもらえた」と振り返った。

集会後、患者団体などでつくる水俣病被害者・支援者連絡会が主催し、新潟水俣病を巡る昨年11月の東京高裁判決の意義を考える会合もあった。初日の6日は水銀が胎児や乳児に与える影響などを議論した。（隅川俊彦）

2018.5.23　　水曜日

熊本日日新聞　　朝刊

24　面　12段

強制不妊手術を考える講演会　来月3日、学園大（旧優生保護法下で強制不妊手術が繰り返された問題を考えようと、県部落解放研究会（会長・花田昌宜熊本学園大学水俣学研究センター長）は6月3日午後1時半から、熊本市中央区大江の熊本学園大学高橋記念ホール。無料。同研究会096-223-6707）

は「当時どういう状況だったのか現時点で分からずコメントできない」としている。

強制不妊手術考える講演会

来月3日、学園大

旧優生保護法下で強制不妊手術が繰り返された問題を考えようと、県部落解放研究会（会長・花田昌宜熊本学園大水俣学研究センター長）は6月3日午後1時半から、熊本市中央区大江の熊本学園大14号館・高橋守雄記念ホールで、旧優生保護法国家賠償請求訴訟の新里宏二弁護団長を招き講演会を開く。

新里氏は、旧法下で強制不妊手術を受けたとして国を初提訴した宮城県の女性を担当。「障害者のいのちと人権」と題して、旧法下の人権侵害の実態や、命の尊厳を守る取り組みについて話す。

無料。同研究会☎096（223）6707。

2018.6.9　　土曜日

熊本日日新聞　　朝刊

24　面　3　段

水俣病の教訓1冊に　熊日記者8テーマで事件史整理（「８のテーマで読む水俣病」熊日の高峰武論説顧問ら記者3人が著書・編者を務めた。A５版、236ページ、2160円。弦書房
TEL092（726）9885

水俣病の教訓 1冊に

熊日記者 8テーマで事件史整理



弦書房から出版された「8のテーマで読む水俣病」

水俣病事件史からくみ取った教訓をまとめた「8のテーマで読む水俣病」が、弦書房（福岡市）から出版された。熊日の高峰武論説顧問ら記者3人が執筆・編集を務めた。

本は8部構成。第1部は「サインを見逃すな」「繰り返される不作為」など八つのテーマで事件史を整理した。原因企業チッソが水銀を含む工場排水を流し続けた経緯や、行政が被害の拡大を防止しなかったため患者救済が遅れた原因などを当時を振り返った。

第2部は2017年8月に発効した「水銀に関する水俣条約」に同行した内田裕之記者が報告。井芹道一編集局長の故伊藤雄二委員は条約採択までの経緯や課題を解説した。1972年の国連人間環境会議に参加した患者の浜元二徳さん（82）のインタビューも収めた。

第3部は、元水俣保健所

2018. 9. 6　　木曜日

熊本日日新聞　　朝刊

25　面　1　段

ヒ素汚染研究後世に　堀田石寄贈
熊本学園大が資料公開（堀田氏は、同センターを開設した故原田正純医師の熊本大医学部の後輩。ともに公害問題の研究や被害者支援に携わった。）

新聞　　（第3種郵便物認可）

ヒ素汚染研究 後世に

堀田医師寄贈
熊本学園大が資料公開

熊本学園大水俣学研究センター（熊本市中央区）は6日、ヒ素汚染の研究に尽力した医師の堀田宣之・桜が丘病院理事長（77）＝同区＝の研究資料の公開を始めた。宮崎県の土呂久鉱害や海外の汚染地域の記録など貴重な資料という。



堀田氏は1975年、ヒ素中毒患者が多発した土呂久地区で医学調査を始め、患者を支援。その後もメキシコやラオスなど世界の汚染地域を巡り、患者の検診に取り組んだ。

資料は堀田氏が作成・収集した紙資料468点、書籍168点、写真3775点。検診カルテや土呂久鉱害訴訟（90年和解）の問題点を整理したメモ、ヒ素中毒に関する論文などが含まれる。

堀田氏は、同センターを開設した故原田正純医師の熊本大医学部の後輩。ともに公害問題の研究や被害者支援に携わった。16年に堀田氏が同センターに資料を寄贈し、整理が進められていた。

この日は、学園大で幸田亮一学長が堀田氏に感謝状と資料目録を贈呈。堀田氏は「ヒ素中毒の研究には未解明の部分も多い。後世の研究者に資料を役立ててもらえればうれしい」と述べた。

閲覧を希望する場合は同センターに申請書を提出する。目録は同センターホームページで公開中。同センター☎096（364）8913。

（隅川俊彦）

熊本学園大に寄贈したヒ素汚染研究の資料について幸田亮一学長に説明する堀田宣之医師（右）＝6日、熊本市中央区

2018.9.27　　木曜日

熊本日日新聞　　朝刊

1　面　1　段

水俣病公害認定50年「後手」の代償（中）　国の幕引きに不信感　患者切り捨て

水俣病公害認定50年

「後手」の代償 (中)

2018.9.27

国の「幕引き」に不信感

患者切り捨て

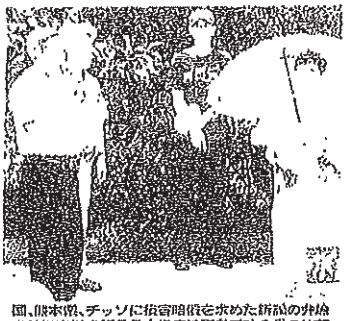
水俣病患者の発生は1956年を最後に終息している。水俣病を公害認定した68年9月の政府見解は、水俣湾周辺を当時囲まれていた漁業1111人の協同で埋めようとしたようにも映る。

ただ、チッソが加害者と特定されたことは、77年に患者が損害賠償を求めて提訴した水俣病1次訴訟の原因にもなった。73年の同訴訟和解条件は患者の全面勝訴。チッソが患者に不当に低額の見舞金を払い、問題の終息を図ろうとした59年の第1次補償協定を「公序良俗に違反し無効」とした。患者側はチッソと1600万～1800万円の一時金などを柱とする補償協定を締結。以後、水俣病の認定申請は急増した。

だが、原田正純（当時）は、77年に複数の症状の組み合わせを条件とする「後天性水俣病の判断条件」（昭和52年判断条件）を通知。認定申請の棄却が相次ぐ。

熊本学園大水俣学研究センター長の花田昌宣教授（66）は「公害認定で政府は水俣病を終わった問題として扱った。水俣病の解明は『解決済み』とする加害者の姿勢を患者側が打ち破ってきたことを忘れてはならない」と指摘する。

水俣病被害者互助会長の佐藤英則さん（63）＝水俣市＝は今も、患者認定と損害賠償を求めて二つの裁判を続ける。「現行の認定基準は患者を切り捨てる道具でしかない。国にそれを改める気持ちはみじんも感じられない」



国、県本訴、チッソに指定賠償を求めた訴訟の弁護を前に支援を訴える水俣病被害者互助会長の佐藤英則さん（左）＝7月23日、福岡市の福岡高裁

佐藤さんの両親と祖母は認定患者。適応だった祖父も個定基準の水俣病と似た症状で死亡した。同じ食卓を囲んだ佐藤さんは2度、認定申請したが、いずれも棄却だった。

2004年と13年には現行の認定基準より幅広く水俣病の被害を救済する救済策が出た。それでも国は「認定基準は変えていない」との姿勢を崩さなかった。

一方で、国は1995年の解決策や2009年の水俣病特別措置法に基づき、4万人を超える未認定患者に一時金などを支給している。

佐藤さんは95年の救済策でも対象外とされた。佐藤さんの妻スエミさん（62）は、患者が多発した芦北町女島出身。95年の政府解決策を受け入れたが、「患者と認められない人を『救済救済』という形で subtract 切り捨てる国ろうとした国に不信感を抱く。

スエミさんは夫の感情には「水俣病をあいまいな定義でわらせてはいけない」。その思いは募るばかりだ。

（岡川悠紀）

※3面に関連記事、29面に新連載「水俣病公害認定50年 環境をつむぐ」

2018.10.8　　月曜日

熊本日日新聞　　朝刊

30　面　1　段

News　インタビュー　水俣病公害認定50年　熊本学園大水俣学研究センター長　花田昌宣さん　被害全容　早急に調査を

本　日　日　新　聞　　平成30年(2018年)10月8日　月曜日

水俣病公害認定50年

被害全容 早急に調査を

熊本学園大水俣学研究センター長

花田 昌宣さん



◇はなだ・まさのり　1952年生まれ。京都大大学院経済学研究科後期博士課程単位取得退学。専攻は社会政策、労働経済学。国立パリ第13大学専任講師などを経て94年から熊本学園大社会福祉学部教授。2010年から同大水俣学研究センター長。大阪府出身。

News インタビュー

「公害の原点」とされる水俣病は9月、政府の公害認定から50年を迎えた。公害認定の評価と、現在も続く混迷の原因について、熊本学園大水俣学研究センター長の花田昌宣教授(66)に聞いた。

(聞き手・隅川俊彦)

―1968年9月の政府の公害認定をどう評価していますか。

「チッソを原因企業と特定し、原因を排水に含まれるメチル水銀としたが、これは当時判明していた事実を追認したに過ぎない。国は60年以降、患者の発生が終息し、低額の見舞金で患者と民事上の和解が成立したとして、『水俣病を終わったこと』として扱おうとした。さらに政府見解が国に規制権限があったことに全く触れていない点など問題が多い」

―国の規制とは。

「例えば食品衛生法による規制だ。当時の厚生省は57年、同法の適用を見送り、水俣湾周辺の漁獲を禁止しなかった。適用していれば汚染や健康被害について調査し、被害の拡大防止や解明につながったはずだ。2004年の関西訴訟最高裁判決は、59年末時点で旧水質二法(水質保全法、工場排水規制法)に基づく規制を行うべきだったと指摘した」

「56年11月には熊本大が汚染源をチッソの排水と疑う報告をしており、この時点で何らかの規制をするべきだった。規制しなかったことが被害の拡大を招き、現在まで続く混乱の原因となった」

―なぜ規制されなかったと思いますか。

「チッソが製造したアセトアルデヒドや、それを原料とするプラスチックを薬らかくする可塑剤は50~60年代、日本の産業を支える重要な化学製品だった。メチル水銀はアセトアルデヒドの製造過程で発生したが、強い経済力を持っていた通産省も経済発展を優先し、製造を止めなかった。通産省は『公害の被害があってもやむなし』と捉えていたとしか思えない。地元住民の多くがチッソを擁護する中、チッソが患者の提訴を抑えようとしていた背景もある」

―問題の解決には何が必要ですか。

「国は、患者の大量棄却を生み出した認定基準を決して改めようとしない。司法に何度も認定の門戸の狭さを指摘されているにもかかわらず。95年と2009年の未認定患者救済策も問題解決には至らなかった。行政は過去の反省を踏まえ、水俣病の被害が広がった不知火海沿岸住民の健康調査を実施し、早急に被害の全容を調べるべきだ」

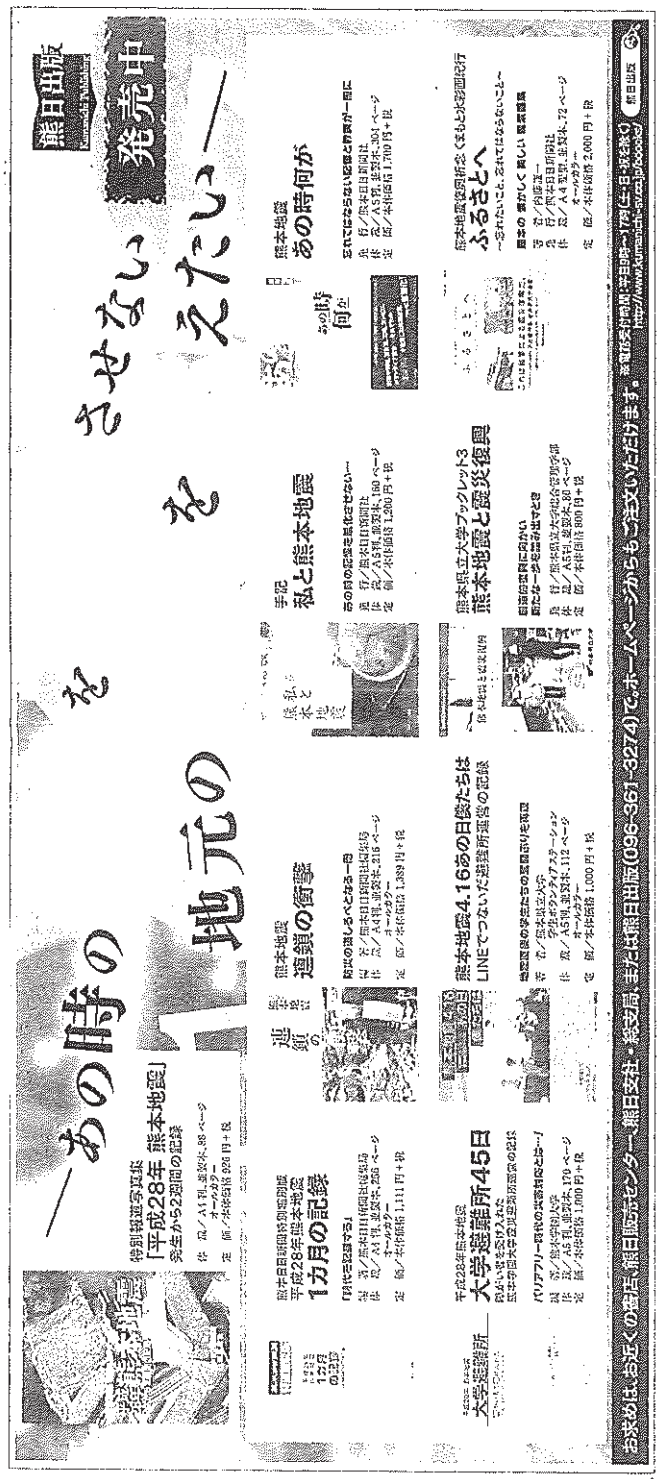
「09年成立の水俣病特別措置法は調査の実施を定めたが、環境省は『調査の手法を開発中』と繰り返し、いまだに実施していない。医学や法律などの専門家や患者団体の代表らを交えた第三者機関で調査手法について議論を始めるなど、やれることはあるはずだ。行政を動かす政治の力も必要だ」

2019.4.10　　水曜日

熊本日日新聞　　朝刊

12　面　11段

熊日出版　発売中　あの時の記憶を風化させない地元の経験を伝えたい「平成28年熊本地震　大学避難所45日」編著/熊本学園大学



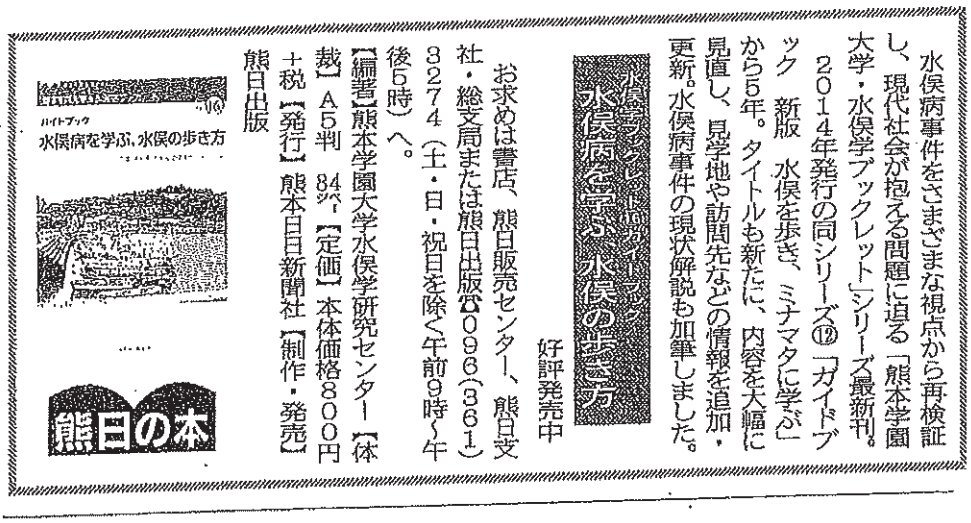
2019.4.13　　土曜日

熊本日日新聞　　朝刊

20　面　5　段

熊日の本　水俣学ブックレット（16）ガイドブック　水俣病を学ぶ、水俣を歩き方　好評発売中

2014年発行の同シリーズ（１２）から5年。タイトルも新たに、内容を大幅に見直し、見学地や訪問先などの情報を追加・更新。水俣病事件の現状解説も加筆しました。お求めは書店、熊日販売センター、熊日支社・総支局または熊日出版TEL096（361）3274へ



水俣病事件をさまざまな視点から再検証し、現代社会が抱える問題に迫る「熊本学園大学・水俣学ブックレット」シリーズ最新刊。

２０１４年発行の同シリーズ⑫「ガイドブック　新版　水俣を歩き、ミナマタに学ぶ」から5年。タイトルも新たに、内容を大幅に見直し、見学地や訪問先などの情報を追加・更新。水俣病事件の現状解説も加筆しました。

水俣学ブックレット⑯ガイドブック
水俣病を学ぶ、水俣の歩き方

好評発売中

お求めは書店、熊日販売センター、熊日支社・総支局または熊日出版☎096(361)3274（土・日・祝日を除く午前9時～午後5時）へ。

【編著】熊本学園大学水俣学研究センター【体裁】A5判　84ページ【定価】本体価格800円＋税【発行】熊本日日新聞社【制作・発売】熊日出版

2019.4.20　　土曜日

熊本日日新聞　　夕刊

8　面　7　段

熊日出版情報　水俣学ブックレット⑯ガイドブック　水俣病を学ぶ、水俣の歩き方　好評発売中

熊日出版情報

水俣学ブックレット⑯ガイドブック
水俣病を学ぶ、水俣の歩き方
好評発売中

水俣病事件をさまざまな視点から再検証し、現代社会が抱える問題に迫る「熊本学園大学・水俣学ブックレット」シリーズ最新刊。

2014年発行の同シリーズ⑫「ガイドブック　新版　水俣を歩き、ミナマタに学ぶ」から5年。タイトルも新たに、内容を大幅に見直し、見学地や訪問先などの情報を追加・更新。水俣病事件の現状解説も加筆しました。

【編著】熊本学園大学水俣学研究センター
【体裁】A5判　84ページ
【定価】本体価格800円＋税
【発行】熊本日日新聞社
【制作・発売】熊日出版



お求めは書店、熊日販売センター、熊日支社・総支局、または熊日出版（熊日サービス開発出版部）☎096(361)3274（土・日・祝日を除く午前9時～午後5時）へ。

2019.5.12　日曜日
熊本日日新聞　朝刊
22　面　5　段

「排除しない避難所を”学園大モデル”学ぶシンポ　東京（講演で花田昌宣教授は「避難所は地域の縮図」と強調）

「排除しない避難所を」

〝学園大モデル〟学ぶシンポ　東京

熊本地震直後に被災した障害者や高齢者を受け入れた熊本学園大の取り組みを学ぶシンポジウムが11日、東京都港区の都人権プラザであり、同大の避難所運営を統括した花田昌宣教授＝社会政策学＝が「避難所は障害者や高齢者であっても排除せず受け入れなければいけない」と訴えた。

災害時における人権問題を学ぼうと、同プラザが主催。首都圏在住の約140人が参加した。同大は前震直後から、教室やホールなどを車いす利用者ら約750人に開放。多様な人を受け入れた避難所運営は「熊本学園モデル」として全国的にも注目されている。

講演で花田教授は「避難所は地域の縮図」と強調。障害者などの受け入れを断る避難所も多かったが「教職員や学生は日常的に障害者や高齢者と交流する。震災前から災害弱者を特別視しない発想が根付いていたことが、受け入れにつながった」と振り返った。

主婦の大友有子さん（53）＝東京都世田谷区＝は「マニュアルだけでなく、避難者それぞれに個別対応することの大切さを実感した」と話した。

同プラザでは6月29日まで同大の避難所運営を写真や資料で紹介する展示コーナーを設ける。（嶋田昇平）



講演する熊本学園大の花田昌宣教授
＝11日、東京都港区

2019.6.13　木曜日
熊本日日新聞　朝刊
28　面　1　段

「水俣病」呼称読み解く　患者の心情置き去り　熊本学園大水俣学研究センター長　花田昌宣教授

患者の心情 置き去り

熊本学園大水俣学研究センター長　花田昌宣教授



◇はなだ・まさのり　1952年生まれ。京都大大学院経済学研究科後期博士課程単位取得退学。社会政策、労働経済学。国立パリ第13大学専任講師などを経て、94年から熊本学園大社会福祉学部教授。2010年から同大水俣学研究センター長。水俣病被害者の訴訟支援にも長年携わる。大阪府出身。

―水俣病の病名変更を求める看板が水俣市内に立ったことをどう受け止めましたか。

「病名をメチル水銀中毒症と変更したいという主張には無理がある。水俣病の苦しみと、加害者である国、県、チッソと闘ってきた患者に『あなたは明日からメチル水銀中毒症患者です』と言えるだろうか。主張は患者側から出たものではない。患者の心情を置き去りにしている」

―ほかに問題点はありますか。

「主張の背後には『病名が変われば水俣市が発展する』という考えがあるのではないか。それは、患者・被害者に『あなたの背負っている病気のイメージはネガティブだから、いなくなればいい』と言っているのと同義だ」

「患者・被害者は天草地域や鹿児島県の一部にも広がる。水俣病の呼称を変えたとしても、差別や偏見の解消にはつながらない」

―水俣学を提唱し、患者支援に生涯を尽くした原田正純医師は水俣病の名前にこだわったと聞きます。

「原田さんは、メチル水銀による環境汚染と魚介類による生物濃縮を経て、人への被害を及ぼしたという発生メカニズムと、汚染が長期間にわたった特異性を踏まえ、水俣病は水俣病であると主張した。診察した患者の苦しみや心情、闘争の経緯も理解していた」

「水俣病とほぼ同様の経過をたどったメチル水銀中毒は世界で新潟、カナダ、中国・黒竜江省の事例があり、原田さんは同様に水俣病と呼んだ。イラクやその他の地域でもメチル水銀中毒は発生しているが、直接暴露や他の物質との複合汚染、汚染が短期間であるものは区別した」

―水俣病関連裁判で医学的論争は現在も続いています。

「2004年と13年の最高裁判決は『メチル水銀暴露と特徴的症状の感覚障害があれば、水俣病と認めることができる』と判断し、決着済みだ」

「しかし、国はその後、被害者側に暴露を証明する証拠を求めるなど、暴露の要件を狭める通知を出し、運動失調や視野狭窄など複数の症状の組み合わせを要件とし、『患者切り捨て』と批判されてきた認定基準を維持した。この経緯が一般の人には理解しにくく、呼称とは別に、裁判を闘っている人への差別や偏見の一因にもつながっている」

（聞き手・隅川俊彦＝随時掲載）

「水俣病」呼称読み解く

2019.6.13

2019.9.7　土曜日
熊本日日新聞　朝刊
27　面　9　段

若手研究者　水俣病学ぶ　熊本学園大がセミナー開講

若手研究者 水俣病学ぶ

熊本学園大がセミナー開講



若手研究者向けセミナーで講義する熊本学園大水俣学研究センターの花田昌宣センター長（右）＝6日、水俣市

将来を担う水俣病の若手研究者向けのセミナーが6日、水俣市で始まり、県内や東京、大阪などの大学院生や教員ら15人が、花田昌宣・熊本学園大水俣学研究センター長の講義に臨んだ。8日まで。同センターが2011年に開講し、6回目。

花田氏は、若手研究者の論文などに水俣弁で「恵み」を意味する「のさり」という言葉が安易に使われると批判。「苦しみを突き抜けた患者本人が言うのは良いが、痛みと365日闘い、病を隠している人もいる。研究者が『のさり』を当然のこととして扱うのはおかしい。想像力が欠けている」と指摘した。

大阪市立大院生の小橋伸一さん(23)は「水俣病被害の風化が懸念される中で、実際に患者から話を聞き取り、被害の今を認識したい」と話した。7日は患者から話を聞き、8日はグループで討論する。（山本遼）

2019.9.25　　水曜日

熊本日日新聞　　朝刊

4　面　9　段

水俣病の課題知って　熊本学園大であすから講義（講義は祝日や年末を除く毎週木曜日の午後1時～2時半。インターネット中継も。）

水俣病の課題 知って

熊本学園大であすから講義

水俣病事件について被害者や研究者らから多角的に学ぶ本年度の水俣学講義が26日、熊本市中央区の熊本学園大で始まる。来年1月まで計15回で、一般の受講生を募集している。

同大水俣学研究センターの主催で18期目。水俣病資料館語り部の川本愛一郎さんや胎児性患者らを撮り続ける写真家、芥川仁さん、政府による被害者救済策に携わった当時の国会議員や環境省官僚らが週替わりで講師を務める。同センターは「水俣病の現状や課題を多くの人に知ってほしい」と呼び掛けている。

講義は祝日や年末を除く毎週木曜の午後1時～2時半。同センターのホームページでインターネット中継も。同センター☎096（364）8913。

（堀江利雅）

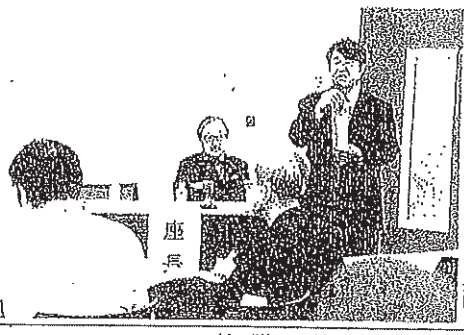
2019. 12. 24　　火曜日

熊本日日新聞　　朝刊

21　面　4　段

「水俣学」研究現状を報告　学園大でシンポ

「水俣学」研究 現状を報告 学園大でシンポ



「水俣学」研究の現状や目的について報告する花田昌宣・熊本学園大水俣学研究センター長＝23日、熊本市中央区

形成支援事業 成果報告シンポジウム

現在と水俣学の創造

熊本学園大学水俣学研究センター

熊本学園大水俣学研究センターは23日、熊本市中央区の同大でシンポジウムを開き、所属する研究者5人が、福祉や地域社会、環境問題など多角的な視点から水俣病事件の教訓を探る「水俣学」研究の現状を報告した。

水俣市にある現地研究センターで医療、福祉相談に携わる田尻雅美研究員は、年間20～40件の相談の中に「水俣病特別措置法による救済策が救済対象外とした1969年以降生まれで、症状を訴える人もいる。幅広い年代の健康調査が必要だ」と指摘した。

井上ゆかり研究員は現地の人々と協力し合って患者の証言や、医学や訴訟の関連資料などを集め、ネットで公開している「水俣学アーカイブ」について報告。「海外からの関覧もある。水俣病の伝承や環境教育に生かしたい」とした。

シンポジウムは文部科学省から補助を受ける「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の成果報告会として開催。県内外の学識者ら約40人が参加した。（堀江利雅）

2019.12.27　金曜日
熊本日日新聞　朝刊
28　面　1　段

「水俣病」呼称読み解く　熊本学園大学水俣学研究センター顧問　下地明友さん　病像の解明が最優先

「水俣病」呼称読み解く

病像の解明が最優先

2019.12.27

―医学者として「水俣病」の呼称を巡る議論をどう捉えますか。

「行政が公式に『水俣病』とするのは公害健康被害補償法（公健法）で認定した約3千人だ。一方、認定されなくてもメチル水銀による症状がある人は多数いる。例えば過去2度の政治救済策の対象となった人だけでも計約5万人に上る。そう



◇しもじ・あきとも　1947年生まれ。熊本大医学部卒。神経精神科医、熊本学園大水俣学研究センター顧問。認知症や自殺問題などを巡り、社会や現場、風土といった視点を絡めた精神病理が専門。カナダの水銀汚染に関する現地調査や住民の検診にも携わる。沖縄県出身。熊本市在住。

いった人々が診断を受けても、正式には「水俣病」ではなく、診断名がないというのが大きな問題だ」

「背景には、行政や医学界が、患者認定や補償額の範囲ばかりを議論し、結果的に病気の範囲を非常に狭義に捉えてきた経緯がある。通常の公害や食中毒であれば被害を受けたと扱われる人々を全員診断し、被害の広がりや症状などの病像を解明する。そこから被害の程度によって補償の議論をすべきだが、水俣病はその部分が抜け落ちている」

―病名が確定しないことはどのような問題を生みますか。

「『水俣病でなければ私のこの病気は何なのか』。患者認定を求める闘争で故川本輝夫さんが問い掛けた言葉は本質を突いている。痛みやしびれなどの症状は実感するのに病名がない。体の中に正体の知れないものが存在している恐怖や苦痛は計り知れない」

「『病気は『風邪』や『扁桃炎』などと診断名が付くことで、治療に向かうだけでなく、自ら認識して納得し、他者に語り癒える。その時、『あなたは私と病気を共有でき、心の安定にもつながる。病名の持つ意義はとても大きい。それがないまま多くの人が放置されているのは、医学的にも一般論としても異常だ」

―診断名は「水俣病」が適切と思いますか。

「議論は必要だが、何より、発生地域に暮らし、症状を自覚した人が頭に浮かべる病名は間違いなく社会的に定着した『水俣病』だろう。今でも、長年症状を抱えながら家族や地域との関係性に悩み続け、初めて地元の病院で診断を受ける人もいる。その時、『あなたはメチル水銀中毒で、正式には行政認定がなければ水俣病ではない』と言われて、納得できるだろうか」

―問題の解決には何が必要でしょうか。

「被害地域住民の健康調査をし、病像を解明することが最優先課題だ。発生初期に関しては、熊本大医学部などによる調査、研究の資料が残されているが、現在は熊本大などでも専門的に研究する医学者はほとんどいなくなった。補償の議論にとらわれずに、現地に足を運んで被害者を診断し、過去の資料を精査して研究をすることが重要だ。今からでも多分野の医師や専門家で協力し、歴史的な公害事件の究明をしたい」

（聞き手・堀江利雅）

※臨時増刊

2020.01.13　月曜日
熊本日日新聞　朝刊
3　面　5　段

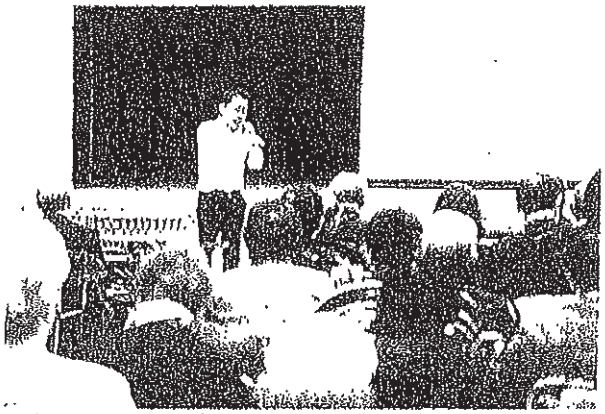
「胎児期の影響調査必要」水俣病研究交流集会で報告

「胎児期の影響 調査必要」

水俣病研究交流集会で報告

水俣病事件研究交流集会は最終日の12日、水俣市公民館で約150人が参加し、医師や研究者ら5人が、胎児性患者の疫学的な調査や差別の問題などについて報告した。

岡山大大学院の頼藤貴志教授（環境疫学）は「胎児性患者は症状に気付いたり、伝えたりするのが難しいことがある」と指摘。水俣地域で胎児性患者と同世代に判断力の低下などの症状が多い傾向を示した過去の調査結果を踏まえ、「胎児期に受けた中～低濃度のメチル水銀による影響の全容が明らかとなっていない」とした。



水俣病事件研究交流集会で胎児性患者に関する研究を報告する岡山大大学院の頼藤貴志教授
＝12日、水俣市

熊本学園大の中地重晴教授（環境化学）は、2017年に発効した水銀条約が「汚染サイト」の評価や管理を求めている点に触れ、「チッソが排出した水銀の埋め立て地の土壌調査やリスクの評価をすべき」と強調。水俣市が進める旧八幡プール一帯の埋め立て、造成に疑問を呈した。

集会は故原田正純医師らが1996年に始めた勉強会が前身で、熊本学園大水俣学研究センターなどが毎年開いている。

（堀江利雅）

2020.3.14　　土曜日

熊本日日新聞　　朝刊

27　面　1　段

ぼう然「最悪の判決」　水俣病互助会訴訟　原告「最高裁まで争う」

本日日新聞

ぼう然「最悪の判決」

水俣病互助会訴訟

原告「最高裁まで争う」



敗訴の判決後、記者会見に臨む水俣病被害者互助会員の佐藤英樹(原告団長)(左)ら＝13日午後4時15分ごろ、福岡市中央区の福岡県弁護士会館（小野宏明）

「信じられない」「歴史上、最悪の不当判決だ」―。13日に判決が言い渡された水俣病互助会訴訟。国などに損害賠償を求めたものの、全面的な敗訴となり、退廷した原告たちは口を真一文字に結んで福岡高裁を見上げた。【1面参照】

判決後、原告らは高裁に隣接する福岡市中央区の福岡県弁護士会館で記者会見。原告の坂口さん(83)は「水俣病を否定する一方、何が水俣病かという病像を示さないのはおかしい」と声を落とした。

原告弁護団の板由美子弁護士

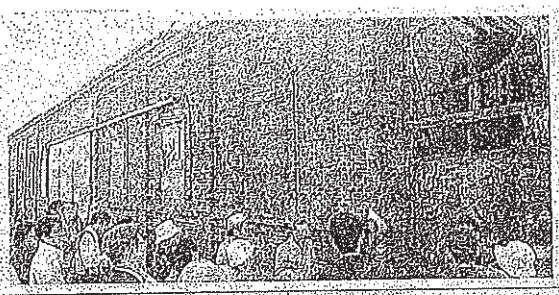
2015/11/04　　水曜日
朝日新聞　　朝刊
25　面　3　段

チッソ旧工場　見学会に80人参加
熊本学園大の公開講座

チッソ旧工場 見学会に80人参加

熊本学園大の公開講座

100年以上前に建てられた水俣市のチッソ旧工場



明治期に建てられたチッソ旧工場を見学する参加者たち＝水俣市

で3日、熊本学園大水俣学研究センターが現地見学会を開いた。約80人が参加し、専門家の説明を聞きながら、市内に残る貴重なレンガ造りの建物を間近で観察した。

旧工場は1909（明治42）年、日本窒素肥料（日窒、現在のチッソ）が農業用肥料を作るための石灰窒素製造工場として建設。壁は高さ約6㍍で、長さは東西と北側の計約120㍍が現存する。現在は合金鉄加工販売会社「江川」（本社・福島県）が所有し、今も工場として使われている。

現地見学会は、熊本学園大が開いた全5回の公開講座の最終回として実施され、熊本大五高記念館の磯田佳史客員教授（近代建築史）が案内した。

旧工場を巡っては、地元住民らが保存会を発足させようと動き出している。保存に向けた課題について、磯田客員教授は「壁の内側はがらんどう。地震や風などの横の力にどれだけ耐えられるかだ」と説明した。（斎藤雄史）

2016/01/10　日曜日

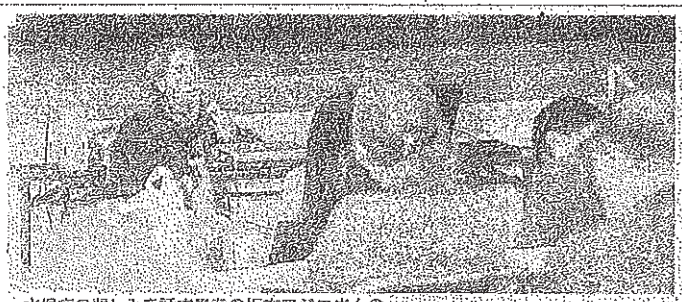
朝日新聞　朝刊

21　面　1　段

「みんな隠したがった」　水俣病患者ら発生当初語る　水俣で研究交流集会

「みんな隠したがった」

水俣病患者ら発生当初語る



水俣病の思しみを話す患者の坂本フジエさんの言葉に、参加者はじっと耳を傾けた＝水俣市

水俣で研究交流集会

1956年（昭和31年）5月の公式確認から60年、いまだ解決しない水俣病と改めて真剣に向き合うきっかけになれば――。水俣市の市公民館で始まった第11回「水俣病事件研究交流集会」は初日の9日、「水俣病60年の歴史の証言」をテーマに、発生当初を知る患者や支援者らが当時の思いや経験を語った。10日も開かれ、研究者の報告などがある。

「昭和31年ごろは『奇病』と言いよりました。伝染病じゃなかろうかと、みんな嫁がり、隠せる人はみんなが隠したがった」

水俣病患者の坂本フジエさん（80）は、自分を含む家族4人が水俣病の被害を受けた。「絶対に死なせず、生きらかしとかんば」と願っていた長女は、次第に口がきけなくなり、物も食べられず、目も見えなくなり、4歳で命を失った。

「親としてこの姿を見るつらさは、いくら大きい声で話しても分かってもらえない」と述べた。

胎児性患者の次女しのぶさんは当初、病院で小児まひとされた。しかし「なんで小児まひの子が産まれるのか」と疑問に思っていたという。

水俣市出身の堀田勝徹さん（75）＝北九州市＝は21歳で亡くなった胎児性患者の上村智子さんと交流したり、看護師として78年から約6年間、移動診療所などで患者たちの訪問、支援活動を行ったりした。

言葉が出ないのにどこも楽しそうな顔で歌う患者や、寝たきりで曲がって硬くなった体を動かして周りが困っていることを教えようとする少女を目の当たりにした。「人間の根本にある霊性の高さを見せられた」と話した。

水俣市立久木野小学校教諭の堀田卓治さん（57）は、坂本しのぶさんと小学校の同級生だった。しのぶさんらが通う「特殊学級」の児童を「怖い、気持ち悪いと思っていた自分があった。差別の意識があったんだと思う」と振り返った。

ただ、胎児性患者たちは認識してもらおう、水俣病のことを知ったのは中学生になってからだったという。水俣病を取り上げた授業を受けた記憶もないという。

「タブーとして、水俣で水俣病を取り上げるのはよほどの覚悟、自信がないと先生たちもできなかったのか」と思うことも振り返った。（真鍋弘樹）

2016/01/11　月曜日
朝日新聞　朝刊
25　面　4　段
対象の地域以外　水銀「被害」報告
研究交流集会で医師

お金の物差しで測ってきたが、生態系が壊された事件として捉え直し、大自然から遊離した文明社会を見直すことが必要」と訴えた。

また、福島第一原発事故や沖縄の米軍基地問題にも共通の政治・社会構造があると指摘した。

続いて講演した森さんは、水俣病だけでなく、自らが取材したオウム真理教などについても、「根底にあるのは組織と個人の問題。集団は時折間違い、暴走する。チッソに残酷な人はいないが組織に入ると変わってしまう」と指摘。教訓の継承については、「事件が風化するのは日本の特徴。なぜ隠したのか、なぜ起きたのかを解明し、残すことが必要」と話した。（河原一郎）

対象の地域以外
水銀「被害」報告

研究交流集会で医師

第11回「水俣病事件研究交流集会」の最終日の10日、水俣市浜町2丁目の市公民館であった。医師や学者など研究者が登壇し、水俣病の被害の広がりや胎児への影響などを報告した。

協立クリニックの高岡滋院長は、水俣病被害者救済法の対象地域外にある上天草市姫戸町の住民352人の検診結果について説明。対象地域内の過去の検診データと比べて、同程度か高い比率で水俣病に特徴的な症状が確認されたとし、「姫戸の水銀汚染は対象地域と同様に存在する」と結論づけた。

また岡山大学の頼藤貴志准教授（疫学）は、1971～74年に熊本大医学部の研究班が行った調査を分析し直した。手足や口の周りの感覚障害などの神経症状を持つ割合を、水銀の影響が少ないとみられる京都府伊根や有明の両地域と比べた場合、「（天草市）御所浦が高く、水俣はさらに高かった」と説明した。（斎藤靖史）

潮	12日・中潮		
	玉名港	三角港	水俣港
満潮	10.43	10.39	10.38
干潮	22.38	22.27	22.22
	4.13	4.14	4.15
	16.40	16.43	16.40
	本渡港	牛深港	八代港
満潮	10.37	9.44	10.38
干潮	22.28	21.20	22.25
	4.12	3.11	4.17
	16.40	15.44	16.42

2016/01/09　土曜日
朝日新聞　朝刊
24　面　3　段
実態や研究報告　きょうあす水俣
第11回水俣病事件研究交流集会

つどい
実態や研究報告

きょうあす水俣

第11回「水俣病事件研究交流集会」が9～10日、水俣市浜町の市公民館で開かれる。患者や支援者、専門家などが水俣病の実態や研究成果について報告する。

9日は「水俣病60年の歴史の証言」をテーマに元・新日窒労組の中村和博さんや初期の水俣病を経験した患者、患者の訪問・支援活動をしていた人がそれぞれ歴史を振り返る。

また続いて9日には、「水俣病の歴史と現在」、10日は「水俣病の医学をめぐる今日の課題」「水俣病をめぐる現在の課題」をテーマに、研究者らがそれぞれ報告する。資料代千円。

2016/04/13　水曜日
朝日新聞　朝刊
32　面　1　段

水俣病 認定後ケアなし　熊本学園大調査　専門家ら県批判　救済 申請主義が壁

水俣病認定後ケアなし

熊本学園大調査 専門家ら県批判

水俣病と熊本県から認定された患者がその後、県から何のケアも受けていない実態が、患者の多い同県芦北町女島での熊本学園大の調査から浮かび上がった。国は「認定基準は医学的な診断基準」と説明してきたが、水俣病に詳しい法律の専門家は「認定=診断なら治療に入るはず。あとは知らん顔では診断とは言えない」と批判している。



住民を診察する下地明友教授と井上ゆかり研究助手（左）＝2012年4月、熊本県芦北町女島



この間の2011年6月～12年8月、故原田正純元教授ら医師団の協力を得て住民の健康状態を調査。県が水俣病の安全宣言を出した1957年以前生まれの100人を対象に調べたところ、調査に応じた46人のうち、21人が認定患者だった。

水俣病は有機水銀によって中枢神経が侵される病だが、医師団の下地明友教授（神経内科医学）によると、21人全員が認定された後、神経学的な診察を一切受けていなかったという。下地教授は「全員、行政からのアプローチがないと言うんですね」と話す。

調査地域は芦北町女島の下地区（同大・水俣学研究センターの井上ゆかり研究助手らが昨年まで7年間、調査研究を続け、今年2月に博士論文にまとめた。

国の認定基準で水俣病と県から認定されると、患者は補償金1600万～1800万円を加害企業チッソから受け取る。この認定基準について国の検討会は89年版から05年版まで、「認定のための水俣病の医学的な診断基準」と明記していた。

患者側が名乗り出ることで行われる「本人申請主義」だ。しかし、患者が名乗り出にくい状況もある中、このことが一つの壁になっている。井上研究助手らの女島調査でも、調査への協力を拒否されることが何度もあったという。

法）は「認定の後には補償があるが、行政側は治療など予定していない。認定基準は補償対象者を判断するものであり、診断とは異質のものになっている」と指摘する。

救済申請主義が壁

水俣病の認定や救済は、64年生まれの女性の場合、水銀値を調べたところ、1・32ppmと、小児水俣病の認定基準（1・2ppm）を超えていた。女性は12年に締め切られた水俣病被害者救済特措法による被害者手帳を申請し、認められていた。医学的調査に応じるよう母親を通じて説得したが、協力を得られなかった。祖父母と父が認定患者の67年生まれの女性の場合は0・62ppmだった。秋田大の村田勝敬教授らの研究によれば、胎児水銀値が0・48ppmを超すと、胎児期に通常では考えられない高濃水銀の汚染にさらされた疑いがある。女性の母親に認定が棄却済み。

井上さんは「今年は水俣病公式確認から60年。いまだに正当な補償がなく、本人申請主義を盾に放置されたままの患者さんがいます。国と県の責任は極めて重い」と訴えている。

（田中奏介）

2016/04/30　　土曜日

朝日新聞　　朝刊

?16面　1　段

水俣病　公式確認から60年



奇病と呼ばれ「みじめでした」

「7歳で死んだ妹 同じ病では」

「救済を」訴えなお



2016/04/30　土曜日
朝日新聞　朝刊
26　面　1　段

60年　何も終わっていない　水俣病アンケート　親子3代で被害　家族に明かさず　43歳で「非該当」救済策に線引き

60年 何も終わっていない

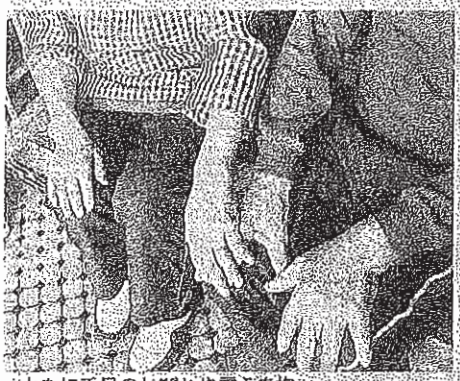
水俣病アンケート

親子3代で被害 家族に明かさず

43歳で「非該当」 救済策に線引き

水俣病の被害はどこまで、いつまで及んだのか、はっきりとわかっていない。親子数代にわたり被害に苦しむ人たち。治らない体の不調と差別や偏見、そして救済の壁――。水俣病公式確認60年アンケートに回答を寄せた人たちを訪ね、思いを聞いた。

▼1面参照



ともに手足のしびれや震えを抱える夫婦＝熊本県水俣市八幡町

「昔は殺しても死なないような丈夫な体をしとりました」。静かに語る熊本県水俣市八幡町の男性(78)の手は、小刻みな震えが止まらない。「チッソには、はらわたの煮えくりかえる思いのすっとですよ」

父は漁師だった。最初に母が患者と認定され、チッソから払われた補償金の一部は今も暮らす家の建築にあてた。総額約600万円の資金の半分は男性の稼ぎ。だが家が建つと「大金をもらって」との陰口が耳に入った。

《アンケートでは、自分や家族が差別・偏見を経験したと答えた人のうち、「補償金や一時金をもらったことへの非難」を選んだ人が41・9%いた》

「おいは水俣病じゃなか」。そう言い張っていた父は、すり足のようにぎこちなく歩いていた。吸うたばこが短くなり、火玉が指まで達しても気にならない。1980年に入院先で亡くなると、熊本大学医学部付属病院へ運ばれ病理解剖された。約1年後、患者認定の通知が届いた。

男性にも症状が表れていた。未認定患者を救済するとした95年の「政治決着」で医療費などの給付を受けるようになった。妻(75)は「死んでもせん」と申請をしなかったが、足のつりなどの症状がひどくなり、09年の水俣病被害者救済法(特措法)による救済策で窓を決した。県外で暮らす3人の子どもを説得し、ともに申請すると救済対象になった。3人は、親子3代の被害をそれぞれの家族には明かしていないという。

「60年たっても、何も終わっていない」。熊本県葦北町出身の鶴崎明成さん(43)＝千葉県習志野市＝は言う。祖父は認定患者で、祖母と両親は医療費などの給付を受けている。

5歳ごろから耳鳴りの症状が始まった。手が震え、小学校の国語の授業で印刷された字をなぞろうとしても、はみ出した。特措法の救済策に申請したが検診も受けられないまま、「非該当」の通知が来た。チッソの工場はメチル水銀の排出を68年に停止。救済策は、救済の対象年齢を原則として69年11月末までに生まれた人に限定している。鶴崎さんは72年生まれだ。

《アンケートでは、地域や生まれた年による救済策の「線引き」について、回答者の4～5割が「広げるべきだ」とした》

「10年、20年たって発症する同世代がいたっておかしくはない」と鶴崎さん。「原発事故の補償でも『線引き』の問題が出てくるかもしれない」。現在、チッソや行政に損害賠償を求める訴訟に加わっている。

（曽原普、岡田将平）

2016/04/30　土曜日

朝日新聞　朝刊

3　面　1　段

水俣病 認定なお高い壁　3千人「被害補償を」

水俣病 認定なお高い壁

3千人「被害補償を」

公式確認から60年がたつ水俣病では、今も約3千人が被害の補償を求めている。患者と認定されるには高いハードルがあり、司法に訴える人も相次ぐ。行政や原因企業チッソは被害者に目を向け続けてほしい――。水俣病公式確認60年アンケートの回答には、患者らの思いがにじむ。

▼1面参照

「今もなお、認定申請や訴訟をしている方が多くいるという事実は重く受け止めている」。水俣病について丸川珠代環境相は28日、閣議後の会見で語った。

公害健康被害補償法（公健法）に基づいて熊本、鹿児島両県などと行政が認めた認定患者は2280人。チッソが1600万～1180万円の慰謝料などを払う。今も2100人余りが認定を求めているが、1977年に当時の環境庁が出した現行の認定基準は「複数の症状の組み合わせ」が要件で、認定はまれだ。1800人以上が賠償を求めて裁判を過ごしている。

患者と認められないまま、「医療費など」を受けた「被害者」も約7万人に上る。2004年、最高裁で被害を拡大させた国や熊本県の責任が確定すると、認定を求める人が急増。国は09年に議員立法で成立した水俣病被害者救済法（特措法）に基づく救済策で収拾を図った。

認定基準を見直す機会はあった。最高裁は13年、症状の組み合わせがなくても認定する余地があるとして、基準の運用見直しを求める判決を下した。14年に環境省は「一つの症状で認定する場合の新指針をつくったが、メチル水銀に汚染された魚介類を食べた証明など終了していないという認識だ」と話す。

◇

患者・被害者らを対象にした今回のアンケートでは、被害の補償や救済策についても尋ねた。

特措法に基づく救済策の申請は12年7月に締め切られた。かつて住んだ地域や生まれた年で原則的に対象者を限定する「線引き」があり、約9800人が非該当となった。アンケート回答では、地域の線引き（対象地域）について「広げるべきだった」が67・5％。一方で注目されるのが原因企業チッソの動向だ。11年に補償責任や債務を同社に残し、営利事業を切り離して子会社JNCをつくった。環境相が承認すれば、JNC株を上場、売却してチッソを清算することもできる。特措法に基づく手続きで「救済の終了」などが条件。丸川氏は認定申請や訴訟が続く現状から「救済終了していない」と認識している。



◇

患者・被害者らを対象にした今回のアンケートでは、被害の補償や救済策についても尋ねた。

特措法に基づく救済策の申請は12年7月に締め切られた。かつて住んだ地域や生まれた年で原則的に対象者を限定する「線引き」があり、約9800人が非該当となった。アンケート回答では、地域の線引き（対象地域）について「広げるべきだった」が67・5％。一方で注目されるのが原因企業チッソの動向だ。11年に補償責任や債務を同社に残し、営利事業を切り離して子会社JNCをつくった。環境相が承認すれば、JNC株を上場、売却してチッソを清算することもできる。特措法に基づく手続きで「救済の終了」などが条件。丸川氏は認定申請や訴訟が続く現状から「救済終了していない」という認識だ」と話す。

2016/04/30　　土曜日

朝日新聞　　朝刊

1　面　1　段

水俣病60年「未解決」65%　患者・被害者アンケート

水俣病60年「未解決」65% 患者・被害者アンケート

水俣病 熊本県水俣市にあるチッソの工場が廃水と一緒に海に流したメチル水銀が原因の公害病。劇症(感覚障害)、見える範囲が狭くなるなど様々な症状がある。症状の表れ方や加齢に伴う変化などが十分解明されておらず、被害の広がり方についても論議が続く。認定患者2280人(うち1879人が死亡)。救済などで医療費などを受けた人が約7万人、一方で、今も2千人余りが患者認定を求め、約1300人が訴訟で損害賠償などを求めている。患者・被害者団体はチッソや行政との交渉や提言、訴訟支援などを通じ、患者らの福祉や補償・救済に取り組んでいる。

水俣病の公式確認から5月1日で60年となるのを前に朝日新聞社と熊本学園大学水俣学研究センター(熊本市)は共同で、水俣病の患者・被害者らにアンケートを実施した。6割超が「水俣病問題は解決していない」と回答。多くは、救済されていない被害者や、患者への認定や損害賠償を求める人たちが今もいることを理由に挙げた。▼3面=補償求め3千人へ、16・17面=詳報、26面=吉永小百合さんインタビュー

回答者の9割超がこの10年で症状が悪化し、差別や偏見を近年も受けたとする人が2割超いた。国は「最終解決」を掲げた救済策により救済の申請を2012年に締め切ったが、問題の根深さが改めて示された。

水俣病では、国の認定基準に基づき、熊本、鹿児島両県が認定した患者と、未認定だが症状が確認され、医療費などを受ける被害者がいる。ほかにも症状を訴え、患者認定を求めている人や裁判で損害賠償を求めている人らがおり、患者・被害者らを含め、複数の団体をつくっている。

アンケートでは、こうした11の団体・施設を通じ、会員ら8948人にアンケート用紙を送付、2610人から回答を得た。平均年齢は70・3歳。

水俣病問題の現状について尋ねたところ、「解決していない」が66・8%、「解決した」3・1%だった。医療費などを受ける被害者でも5~6割が「解決していない」と答えた。未解決の理由(被害者)では「まだ救済されていない被害者がいる」79・0%、「損害賠償を求めて裁判を起こしている人がいる」62・7%、「(原因企業の)チッソや国、加害県がきちんと責任を認めていると思えない」44・9%――と続いた。

手足のしびれや感覚障害などが水俣病の典型症状とされ、この10年間でこうした症状が「軽く感じるようになった」と回答した人は96・6%。水俣では、初期を求める被害者らへの差別・偏見が指摘されてきた。アンケートでも、自分自身や家族の差別・偏見に関する経験があると30・6%の人が回答。この数年間に差別・偏見を経験した人も23・3%いた。

アンケート結果について、熊本学園大水俣学研究センターの花田昌宣センター長は「補償や一時金を受けることを非難された経験が目立ち、子や孫など身内にも相談をしたことがない人が少なくなかった。水俣病に負のイメージを抱き、団体の会員でも潜在人が多いことがわかる。行政は残された被害者が声を上げるのを待つのでなく、広く医療費などを給付する必要がある」と指摘している。

2016/05/01　日曜日
朝日新聞　朝刊
8　面　4　段
社説　水俣病60年　解決遠い「公害の原点」



2016・5・1

水俣病60年

解決遠い「公害の原点」

「公害の原点」とも言われる水俣病が公式確認されてから、きょうで60年になる。だが、被害者らの多くが「問題は解決していない」と考えている。

熊本学園大の水俣学研究センターと朝日新聞が行った認定患者や被害者への「60年アンケート」でも、回答者2610人の3分の2がそう答えた。

救済から漏れた被害者の存在や不十分な国の制度、年を重ねるにつれ悪化する症状と、アンケートからは被害を受けた人々の不満や不安が伝わってくる。なぜ解決できないのか。認定患者をできるだけ増やさないようにしてきた政府の姿勢が、真っ先に問われる。

1977年に認定基準を狭めて以降、感覚障害だけの患者がなかなか認定されなくなった。その結果、チッソが原因企業の熊本、鹿児島両県の認定患者は2280人にとどまる。被害の救済より、補償金を払うチッソの経営に配慮してきたと見られても仕方がない。

認定されない人々は、損害賠償を求めて次々に提訴した。こうした裁判で、国と県は一貫して責任を否定してきた。

政府は95年、2009年と2度にわたる政治決着で、「患者」と区別する「被害者」と位置づけ、一時金支給などの救済策を実施した。

対象者は、最初の政治決着が約1万人、2度目は約3万6千人。その他、医療費などを受けた人も含めると、被害者は7万人超にまで膨れ上がった。

一方で、2度目の救済からは約9600人が漏れた。対象地域や年齢の設定が狭すぎた、と専門家から批判が出ている。

さらに、認定申請者はいまも2100人を超え、1300人余りが処分保留のままだ。

その結果、チッソが原因企業であることが国や熊本県、チッソに損害賠償を求める裁判を続けている。

特措法は2009年に、水俣病が公式確認されてから、きょうで60年になる。だが、被害者らの多くが「問題は解決していない」と考えている。

熊本学園大の水俣学研究センターと朝日新聞が行った認定患者や被害者への「60年アンケート」でも、回答者2610人の3分の2がそう答えた。

救済から漏れた被害者の存在や不十分な国の制度、年を重ねるにつれ悪化する症状と、アンケートからは被害を受けた人々の不満や不安が伝わってくる。なぜ解決できないのか。認定患者をできるだけ増やさないようにしてきた政府の姿勢が、真っ先に問われる。

1977年に認定基準を狭めて以降、感覚障害だけの患者がなかなか認定されなくなった。その結果、チッソが原因企業であることが国や熊本県、チッソに損害賠償を求める裁判を続けている。

2016/05/08　日曜日
朝日新聞　朝刊
34　面　1　段

終らない水俣病 公式確認60年 アンケートから ㊤ 「奇病」なのか
追及20年 86歳、震える手隠し続け

「奇病」なのか 追究20年

終わらない 水俣病

公式確認60年 アンケートから ㊤

私は水俣病なのではないか――。問い続けて20年余り。答えはまだ見えない。

「焼けるような」手足の痛み。耐え難い苦しみを紛らわせようと、冬でも窓を開け放ち、手足を冷やす。それでも3時間続けては眠れない。山本美孝男さん（68）＝岐阜県可児市＝の症状は、40歳を過ぎてひどくなった。受診した医療機関は「100を超えるが、原因は分からず、様々な薬を試しても痛みは癒えない。心当たりはある。故郷の集落に来ていた行商の男性から買った魚だ。

鹿児島県伊佐市大口。冬は雪が積もる山深い県境集落で、山本さんは育った。生まれつき体が弱かった。滋養のためにと祖母は毎日、魚を食べさせたが、5歳になっても起き上がるのがやっと。「水俣で流行している『奇病』のことだ」のようだ」。鹿児島市の病院で医師が漏らした言葉は、幼心に刻まれた。

12歳の時、家族で大阪へ。山本さんが90歳を前に起こした医療・介護用品の卸会社は成功した。事業の充実の一方、体の不調は頻知人を訪ねて調べ始めた。



出身集落の水俣病被害について調べてきた山本美孝男さん＝岐阜県可児市塩河

症状が出るなら、一番はあの人だ。思い定めて真っ先に会ったのは、隣接する「隣岸布計駅の近くで「村上商店」を営んでいた村上文枝さん（86）。行商から仕入れた魚が日々、店頭に並んでいた。

山本さんはかねて水俣病を疑っていた。大口の隣駅、布計駅で乗り降りしていた行商の男性は、国鉄山野線（1988年廃線）で熊本県水俣市から来て、水俣の魚を売っていた。山本さんの父はチッソの水俣工場の社員。工場の廃液が魚を汚染し、水俣病を引き起こしていたことは知っていた。魚を買った他の人たちの体はどうなのか。20年以上前に思い立ち、年に数回、里帰りして、集落や周辺の



水俣から魚を運んできた行商が乗り降りした国鉄山野線の薩摩布計駅跡。村上文枝さんはその魚を売ってきた＝鹿児島県伊佐市大口

86歳、震える手隠し続け

上がり框に座る村上さん。取りに行ってもらい、ふたわざと離れた所の品を開けてもらっては足取りや手つきに目を凝らした。

「おばちゃん、手が震えるね」。村上さんは「そんなことない」と首を振った。その後も折を見て訪ねたが、はぐらかされ続けた。

5年前、正面から切り出した。「自分は行商の魚を食べて水俣病になったと思ってる。おばちゃんも症状が出てるやろ」。村上さんは「出ごらせん。そんな人はおらん」。だが、山本さんが地元で会った多くの人は、手足のしびれやまひを発症していた。2004年以降、山本さんは水俣病の患者認定や医

気づいた時期に幅

【水俣病公式確認60年アンケートの回答から】水俣病だと気づいた時期には、回答に幅があった。40年以上前が計18.5％だった一方、「10年前」と「最近」を合わせると計35.1％。

療費給付を求めて申請を繰り返したが、3回退けられた。チッソが廃液を流した不知火海から約20キロ離れた伊佐市大口は、未認定患者の救済策などの「対象地域」外。15年、被害者団体に入り、国などに賠償を求める訴訟の原告になった。

その頃、訴訟の関係者から、村上さんも原告と聞かされた。「かたくなに否定していたのになぜ」

村上商店は今も原動のそばにある。「山本君には本当のことを言わず、悪かったですね」。訪ねた記者に村上さんは語り始めた。

89歳で足がしびれて力が入らなくなり、医師に「奇病」と言われた。その響きにぞっとした。ハンセン病患者のように家族から隔離されるのではと恐れた。隠し通そうと誓った。

12年春、水俣病の潜在被害の調査を続ける民間の医師団が、住民の検診に訪れた。渋々参加したが、問診で「しびれはない」とそそくさと帰ろうとした。

検診を終えた医師は村上さんの震える手を握り「これは水俣病だ」と言った。その瞬間、体中の力が抜けた。「ああ、私は水俣病だったのかと。40年の胸のつかえが下りました」

村上さんが原告団に加わったのはその後。集会で人前に立ち、被害救済を訴える。「知らなかったとはいえ、魚を売って被害を広めた」。そんな自分が負った「責任」と考えている。

再び岐阜へ。村上さんの話を記者から伝え聞いた山本さんは、しばらく黙って「この病気は人の心も苦しめるんだね」と頭を振った。「水俣病は、自分で被害を訴えないと放置される。40年悩み苦しんだ村上さんのような人に、国やチッソは報いないといけない」（奥村智司）

◇

水俣病を巡っては、被害への償いを求める訴えがなお続いている。被害者を限定する救済策の線引き、地域経済に影響を持つ原因企業チッソへの遠慮、被害者への差別・偏見――。様々な障壁が問題の解決を阻んできた。公式確認60年を前に朝日新聞社と熊本学園大学水俣学研究センターが実施したアンケート（原則無記名）の回答者で、記者の取材を了承いただいた方々を訪ねて課題を探った。

2016/05/09　月曜日
朝日新聞　朝刊
34　面　1　段

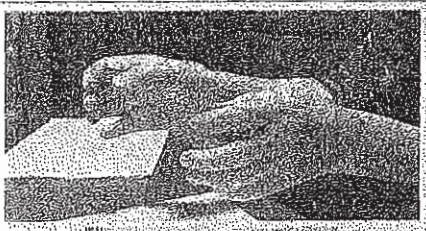
終らない水俣病 公式確認60年 アンケートから ㊦ チッソ城下町 自制今も 「悪い事言えぬ」

チッソ城下町 自制今も

終わらない水俣病

公式確認60年 アンケートから ㊦

「悪いこと言えぬ」





❶身内にチッソ関係者がいる女性は、手を震わせながら複雑な心境を話した＝熊本県芦北町 ❷自身を「水俣病」と診断した医師の意見書を示す緒方四文さん＝岡県水俣市

チッソ元従業員の父親は体の不調を抱えながらも、水俣病の患者認定を申請しなかった。「チッソに迷惑しないんじゃないか」。息子の赤松徹さん(66)＝鹿児島県水俣市＝はそう思っている。

実家は熊本県水俣市の街中にあった。水俣の隣、津奈木町の漁師の家だったおばの2人の息子は、会話ができず、自分の体を動かすのもやっと。けいれん発作もよく起こした。「2人とも40歳くらいで死んでしまった」。実家の食卓には、おばの家からもらった小魚が並んでいた。

大正生まれの父は、チッソ水俣工場で働いた後、土木建築の仕事に従事したが、50歳前後で失明。緑内障との診断だった。87歳で亡くなった。

「水俣のせいかもしれないと思うが、チッソは自分がいた会社だから」。患者の認定申請も被害の訴えもしない理由を、兄にそう話していたと後に知った。

高校卒業後に水俣を離れた赤松さんも10年ほど前から体の不調があらわになる。

「水俣病ではないか」。当時、医療費を受給(…)

刺すような手足のしびれ。熊本県芦北町の女性(62)は07年ごろ、夫と共に水俣病の症状が確認され、医療費の支給対象になった。3人の子のうち2人は特措法救済策で医療費などを受けている。

家族で水俣病にさいなまれながら、女性の胸中は複雑だ。亡くなったおばはチッソに勤めていた。今は20代の孫が、チッソが100%出資する事業子会社JNCで働く。女性が「チッソ」と口にすると、孫に「今はチッソじゃない、JNCだよ」と言い返される。自分たちは水俣病と関係はない――そんな意識も、孫の言葉には感じる。

「チッソに悪いことは言えない」と女性は言う。11年、チッソは認定患者への補償責任や債務を同社に残してJNCをつくった。社名は「ジャパン・ニュー・チッソ」の頭文字に由来する。合理化などで、現在の水俣側事業所の従業員は、半世紀前の水俣工場の約6分の1にあたる約580人に。それでも関連会社などを含めた雇用や商取引で地域経済に影響を保つ。そんな企業城下町・水俣にかつてチッソ水俣工場付属病院があった。そこで生まれた緒方博文さん(69)＝水俣市＝は、チッソや国などに損害賠償を求める訴訟を続けている。

幼い頃から足の感覚が鈍く、熱い風呂に入っても足先は冷たく感じる。すねの青あざや擦り傷に、後から気づく。そんな体の不具合を水俣病患者のおばに相談したのがきっかけで、05年に患者認定を申請し、訴訟にも加わった。

チッソと関係の深い製造業の会社に勤めていた。やがて職場で「変化」が生まれた。

訴訟のために上司に休みを申し出ても、理由を問い詰められて許可されない。通院のため定時で退社しようとする日には残業を余儀なくされる。姉がらせだと感じた。訴訟に参加していることは誰にも話さなかったが、知れ渡っていた。

「なんでそんなことを」「金もらってがんしようと」。同僚からそんな言葉も投げかけられた。周囲がつらくなり、退社した。

「あんまりチッソを責めると、このまちの衰退につながる」。「自制」を求める声が、今も耳に届くという。緒方さんは言う。

「誰もチッソをつぶそうなんて思っていない。ただ、被害者への責任はきちんと認めるべきではないですか」(高原勇、鹿嶋岳大)

補償の充実期待

【水俣病公式確認60年アンケートの回答から】今後、チッソに最も期待することでは「認定患者への補償を継続・充実させる」32・3%、「幅広く被害者に補償する」28・8%が突出した。子会社JNCの発足を「よく知っている」「ある程度知っている」は計36・6%。「あまり知らない」「全く知らない」は計55・2%だった。



(小数点2位以下は四捨五入)

2016/05/10　火曜日
朝日新聞　朝刊
30　面　1　段

終らない水俣病　公式確認60年　アンケートから　㊦　「家の恥」口閉ざした　避難恐れ　申請に壁　差別・偏見　3割が経験

終わらない 水俣病

公式確認60年 アンケートから ㊦

「家の恥」口閉ざした


西川成代さん

亡くなった父親と祖父の厳しい言いつけだった。

「水俣病のことを話すのは家の恥」。8年前まで、西川成代さん(72)＝大阪市平野区＝は守っていた。

不知火海を挟んで旧本渡市（現天草市）の出身。祖父は網元の漁師で、三男坊の父は、網の補修や漁師のいさかいの仲裁など裏方仕事を黙々とこなし、「目置かれる存在だった。新鮮なイワシやアジなどが食卓に並んだ。

「浮かんで流されてきた魚は食べてはいかん」。対岸の水俣市での「奇病」の発生が話題になった。周囲では病気の魚が原因とうわさされた。だが、家族には関係ない話だった。

水俣市の対岸に浮かぶ御所浦島（同県

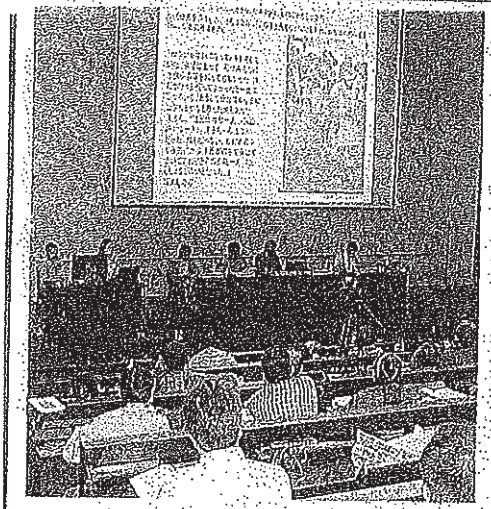
2016/09/11　日曜日

朝日新聞　朝刊

32　面　1　段

水俣病の教訓を共有　タイで集会
研究者「今も闘い」

水俣病の教訓を共有
タイで集会 研究者「今も闘い」



熊本学園大とNPO法人水俣病協働センター（水俣市）は10日、タイ・バンコクのチュラロンコン大で、同大と共催した水俣病の公式確認60年と産業災害などに関する集会に参加し、水俣病の現状や課題について講演した。またタイの研究者らは、水俣病の教訓をどういかすかなど、タイの環境問題への課題を語った。

集会は「水俣病60年～産業災害の教訓・持続可能な社会を目指して」と銘打ったもので、タイの環境NGOなどと共催した。

熊本学園大水俣学研究センターからは4人が登壇し、水俣病の教訓や課題、水銀規制などを説明した。田尻雅美研究員は、胎児性・小児生患者が長年受けてきた社会的な差別、チッソからの補償だけでは介護が立ちゆかない現状などを報告。「胎児性・小児生水俣病患者の多くは60歳前後になったが、現実とかけ離れた制度のために今も闘い続けなければならない」と語った。また、産業公害について、日本の教訓をタイでどう生かすか、現地の研究者らも講演した。

タイの環境NGOのペンチョム・セータン事務局長は、「水俣病は政府、国の政策の悪さによって起きた。もっと人の健康や環境を考慮したなら、水俣病だけでなく、工業汚染、公害病を起こすことはできないが、タイ政府はいま、人の健康より成長率を優先する発展計画をしている」と指摘した。聴衆の一人から「住民への被害を反省して、地域開発計画に盛り込んで欲しい。政府は環境に影響をもたらすすべての事業、活動をやめて欲しい」と要望があがると、大きな拍手が起こった。（斎藤靖史）



タイの集会で水俣病の被害の状況や課題などを説明する熊本学園大水俣学研究センターの研究員たち＝10日、バンコク

2016/09/11　日曜日

朝日新聞　朝刊

38　面　1　段

「水俣病みたいの繰り返してほしくない」　患者の坂本さん タイで講演

朝日新聞　2016年(平成28年)9月11日　日曜日

「水俣病みたいの繰り返してほしくない」

患者の坂本さん タイで講演

母親のおなかの中で水銀被害を受けた胎児性水俣病患者の坂本しのぶさん(60)＝熊本県水俣市＝が10日、水俣病の公式確認60年を機にタイ・バンコクで開かれた集会で講演した。環境団体や公害の被害者ら約200人を前に、被害の経験や自らの思いを語った。

集会は、バンコクの工場地帯での大気汚染や金鉱山の廃水による農村の土壌被害などを共同研究しているタイのチュラロンコン大と熊本学園大水俣学研究センターなどが主催した。

登壇した坂本さんは、こわばった手足に力を込めて語りかけた。「水俣は、チッソの廃水で、あたしたちは悪くないのに、病気になった。とても悔しいです」

原因企業チッソが海に流したメチル水銀に汚染された魚を母親が知らずに食べ、胎児期に脳の神経細胞に被害を受けた。会話や歩行が不自由な体で、中学3年だった72年には国連人間環境会議が開かれていたスウェーデン・ストックホルムを訪問。水俣病の被害を世界に訴えた。

以前は何十分も歩けたが、50代後半に体のこわばりなどの症状が悪化。今は人の支えがないと安全に歩けず、長距離の移動には車いすが欠かせない。そんな中、水俣病患者を支援するNPOを通じてタイ側から集会参加の打診を受けた。移動への不安もあったが、「水俣病みたいの、ほかの所で絶対に繰り返して欲しくない」と出席した。

この日は、子どもの頃に一生懸命練習して歩けるようになったこと、海外で被害を訴えてきたことなどを語った。タイは公害が社会問題化しているものの、水銀の使用などを規制する「水俣条約」に調印していない。坂本さんは「タイでも水銀のこと、ちゃんとして欲しいな、とか思っております。水俣みたいにして欲しくない」と訴えた。

話を終えると、会場から拍手がわき起こった。「あたしの話を、分かってくれたかな、と思ったの」。坂本さんはそう話し、顔をほころばせた。（斎藤靖史）



水俣病の経験を力を込めて語る坂本しのぶさん＝10日、タイ・バンコクのチュラロンコン大学

2016/09/24　　土曜日

朝日新聞　　朝刊

25　面　5　段

水俣で地震の備え考える講座　熊本学園大、27日から

水俣で地震の備え考える講座　熊本学園大、27日から

熊本学園大水俣学研究センターは27日から、水俣市浜町2丁目の市公民館で公開講座「熊本地震と水俣―地震への備えを考える―」を開催する。全5回。いずれも火曜日の午後6時半からで、受講は無料。

4月の地震発生直後から避難所の設置や運営、障害者支援に携わってきた同大の研究者らが、今後の地震にどう備えるべきかといった課題について考える。

講座の日程と内容、講師は以下の通り。詳細は水俣学現地研究センター（0966・63・5030）へ。

①27日、「益城町の被災状況」、和田要・同大社会福祉学部教授②10月4日、「災害後のまちづくり」、天野和彦・福島大うつくしまふくしま未来支援センター特任准教授③11日、「熊本地震からの復興と次の地震にどう備えるのか」、河田恵昭・関西大社会安全研究センター長④18日、「熊本学園大学の避難所の経験」、花田昌宣・熊本学園大水俣学研究センター長⑤25日、「被災地障害者支援」、東俊裕・同大社会福祉学部教授。（斎藤靖史）

2016/11/07　　月曜日

朝日新聞　　朝刊

23　面　1　段

被災地の大学 役割とは　「居場所」づくり目指そう　■熊本学園大（社会福祉学部の花田昌宣教授は・・・）

被災地の大学　役割とは

「居場所」づくり目指そう

■熊本学園大

6日、熊本学園大（熊本市中央区）で「地域に根付いた避難所の取り組みと被災者支援」をテーマにしたシンポジウムがあり、学生ら約270人が参加した。

4月14日の前震では同大学内の施設も被災したが、直後から一部施設で地域住民を受け入れ始め、ピーク時には約760人が避難。5月28日に閉所するまで、24時間態勢で教職員らを配置し、運営にあたった。

社会福祉学部の花田昌宣教授は「一人がぎっしりで、通路にもあふれていた。中には車いすの人もいた」と開設当初を振り返った。どのように受け入れられるか考えた結果、福祉避難所には移さず、学内のホールを専用に使うことにした。

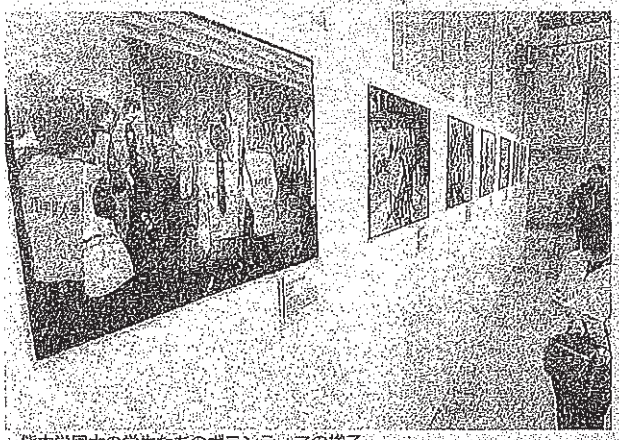
花田氏は「（学内には）日常的に障害がある人、高齢者と共に生きる社会があり、災害のときに後回しにしない発想を持つことができた」と話した。

付属幼稚園長を務める経済学部の長友敬一教授は避難所での子どもの支援について説明。地震後、幼稚園児から小学生を対象とした「こども広場」を開設し、地震の記憶におびえたり、余震に不安を感じたりする子どものケアを目的に、勉強や遊びなど自由に使ってもらったと報告した。

「居場所があり、『受け入れてもらえる』と感じてもらうことが大切。まずは寄り添うことだ」と長友教授。今回のような「被災者が被災者をケアする例」では、被災者が自分自身の限界を理解したうえで支援することが必要だとした。

大学の震災資料館では13日まで、特別資料展を実施中。地震直後の避難所やボランティアに取り組む学生の様子などを収めた写真の展示や、学生のインタビュー動画を流している。午前9時開館で、平日は午後8時、土曜は午後7時、日曜は午後5時まで。

被災地の大学はどうあるべきか――。熊本地震後の被災者支援や復旧・復興にあたる大学の役割や課題を考えるシンポジウムが5、6の両日、県立大と熊本学園大で相次いで開かれた。大学側や専門家は日常的に地域や要支援者らとつながることの大切さを訴えた。

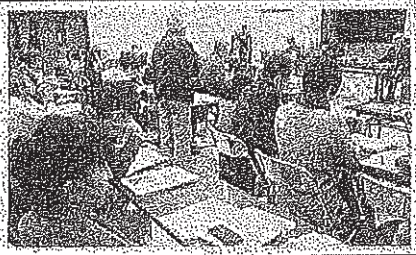


熊本学園大の学生たちのボランティアの様子を紹介する特別資料展＝6日、熊本市中央区

2017.01.08　日曜日
朝日新聞　朝刊
21　面　1　段
ﾁｯｿ救済の論点再考　水俣病研究集会　きょうまで

チッソ救済の論点再考

水俣病研究集会きょうまで



参加者からの質問を受ける発表者＝水俣市浜町2丁目の市公民館

水俣病の研究者や市民らが一体となって議論する水俣病事件研究交流集会が7日、2日間の日程で始まり、初日は、会場の水俣市公民館に約130人が集い、研究者ら7人が「水俣病原因企業と行政」などをテーマに報告した。

集会では、水俣病の原因企業チッソへの公的支援が決まった経緯について、当時の副社長が残した「内部メモ」の存在を確認したチッソ史研究者の矢作正氏がメモを中心にチッソ救済の是非の論点などを報告。参加者らが質問した。

また、水俣病行政に関わってきた元県健康福祉部長の森枝敏郎氏は1990年から、県水俣振興推進室で取り組んだ「水俣再生」の経緯を報告。多くの患者らを訪ねて意見交換を重ね、犠牲者慰霊式での水俣市長の謝罪を強く求めたという、近年は「水俣病問題に正面から向き合うことなく『教訓』『教訓』と言っている」と危惧も示した。

NHK熊本放送局の吉崎健ディレクターは、胎児性患者で公式確認の1956年に生まれた坂本しのぶさんの少女時代からの映像を披露。坂本さんが、障害を抱えながら和紙づくりや機織りといった「自分にできること」を懸命に模索する様子や、自身について「本当は逃げたいと思ったこともある。水俣病から逃げても逃げられない」「私にとって一日一日が大切だ」と語る場面などを紹介した。

8日は午前9時半から、「水俣病訴訟の現状と課題」などをテーマにした報告が予定されている。（奥正光）

2017.01.08　日曜日

朝日新聞　朝刊

29　面　1　段

チッソ救済「何のため」問う　元副社長メモ

水俣研究会で公表

チッソ救済「何のため」問う

元副社長メモ　水俣病研究会で公表

水俣病の原因企業チッソへの公的支援が決まった経緯を記した内部メモの存在を確認したチッソ史研究者の矢作正氏(65)が7日、その概要を発表した。チッソ救済の一方、患者認定審査が厳格化され、多くの認定申請者が棄却されたと指摘した。

矢作氏は元福岡大准教授で「工業化と社会」資料館（東京）館長。チッソ関係者の許可を得て同社保管資料を閲覧しメモを書き写した。舞台は水俣市で7日始まった恒例の水俣病事件研究交流集会で報告した。

メモは1977～89年に副社長を務めた久我正二氏（故人）がまとめた。作成時期は93年9月とみられる。70年代後半、チッソは患者への補償で経営が行き詰まり、関係省庁などに支援を求めて陳情を重ねた。内閣官房の渡辺の部分は、公的支援を検討する一方、患者との間で結んだ補償協定の改定や破棄をチッソに迫り返し注文。県知事には「補償金支出の抑止が欠落している」として、「患者に認定について厳しい姿勢を求めた」と記されている。

矢作氏は、これらの経緯がメモで明らかになったと指摘。県が県債を発行し国などから調達した資金をチッソに貸し付ける支援方式を政府が78年に閣議了解した直後、認定基準の厳格化につながる環境庁事務次官通知が出た。

矢作氏は発表後の取材で「チッソ救済と認定の厳格化の関係が地図できる。認定申請者の急増で補償にいくら必要になるか見通せない中、補償負担を抑えようとしたとみられる」とした。

「患者救済 隠れ蓑か」

補償実現に奔走した川本氏の長男

内部メモに二人の患者の名がある。患者たちの補償実現に奔走し、チッソや行政に敵視された。その長男は患者家族として経験を語り継いでいる。「チッソ救済は何のためだったのか」。加害者に問い続ける。

川本に対する東京高裁の逆転の判決。検察庁上告（1977年6月）





（右）。新たに出る環境庁事務次官通知をめぐり、「国で補償の面倒をみるかわりに（認定申請者の）窓口処分、つまり患者の切り捨てを進めようというものだ」と山田久就環境庁長官に訴える川本輝夫さんと（1978年8月、東京都千代田区の環境庁で）

川本氏の歩みは、一歩一歩、被害者の補償実現に進んだ歴史と重なる。自身は水俣病認定申請を旭本県に棄却されたが、現地庁に不服を申し立て、71年に逆転「認定された。この行動は環境庁事務次官通知に結実した。

「闘いは続いた。チッソには補償を迫まれ、71年12月から1年7カ月、東京のチッソ本社に座り込んだ。チッソ相手の損害賠償訴訟で勝訴した患者家族と共に交渉を続け、締結にこぎつけた補償協定は、今日に至るまで認定患者の補償の根拠になっている。

だが、久我氏のメモには、川本氏らが勝ち取った患者の抑制への国の冷やかな視線が浮かぶ。

その後、チッソは公的支援を受けて患者への補償を続ける一方、国は患者の認定棄却を厳格化し、被害の広がりを調べようともしなかった。「公的支援による患者救済はチッソ救済の隠れ蓑だったのでは」。大義は「（官房副長官から）最初に出た言葉は『川本など逮捕すべきだ』だった（同）。77年に副官に訪れた久我氏に官房副長官が語ったとされる言葉がメモに記されていた。

「切って捨てればいい人間たとそんなニュアンスを感じます」。川本氏の長男・亮一郎さん（58）は、このメモを読んで語った。

祖父・斎藤太さんは66年、急性劇症の水俣病と同様の症状を呈して69歳で死亡したが、水俣病と認定されなかった。その悔しさを晴らそうと、父・栄一郎さんは、そんな街の空気は裏向き和らいだと感じるが、一度流れて記憶が薄れただけでは。患者への理解が深まったとは思えない」。被害を訴える人の声はやまず、定棄症を厳格化し、被害の

（田中久稔）

2017.02.19　日曜日
朝日新聞　朝刊
31　面　6　段
水銀汚染　カナダから報告

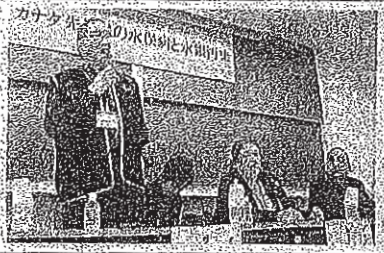
水銀汚染、カナダから報告

カナダの先住民居留地を襲った水銀汚染について報告する国際シンポジウム「カナダ先住民の水俣病と水銀汚染」が18日、熊本市中央区の熊本学園大で開かれた。カナダからの報告に約70人が聴き入った。

水俣病公式確認60年を機に同大水俣学研究センターが企画し、カナダ・オンタリオ州の居留地「グラッシー・ナロウズ」の長のサイモン・フォビスターさん（61）らを招待。カナダの水銀汚染は製紙工場が河川に排出した水銀に汚染されたり車庫や研修施設を活用したりしていたが、7月はそうした環境が整っていなかったという。県の担当者は「申し訳なく思っている」と話した。（大林浩志郎）

予定者の考えをじっくり聴く機会がない」と企画した。最初に立候補予定者に演説してもらい、その後、復興政策を中心に質問をぶつける。田中武夫代表は「復興に向かうこの4年間は極めて重要。肉声を聴き、最良の選択をする機会にさせたい」という。

県は、収容数の増加に対応するため、昨年夏ごろからコンテナハウスを設置したり車庫や研修施設を活用したりしていたが、7月はそうした環境が整っていなかったという。県の担当者は「申し訳なく思っている」と話した。（大林浩志郎）


カナダでの水銀汚染などを話すサイモン・フォビスターさん（左）

泥を取り除くよう言い続けている」と述べた。妻のルーシーさん（66）は、魚を食べ続けた犬や猫が震えるようになり死んでいったことを振り返った。自身は今でもつま先の痛みが夜に悪化する。「この苦しみは水銀からなのに、何の補償も受けていない」と訴えた。（奥正光）

■水俣病の不服請求審理

国の公害健康被害補償不服審査会は、水俣病の認定申請を棄却された京都市在住の男性（81）について17日に口頭審理を行った。症状を訴える男性に対し、棄却した鹿児島県は、家族の認定状況などを理由に男性が有機水銀の影響を受けた可能性はほとんどないと主張した。男性は不知火海に面した同県出水市高尾野町出身。水俣病が公式確認された1956年後半に大阪へ働きに出たという。同県によると、公的検診で両手足の先の感覚が鈍くなる障害を認めた一方、有機水銀の影響はないとして2012年10月に棄却。男性が不服審査請求をしていた。

口頭審理で、鹿児島県の本田豊洋・県環境林務課主幹は、有機水銀の影響を否定した県の判断について「男性が居住した地域に被認定者がなく、同時期に同居していた家族などにも被認定者がいない。海で魚や貝を取っていたというが、漁業の従事歴はない」と説明した。

2017/8/7　　月曜日
朝日新聞大阪　　朝刊
2　面　4段

被災障害者らへの「配慮」を考える
浪速区で巡回資料展

被災障害者らへの「配慮」を考える

浪速区で巡回資料展



昨年4月の熊本地震発生後、45日間にわたって被災した障害者や高齢者らを受け入れた熊本学園大学（熊本市）の取り組みをまとめた巡回資料展が、大阪市浪速区の大阪人権博物館で開かれている。

学校法人熊本学園などが主催。大学は4月14日の前震直後から障害者らを受け入れ、5月28日まで24時間態勢で避難所を運営した。その様子を記録した資料約40点が展示されている。

学生による炊き出しの光景や、車いすの人が使いやすいよう段ボールを使って高さを調整したベッドが並んだ避難所の写真パネルのほか、実際に避難所に張り出された情報発信のための模造紙なども紹介。10月からは奈良県御所市の水平社博物館で展示される。

障害を理由とした不当な差別を禁止する「障害者差別解消法」が施行されて1年以上。法は、障害者が壁を感じずに生活できるような「合理的配慮」を関係機関に求めている。

展示を構成した熊本学園大水俣学研究センターの井上ゆかりさんは「災害はいつ、どこでも起こりうる。被災地での『合理的配慮』について一緒に考えてもらえれば」と話す。

今月28日まで。19日には熊本学園大の花田昌宣教授、井上さんによる解説もある。入館料は大人600円、高大生300円、小中生200円など。日、月、火、第4金曜、祝日は休館。（山根久美子）

熊本学園大学に大勢が避難していた時の様子を撮影した写真パネルや、各地から寄せられたメッセージなどが展示されている＝大阪市浪速区

2018/1/7　月曜日
朝日新聞　朝刊
27　面　1　段

新潟水俣病判決などを議論　研究交流集会に市民ら１５０人

新潟水俣病判決などを議論

研究交流集会に市民ら150人

水俣病を巡る問題について、全国の研究者や専門家、市民らが議論する「第13回水俣病事件研究交流集会」が6日、水俣市公民館で始まった。この日は、新潟水俣病の患者認定をめぐる昨年11月の東京高裁判決などについて、研究者や弁護士らが集まった約150人と議論を深めた。7日まで。

東京高裁判決は新潟市が患者と認めなかった9人全員の認定を命じた。弁護団長を務めた高島章弁護士は「（勝訴判決の）予感はあった」と述べたうえで「判決によって行政認定が変わらないとすれば、訴訟が続発していく」と指摘した。

訴訟支援団体事務局の萩野直路さんは、感覚障害だけでも患者認定できる場合があるとした2013年の最高裁判決を受けて環境省が通知した新指針を、この東京高裁判決が「事実上否定する内容」と指摘。判決について、環境相が「現行の認定条件を変える必要はない」との認識を示したことについて、「なぜ改める必要はないと我田引水するのか、そこを問うていかないといけない」と話した。

熊本地裁だけで1300人以上の原告が原因企業チッソなどに損害賠償を求めている「ノーモア・ミナマタ第2次訴訟」弁護団の中島潤史弁護士は、水俣病被害者救済法（特措法）の「対象地域外にも多数の被害があることを明らかにしていく」と報告した。

対象地域外に住む原告の女性2人は「手のしびれや震えなどがあり家事がうまくできず自分を責めてきた」「（嫁ぎ先の店が）売った魚を食べて病気になった方を救済してほしい」などと述べた。（奥正光）

2018/1/8　　火曜日

朝日新聞　　朝刊

2　面　1段

水俣病団体アンケート　調査回答の半数「救済域外で被害」

水俣病団体アンケート 調査回答者の半数「救済域外で被害」

水俣病の公式確認60年を機に、11の患者・被害者団体を通じて実施したアンケートの分析結果を、熊本学園大学水俣学研究センターが7日、発表した。差別や偏見が続いていることや被害者への補償・救済を求める声が多いことを指摘した。

アンケートは朝日新聞社と水俣学研究センターが2016年に実施。9033人に送り、宛先不明で届かなかった分を除く8948人のうち同年5月までに2619人から回答があった。同センターは分析結果の中間報告をまとめ、水俣市であった水俣病事件研究交流集会で発表した。

回答者が「水俣病の被害を受けたと思う時」の住所は、水俣市と、水俣病被害者救済法（特措法）に基づく救済策の対象地域内が計48・6%。それ以外の地域が半数に達したことから、「濃厚な魚の汚染があったと考えられる地域だけを救済地域と限定している特措法の考え方では、多くの被害者を救済できない」と指摘した。

「自分が水俣病だと気づいたのはいつごろか」との問いには、10年前～30年前とする回答が合わせて6割強を占めた。分析で、1995年の政治解決策や救済策を機に水俣病の症状について認知度が高まった結果との見方を示した。

悪口や陰口、補償を受けたことへの非難などの差別・偏見を、自分や家族が経験したとの回答は30・7%で、「ここ数年」でも23・4%。水俣病に関する情報発信などの「啓発事業だけでは限界がある」とした。

原因企業チッソに最も期待することとしては「認定患者への補償を継続・充実させる」「幅広く被害者に補償する」を選んだ人だけで計8割を超えた。

同センターの研究の外部評価委員を務める前滋賀県知事の嘉田由紀子氏は発表を聞き「2600人余のデータの重さがある。この結果は有用なものがあり、生かしてほしい」と述べた。センターは詳細な分析を続ける予定。（田中久稔）



新成人「町復興に貢献」

熊本地震で大きな被害を受けた益城町の町文化会館で7日、成人式があった。町では275人が成人を迎えた。

この日は進学や就職で町を離れていた新成人も帰省し、会場では振り袖やはかま姿で「久しぶり！」などと笑顔で再会を喜び合った。

式典では、西村俊則町長が「町の復興は少しずつ進んでいる一方、今も多くの町民が仮設住宅やみなし仮設住宅で不自由な暮らしをしている」とあいさつ。「新成人のみなさんにも町復興に力を貸してほしい」と語りかけた。

新成人代表として登壇した同町広崎の熊本学園大学2年、山名陸斗さん(20)は自宅で本震に遭い、地震後は町役場近くでボランティアに参加。「壊れた建物の除去、割れた道路の修復など、一つずつ着実に前へと進み出しています。町のために何か小さなことでも貢

熊本総局
TEL 096・352・4131
FAX 096・326・4170
熊本市中央区花畑町1-10
八代支局 0965・34・9822
人吉支局 0966・22・4022
天草支局 0969・22・2435
阿蘇支局 0967・22・0134
玉名支局 0968・72・2747
水俣支局 0966・63・2477

購読申し込みのご用件
(7~21時)
0120・33・0843
広告のご用は
朝日広告社 322・1001
チラシのご用は
熊本 328・3577

きょうの天気

6~12時 降水確率 12~18時

熊本	20	20
阿蘇	20	20
本渡	20	20
水俣	20	20
人吉	20	20

熊本	南西	西	水俣
阿蘇	南西	西北西	人吉
本渡	南西	湿度 80%	

気温

	最高	最低
熊本	14度	8度
阿蘇	12度	4度
本渡	16度	7度
水俣	17度	10度
人吉	13度	6度

あす

熊本	西北西	北北西	水俣
阿蘇	西南西	西北西	人吉
本渡	西	湿度 50%	

1月9日
(旧11月23日)

日出	7:20
日入	17:28
月出	0:12
月入	12:17
月齢	21.9

2018. 9. 9　日曜日
朝日新聞　朝刊
33　面　1　段

ヒ素汚染記録　次世代へ　医師・堀田宣之さん　熊本学園大に寄贈　カルテなど公開中

ヒ素汚染記録 次世代へ

医師・堀田宣之さん 熊本学園大に寄贈

カルテなど公開中

宮崎・土呂久の公害など国内外のヒ素汚染の調査を続けた医師堀田宣之さん(77)＝熊本市＝の所蔵した資料が熊本学園大学に寄贈され、5日から公開されている。堀田さんが各地で診たヒ素中毒被害者のカルテなどが含まれており、大学によると全国に例がない資料群という。

寄贈されたのは紙資料（468点）のほか書籍（168点）と写真資料（3775点）。このうち紙資料が先行公開され、大学の水俣学研究センターがウェブサイトに目録を掲載した。堀田氏が1975年以降、国内外のヒ素汚染地域で検診をした際のカルテや、土呂久公害訴訟での論点整理メモ、ヒ素中毒が全身病であることを立証するための論文などがある。今後、書籍やヒ素中毒患者の患部などを撮影した写真も公開する予定。

堀田さんは65年に熊本大学医学部を卒業し、73年に熊大体質医学研究所気質学部門の助手になった。同部門の助教授だった故・原田正純医師と共に水俣病の調査をする一方、宮崎県高千穂町・土呂久のヒ素中毒患者に水俣病に似た神経症状があることに関心を持った。75年から土呂久や同県木城町・松尾の鉱山跡に通い、90年に土呂久公害訴訟が和解するまで被害者の医学的調査に関わった。

その後、2011年までに海外二十数カ所のヒ素汚染地域を訪れて症状を調査し、ラオスやベトナム、フィリピンなどで軽症のヒ素中毒被害の広がりを突き止めた。これらの功績で10年に第22回久保医療文化賞を受賞。同年には原田医師の呼びかけに応じ、水俣病と同様のメチル水銀中毒被害が起きているカナダの先住民居留地の調査にも加わっている。現在は桜が丘病院（熊本市）理事長。

学園大は水俣病事件の全体像の解明などのため、資料の収集とデータベースの作成を進めている。堀田さんの資料は16年5月、一時保管していた民間の資料館「来民文庫」（山鹿市）を介して寄贈され、整理作業を経て公開された。

5日は大学で発表会見があり、堀田さんは「ヒ素中毒は胎児への影響など解決していない課題が多い。資料が保存されれば将来何かに役立つ時があるかもしれない」と期待を語った。水俣学研究センター長の花田昌宣教授は「資料には住民一人ひとりの症候の記録が含まれている。アーカイブで次の世代に引き継ぎたい」と話した。

（田中久稔）



寄贈した資料について幸田亮一・熊本学園大学長（左）に説明する堀田宣之さん＝熊本市中央区大江2丁目

2019.8. 30　　金曜日

朝日新聞　　朝刊

25　面　1　段

「世界に水銀の怖さ伝えたい」　胎児性水俣病患者・松永さん　ＣＯＰ３へ意気込み　（２０１７年８月に発効した「水銀に関する水俣条約」について考える講演会が 28 日夜、水俣市公民館であった。（熊本学園大の中地重晴教授（環境化学）が、水銀規制の現状と課題について話し、・・・）

「世界に水銀の怖さ伝えたい」

胎児性水俣病患者・松永さん　COP3へ意気込み

2017年8月に発効した「水銀に関する水俣条約」について考える講演会が28日夜、水俣市公民館であった。熊本学園大の中地重晴教授（環境化学）が、水銀規制の現状と課題について話し、今年11月にスイス・ジュネーブで開かれる同条約の第3回締約国会議（COP3）に参加を予定している胎児性水俣病患者の松永幸一郎さん(66)が、意気込みを語った。

講演会は、発効から2年となった同条約の課題などを学ぼうと、市民有志らでつくる同条約推進ネットワーク（MICOネット）が開き、市内外から約60人が参加した。

中地教授は、昨年の第2回締約国会議（COP2）の概要を説明し、「今年の11月に汚染サイトの管理に関するガイドラインを議論するという話なので、注目すべき時期に来ている」と指摘。「私たちより後の世代へ悪影響を及ぼさないため、きちんと汚染サイトに残る水銀の対策をしていく必要がある」と述べた。

松永さんは11月、MICOネットの一員としてCOP3に参加する予定。この日の参加者に向かって、卓いすが欠かせなくなった自身の体調に不安を抱えながらも、「思い切って行こうと決意した」と告げた。何を世界へ伝えたいか、こう綴った。

「世界中の人に水銀の怖さを知ってもらいたい。患者は一生この病気とつき合わなければならず、治る薬もない。いま世界の国々がきちんと規制をしなければ、未来の子どもたちが私たちと同じような被害を背負うことになるかもしれない。日本が犯した過ちを繰り返さないでほしい」（興正晃）



第3回締約国会議（COP3）に向けた思いを述べる松永幸一郎さん＝水俣市公民館

2019. 10. 18　　金曜日

朝日新聞　　朝刊

27　面　5　段

特措法１０年・・・「被害調査できていない」　水俣病の講座　熊本学園大で元参院議員・松野信夫さん

特措法10年…「被害調査できていない」



水俣病の講座 熊本学園大で元参院議員・松野信夫さん

水俣病に関わる専門家や市民による連続講座「水俣学講義」が17日、熊本学園大（熊本市中央区）であり、元参院議員で弁護士の松野信夫さん(68)が水俣病訴訟や政治解決策の歴史について語った。法案づくりに深く関わった水俣病被害者救済法（特措法）が定める「健康にかかる調査研究」が、2009年の立法から10年を経てなされていない現状に苦言を呈した。

松野さんは、原因企業チッソだけでなく国、県の責任も問うた水俣病第3次訴訟の原告弁護団に参加。参院議員時代、第2の政治解決策として議員立法で成立した特措法の法案づくりに、当時野党の民主党の作業チーム座長として携わった。与党案に基づきチッソの分社化と清算・消滅を可能にする仕組みが盛り込まれたため、法案の採決では棄権した。

講義では、チッソ分社化や、特措法に基づく救済策の対象地域外に症状のある人が残されていることを問題視。「これだけの被害が出ているのに、きちっとした被害調査、汚染調査ができていない。特措法にも調査の項目は入ったが行われていない。問題点は残ったままだ」と述べた。

松野氏によると、特措法の調査研究条項は与野党協議で民主党が要求した。取材に「被害の実態を明らかにできれば、と入れさせた。政治家や大臣がやろうとしなければ環境省は動かない」と語った。（田中久稔）

2016/03/28　月曜日
西日本新聞　朝刊
30　面　5　段

水俣病公式確認60年　「終わってない」胎児性患者訴え　水俣市、シンポ最終回

を求める」とする不知火海沿岸住民の健康調査についても、具体的にどう国を動かすのか、その本気度が問われていく。農業県にとって環太平洋連携協定（TPP）への対応も待ったなし。これまで以上に指導力と実行力が試される。（前田淳）

「終わってない」胎児性患者訴え

水俣市、シンポ最終回

水俣病公式確認から5月1日で60年を迎えるのを前に、患者団体などでつくる実行委員会の「水俣病事件60年を問うシンポジウム」（3回）の最終回が27日、熊本県水俣市で開かれた。胎児性患者の坂本しのぶさん（59）が「年齢を重ねると症状がだんだん悪くなり、将来が不安。水俣病は終わらない」などと、解決にはほど遠い現状を語った。

坂本さんは「水俣病問題は全く変わってない。同世代（の被害者）にも未認定の人がいる」と支援を呼び掛け、「国も県も、逃げてはだめだ」と訴えた。

水俣病問題の研究者や支援者からは、メチル水銀汚染が広がった不知火海沿岸以外も含めた広範な被害の全容解明を求める意見や、環境省主導の地域事業への疑問が示された。熊本学園大水俣学研究センター長の花田昌宣（まさのぶ）教授は「謝罪と補償を求める被害者にどれだけ償っているのか」と、行政や原因企業チッソを批判した。（河野潤一郎）

水俣病 公式確認60年



少女時代の写真を背景に、水俣病の被害や将来の不安を語る坂本しのぶさん（左）＝27日、熊本県水俣市

カーコン倶楽部
カーコン自信
www.shineiner.com
クルマは家族
信家自動車株式会社
TEL. 092-771-9048

衛星ひとみ通信途絶

姿勢異常で電力不足か

宇宙航空研究開発機構（JAXA）は27日、プラックホールなどの観測を目指し2月に打ち上げたエックス線天文衛星「ひとみ」との通信が26日午後からほとんど途絶え、衛星の状態が確認できなくなったと発表した。衛星の飛行姿勢に異常が生じ、太陽電池で発電できずに電力不足に陥った可能性があるという。今後、通信の復旧を目指し作業を続ける。

JAXAによると、ひとみは高度約580キロの軌道を周回中だが、軌道にずれが生じている可能性もあり

2016/05/15　日曜日
西日本新聞　朝刊
13　面　1　段
読書館　郷土の本　いのちの旅「水俣学」への軌跡　原田正純著

読書館

郷土の本



いのちの旅 「水俣学」への軌跡

原田正純著

世界に例をみない健康・環境破壊をもたらした水俣病は、今年、公式確認から60年の節目を迎えた。だが、その教訓は十分に生かされているだろうか。

本書は、熊本大医学部で水俣病を研究し、一貫して患者の立場から診断と研究を行い、人類の負の遺産として「水俣」を捉え直して未来を展望する「水俣学」を提唱した原田正純医師（1934～2012）が書き残した随筆と行動の記録だ。

全体は、①「水俣学」の原像②忘れ得ぬ人びと③地球を蝕む水俣病④繰り返される過ち⑤希望の世紀めざして―の5章で構成され、各章とも1編1200字程度の連載ともいえる短文が集められている。

例えば、水俣病研究半ばでがんで死去した新潟大の医師の話は胸を打つし、現地破壊の現場をアジア、アフリカ、中南米に訪ねた「中国の水俣病」「ビクトリア湖にも」などは貴重な記録だ。また、巻末に収録されている花田昌宣・熊本学園大教授の解説は、原田氏の仕事と「水俣学」を俯瞰する内容となっている。

2002年に本紙などに連載した原稿をもとに刊行された単行本を、節目の年に文庫化した。

（岩波現代文庫・920円）

万国レシピ博覧会

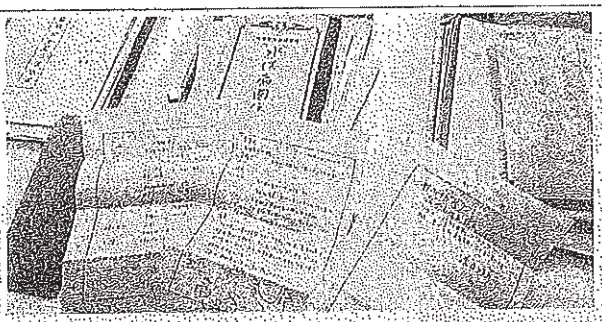
津田尊子、松隈美紀著

仕事や結婚、留学などで故国を離れ、福岡に暮らす外国人12人が教える母国の家庭料

2016/06/06　月曜日
西日本新聞　朝刊
26　面　1　段

水俣病公式確認60年　水俣病史 新資料発見　「有機水銀説」の過程詳述　元熊大学長・故鰐淵氏が記録　熊本学園大で保管

水俣病史 新資料発見



熊本地震後に見つかった鰐淵健之氏の文書。患者発生報告（手前の3枚）や水俣病関係とするノートがある＝5月31日、熊本市中央区（写真の一部を加工しています）

元熊大学長・故鰐淵氏が記録

「有機水銀説」の過程詳述

水俣病 公式確認60年



鰐淵健之氏（熊本大ホームページから）

熊本学園大で保管

熊本学園大（熊本市中央区）で、水俣病関係の新たな資料が発見された。元熊本大学長の故鰐淵健之氏が、水俣病の原因として「有機水銀説」を発表した熊本大医学部研究班の会議録などを詳細に記したノートなどで、熊本地震で散乱した資料を整理する中で見つかった。所蔵する熊本学園大水俣学研究センター長の花田昌宣教授は「公式確認60年の水俣病史を発生初期から記す貴重な資料も含まれている。分析できていない資料も多く、精査したい」と話している。

文書は熊本学園大の一室に保管されていた。水俣病被害が拡大し始めた1950年代、鰐淵氏は熊本大学長（1950～59年）を務めており、当時から80年代までのノートや書簡、患者発生報告書など計約300点が入っていた。

「水俣病関係」と表題がある会議録ノートには、「有機水銀をシロネズミに経口投与すると（水俣病の）症状が出ている」などと、医学部研究班が有機水銀説を発表する直前の生々しいやりとりが描かれている。

鰐淵氏の弟子とされる研究班リーダーの徳臣晴比古氏（2014年死去）が鰐淵氏に送った「水俣病患者発生報告（六十九人目）」には、1959年の男性患者の症状を「3・10 舌がもつれ始め」などと日付入りで記録。「毎日刺し身をタベ欠かしたことなく」と摂食状況も記している。

当時のチッソ水俣工場長が、存命中の患者について「（死亡した場合）解剖した脳を分けてほしい」と依頼する文書もあった。

鰐淵氏は48年に旧熊本医科大学長、59年には旧厚生省食品衛生調査会水俣病特別部会の委員代表などを歴任。熊本大医学部研究班の会議で報告を受ける立場にあり、それを記録していたとみられる。

研究班は64年に水俣病研究の成果を書籍で刊行したが、鰐淵氏個人が記したメモにはこれまでにない研究の舞台裏が記されている可能性がある。

鰐淵氏は61～69年まで熊本学園大の前身の熊本商科大学長を務めており、同大は資料の解析を進め、デジタベース化する予定。

（河野潤一郎）

2017/1/8　　月曜日
西日本新聞　　朝刊
20　面　5　段

「61年目」伝え方など課題議論　水俣病の研究交流集会開幕　きょう医学や訴訟　現状報告　130人参加

水俣病の研究交流集会開幕

きょう医学や訴訟 現状報告

130人参加

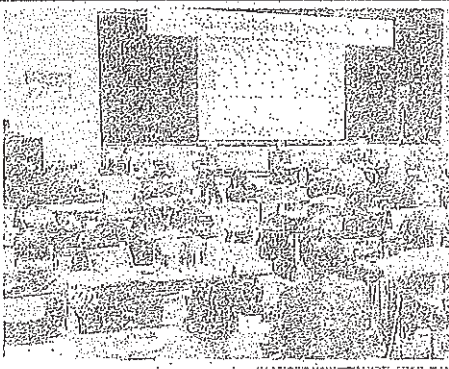
「61年目」伝え方など課題議論

水俣病の研究者や医師、患者・被害者の支援者らが全国から集まり議論する「第12回水俣病事件研究交流集会」（実行委員会主催）が7日、水俣市の市公民館で2日間の日程で始まった。初日は7人が六つのテーマで研究内容を報告、公式確認から61年目を迎える水俣病の伝え方や地域再生について意見を交わした。

元県健康福祉部長の森枝敏郎氏は1990年から5年間、水俣再生に取り組んだ経験などを振り返り、「問題に正面から向き合うことなくして、教訓は生まれない。過去にふたをし、歴史を塗り替えることは許されない」と強調した。

NHK熊本放送局の吉崎健ディレクターは、胎児性患者の坂本しのぶさん(60)を記録した59年から現在までの映像を見せ、今後の課題などを説明した。加齢とともに進む症状の悪化や親の高齢化、生きがい探しに焦点を当て、「まだ60歳。これからどう生きていくのか、人として関心を持ってもらいたい」と訴えた。

集会は、水俣病研究の第一人者で医師の故原田正純氏が始めた勉強会を引き継ぎ、今年は約130人が参加。8日は午前9時半から、医学や訴訟の現状などについての報告がある。（河合仁志）



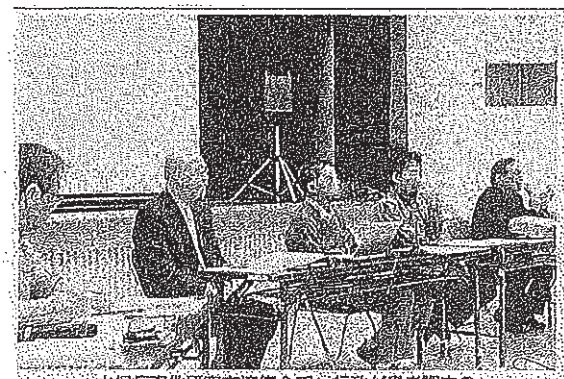
水俣市で始まった第12回水俣病事件研究交流集会

2017/1/9　月曜日
西日本新聞　朝刊
22　面　1　段

毛髪水銀濃度、行政の線引き　「認定の壁」批判相次ぐ　水俣病の研究交流集会閉会

毛髪水銀濃度、行政の線引き
「認定の壁」批判相次ぐ
水俣病の研究交流集会閉会

全国の水俣病研究者や医師、支援者たちが意見を交わす「第12回水俣病事件研究交流集会」（実行委員会主催）は最終日の8日、水俣市の市公民館で医学や訴訟、環境汚染について報告があり、閉会した。行政が水俣病発症の境界値と見なし、患者認定の壁ともなっている毛髪水銀濃度などを中心に議論し、研究者や医師から「行政に都合のいい線引き」「科学的な根拠がない」との批判が相次いだ。



水俣病事件研究交流集会で、行政が患者認定の目安としている水銀濃度などについて参加者と意見を交わす医師や研究者

世界保健機関（WHO）は1990年、成人で神経症状の出現が疑われるメチル水銀の最小値を毛髪水銀濃度で50ppmと規定。国や県は患者認定の際の目安と位置づけ「訴訟でも『50ppmを超える汚染がない限り発症する』とはない（新潟市）」などと主張している。

新潟水俣病訴訟で未認定患者を支援する椿忠雄医の丸山公男・新潟青陵大教授は65～86年に実施した診断結果を基に「50ppm未満でも安全ではなく、国や県の勝手な論理」と指摘。阪南中央病院（大阪府）の三浦岸医師は基準値が採用された経緯に触れて「動物実験や海外の事例から得た何の意味もない数字で、既に時効だ」と非難した。

このほか、熊本学園大の中地重晴教授（環境化学）が、2014年と昨年、水俣湾周辺で実施した水銀などの底質調査や、昨年3月に市民5人を対象に食事に含まれる水銀濃度を調べた結果を報告。「底質中の水銀濃度は全国の平均値より10～70倍高く、食事についても継続して調査する必要がある」と述べた。（河合仁志）



ミュージカル「CATS－IN ASO」でネコを演じる出演者たち

歌声で熊本を元気に

2017/2/19　　日曜日

西日本新聞　　朝刊

16　面　5　段

カナダの水銀被害訴え

熊本学園大で国際シンポ　先住民が報告

カナダの水銀被害を訴え

熊本学園大で国際シンポ 先住民が報告

カナダの先住民居留地で起きた水銀汚染について考える国際シンポジウムが18日、熊本市の熊本学園大で2日間の日程で始まった。初日は、先住民代表のサイモン・フォビスターさん(61)ら3人が現地の現状や健康被害補償について報告し、「住民のニーズに合った補償になっておらず、制度の再構築を政府に要求している」などと語った。

カナダ中南部のオンタリオ州では1960年代以降、製紙工場の廃水に含まれた水銀で川が汚染され、その後住民らに健康被害が現れた。75年に医師の故原田正純さんらが先住民たちの健康調査を行い、汚染の実態を公表。86年、カナダ政府などは「水俣障害委員会」を設け、神経症状などがある住民に補償金を支払う仕組みを作ったが、厳しい基準になっているという。

フォビスターさんは「原田さんは『水俣病が発生している』と言ったが政府は認めていない。川底の水銀除去も十分ではなく、背景には先住民への差別がある」と訴えた。別の地区に住むマーヴィン・リー・マクドナルドさん(54)は「末娘が水銀中毒症と診断された時も州政府からは何の説明もなかった」と語った。

19日は水俣市の市公民館で、水俣病被害者の報告や先住民たちとの討論も行われる。(河合仁志)



水銀汚染の被害について語るカナダ先住民代表のサイモン・フォビスターさん(左)たち

復興支援団体育成へ

熊本地震からの復興を支える地元の支援団体を育成しようと、NPO法人のジャパン・プラットフォーム(東京)が主催する集合講座が17日、熊本市で始まり、支援団体や行政関係者など約40人が参加した。

2017/2/20　月曜日
西日本新聞　朝刊
16　面　5　段

カナダと交流を継続　水銀国際シンポ閉会
水俣学研究センター

カナダと交流を継続
水銀国際シンポ閉会
学園大水俣学センター

カナダの先住民居留地で起きた水銀汚染について考える国際シンポジウムは最終日の19日、水俣市の市公民館で水俣病被害者や現地で調査に当たった医師の報告があり閉会した＝写真。主催した熊本学園大水俣学研究センターは2年に1回、両国を相互に訪問し、交流を続けていくことを確認した。

2010年に居留地を訪れ、検診をした協立クリニック（水俣市）の高岡滋院長は神経所見などを基に「カナダと日本のメチル水銀被害者の症候は類似している」と説明。医師による診察が現地で適切に行われていないとして「（日本と同様に）医学が行政にコントロールされてしまっている」と指摘した。

同センターの花田昌宣センター長は「現地では10代の多くに感覚障害があるのが驚き。カナダ国内での関心は低く、引き続き調査や交流を続けていきたい」と語った。（河合仁志）



事件・事故

◆芦北町の畑で火災、男性やけど　19日午前10時45分ごろ、芦北町告の畑約5千平方㍍を焼く火事があった。芦北署によると、畑を所有する近くの平岩正義さん（85）が現場で倒れており、両膝にやけどを負って病院に搬送された。命に別条はないという。

2018.1.7　日曜日
西日本新聞　朝刊
1　面　1段
水俣病の研究交流集会　開幕

弁護士ら国認定基準を批判
昨年の高裁判決評価高く

西日本新聞

水俣病の研究交流集会開幕

昨年の高裁判決評価高く

弁護士ら、国認定基準を批判

水俣病の研究者や医師、支援者などが全国から集い議論する「第33回水俣病事件研究交流集会」（実行委員会主催）が6日、水俣市の市公民館で2日間の日程で始まった。初日は水俣病の認定基準を国の現行基準より幅広くとらえた昨年11月の東京高裁判決など、八つのテーマで8人が研究内容や訴訟経過を報告。約170人が参加して公式確認から62年目を迎える水俣病について意見を交わした。

新潟水俣病の認定申請を一の弁護団長を務めた高島章業和さんは9人全員を患者と認定するよう命じた昨年11月の東京高裁判決で、訴訟を念じた新潟市の判断を「下が出た」と説明。上告を断念した国は「良い方向で判決と考えたのではないか」と語り、背景に認定基準を現状のまま維持したい国の思惑があったと推測した。

熊本地裁でも、患者認定などを求める同様の訴訟が続いており、高島氏は「認定制度が今回の判決で変わらないとすれば、訴訟が続発して国は批判を浴び続けることになる」と指摘。訴訟を支援した故野呂瑛さんは「今回の判決はこれからの水俣病の解決に向けて大いに力づけられ、方向性が出た」と語った。

水俣病の患者認定を求めて係争中の原告を診断している三浦洋医師は、行政が発症の境界値とみなしている毛髪水銀値を「不当」と

（第3種郵便物認可）



水俣市であった研究交流集会で、出席者の質問に答える高島章弁護士（左）

で開かれた「水銀に関する水俣条約」第1回締約国会議に参加した胎児性患者の坂本しのぶさんらの報告のほか、水俣病の問題解決に向けた研究発表などがある。毎年、水俣市で開催。7日は、昨年9月にスイス

（河合仁志）

した上で、発症時期に関する国側の主張にも「根拠がない」と批判した。

集会は水俣病研究の第一人者で医師の故原田正純氏らが始めた勉強会を引き継ぎ、

マルルなど人気者と再会

熊本市動植物園　観覧エリア拡大

熊本地震で地面の液状化などの被害が出て、上日祝日限定で開園している熊本市動植物園（熊本市東区）との再会を心待ちにしていた。

の復旧工事が進んだため観覧エリアを広げた。ホッキョクグマのマルル（3歳、雌）など、人気の動物たちは6日、立ち入り制限区域

当事者会の結成提案

地震被災　熊本市でシンポ　みなし仮設入居者ら

みなし仮設住宅の入居者や、熊本地震で損壊した家に住み続ける「在宅被災者」が直面する課題を話し合うシンポジウムが6日、熊本市中央区の熊本学園大であった。みなし仮設入居者が地元を離れた孤独感を訴えると、みなし仮設や

荒尾市の夏祭り「あらお荒炎祭」の実行委員会（会長・浅田敏彦荒尾市長）は、祭りをPRする2018年版Tシャツのデザインを募集している。31日まで。Tシャツの売り上げは、祭りの運営資金に充てる。

応募は1人3点までで、市外からも受け付ける。生地はブラックとグリーンの2種類あり、①山の炎②海の炎③大地の炎④人の情熱の炎―

夏祭りPRから5万円採用作に

Tシャツのデザイン募集

31日まで、採用作には5万円

のデザインを最大3点まで、ゼンヤ

（6

2018. 1. 8　　月曜日

西日本新聞　　朝刊

18　面　1　段

水銀汚染多角的に議論
坂本しのぶさん「私の言葉伝わった」

水俣病事件研究交流集会が閉幕

（第3種郵便物認可）

坂本しのぶさん「私の言葉伝わった」

カナダ先住民居留地の浄化対策報告

水銀汚染多角的に議論

水俣病事件研究交流集会が閉幕

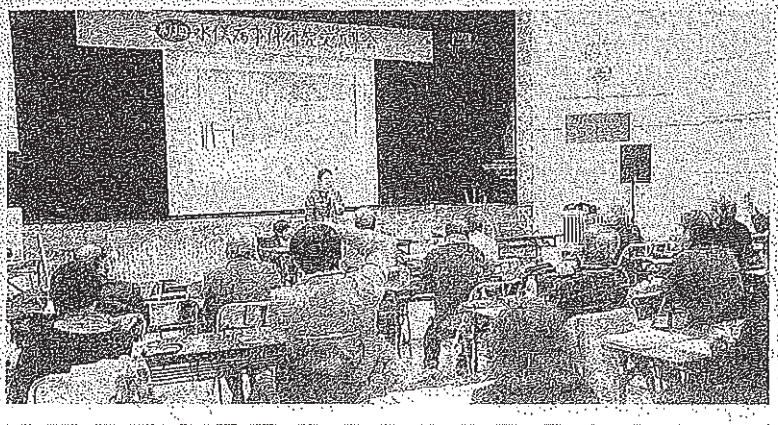
全国の水俣病研究者や医師、支援者たちが意見を交わす「第13回水俣病事件研究交流集会」（実行委員会主催）は最終日の7日、水俣市の市公民館で、胎児性患者の坂本しのぶさんらの報告があった。カナダの先住民居留地で起きた水銀汚染に関する現状や、熊本学園大水俣学研究センターの活動を伝える発表もあり、「終わらない水俣病」を取り巻く課題の整理を中心に議論を深めた。

昨年9月にスイスで開かれた「水銀に関する水俣条約」第1回締約国会議に参加し、水銀被害の根絶を訴えた坂本さんは「私の言葉が伝わったと思う」と話した。付き添った支援者の谷由布さんは「いろんな人と会う機会が得られ、充実した10日間だった」と振り返った。

カナダ先住民の水銀被害を研究する和光大（東京）の森下直紀講師（環境学）は、現地の州政府が昨年6月、汚染した河川の浄化に10年間で計約76億円の資金拠出を決定したことを報告。厳しい環境基準を設けて環境回復を図る計画も紹介し、「健康被害の判断基準の改善も含め、今後の動きを注視していきたい」と語った。

集会後には、水俣病の認定基準を国の現行基準より幅広くとらえて、新潟水俣病の認定申請を棄却された9人全員を患者認定するよう命じた昨年11月の東京高裁判決を踏まえた会合も市公民館であった。

高島章弁護団長は「1人でも認定患者を多く勝ち取ることが課題。この判決を具体的な成果につなげるため協力したい」と強調。訴訟支援団体事務局の萩野恒路さんは「今回の判決で訴訟のハードルが下がった。訴訟の輪を広げて、国の現行基準の見直しを求めていきたい」と述べ、活動への期待感を語った。会合を主催した水俣病被害者・支援者連絡会は、環境省や県への働き掛けを強める考えを示した。（河合仁志）



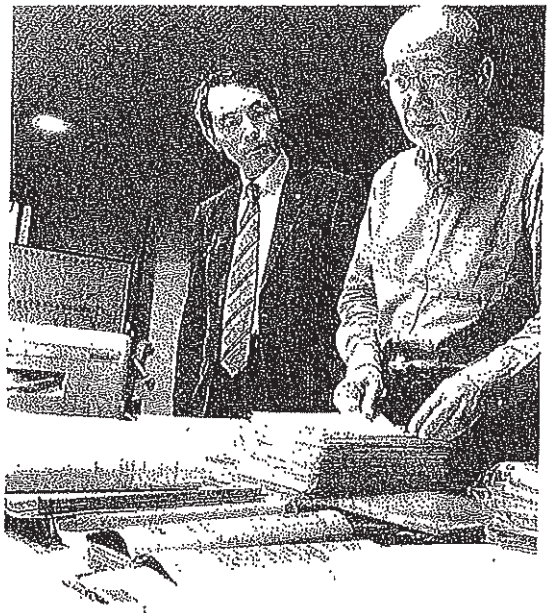
胎児性患者の坂本しのぶさんらが報告した「水俣病事件研究交流集会」

2018.9.6　木曜日
西日本新聞　朝刊
26　面　1　段
土呂久鉱害研究資料468点公開　熊本学園大学データベース化

土呂久鉱害研究資料468点公開

熊本学園大 データベース化

宮崎県高千穂町の土呂久鉱害をはじめ国内外でヒ素中毒被害の研究に長年取り組んできた熊本市の病院理事長堀田宣之さん(77)の研究資料を、熊本学園大(熊本市)がデータベース化し、5日から目録の一般公開を始めた。同大は「ヒ素中毒の調査研究として世界的に貴重」とし、堀田さんは「民間や大学の研究者が活用してくれればうれしい」と語った。



寄贈の堀田さん「広く利用して」

堀田さんは熊本大医学部を卒業後、1973年に同大体質医学研究所気質学部門の助手に。同部門助教授だった故原田正純さんとともに、公害問題に取り組んだ。

74年、国立熊本病院で偶然診察した女性が土呂久地区で働いており、水俣病に似た神経症状があったことがきっかけで、ヒ素中毒の問題に関心を持った。

2011年ごろまで国内外で患者約千人を検診し、慢性ヒ素中毒が全身症状を及ぼす病態であることを証明。土呂久地区の住民が企業を相手に起こした訴訟では、住民側証人として法廷で証言した。「ヒ素中毒について深く知りたい」という探求心が原動力になったという。

資料は、堀田さんの友人が運営する私設図書博物館「来民文庫」(熊本県山鹿市)で保管していたが、「広く利用してほしい」と16年に水俣学研究センターがある同大に寄贈した。

寄贈資料は、堀田さんが検診した患者のカルテや写真、ヒ素中毒に関する論文、訴訟で提出した証拠資料など約4千点。今回、468点の目録をまとめ、センターのホームページで公開した。原本は6日からセンターで閲覧できる。

堀田さんは「ヒ素中毒には未解明な部分もあり、今後も研究を進めてほしい」。花田昌宣センター長は「全身に神経症状があるヒ素中毒は、水俣病と共通点が多い。公害研究に役立ててほしい」と呼び掛けた。(壇知里)

寄贈した資料を手にする堀田宣之さん(右)と熊本学園大の幸田亮一学長＝5日午後、熊本市

2018.10.4　　木曜日

西日本新聞　　朝刊

24　面　1　段

次世代が語る　水俣学講座　（水俣学公開講座）　一緒に学ぶ平和　“共”育　修学旅行生に沖縄戦を伝える　株式会社がちゆん社長　国仲瞬さん（25）

（第3種郵便物認可）　西

一緒に学ぶ平和〃共〃育

修学旅行生に沖縄戦を伝える

戦争体験者や公害被害者が高齢化し、多くがいなくなっていく中、記憶の風化を乗り越え、次世代に何を、どう伝えていくのか。「負の歴史」の継承をテーマにした公開講座（熊本学園大水俣学研究センター主催）が2日、水俣市で始まった。毎週1回、沖縄戦や原爆、水俣病などの四大公害をテーマに計5回、各地の取り組みが報告される。初回は、沖縄への修学旅行生に平和学習のプログラムを提供している「株式会社がちゆん」（沖縄県中城村）社長の国仲瞬さん（25）が講話した。各回の講座の内容を随時紹介していく。（河合仁志）

―琉球大在学中、実現型討論サークルを立ち上げ、翌年に起業を決意した。修学旅行生と地元の大学生による対話型平和学習は学校関係者の間で評判となり、受け入れ先の学校が増えていったという

修学旅行生との交流も最初はボランティア活動だった。沖縄戦を教えることや語ることはできないが、共に考え、共に育つ「共育」ならできると考えた。

2014年、糸満市にある全戦没者の名が刻まれた「平和の礎」で、ある生徒が「あの崖は戦争を語り継ぐ場所だ。ここで多くの人たちが死んでいった所だろ」と言っているのを聞いた。こんな子が夢中になる学習プログラムを作らないと、沖縄戦や基地のことは若い世代から無視されていくと感じた。この出会いが起業につながった。



「伝える側の悩みも含めて、修学旅行生に一緒に考えてもらうことを意識している」と話す国仲瞬さん

株式会社がちゆん社長

国仲　瞬さん（25）

くになか・しゅん　1992年、沖縄市生まれ。曽祖父が沖縄戦没者。琉球大在学中の2013年5月、実現型討論サークル「がちゆん」を設立。由来は「がち」（本気）で「ゆんたく」（沖縄の方言でおしゃべりの意味）すること。翌年、修学旅行生を対象に平和学習プログラムを提供する「株式会社がちゆん」を起業。県のアドバイザーや沖縄市平和行政推進委員なども務めている。25歳。

―資料館の見学や、語り部など体験者の証言、講話を聴く取り組みは全国にあるが、子どもたちに学ぶ姿勢がないと本当に伝えたいことは伝わらない。想像力や当事者意識を持ってもらうために工夫をこらす

例えば事前学習で生徒が集った体育館を沖縄本島に見立てて、簡単に沖縄戦を再現していく。生徒に住民役となってもらい、史実に基づいた質問を投げ掛ける。「なぜ、米軍は日本軍の反撃をほとんど受けずに上陸できたのか」など。答えは2択。頭を使いながら、沖縄戦の情報を得てもらう。米軍普天間飛行場ができ、周辺に人が密集した経緯も体を動かしながら学ぶという仕掛けがある。

平和の礎には24万人の名前がある。一人一人の命が奪われたのが沖縄戦。生徒には「3時間後にこの人についてガイドをしてもらうから、調べてきて」と指示する。平和の礎や近くの平和祈念資料館で個人について探索し、後で別の生徒の前で発表してもらう。これが伝える側に回るというプログラム。伝えるために考え、終わってからも反省点が見つかる。これこそが学習効果だと思っている。

―体験者、証言者の高齢化が進み、いずれはゼロの時代を迎える。がちゆんの活動も正念場だ

「人に会いに行くタクシー」プラン」がある。戦跡などの場所ではなく、1人の体験者の視点で、ゆかりの場所を巡り、最後に本人から話を聞く。事前に案内役の学生が丹念に調べないといけないので、学生が継続的に学ぶ仕組みにもなっている。体験者の高齢化や減少でだんだんできなくなっている。映像で残している証言を編集するなどして効果的に使うことを模索しないといけない。

体験者には戦前の生活についても聞き、記録している。戦争が起きた原因を生活者の目線から追うことも重要だ。戦争に至るまでの雰囲気とはどんなものなのか、追体験する学習を通して平和の意味を考える教材を提供していきたい。

2018.10.14　日曜日
西日本新聞　朝刊
18　面　1　段

次世代が語る　水俣学講座　随時掲載　身近な環境問題に目を　四日市公害から学んだこと　自然観察指導員　谷崎仁美さん（３４）

（第3種郵便物認可）

身近な環境問題に目を

四日市公害から学んだこと

「負の歴史」の継承をテーマに各地の取り組みを報告する公開講座（熊本学園大水俣学研究センター主催）の第2回目（9日開催）は、自然観察指導員三重連絡会の事務局長、谷崎仁美さん(34)が「四日市公害から学んだこと。今、私たちにできること。」と題して講話した。

―環境問題に関心を持った大学生時代、生まれ育った三重県四日市市の塩浜地区で、深刻な大気汚染公害が起きていたことを知り、衝撃を受けた

母校の市立塩浜小は、国が大気汚染の著しい地区にあると指定した学校で、当時は空気清浄器を取り付けたり養護教諭を増員したり

していた。私が通った時期も、水道の蛇口が40個並ぶ場所が計6カ所あり、低学年時は頻繁にうがいをして

いたのに、公害被害地としての意識は薄かった。こんなに近くでこんなにひどいことが起きていたことを知らず恥ずかしくなった。

―市環境学習センターの指定管理者となった民間企



「得意分野の人に伝える活動を通して、地域を良くしていきたい」と語る谷崎仁美さん（熊本学園大水俣学研究センター提供）

自然観察指導員

谷崎　仁美さん(34)

たにざき・ひとみ　1984年、三重県四日市市生まれ。青森大大学院で環境教育学を専攻。愛知県環境調査センター勤務を経て、2009年、四日市市環境学習センターを指定管理者制度で運営する民間企業「アクティオ」の社員に。15年３月、市の資料館「四日市公害と環境未来館」の開館に伴い、同社が環境学習イベントの企画、運営を業務委託されたため、スタッフとして活動。若者有志でつくる団体で、地域の環境保全にも取り組んでいる。34歳。

2018.10.20　土曜日

西日本新聞　朝刊

22　面　1　段

次世代が語る水俣学講座　戦後の被害伝える責任　被爆２世として生きる　山口被曝二世の会代表　寺中正樹さん（５６）

（第3種郵便物認可）

戦後の被害伝える責任

被爆2世として生きる

次世代が語る
水俣学講座
随時掲載

「負の遺産」の継承をテーマに各地の取り組みを報告する公開講座（熊本学園大水俣学研究センター主催）の3回目（16日開催）は、山口被爆二世の会代表の寺中正樹さん（56）＝山口市＝が「被爆二世として生きる」と題し講話した。

山口大在学中、重度の身体障害者が「地獄の中で共に生きられる社会を作ろう」と訴え、ビラ配りをしている姿に目からうろこが落ちた。原爆の後遺症で満足に働けず、生きるだけで大変な父の姿が重なった。

「貧困や障害や病気は個人の責任ではなく、生きづらくしている社会にこそ問題があるという障害者たちの考えに共感した。病弱な父を見下していた私自身に差別の意識があったことに気づき、父の苦しみも理解できるようになった」

障害者や介護する仲間たちとの活動を通して、被爆2世としての役割を考えるように。20代半ばで被爆二世の会を立ち上げた。

「2世たちは、いつガンなどの病気になるか分からないという不安を常に抱えている。共通の心理が固い結束につながっている。私たち世は、戦後、親世代がどれだけ被爆の影響で苦しんできたか、日常生活に支障をきたしていたかを伝えることもできる。私の場合は、夏場に父の毛根から白い糸のような膿が出ていたことなど、子ども施」を訴えてきた。突き動だから知っていることもある」

当事者ではないことを理由に、伝承する活動に踏み出せない人も少なくない。死去や高齢化に伴い、語ることができない被爆者に代わってできることを約30年、考え続けてきた。

「今、被爆者の会の運動を担っているのは、被爆当時0～5歳くらいまでの人たち。73年前の記憶はなくても、家族から聞いた話や、戦後を生き抜いた体験そのものが証言だ。2世の場合も、被爆の実情が分からないからいろいろな人と交流して話を聞いて補完している。一般の人も思いがあれば、活動に参加できるし、実際に支援者の力なしに会を運営していくことはできなくなっている」

被爆者や2世に対する偏見が根強い中で、先頭に立って「国による援護策の実かしてきた思いがある。

「被爆の影響は、2世、3世へと時空を超えて続いていくと考えている。私たちが声を上げないと、原爆被害の全体像は見えない。伝えていく責任がある。原爆投下直後の状況だけが被害ではない。73年たっても、この先も、影響がないとは誰にも言えない」

「当事者の証言を私たちが引き受けていくと同時に、3世、4世の伝承役を育てていかないといけない。孫世代に当たる小、中学生の作文を文集に載せたり、一緒に署名活動をしたりして、子どもたちに当事者意識を持ってもらえるようにしている」

（まとめ・河合仁志）



「被爆2世には被害の実態を伝えていく責任がある」と語る寺中正樹さん

山口被爆二世の会代表

寺中　正樹さん(56)

てらなか・まさき　1961年、山口県旧周東町（現岩国市）生まれ。父が14歳の時、広島駅近くで被爆。自身も10歳の時、急性出血性ぼうこう炎に。山口大で障害者解放運動に出合い、86年に兄らと山口市被爆二世の会を立ち上げた。昨年2月、国に被爆2世への援護対策を求める集団訴訟の原告となり、国の不作為を問うている。全国被爆二世団体連絡協議会副会長、山口市原爆被害者の会事務局長。56歳。

2018.10.29　　月曜日

西日本新聞　　朝刊

18　面　1　段

次世代が語る　水俣学講座　随時掲載　被害者の言葉を後世に　「公害経験」を伝えること

（第3種郵便物認可）

被害者の言葉を後世に

「公害経験」を伝えること

次世代が語る　水俣学講座　随時掲載

「負の遺産」の継承をテーマに各地の取り組みを報告する公開講座（熊本学園大水俣学研究センター主催）の4回目（23日開催）は、弁護士であおぞら財団理事長の村松昭夫さん（64）＝大阪＝が「あおぞら財団の活動と公害経験を伝えること」と題し、講話した。

村松さんは弁護士になった直後、大阪市西淀川区の住民が阪神工業地帯の主要企業10社と国、旧阪神高速道路公団を相手に、健康被害への損害賠償などを求めた西淀川公害訴訟の弁護団に加わった。1995年3月、726人の原告と企業側が和解。翌年、和解金を基に設立されたのが、地域との和解金で次の世代のための再生を目指す公益財団法人の「あおぞら財団」だ。

「提訴は、私が弁護士になる前の78年4月。20年かかって国、公団とも全面解決に至った。被害者と企業との

2018.11.7　　水曜日

西日本新聞　　朝刊

18　面　1　段

次世代が語る　水俣学講座　最終回
水俣・芦北公害研究サークル　高木実さん（61）　“真実”を見極める力を　水俣病を学び伝えていく

（第3種郵便物認可）

“真実”を見極める力を

水俣病を学び伝えていく

次世代が語る 水俣学講座 最終回

「負の遺産」の継承をテーマに各地の取り組みを報告する公開講座（熊本学園大水俣学研究センター主催）の最終回（10月30日開催）は、水俣・芦北地域の小中学校教諭などでつくる水俣・芦北公害研究サークルの高木実さん（61）＝水俣市＝が「水俣病を学び伝えていく」と題し、講話した。

高木さんは1980年代後半、水俣市立水俣第一中勤務時に、教育現場で水俣病の授業を実践していた同サークルに参加。社会科教諭として水俣病をどう伝えるかを模索してきた。

「社会科は主権者教育と言ってもいい。選挙の際に自分の判断で投票先を決める、（候補者の）政策の善しあしを理解する―。そういう目的意識で教えている」

サークルは、水俣病患者が原因企業チッソに全面勝訴した第1次訴訟判決（’73年）後の76年に結成。判決の記述はごくわずかだった。サークルで作った資料集『水俣病・授業実践のために』を機に患者への差別は影をひそめつつあったが、偏見は今よりも強く残っていた。被害者と加害者が同居する現地で関係者の子どもいる中、敬遠されがちなテーマをあえて教材にして教育現場に風穴をあけてきた。

「教室にはチッソ社員の子も患者家族もいる。過去にはサークルの資料集を持つのも躊躇された時期があったが、今はほとんどの教員が手にしている」

「帝国書院の地理の教科書に『公害のまちから生まれ変わった水俣市』と題したコラムがある。『八代海に面する水俣市では、1950～60年代にかけて、神経や筋肉がおかされる水俣病が発生しました』と記述されている。生徒たちには『これで誤解を生まないかな？』と質問する。この文章だと、水俣病の発生した場所が水俣市だけだと思う人がいる。不知火海全域に広がったという認識が必要だ」

総合学習の時間に患者・家族や支援者など地元の人を講師に招く他、生徒を地域に連れ出して学習する「地元学」を採用してきた。

「公害研究者の故宇井純さんは『権限や情報を持っている立場の人たちの何倍も勉強しないと、本当のことが伝えられず、だまされていても見抜けない』という趣旨の発言をしていた。水俣病の歴史でも、権力を持つ人たちが情報を操作し、被害者に不利なことをしてきた事実がある」

「生徒たちには『本当かな？』と疑問に思う癖をつけてもらいたい。インターネットに出ていることをうのみにせず、自分で考える。直接、現場に行ったり話を聞いたりして、納得したことを大切にしてもらいたい。検証を積み上げていけば『問題の本質に迫れるし、解決の仕方が見えてくる。じっくり考えが、何となく正しいかな、と思うことは危うい。真実を正しく知るという力を養っていきたい」と思っている」

（まとめ・河合一恵）



「水俣病の学習を通して、何となくではなく自ら検証して事実を正しく知る力を生徒たちに養っていきたい」と話した高木実さん

水俣・芦北公害研究サークル
高木　実さん（61）

たかぎ・みのる　1957年、福岡県志免町生まれ。八代高、佐賀大卒業後、熊本市立龍田小に勤務。85年、水俣市立水俣第二中に社会科教諭として着任。その後、水俣・芦北公害研究サークルに入り、水俣病の授業実践に取り組む。全国組織のサークル、地理教育研究会員。今年3月に水俣市立袋中を定年退職、現在は再任用で市立緑東中に勤めている。61歳。

2019.9.10　　火曜日

西日本新聞　　朝刊

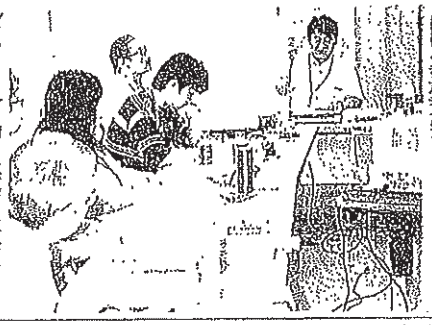
24　面　1　段

水俣病　若手研究者学ぶ　講義や患者の声を聞く

西日本新聞　2019年(令和元年)9月10日　火曜日

水俣病 若手研究者学ぶ

講義や患者の声を聞く



花田昌宣センター長（奥）の講義に耳を傾ける参加者たち

講義やフィールドワークを通じて水俣病の現状と課題を考える「若手研究セミナー」が6～8日、水俣市内であった。各分野の研究者や大学院生ら8人が、熊本学園大教授らの講義を受け、被害が多発した地域で患者らの声に耳を傾けた。

水俣病問題を分野や国境を越えて研究する「水俣学」の取り組みを共有し、それぞれの研究に生かしてもらおうと、同大水俣学研究センターが主催して今年で6回目。

初日は花田昌宣センター長が講義し、水俣病問題の解決策として、被害者本人が患者認定の申請をするのではなく、行政が健康管理手帳を一律に配布する制度を提案。対象地域や年代は被害者団体と協議し、症状があれば補償する仕組みにすれば、認定申請をためらう被害者も広く救済できるとした上で「偏見、差別が残る中、現行制度では被害者全員の掘り起こしは無理」と指摘した。

2日目は参加者が3グループに分かれ、胎児性患者や患者認定を巡り係争中の被害者から体験談を聞いた。早稲田大大学院修士課程3年の坂本一途さん(25)は「初めて被害者と話して実感した。全てが貴重な経験になった」と話した。（村田直隆）

2019.9.20　金曜日
西日本新聞　朝刊
26　面　3　段

引きこもり支援　水俣で公開講座
２４日から受講者募集

ひきこもり支援 水俣で公開講座

24日から 受講者募集

熊本学園大水俣学研究センターは24日から、ひきこもりをテーマにした公開講座「『ひきこもり』を知る・考える―『個人の問題』で片づけてしまわないために」を水俣市浜町2丁目の市公民館で開く。毎週火曜開催の全4回。受講無料。

初回は、県ひきこもり地域支援センターの富田正徳所長と西田稔参事が、行政による支援の現場について紹介。10月1日は、九州大大学院医学研究院の加藤隆弘講師が、海外との比較調査を通じて国内にひきこもりの問題が多い背景を語る。

同8日は、熊本学園大社会福祉学部の城野匡教授が、児童・思春期外来の取り組みを講演。同15日は、水俣市社会福祉協議会の秋山真輝主任相談支援員が同協議会の活動を報告する。

4回とも午後6時半から。各回ごとに受講できるが、事前申し込みが必要。同大水俣学現地研究センター＝0966（63）5030。

2019. 9. 26　木曜日
西日本新聞　朝刊
24　面　1　段

公開講座「ひきこもり」を知る・考える　県支援センター　西田稔参事・富田正徳所長　「関わり」見直す機会に（熊本学園大学水俣学研究センター主催）

公開講座「ひきこもり」を知る・考える ①

県支援センター　西田稔参事・富田正徳所長

「関わり」見直す機会に

引きこもりをテーマにした公開講座「『ひきこもり』を知る・考える―『個人の問題』で片づけてしまわないために」（熊本学園大水俣学研究センター主催、計4回）が24日、水俣市公民館で始まった。10月15日まで週1回、行政の支援や海外との比較調査、児童・思春期外来などの取り組みを報告する。各回の講座の内容を随時紹介していく。（村田直隆）

初回は、県ひきこもり地域支援センターの西田稔参事と富田正徳所長が「『ひきこもり』が問いかけるもの」をテーマに講話した。

最初に壇上に立った西田氏は、電話での個別相談や交流会、家族向けのセミナーなどセンターの業務を紹介。「できることは多くなく、何が正解かわからないが、家族と一緒に考えている」と話した。

その上で、最初に相談に訪れることが多い家族の支援をきっかけに、本人の支援、集団での交流、就労支援へと段階を踏む重要性を強調。「本人の状態に合わせて進むことを最優先に考えている」と述べた。家族も疲弊している場合が多いため、「地域社会が孤立を防ぐ取り組みが大事」と付け加えた。

家族が本人に接する際には、「いつになれば学校に行くの」「親が亡くなったら、あなたは生きていけないよ」などという意見の押し付けを控えることを勧め、「一番苦しんでいる本人に共感する言葉を掛け、安心できる環境をつくることを考えて」と訴えた。

続いて登壇した富田氏は、インターネットなどで「引きこもりは犯罪予備軍」という偏った意見が散見される現状について「支援している側にとっては非常に厳しい」と危機感を示した。

引きこもり支援の際、「信用できない」「恥をかきたくない」などの理由で拒否する人がいる一方で、「このままでは不安」「親の顔を立てる」などの理由で支援を受け入れる人がいる、という研究資料を紹介。「どちらも大変な葛藤の中にいる。人間関係の再開には、それだけ大きなエネルギーが必要だということ」と分析した上で「引きこもりの問題を考えるにあたって、人との関係や社会との関わりを見直す機会にしてほしい」と、自戒を込めて訴えたい」と締めくくった。



「『ひきこもり』が問いかけるもの」をテーマに講話する富田正徳氏



県ひきこもり地域支援センターの取り組みなどを紹介する西田稔氏

2019.10.3　　木曜日

西日本新聞　　朝刊

20　面　1　段

公開講座「ひきこもり」を知る・考える（2）　九州大病院精神科神経科　加藤隆弘講師　社会回避生む「恥」の文化　　（引きこもりをテーマにした公開講座（熊本学園大学水俣研究センター主催）の第２回では、九州大病院精神科神経科の加藤隆弘講師が１日夜、「国際調査で見えてきた『ひきこもり』の課題―なぜひきこもりは日本におおいのか？」と題して話した。・・・）

公開講座「ひきこもり」を知る・考える　②

社会回避生む「恥」の文化

九州大病院精神科神経科　加藤隆弘講師

引きこもりをテーマにした公開講座（熊本学園大水俣学研究センター主催）の第2回では、九州大病院精神科神経科の加藤隆弘講師が1日夜、「国際調査で見えてきた『ひきこもり』の課題―なぜひきこもりは日本に多いのか？」と題して話した。

加藤氏はまず、引きこもり状態にある日本の未成年と成人の症例を示し、要因や支援、治療法などをどう考えるのか、米国やオーストラリア、インド、韓国など8カ国の精神科医ら23人にアンケートした結果を紹介した。



国際調査を踏まえ引きこもりについて語る加藤隆弘氏

調査では、全ての国の医師が「引きこもり状態にある人」が存在すると回答。治療法について「何もしない」と答えた精神科医が日本だけだった一方で、韓国では「積極的に閉鎖病棟で治療する」とする回答が半数以上。「同じ引きこもりでも、国によって扱われ方が全然違う」と述べた。

日本社会の特性として「日本人は安心を求め、レールから外れないような教育を受ける」ことを挙げ、「会社に入ると突然レールがなくなり、多くの人が戸惑う」と分析。「リスクを冒すことができる信頼社会」である米国と比較して、不安を抱きやすい環境にあると指摘した。

さらに、民話「鶴の恩返し」を例えに「自分の姿を見られると、その場にいられなくなる」と、「恥」という日本文化にも言及。「少し部屋が汚いだけで、他人を家に入れたくないという心性を持っていないか」と会場に問いかけ、「日本人は引きこもり行動を起こしやすい文化、社会で生きている」と語った。

最後に加藤氏は「誰もが一人一人、心の中に引きこもり的な部分がきっとある。そこに共感していけると、そんなに引きこもりが問題にならない社会になるのではないかと思っている」と訴えた。

（まとめ・村田直隆）

KUMAMOTO

配達の問い合わせ
購読の申し込みは
0120-44-0120
（午前7時―午後8時）

▽熊本総局
〒862-0975
熊本市中央区新屋敷
1-5-1
☎096(362)5111
FAX(362)5113
▽荒尾・玉名支局
☎0968(63)0127
FAX(63)0157
▽阿蘇支局
☎0967(22)3507
FAX(22)3513
▽人吉支局
☎0966(22)3326
FAX(22)3576
▽水俣支局
☎0966(63)2357
FAX(63)2366
▽天草通信部
☎FAX
0969(24)7977

あすの潮（中潮）
旧暦9月6日
月齢6.4
月出6.13　月入17.59
月出11.53　月入22.13

		満潮	干潮
4日	三角港	12.26 23.57	6.02 18.21
	水俣港	12.24 23.50	6.04 18.19
	長洲港	— 12.35	6.12 18.31
	牛深港	11.59 23.05	5.17 17.43

2019.10.4　　金曜日
西日本新聞　　朝刊
20　面　5　段

「部落差別は現在の問題」　荒尾市で花田教授講演（水俣学研究センター長）

調印式で草村町長は「互いの魅力を再発見し、共同で発信しながら、両町の交流人口、外からの関係人口を増やしていきたい」。出席した同連合の長谷川昭憲常務理事は「合併した多くの自治体が、そのメリットを実感できずにいる。これからは小さな町村の緩やかな連合体が強みを発揮していく時代になるのではないか」と話した。（佐藤倫之）

「部落差別は現在の問題」

荒尾市で花田教授講演

人権・同和問題講演会が荒尾市であり、熊本学園大社会福祉学部の花田昌宣教授が「部落差別の現状と課題」と題し講演した＝写真。市社会人権・同和教育推進協議会などの主催。



9月28日の講演で、花田氏は2016年施行の部落差別解消推進法について「部落差別が現在もあることを初めて法律に書き込み、そこを差別解消への出発点にしていることが画期的」と評価。実際にこの10年に起きた被差別部落への差別を助長する発言や調査、インターネットの書き込みなどを紹介し「決して過去の問題ではないことを知ってほしい」と訴えた。

その上で「部落差別は社会全体の問題。部落解放同盟や運動体に任せればいいというのは筋違いで、一緒に取り組もうという発想が大事。原則は一人一人の命の尊厳を大事にしていくことだ」と呼びかけた。（宮上良二）

2019.10.10　木曜日

西日本新聞　朝刊

22　面　1　段

公開講座「ひきこもり」を知る・考える（3）　熊本学園大学社会福祉学部　城野匡教授　転機の時に支える準備を

公開講座「ひきこもり」を知る・考える　③

転機の時に支える準備を

熊本学園大社会福祉学部　城野匡教授



未成年の引きこもり支援について語る城野匡氏

引きこもりをテーマにした公開講座（熊本学園大水俣学研究センター主催）の第3回では、精神科医で熊本学園大社会福祉学部教授の城野匡氏が8日夜、「児童・思春期外来を通して考える『ひきこもり』支援」と題して話した。

城野氏は今年3月まで熊本大病院に勤務。現在も週1回、診療に当たっている経験を踏まえ、引きこもりや不登校の状態にある未成年の心体が変化してきたことに着目。「一昔前は、自己の確立などで悩み、試行錯誤するけどうまくいかない人がいた」とする一方、「今は学校で会う周囲への過剰な不安から不登校になる場合が多い。悩みというより怖くて避けているので、成長のための支援がより必要」と分析した。

続いて、2017年に熊本大病院で診察した引きこもりなどに悩む未成年約120人が、精神医学的にどんな症状があったかを示すグラフを紹介。「医療的に対応しているのはごく一部」と前置きした上で、「約半数は（脳の）過敏やこだわりの強さといった障害がある）自閉症スペクトラムと診断され、そういう人への対応をしている」と話した。

城野氏は、本人との関係を途切れないようにすることを最重要視し、引きこもりから抜け出すための「いい偶然」に出合えないかを常に模索しているという。「まずは家族とのコミュニケーションから始め、教室に入らなくても学校と少しでもつながっていくことで、期待通れるきっかけづくりを地道にやっている」と話した。

同時に、円滑な人付き合いの方法などを身に付けるよう促しているといい、「どこで転機が訪れるかわからないが、変化したときに助けとなるような準備しておくことが大事」と訴えた。

（まとめ・村田真隆）

熊本
KUMAMOTO

配達の問い合わせ
購読の申し込みは
0120-44-0120
（午前7時～午後8時）

▽熊本総局
〒862-0975
熊本市中央区新屋敷
1-5-1
☎096(362)5111
FAX(362)5113
▽荒尾・玉名支局
☎0968(63)0127
FAX(63)0157
▽阿蘇支局
☎0967(22)3507
FAX(22)3513
▽人吉支局
☎0966(22)3326
FAX(22)3576
▽水俣支局
☎0966(63)2357
FAX(63)2366
▽天草通信部
☎FAX
0969(24)7377

あすの潮（中潮）
月齢9月13日 12.4
月出 8.18 月入 17.50
月出 16.51 月入 3.36

11日		満潮	干潮
三角港		7.16	1.26
		19.46	13.50
水俣港		7.14	1.22
		19.43	13.31
長洲港		7.26	1.35
		19.56	13.40
牛深港		6.25	0.36
		18.57	12.41

2020.01.12　　日曜日

西日本新聞　　朝刊

18　面　1　段

水俣病研究交流集会始まる　「差別根絶へ教育重要」　元高校教諭　体験踏まえ報告

西日本新聞　2020年(令和2年)1月12日　日曜日

水俣病研究交流集会始まる
「差別根絶へ教育重要」
元高校教諭 体験踏まえ報告

水俣病の研究者や医師、支援者らが集い議論する「第13回水俣病事件研究交流集会」(実行委員会主催)が11日、水俣市浜町の市公民館で始まった。12日まで。初日は約170人が参加し、「教育」「係争中の訴訟」の2分野について報告があった。



教育と水俣病をテーマに語る石井雅臣さん

教育に関する報告では、熊本学園大水俣学研究センター客員研究員の元高校教諭石井雅臣さん(67)が登壇。水俣高で1年生の担任だった1982年、授業で水俣病研究の第一人者である医師故原田正純氏の講演の読書会をしたことを振り返った。

一部関心な生徒が多い中、ある女子生徒が授業の終盤、患者らを撮影した米国人写真家の故ユージン・スミス氏の写真集を手に、「この写真は私のお姉ちゃんです。お姉ちゃんを殺したチッソが憎い。みんな水俣病をもっと真剣に考えてほしい」と声を振り絞ったという。

石井さんは、女子生徒の思いに気付かず、「教師面をしていた自分を恥じた」と告白。その後、公害教育を続けたが、チッソ関係者や職場の上司から圧力を受けたという。現在の水俣病教育も不十分と感じるといい、「今なお続く差別をなくすには、正しく教育で取り上げていくことが重要」と強調した。

また、水俣病被害者救済法に基づく救済策から漏れた人らが原告となった集団訴訟弁護団の村山雅則弁護士が現状を報告。救済策の対象地域外に住みながら一時金が支給された約千人分の居住地が、国と県が提出した資料で判明したことに触れ、「ほかのデータも開示させ、今後の開いに生かしていくことが、われわれに求められている」と述べた。

集会は原田氏らが始めた勉強会を引き継ぎ、毎年水俣市で開催している。(村田直隆)

2020.01.13　　月曜日

西日本新聞　　朝刊

16　面　1　段

被害者への中傷　脱却を　水俣病研究集会最終日　国の差別も問題視

西日本新聞　2020年(令和2年)1月13日　月曜日

被害者への中傷 脱却を

水俣病研究集会最終日 国の差別も問題視

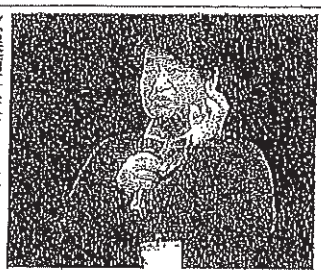
水俣市で開かれた「第15回水俣病事件研究交流集会」は最終日の12日、水俣病を巡る社会的な課題や医学的研究に関する報告があった。水俣病被害を訴えたために地域社会内で批判される問題や、訴訟を巡る国の対応について意見を交わした。

熊本学園大水俣学研究センター長の花田昌宣教授（社会福祉学部）は、行政から水俣病と認定されていない被害者が「ニセ患者」と言われ苦しむ問題について講演。「補償金目的」「水俣のイメージが悪くなる」と批判され被害を訴えにくくなる構図があることを解説した。

国、県側が水俣病を巡る訴訟で提出した文書に「水俣病認定が受益的処分である以上、申請者や家族等において虚偽あるいは誇張した供述をする誘引があることは否定できない」と、申請者が金銭目的でうそをつくかのような記述をしたことを問題視。「国が堂々と露骨な差別発言をしている」と批判した。

その上で「これらの事実をきちっととらえ、ひっくり返していく必要がある。被害者個人というより、地域社会で抵抗力を持ったコミュニティーをつくるしかない」と問題を共有して対応する重要性を指摘した。

また、協立クリニック（同市）の高岡滋院長は、水俣病を巡る訴訟で被告の環境省に依頼され、日本神経学会が国側の主張を追認する内容の「見解」を作成したことに言及。「（見解の根拠となる）観察（健康調査）が欠落しており、医学の根本から逸脱している」と非難した。（村田直隆）



水俣病事件研究交流集会で現状の課題を語る花田昌宣氏

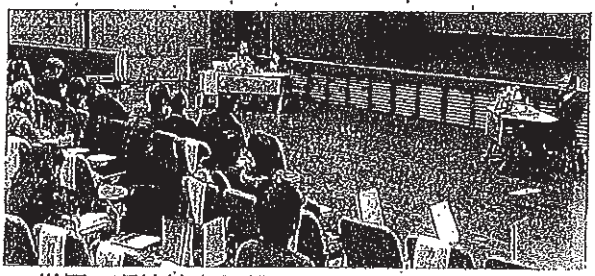
2019/02/23　土曜日
南日本新聞　朝刊
30　面8　段

熊本市で環境フォーラム
水俣病教訓世界へ発信
「偏見根強い」調査報告

熊本市で環境フォーラム

水俣病教訓 世界へ発信

「偏見根強い」調査報告



世界の環境被害などについて話し合う国際フォーラム　＝22日、熊本市の熊本学園大

水俣病の教訓を国内外で生かすため、世界の環境被害や課題について話し合う国際フォーラムが22日、熊本市で始まった。熊本学園大の水俣学研究センターなどが主催し、今回で3回目。国内と東アジア、カナダから被害者や研究者ら約110人が集まり、各国の状況を報告した。

韓国から来日した趙淳美さん(49)は、加湿器用の殺菌剤に含まれていた有害物質の影響で、重いぜんそくを患っていることを報告。被害者への支援や、問題を風化させないことの大切さを訴えた。

水俣学研究センター長で社会政策が専門の花田昌宣教授(66)は基調講演で、水俣病の公式確認から60年となった2016年に実施した、患者や被害者らを対象とした調査結果を報告。回答した261人のうち約2割が「差別や偏見がつらい」としたことを紹介し「なお偏見が根強く、水俣病を隠して話せない人がいる」と指摘した。

国際フォーラムは24日、熊本県水俣市で討論が行われて閉幕する。

2019/02/25　月曜日
南日本新聞　朝刊
25　面 10　段

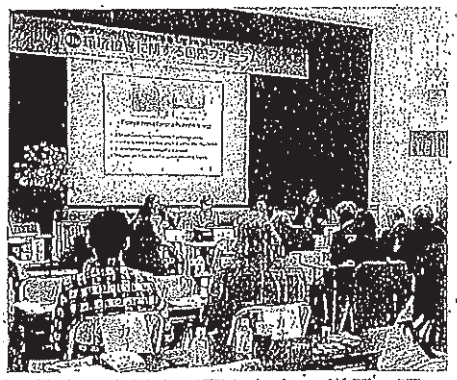
公害被害なくせ　国際交流を確認　水俣フォーラム閉幕

公害被害なくせ 国際交流を確認 水俣フォーラム閉幕

水俣病の教訓を国内外で生かそうと、世界の環境被害をテーマにした国際フォーラムが24日、熊本県水俣市で開かれ、国内と東アジア、カナダの被害者や研究者ら約100人が今後の課題などを討論した。地球上から公害をなくすため、被害者や支援者らが交流を深めていくことを確認し、同日閉幕した。

フォーラムは熊本学園大の水俣学研究センターなどが主催。3回目の今回は、初日の22日に参加者らが熊本市に集まり、各国の状況を報告した。

2日目のフォーラムでは、河川の水銀汚染の被害者、カナダのジュディ・ダ・シルバさん(57)が「産業を発達させた影響で私たちは同じように病に苦しんでいる。団結して助け合うことが大事だ」と強調した。「水俣病被害者互助会」の佐藤英樹会長(64)は、水俣病が解決しない理由は「被害者に向き合っていないからだ」と指摘。国や加害企業などに対し、被害者の声に耳を傾け、十分に補償するよう求めた。



熊本県水俣市で開かれた、世界の環境被害をテーマにした国際フォーラム　＝24日午後

2019/04/17　水曜日
南日本新聞　朝刊
27　面1　段
素人の力を生かす　熊本学園モデル　学生らで柔軟運営
福祉避難所は今　熊本地震から3年㊦

素人の力を生かす

熊本学園モデル

学生らで柔軟運営

福祉避難所は今 熊本地震から3年 ㊦



地震発生後の熊本学園大学多目的ホール。卓いすの避難者らも受け入れている。＝2016年4月、熊本市中央区（同大提供）

熊本学園大学（熊本市）が、熊本地震発生「ユニークだ。最大で75人を収容、卓いすの障害者も60人いた。数後に開設した避難所が市内で唯一。

職員や学生ら避難所運営に関しては「素人」が切り盛りした。後に「熊本学園モデル」として全国から注目を集めることになる。

「もともと福祉避難所でもなければ、指定避難所でもなかった。自然と住民が集まって、自然とそうなった」。運営を統括した花田昌宣教授（水俣学研究センター長）が振り返る。

体育館など多くの設備が被害を受けたが、多目的ホールが入った14号館は無事だった。2007年完成の比較的新しい建物は、設計段階からバリアフリーを取り入れており、卓いす利用者向けに開放できた。

社会福祉学部などの教職員や学生たちが運営の中核を担った。マニュアルもなく手探り状態だったが、逆に前例にとらわれることもなかった。型破りだったのは「管理しない」方針。名簿は作らず出入り自由。ペット同伴も認めた。「多様な人がいれば二ーズもさまざま。規則で縛れば息苦しさが生まれ、居づらくなる」

（園口國）

何でも手放しというわけではなかった。牧職員は交代制で24時間配置。避難所内で最悪があればすぐに察知できるよう心がけた。炊き出しや高齢者の食事の介助などは学生たちが担った。

サポートは避難者の行く先が決まるまで続いた。最後の避難者を見送った5月末、大学は避難所として役目を終えた。

活動の記録は「大学避難所」のタイトルで、書籍化された。花田教授は「高齢者も障害者も地域の一員。介助のプロがいなくても、何が必要か、本人に確かめながら進めるという柔軟な発想が必要だ」と指摘する。

（園口國）

素人の力を活用する動きは熊本県内でも進む。熊本学園大と同じく、福祉系の学部を持つ鹿児島国際大学（鹿児島市）は、昨年度、学生ボランティアによる炊き出し研修や、災害弱者への対応を学ぶ講話などを開いた。直江康隆総務部長は「医師免許や介護福祉士などの資格を持つ教員もいる。避難所運営にノウハウを生かせるはず」と力を込める。

要配慮者側も支援を受けやすくする取り組みを模索する。県内の障害者や難病患者でつくる「災害時の避難方法を弱者の視点から提案する協議会」は、避難所での混乱を防ぐ「色分けカード」の活用を提唱した。「生命維持装置が必要」は「赤」、「歩行が一目で分かる方法だ。

避難所の充実を求めて同会が今年2月から始めた署名は6千人を超えた。菅付加代子代表（69）は、「誰にでも優しい避難所になるように、みんなで考えてほしい」と訴えた。

2019/07/11　木曜日
南日本新聞　朝刊
23　面1　段

見えぬ最終解決　潜在被害調査手つかず　水俣病特措法10年

見えぬ最終解決

潜在被害 調査手つかず

水俣病特措法10年

四大公害病の一つ・水俣病の被害を訴えながら、患者認定を得られずにいた人々への特別措置法が、2009年に施行されてから15日で10年となる。この法律で約3万8千人が救済されたものの、1万人近くは対象外の判定。漏れた人々は裁判闘争を続ける。法が掲げた「公害問題の原点の最終解決」は見えない。（1面参照）



熊本県水俣市で民間医療団体が開いた検診＝6月

水俣病公式確認から63年が過ぎた、今年6月。熊本県の民間医療団体などが同県水俣市で開いた検診で、医師は受診者に居住歴や魚介類の食歴を質問。針や灸を手足に当てて反応を確認した。

「風呂の湯加減がちょうどよいと思っても、家族は熱過ぎると言う」と、長島町の60代女性は感覚の違和感を訴えた。検診は月1回。約200人が順番を待つ。

▼集団訴訟

公害健康被害補償法の患者認定や特措法などの救済を受けられていない人々のうち、検診で「疑いあり」とされた人の9割は、最大の被害者団体「水俣病不知火患者会」へ。国や熊本県、原因企業チッソに損害賠償を求めて、東京、大阪、熊本の3地裁で2013年から同会が展開する集団訴訟に加わるという。

東京訴訟の土田親子さん（68）＝東京都杉並区＝は、魚売りの両親と熊本県天草諸島で18歳までを過ごした。「魚は毎日、食卓に並んだ。タンパク源は、これしかないから」。子どもの頃から頻繁にこむら返りがあり、耳鳴りもする。症状に疑いを持ったのは、特措法が施行された09年7月15日より後。申請したが認められず、結果を受け入れられなかった。

特措法は、認定患者でなくても一定の症状がある場合、一時金を支給したり医療費支給を認める被害者手帳を交付したりすると定めた。ただ、原則として年齢や居住歴に関する制約が設けられた。申請は12年7月末で打ち切られている。

環境省によると、新潟、熊本、鹿児島の3県で4万8012人が特措法に基づき申請。うち救済対象となったのは、3万8320人だった。

▼幕引き懸念

特措法は、かつて水銀に汚された不知火海岸に居住歴がある人々の健康調査を、政府に要求。だが、まだ実施されていない。環境省は「特殊疾病対策室の佐藤室長は「調査手法を研究している」と答えるにとどめた。

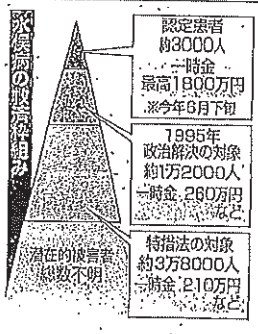
不知火患者会の元島市朗事務局長（64）は「被害が広範囲なのは明らか。教訓を後世に伝えるためにも、全額の解明を」と早期実施を求める。

同法は、チッソの事業を引き継いだ子会社、JNCの株式譲渡も定め、救済終了や環境相の承認などを条件に挙げた。JNCを上場し、株式売却の意向を持つチッソ。被害者側は「問題の幕引きを図るのでは」と懸念する。

環境省は「大臣は昨年、承認できる状況にない、と述べた。認識は変わらない」との姿勢だ。

公健法の患者認定を得るには、原則として感覚障害だけでなく運動失調など複数の症状が必要となるため、ハードルが高いとされる。熊本学園大・水俣学研究センター長の花田昌宣教授（社会政策）は「多くの被害者が潜在している」と指摘。行政が被害者団体と組んで広範囲の健康調査をし、新たな医療費支給の枠組みなどを設けることを提唱する。

熊本県の蒲島郁夫知事は7月初頭の会見で現状の認識を示した。「裁判が続く。最終解決に至っていない」



Q＆A 水俣病特別措置法

2004年の水俣病関西訴訟で最高裁が従来の患者認定基準より広く被害を認め、各地で提訴が相次いだことを受けた、新たな救済立法。09年7月8日に成立し同月15日に施行された。救済対象と判断した被害者に、一時金210万円や医療費を支給するとした。ただ、原則として患者多発地域で一定の居住歴がある人に限られ、出生時期も制約が設けられた。12年7月末に申請が打ち切られるまでに熊本、鹿児島、新潟の3県で計約4万8千人が申請したが、うち約2割は対象から外れた。

2019/09/08　日曜日
南日本新聞　朝刊
3　面11　段

水俣病患者宅訪ね実態学ぶ　水俣でセミナー

水俣病患者宅訪ね実態学ぶ

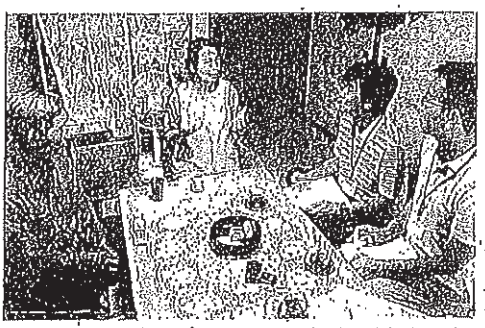
水俣でセミナー

水俣病被害の実態や課題を学ぶセミナーが6日から熊本県水俣市で始まり、東京や大阪などの若手研究者ら10人が参加した。7日は患者宅を訪ねて生い立ちや暮らしぶりを聞き取り、複雑な救済策や訴訟の流れも学んだ。

水俣病被害者互助会の会長で、胎児・小児期のメチル水銀被害を巡って裁判闘争中の佐藤英樹さん(64)は、自宅で聞き取りに応じた＝写真。「国や県の対応は患者の切り捨て。被害を受けた人が偏見や差別に遭うこともおかしい」と訴えた。

特別講演では、公害訴訟に詳しい立教大学の淡路剛久名誉教授(民法・環境法)が、水俣病訴訟の現状を解説した。「最終解決に近づけるためには、救済から漏れている地域の疫学調査が必要」と話した。

セミナーは熊本学園大学水俣学研究センターが2011年から企画し、6回目。8日まで。(赤間早也香)



2019/09/20　金曜日
南日本新聞　朝刊
3　面1　段

水俣病特措法　対象域外
133人へ一時金　県初集
計　線引きに疑問

水俣病特措法

対象域外133人へ一時金

県初集計　線引きに疑問

水俣病特別措置法による救済対象の地域外で、鹿児島県内の少なくとも133人が手足に感覚障害などの症状があり、一時金給付の該当者になっていたことが分かった。県が初めて集計した。県内の対象地域外に汚染された魚介類が流入していたことを行政が示したことになり、専門家からは、対象地域の線引きを疑問視する声が上がっている。

（23面に関連記事）

集計は、特措法で救済されなかった人たちが、国などに損害賠償を求めて係争中の「ノーモア・ミナマタ2次訴訟」で、被告側が5月、熊本、鹿児島両県の作成した資料として熊本地裁に提出した。

対象地域外の一時金該当者は、旧長島町で69人に上り、旧高尾野町21人、旧野田町16人。阿久根市では波留、大川地区などの少なくとも計23人。旧国鉄山野線を利用した行商人が流通したとされる旧大口市でも4人が該当していた。

熊本県側では、芦北町の内陸部で377人、天草、上天草の両市合わせて500人以上が該当者だった。

給付を受けるには、感覚障害などがあっても対象地域内に1年以上の居住歴がない場合、汚染された魚介類を多く食べたことを証明する漁業証明書などの提示が必要だった。証明できずに救済されなかった人たちが、被害を訴えて裁判で争っている。

鹿児島県は、これまで一時金該当者がどこで汚染された魚介類を多く食べたのかについて「居住歴がさまざまあり、分類は困難」とし、集計していなかった。県環境林務課によると、今回の訴訟の要請を受け、対象地域外の一時金該当者に限って地域別に分類した。

熊本学園大・水俣学研究センター長の花田昌宣教授（社会政策）は「対象地域の線引きに医学的根拠がないことが裏付けられた。特に、芦北町の山間部でこれだけ多くの人が対象となったことは驚く数字だ」と話した。

鹿児島県内で特措法救済策の一時金210万円を申請したのは1万7973人。うち1万1127人が該当者となった。救済対象地域は、公害健康被害補償法に基づく認定患者数を踏まえて県が定めたが、当初から「不当」と批判があった。

（赤間早也香）



2019/09/20　金曜日
南日本新聞　朝刊
23　面1　段

水俣病特措法を巡る訴訟
立教大　淡路剛久名誉教授が講演

原告側主張に説得性

水俣病特措法を巡る訴訟

立教大 淡路　剛久名誉教授が講演

熊本学園大学水俣学研究センターが今月上旬に水俣市で開いたセミナーで、公害訴訟に詳しい立教大学の淡路剛久名誉教授（民法・環境法）が、水俣病を巡る訴訟について講演した。主な発言は次の通り。（3面参照）

水俣病の公式発見から63年を経過し、この間、何度も被害者救済が問題となり、その時々で一応の決着をみた。しかし、今もノーモア・ミナマタ2次訴訟が提起され、審理されている。

それは、水俣病特別措置法の救済策が抜本的解決とはならなかったからだ。多数の被害者が一定の救済を受けたが、申請期間が短く、地域や出生時期の基準が設けられたことで、対象地域外から新たな問題が生じた。

2次訴訟の主な争点は、疫学（集団を対象に疾病の発生原因や健康状態などの調査研究）に基づいて、個別被害者のメチル水銀暴露と感覚障害の発症との因果関係を証明できるかだ。



「水俣病の全面解決はほど遠い状況」と語る立教大学の淡路剛久名誉教授＝熊本県水俣市

不知火海域の調査を

原告側は、相対的危険度や原因確率が一定の高さ（70～80％）を超える場合には、法的因果関係を推定できると主張する。一方、被告側は疫学的研究の結果を個別的因果関係の推論に用いることはできないとする。

最近は、原因確立が80％程度を超えるような場合は、個別的因果関係の証明を肯定するのが有力となっている。疫学専門家の意見書などを踏まえると、原告側の主張に説得性があると考える。

ただ、仮に同訴訟の判決が原告の請求を認めたとしても、それで水俣病被害者救済問題が最終的解決になるのは難しいかもしれない。訴訟外の「隠された被害者」の存在があるだろうからだ。

最終解決に近づけるには、救済から漏れている不知火海地域の疫学調査が必要だ。また、公害健康被害補償法の改正や、裁判所が間に入って和解の仕組みをつくるなど、新たな法的被害者救済システムが必要となるかもしれない。

（赤間早也香）

2020/01/12　日曜日
南日本新聞　朝刊
22　面3　段

胎児・小児期水銀被害学ぶ　水俣病研究交流会

胎児・小児期水銀被害学ぶ

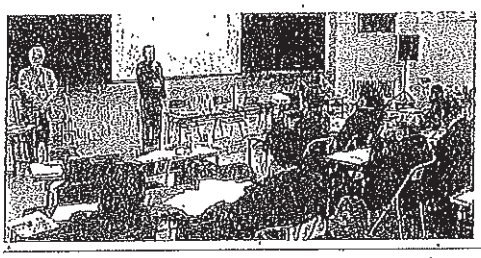
水俣病研究交流会

水俣病事件研究交流集会が11日、熊本県水俣市公民館で始まった。10日に福岡高裁で結審した胎児・小児期のメチル水銀被害を巡る訴訟（第2世代訴訟）の控訴審などについて報告があり専門家らが意見交換した＝写真。

第2世代訴訟の原告は、鹿児島、熊本両県に住む59～66歳の男女8人。発生初期の患者の子ども世代にあたり、国、熊本県、チッソに総額約3億円の損害賠償を求めている。

12年前の提訴から支える水俣病被害者互助会事務局の谷洋一さん（71）は「行政が魚介類の流通を封じ込めるなどの対応をすぐにしていれば、多くの命が救われ、症状を軽減できた」と訴えた。

集会は患者救済に尽くした故原田正純医師（さつま町出身）らの提案で1996年に始まり、今年は県内外の研究者ら約170人が参加した。12日まで。（赤間早也香）



2020/03/10　火曜日
南日本新聞　朝刊
10　面1　段

水俣病　互助会訴審13日
判決　胎児・小児期認定
が焦点

水俣病
胎児・小児期認定が焦点
互助会控訴審判決13日

胎児・小児期のメチル水銀被害を訴えている水俣病被害者互助会の未認定患者8人が、国と熊本県、原因企業チッソに総額約3億円の損害賠償を求めた訴訟の控訴審判決が13日、福岡高裁で言い渡される。発生初期の患者の子ども世代に当たる“第2世代”の原告たちが水俣病と認定されるかどうかが最大の焦点となる。



8人は、水俣病の公式確認とされる1956年前後に長島町や水俣市などで生まれた。

「頭痛やめまい、手足のしびれなど、自分の体が少しずつ、つらそうだった親たちと同じような状況になっている」

今年1月10日、福岡高裁であった最終弁論。原告の1人で出水市に暮らす女性(60)が、法廷で思いをぶつけた。

結審を前に、水俣病被害を訴える原告や支援者ら11月10日、福岡市の福岡高裁前

熊本県の漁村で漁師の家に生まれ、毎日魚を食べて育った。祖父母や両親ら10人を超える親族が認定患者。自身も若い頃からこむら返りや頭痛に苦しんだが、誰もにある症状だと思っていた。2005年に鹿児島県へ認定申請し、16年に棄却された。

14年3月の熊本地裁一審判決は、女性ら鹿児島県関係の2人を含む3人を水俣病と認め、チッソなどに総額1億1160万円を支払うよう命じた。残る5人は、家族に認定患者がいないなどを理由に請求を棄却した。

原告側は全8人の認定などを求め控訴。被告側も認定を不服として控訴した。

主な争点
- 原告8人が水俣病かどうか、賠償額は
- 国、熊本県が、食品衛生法に基づく被害拡大防止策を怠った責任が問えるか
- 除斥期間（被害を受け20年経過すると損害賠償請求権が消滅）の起算点

原告8人は、行政から水俣病患者と認定されていないが、水俣病研究の第一人者だった故原田正純医師が水俣病と診断した。

国の基準より広く被害を認めた関西訴訟を支えた阪南中央病院（大阪府）も新たな検査方法を加味し8人を水俣病と診断。控訴審では同病院の診断書を提出した。

一方、国やチッソなど被告側は「原告らの症状は糖尿病や更年期障害などの他疾患による」と訴え、全員が水俣病ではないと主張。日本神経学会医師の見解などを踏まえ、阪南中央病院の診断結果や検査方法を「信用できない」と反論する。

控訴審では、原告7人が認定患者に支給される一時金と同等の1人1600万円を、残る大堂進さん(60)＝長島町出身＝は介護費用などを含む1億9千万円を賠償請求している。

認定患者家族の有無の影響や、一審で水俣病の損害賠償額として過去最高の1億500万円となった大堂さんの賠償額も注目される。食品衛生法に基づく国や熊本県の責任も争っている。

半世紀近く水俣病裁判に関わる原告側の山口紀洋弁護士は「原告は自分のためだけでなく、60年以上放置された人々や死んでいった患者を代表して闘っている」と訴える。

（赤間早也香）

2020/03/14　土曜日
南日本新聞　朝刊
27　面1　段
行政追認強まる　水俣病判決　判断基準は曖昧〈解説〉

行政追認強まる

水俣病判決 判断基準は曖昧

〈解説〉

胎児・小児期のメチル水銀被害を訴えた原告8人全員を水俣病と認定しなかった福岡高裁判決は、一審判決より行政追認が強まった。どういう症状があれば水俣病と言えるのか高裁としての判断を示さないまま、門戸の狭い1977年の国判断基準に逆戻りした感が否めない。（1面参照）

77年判断基準は、水俣病認定には複数の症状の組み合わせが必要としている。しかし、多くの業知者が司法救済を求め、2004、13年の最高裁判決などで基準の緩和に傾く判断が示されてきた。

今回の高裁判決は、3人を水俣病と認めた一審判決を覆した理由について「他の病気による可能性」と言及し、曖昧な判断を下したのみ。被告側の主張をそのまま認めた部分も目立った。原告側が、最初から認めるつもりがない「結果ありきの判決」と指摘するのもうなずける。

14年に国が示した認定基準の新運用指針は申請する側にメチル水銀摂取量の立証を課した。原告側は「そもそも立証できない」と主張する摂取量について、高裁は原告一人一人の度合いを「高濃度」などとあえて積み込み判断。国の基準に都合がいいように歩調を合わせたかのように映る。

原告8人は行政の認定審査で棄却された人たち。一審は3人を水俣病と認めたが、高裁は全員を認めなかった。割れた司法の判断には、行政が水俣病被害の実態調査を怠ってきたこともあるといえる。公式確認から64年近くたっても救済を求める声が上がるのは当然で、病像が解明されないまま作られた認定基準に合理性はあるのか。疑問は消えない。

（赤間早也香）

「最悪」原告ら失望、怒り

「ここまでひどい最悪の判決は予想もしなかった」。一審が水俣病と認めた鹿児島県関係の2人を含む水俣病被害者互助会の原告8人全員が全面敗訴した13日の福岡高裁判決に、原告や支援者は言葉を失った。弁護団は判決文を読み進めるにつれて怒りを増し「国策に従った判決」と厳しく批判。上告審に向け「徹底的に闘う」と気持ちを切り替えた。

午後3時すぎ、判決を傍聴した支援者が重い足取りで高裁前に姿を見せ「敗訴」の紙を張り出すと、周辺はしんと静まり返った。想像しなかった判決に、原告らの表情に失望や戸惑いが浮かんだ。

判決後に開かれた報告集会。原告側代理人の佐伯良祐弁護士は「被告の主張をうのみにした判決。怒りを感じる」。康由美弁護士も、国の基準より広く被害を認めた2004年の関西訴訟最高裁判決などを挙げ「これまで判例で積み重ねてきたことを全く無視している」と憤った。

胎児期や幼少期のメチル水銀被害を訴え、地裁提訴から12年5カ月。水俣病研究の第一人者、故原田正純医師（さつま町出身）が病に冒されながらも「最後の闘いとしてやる」と原告らの自宅を一軒一軒訪れ、診断や疫学調査を重ねて支えてきた裁判だった。

「命を削って法廷に立った原田先生の遺志を生かした裁判にしてほしい」。出水市に暮らす原告女性（80）の願いは高裁に届かず、水俣病と認めた一審が覆った。「水俣病を理解した判決内容ではなく、認めない理由を後付けしたとしか思えない。上告するしかない」。熊本学園大・水俣学研究センター長の花田昌宣教授（67）は「原田先生は、胎児性患者らと比べて比較的症状が軽い原告のような人たちに、何もしてこなかったと悔いていた」と明かす。今回の判決は「司法救済の道をここまで閉じると、今訴えている人は皆二セ患者となる。怒り心頭。まだ墓前には報告できない」と話した。

（赤間早也香）



控訴審判決で全員敗訴の紙を掲げる関係者＝13日午後3時8分、福岡市の福岡高裁（檜口実昭撮影）

2020/03/14　土曜日
南日本新聞　朝刊
27　面5　段
「最悪」原告ら失望、怒り

2017.1.8

読売新聞　　朝刊

2　面　1段

水俣病事件研究会始まる　１３０人聴講

又　熊本　2017年(平成29年)1月8日(日曜日)　言壹

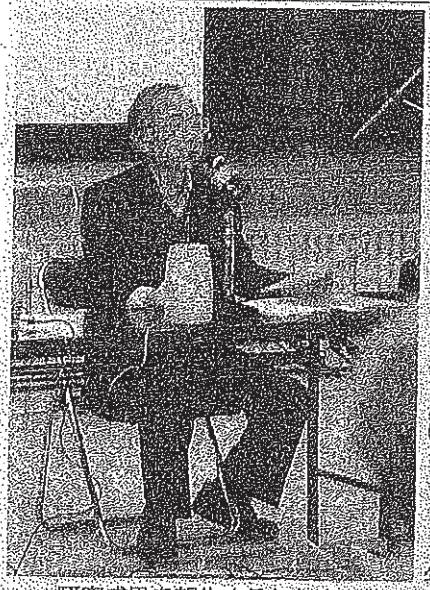
水俣病研究集会始まる 130人聴講

水俣病研究者らが研究成果や活動を報告する「水俣病事件研究交流集会」が7日、水俣市公民館で始まり、市民ら約130人が聴講した。8日まで。水俣病を巡る課題解決に向け、議論を深めようと、熊本学園大（熊本市）が事務局となって毎年開いており、12回目。

水俣病の原因企業・チッソの歴史を研究している矢作正さんは、「1970年代チッソ救済の経緯と論点」と題して発表。チッソ副社長を務めた久我正一氏（2008年死去）のメモから、患者への補償で経営危機に陥った同社への公的支援の実施を国が決めるまでの経緯などを明らかにした。

質疑応答では、「チッソは企業城下町の城主として振る舞うのではなく、市民と一緒になって水俣のまちづくりを進めるべきだ」などの意見が出された。

8日は医師や支援者らが、水俣病の実像や係争中の訴訟などについて報告する。



研究成果を報告する矢作さん

2018年　4月　28日
朝・毎・読・南・熊日（朝・夕）・日

4月28日（土曜日）　書評　2016.4.28（木）

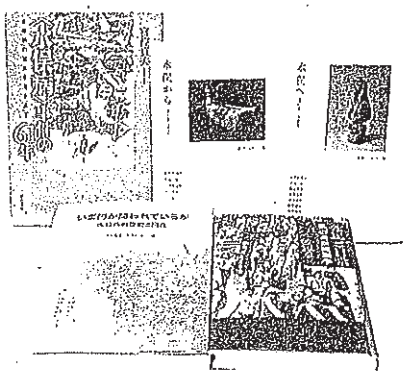
水俣病 問い続ける書籍

水俣病関連に関する書籍の刊行が、昨年秋から相次いでいる。通底しているのは、水俣病とは何であったのかという問いかけとともに、決して終わらない「現在の問題」としてとらえるまなざしだ。公式確認から来月1日で、62年となる。（石田祐樹）

水俣病　熊本県水俣市のチッソ水俣工場から海に排出されたメチル水銀が原因で起きた中毒性の神経症状。深刻な健康被害や環境汚染を引き起こした公害で、1956年5月1日、水俣保健所に原因不明の脳症状を呈する患者がいると報告された。これが公式確認とされる。有害な排水の流出は68年まで続き、その年に公害病と認定された。

語り、検証 まなざし鋭く

昨秋から刊行相次ぐ



水俣病を題材に最近刊行された書籍

NPO法人「水俣フォーラム」（東京）は今月、『水俣から 寄り添って語る』と、『水俣へ 受け継いで語る』（いずれも岩波書店）を刊行した。同フォーラムが1999年から開いてきた「水俣病犠牲者講演会」の講演録から主に編集。水俣病と向き合った人々の肉声な「語り」がある。

『水俣から』には、水俣の地から水俣病を告発した、作家の石牟礼道子、医師の原田正純、環境学者の宇井純ら10人を収録した。

水俣病の現実は、根深い差別の中で語られてきた。水俣市立水俣病資料館の語り部である吉永淑己子さんの講演は、そのことを物語る。父ら家族を水俣病で失うなか、ずっと口を閉ざしてきた。〈私は父たちのことを聴していた……。人にも言えなかった……。本当に申し訳なかった。私が一番水俣病を差別していたと気付かされました〉と、語り部になった経緯を打ち明けている。

また、『水俣へ』では、水俣からの問いかけに真を澄まし、問いを引き継いだ人々が語っている。作家の池澤夏樹や高橋源一郎ら11人だ。

〈私たち一人ひとりは弱いですから、事件が起こったときには必ず、「ここで一番弱い人の立場はどこだろう」というところから考えないといけません〉と指摘したのは劇作家、井上ひさし。我々は何が問題が起きたとき、安易な邪推や勘ぐりでもって、事態を見たつもりになっていないか。井上の言葉には、そうした戒めも込められている。

水俣フォーラム理事長の実川悠太さんは「水俣病は決して過去の問題ではなく、いつも私たちの今を映し出す。先達の貴重な証言の声をヒントにして、考えていきたい」と話す。

水俣病の real は今も分かっていない。そのことを伝えるのが、『〈水俣病〉事件の61年 未解明の現実を見すえて』（弦書房）。事件の経過をふまえながら、何が未解明なのか、問題点を検証している。

著者の熊本大名誉教授、富樫貞夫さんは、水俣病第1次訴訟の原告側への理論的な支援を目的に、69年に結成された「水俣病研究会」の代表。2015～16年、熊本大で行ったセミナー（全4回）の論旨をまとめた。

富樫さんは、水俣病という病名には明確な定義がなく、医学上の確立した概念ではないこと、医療行為としての「診断」と行政上の「認定」が混同されてきたことなどの問題点を鋭く指摘し、これまでに明らかになったことは全体のごく一部にすぎない。その大半は未解明のままであるゆえに、持続的な研究の必要性を訴えている。富樫さんは「命は一度と帰ってこない。全容を解明せずに終わらせようとすることは、亡くなった患者のためにも、許されないことだと思う」と話す。

このほか、日本近代史家の渡辺京二さんが、1969年からの約15年間、「水俣病闘争」にかかわる中で執筆したエッセーなどをまとめた『死民と自常 私の水俣病闘争』（弦書房）も出た。「義」によって助大力いたす」をスローガンに掲げて、患者たちが闘ったことの本質的な意味がつづられる。

また、熊本学園大水俣学研究センター長を務める花田昌宣さんらが編集した『いま何が問われているか 水俣病の歴史と現在に学ぶ』は、これから学ぶ人たちの入門書として読める。

＊一部敬称を略しました。

2018年　9月　25日
朝・毎・読・南・熊日（朝・夕）・日

（月ぎめ定価3093円（本体価格2861円＋消費税232円））1部売り130円　（外31段38行18字）

水俣病 公式確認50年

経済発展の裏 真実求め

「金ですむ」冷酷さに異議

水俣病の発生後も、産業界や官僚たちは高度経済成長を支えたチッソを擁護した。それに臆せず真実に迫り続けたのは、現場で患者を見つめた熊本大研究班や支援者だった。

〈失われた人命はかえらないし、病気にかかった人の一生は金では幸福にはならない。それが金ですむと考えるなら、資本家の思い上がりと冷酷さがある〉

茶色に変色したA5判のノートには、チッソへの痛烈な批判がつづられている。患者の公式確認から3年後の1959年頃、医学者で熊大学長だった故・勝沼精蔵之氏が、水俣病に関する研究結果などを記したものだ。

ノートは2016年5月、熊本学園大の一室で段ボールの中から見つかった。前月の熊本地震で散乱した資料を整理していた時だった。勝沼氏は前身の大学の学長でもあり、学園大の目黒純一理事長（77）は「日頃から『資本主義が行き過ぎ、その脆部が抑えられなくなると、国民が苦しむ』と語っていた先生らしい言葉だ」と話す。

＊

勝沼氏は59年、旧厚生省（現・厚生労働省）が設置した水俣食中毒特別部会で代表を務めた。同10月には部会の中間報告で、現地調査や患者の診察を行った熊大の研究をもとに「原因物質としては水銀が最も重要視される」と発表した。

しかし、チッソは旧日本軍が海に捨てた爆薬を原因とする廃説を宣伝して打ち消しを図った。産業の発展や豊かな生活に不可欠なプラスチックやビニールの原料を供給するチッソを、官僚たちもかばった。

もはや昭和ではない！　時代は高度経済成長の真っただ中だった。

中間報告から1か月後に開かれた関係省庁の連絡会議。熊大の有機水銀説を批判する旧通産省（現・経済産業省）の局長に、温厚な勝沼氏が激高したという。

＊

経済発展の裏で多くの命が失われ、全てを金銭で解決しようとする risk 観への異議。今年2月に死去した作家の石牟礼道子さんは、勝沼氏と通じる思いを、代表作「苦海浄土」で表現した。

〈人びとのいのちが成仏すべくもない値段をつけられていることを考えねばならない。死者たちの魂の遍歴を魂一の遍歴として、どタ一文ない水俣病対策市民会議は発足した〉

市民会議は公害認定の68年、初の支援組織として設立された。石牟礼さんも参加し、患者とチッソの補償交渉に立ち会った。

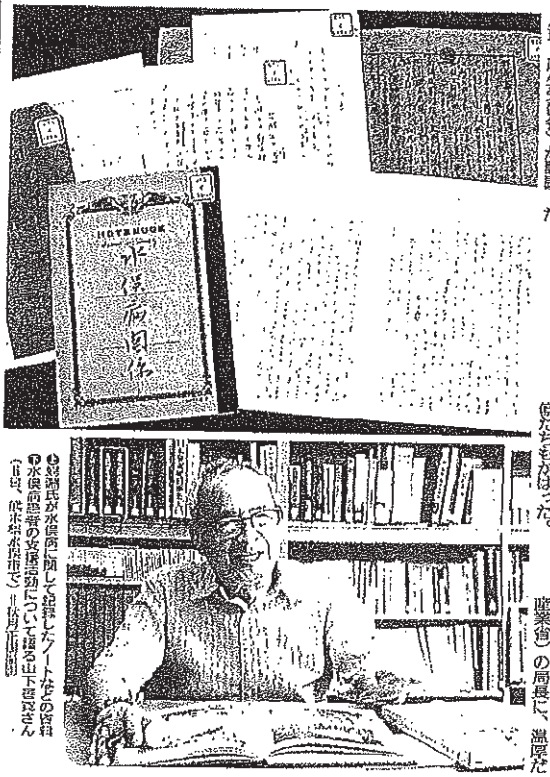
チッソ社員だった山下鐐寛さん（78）は会社で働きながら市民会議で活動した。経営責任をただすため、脚が不自由な患者を背負って株主総会に乗り込んだ。

会社と対峙したのは罪悪感からだった。

水俣病の原因を分析する部署にいた62年頃、周囲から「問題になっている水銀だ」と抽出した結晶を見せられた。「これを draw らせばクビになる」。口をつぐんだ当時について「被害拡大の一端を担っていた」と語る。

定年後も患者と交流し、水俣病裁判の傍聴を続ける。22日には熊本県水俣市で開かれたシンポジウムで登壇し、この半世紀を振り返った。

「企業のデータ改ざんなど組織ぐるみの不正は後を絶たない。社会は水俣病の反省を忘れていないか」。山下さんは自らの価値と向き合いながら警鐘を鳴らす。



❶勝沼氏が水俣病に関して発表したノートなどの資料
❷水俣病患者の支援活動について語る山下鐐寛さん（16日、熊本県水俣市で）＝佐野正信撮影



石牟礼道子さん

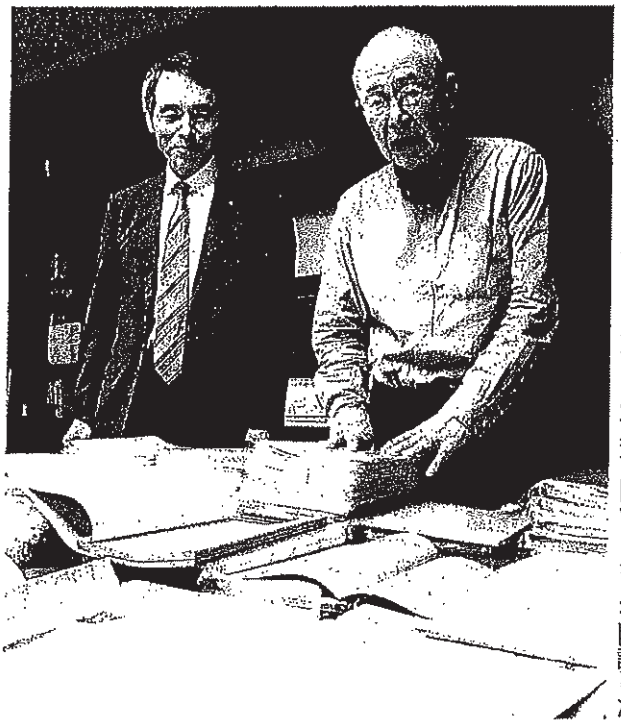
2018. 10. 11　木曜日
読売新聞　朝刊

ヒ素汚染資料データ化　熊本学園大
土呂久や海外の468点
土呂久公害の研究を進める花田昌宣センター長は「ヒ素を巡る問題が将来起きないとも限らない。資料を保存して次の世代に伝えることが大事だ」と述べた。

ヒ素汚染資料 データ化

熊本学園大 土呂久や海外の468点

熊本学園大水俣学研究センター（熊本市）は、宮崎県の土呂久公害㊟などヒ素中毒の研究に長年取り組んできた病院理事長の堀田宣之医師(77)（同）の調査資料をデータベース化し、目録を公開している。海外の汚染地域の記録なども含まれており、同大は「公害の再発防止へ向け、国内外の研究に寄与できる貴重な資料だ」としている。（江口朋美）



調査資料について説明する堀田さん（右）

再発防止へHPで公開

堀田さんは熊本大医学部を卒業後、同大体質医学研究所気質学部門の助手となった。当時、同部門の助教授は、水俣病研究の第一人者で同センターを開設した原田正純医師（2012年に77歳で死去）。ともに公害問題の研究や被害者支援に取り組んだ。

1974年に診察した宮崎県高千穂町・土呂久地区の女性に、水俣病と似た神経症状があったことからヒ素中毒に関心を持った。翌年から鉱山跡に通い、被害者が鉱業会社を相手取った損害賠償請求訴訟が90年に最高裁で和解するまで、健康被害を調査した。

その後、世界各地のヒ素中毒患者を支援するNPO法人「アジア砒素ネットワーク」の初代代表も務め、2011年頃までにベトナムやカンボジアなど海外のヒ素汚染地域を約20か所訪問した。

この間に診察した患者のカルテや損害賠償請求訴訟に関するメモ、ヒ素中毒が全身病であることを立証するための論文、患部を撮影した写真など約4000点が、同センターに寄贈された。うち468点の目録を同センターのホームページで公開している。

堀田さんは「ヒ素中毒はまだ解明されていない分野もある。資料を後世に残してもらえるのは、ありがたい」と語る。土呂久公害の研究を進める花田昌宣・同センター長は「ヒ素を巡る問題が将来起きないとも限らない。資料を保存して次の世代につなげていくことが大事だ」と述べた。

資料の閲覧を希望する場合は、事前の申し込みが必要。問い合わせは、同センター（096・364・8913）へ。

㊟土呂久公害　宮崎県高千穂町の土呂久鉱山で1920年代から、染料や薬の原料となる硫砒（りゅうひ）鉄鉱が採掘された。精製の過程で排出されたヒ素を含む煙や粉じんを吸った周辺住民がヒ素中毒となり、呼吸器の疾患やがんなどで次々と亡くなった。国は73年、水俣病などに次ぐ第4の公害病に指定した。

2018. 12. 03　　月曜日

読売新聞　　朝刊

「水俣病終わってない」未認定患者ら紛争続く。

熊本学園大学水俣学研究センターの花田昌宣センター長は、

「水俣病の発生後、行政の範囲や被害者数をすぐに調査すべきだった。紛争が続く背景に、被害実態の全容が解明できてないことがある」と指摘する。



「水俣病終わっていない」

熊本リポート

未認定患者ら紛争続く

公害認定から50年たった水俣病だが、今も県内の未認定患者らが患者認定や補償を求める訴訟が続いている。患者認定の遅延が厳しく、二度の「政治決着」でも救済の枠から漏れた人がいるためだ。原告らは「水俣病は終わっていない」と訴えている。（関屋淳平）

弁当の箱に被害を訴える原告ら（11月30日、熊本地裁の前で）

認定義務付け訴訟

「患者は国、県、チッソから六十数年間、見捨てられてきた。それを強訴し、事実を訴える裁判だ」。熊本地裁で11月30日、未認定患者団体「水俣病被害者互助会」（水俣市）の男女7人が鹿児島、熊本県に認定を求めた訴訟の口頭弁論。支援者の1人が弁論前の集会で訴えた。

7人は58～65歳で、発生初期の患者の子の世代にあたる。原告団長の佐藤英樹さん（63）は、八代海に面する水俣市・芦北地区の漁師の家に生まれた。両親や祖母は認定患者で、豊富な魚介類を食べて育った。

30歳代半ばの頃に、水俣病研究の第一人者の原田正純医師（2012年死去）の診察を受け、水俣病と告げられた。子どもの頃から手足のしびれなどに悩まされてきたが、水俣病は「終わりにしたい」などと思い込んでいたという。

その後、県に認定申請したが、棄却され、1995年の政治決着による未認定患者救済策でも対象外とされた。

しかし、未認定患者の女性の過酷な人生を描いた行政訴訟の上告審で、最高裁は2013年、「行政の判断とは別に裁判所は証拠を総合的に検討して水俣病かどうかを認定できる」との初判断を示し、患者と認めた。これを受け、7人は患者認定を求める訴訟を起こした。

佐藤さんは「私たちの世代は初期の患者に比べ、比較的軽症の人が多い。自分が水俣病と気づいていない人も多いはずだ」と語る。

国家賠償請求訴訟

佐藤さんら関西在住9人は07年、国と県、チッソを相手取った訴訟も熊本地裁に起こした。水俣病の発生当初、魚介類の摂取を規制しなかった行政の責任などを問い、損害賠償を求めた（18年に1人が取り下げ）。

14年の地裁判決は、佐藤さんを含む3人を水俣病と認め、2220万～1億5500万円の損害賠償を命じたが、残る5人の損害は認めなかった。このため、原告、被告の双方が控訴し、福岡高裁で控訴審が続いている。

二つの訴訟で、佐藤さんらは「水俣病特有の手足のしびれなど症状がある」と主張するが、被告側は「通常病などほかの疾病が原因」などと反論している。原告団弁護団の谷洋一さんは「政治決着による救済策で非該当となった後、患者認定される人がいるなど制度は破綻している」と語る。

救済法を巡る訴訟

熊本地裁では、09年に成立した水俣病被害者救済法を巡る訴訟も係争中だ。同法に基づく救済措置で非該当などとされた未認定患者1310人が国と県、チッソに1人あたり450万円の損害賠償を求めている。

救済期限は12年7月末に締め切られた。原則、水俣市などの指定地域に居住歴がある人などが対象で、条件を満たさない場合、汚染された魚介類を多食したという証明が求められた。

13年に熊本地裁に第一陣が提訴した後、環境、大阪地裁にも提訴され、原告は計1500人を超える。原告側は医師の診断書などを証拠提出。対象地域外でも汚染魚が流通したと主張するが、被告側は「診断書の検診方法に問題がある」などと反論している。

熊本学園大水俣学研究センター（熊本市）の花田昌宣センター長は、水俣病の発生後、行政は汚染の範囲や被害者数をすぐに調査すべきだった。紛争が続く背景に、被害実態の全容が解明できていないことがあると指摘する。

◎県内の未認定患者らによる主な裁判

	訴訟の主な内容	裁判所
認定義務付け訴訟	水俣病被害者互助会の7人が熊本、鹿児島両県を相手取り、棄却処分の取り消しと患者認定の義務付けを求める	熊本地裁
国賠訴訟（第4次訴訟）	水俣病被害者互助会の8人が国、県、チッソを相手取り、魚介類の摂取を規制しなかった行政の責任などを問い、慰謝料3億1200万円の損害賠償を求める	福岡高裁
救済法を巡る訴訟	水俣病被害者救済法に基づく救済措置で「非該当」などとされた1310人が、国、県、チッソを相手取り、民間の検診で手足の感えや眼痛など水俣病の症状があると診断されたなどと主張。1人当たり慰謝料1100万円と弁護士費用150万円を請求	熊本地裁

水俣病　チッソ水俣工場の排水に含まれるメチル水銀に汚染された魚介類を食べた人が発症した神経系の中毒症状。1956年に水俣市で確認され、68年に公害病と認定された。95年に一時金を支払うなどの政治決着が図られたが、2004年の最高裁判決で国などの責任が認められ、認定申請が急増。09年に成立した水俣病被害者救済法に基づく救済措置という第二の政治決着が図られた。

2019年　1月　13日
朝・毎・読・南・熊日（朝・夕）・日

朝日　熊本　2019年(平成31年)1月13日(日曜日)　教育　23面

水俣病研究者ら集会

成果や活動を報告

水俣病研究者らが研究成果や活動を報告する「水俣病事件研究交流集会」が12日、水俣市公民館で始まり、胎児性患者の高齢化による急速な機能低下などが報告された。13日まで。

集会は、水俣病について議論を深めようと、熊本学園大（熊本市）が事務局となって毎年開催。12日は研究者や医師ら8人が報告し、約160人が聴講した。

福岡女学院大の池田理知子教授（コミュニケーション学）は、水俣病などの公害問題の特集を組んだ雑誌「暮しの手帖」の1967年秋号について報告。公害の背景を「人間の生命を軽く考える風潮だ」と指摘した記述を紹介し、「権力側への痛烈な批判だ。この時期に、こうした特集を組んだ雑誌は少ないのではないか」などと述べた。

岡山大の頼藤貴志准教授（環境疫学）は、胎児性患者11人（50～60歳代）の食事や排せつなどの日常生活機能を10年前と比較をした結果、同世代の健常者と比べ、著しい低下が見られたことを報告。「（水俣病の影響で）加齢に対抗する余力がないのでは。地域社会での継続的な支援が必要だ」と訴えた。13日は水俣病裁判の現状と課題などが報告される。



研究成果を報告する頼藤准教授

2017/11/25　土曜日
新潟日報　朝刊
2　面　段

田尻雅美　水俣学研究センター　研究員

諦めない姿勢学んで

田尻雅美・熊本学園大水俣学研究センター研究員

本県の新潟水俣病情報発信事業の一環で水俣市を訪れた新大生の案内役を務めたのは、熊本学園大水俣学研究センターの田尻雅美研究員(49)だ。田尻さんに水俣病を現地で学ぶ意義を聞いた。

×　×

水俣学は「負の遺産としての公害、水俣病を未来に生かすこと」を目的にしています。水俣病研究の第一人者で2012年に亡くなった原田正純医師が提唱しました。

熊本学園大は05年、熊本市に水俣学研究センターを、水俣市に水俣学現地研究センターを相次いで開設しました。初代センター長は原田さんでした。

水俣の現地に足場を置き、国際的視野をもって教育と研究を進めています。

私は胎児性水俣病患者のケアに取り組む傍ら、水俣病を学ぼうと全国から水俣を訪れる研究者や学生を、水俣学研究センターとして受け入れ、年間20回くらい視察先を選んで案内しています。

その際に大事にしているのは、被害者の住む家や施設、漁村などころにも危険な問題がある」と、肌で感じてもらうことです。ことができるのではないでしょうか。

水俣病は、チッソ水俣工場が海に流したメチル水銀が原因で、汚染された魚介類を食べた住民が神経障害を発症した特別な事件です。



たじり・まさみ　1968年、熊本市出身。熊本学園大大学院博士後期課程修了。2005年から同大水俣学研究センター研究助手、17年から現職。専門は社会福祉学。

しかし、被害者は決して特別な人たちではありません。自然豊かな場所で、普通に暮らしていた人たちです。そのことを実感して、声を上げられない人もたくさんいます。

社会を動かしてきたのは、「(被害者になったのは)しょうがない」などと諦めなかった被害者とその支援者だと思います。

水俣を視察した学生が将来、就職した時、過重労働やいじめなど、理不尽な問題と直面することがあるかもしれません。その時に「しょうがない」などと諦めてほしくありません。当事者として、あるいは当事者の仲間として、その問題としっかり向き合ってほしいのです。短い時間ではあっても水俣の人たちとの触れ合いを通じて、そのことを学んでほしいと思います。

平成 27 年度～平成 31 年度
私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
研究成果報告書
「水俣病の経験を将来に活かした地域構想と
国際的情報発信のための水俣学研究拠点の構築」

2020 年 5 月 27 日発行

編集・発行　熊本学園大学水俣学研究センター
研究代表者　花田 昌宣
〒862-8680　熊本市中央区大江 2-5-1
TEL：096-364-8913
E-mail：minamata@kumagaku.ac.jp
URL：http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/

ISBN：978-4-903967-16-5